
カワパン

川上 宏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カワパン

【Nコード】

N46120

【作者名】

川上 宏

【あらすじ】

1969年、戦後は終わり学生運動も終息する頃、僕は中学3年生を迎えていた。

僕の家は川崎の住宅街だけどまだ回りは畑があり、肥溜めもあって妹はその肥溜めに落ちてしまった。

犬殺しと言う保健所の職員が年に何回か僕たちの町を巡回し、ある日、我が家のトサはつかまってしまった。

助けに行かなければ。

そんな時代をカワパンは上原中学校で親友の石山と色々な出来事を

経験するのであった。

新学期

チン

トースターからちよつとこげ目の強いトーストが2枚跳び上がる。冷蔵庫を開けると、独特のツーンとしたイヤな臭いが鼻に付く。ノンスメルは入っているのに、冷蔵庫の中のイヤな臭いは取れやしない。キムコの方がいいのかもしれない。

僕は紙で作られている樽形の容器に入っているピーナツクリームと苺ジャムを取り、それをトーストに素早く付けると、前もって用意していた、砂糖をスプーン2杯入れたコーヒと一緒に、あっという間に腹の中に入れ込んだ。

弟が力チャカチャテレビのチャンネルを回している。

「8チャンネルはちゃんと映らないから、チャンネルに紙を挟むといいぞ！」

口をグチャグチャ噛みながら弟に言うと、弟は僕の言う通りチャンネルを8に合わせ、厚紙をチャンネルの隙間に入れ微妙にチャンネルを動かし画像を調整し、一番きれいに映ったところで厚紙を思いつ切り入れ、チャンネルを固定した。テレビの右下に映る時刻が7:55と出ている。

「そろそろ行かないと」

僕はそう言うのと同時にイスから立ち上がり、台所から階段を下りて玄関に向かった。

僕の姿を見ると、玄関で寝ていた我が家の愛犬トサが立ち上がり一緒に外に出ようとする。

「トサはここにいな」

僕は手でトサを制し、素早く玄関ドアを開けると外に飛び出した。温かくなれば玄関のドアは開けっ放しになり、放し飼いのトサも家と外を自由に行き来できるようになるが、今は春になったとはいえ、まだ寒いので玄関ドアは常に閉まっている。

トサは僕が5才の時から飼っているのです、もう9歳になる。最初は犬小屋を作り外で繋いで飼っていたが、いつの間にか放し飼いにし玄関で暮らすようになった。放し飼いにしても近所を時々ぶらりと歩くだけでほとんど家の前の道路にいるか玄関にいる。近所の人でも可愛がつてくれているので、放し飼いにしているための苦情はまだ1回も来たことはない。しかし風の噂ではどこかにトサの子供がいるという。近所のメス犬が発情期になると夜中になってもトサは帰ってこない時があるので、その噂は本当かもしれない。

放し飼いにして恐いのは犬殺しだ。保健所の係員が年に数回ノラ犬を捕獲しに来るが、僕達はその人間達を犬殺しと呼んでいた。

「おい、さつき神社で犬殺しを見かけたけど、大丈夫か？」

兄の心配そうな声に「大丈夫だよ、ここにいるよ。それにトサは頭がいいから見つかっても捕まらないよ」というような会話を年に何回かはする。

ところがある日、3日ほどトサが家に帰って来ない時があった。

1、2日いない日は時々あるので、一日位ならそれほど心配しないのだが、二日いないとさすがに心配になり兄弟みんなで町内を捜し回った。

みんなで捜し回っても見つからないとさすがに不安になる。もしかしたら犬殺しでは。情報を集めると2、3日前に犬殺しが来ていたという近所のおばさんの証言。これはますます犬殺しに捕まったのだと確信し、僕と一番上の兄は飯田の川沿いにある犬殺しの小屋に向かった。

犬殺しの小屋は僕の家から歩いて一時間余りだが、トサのことが心配で早足で歩いたため、あっという間にその時は過ぎた。

僕達は犬殺しの小屋と呼んでいたが、その建物は鉄筋コンクリートで作られたちゃんとした大きな建物であった。しかしさすがにその建物に近づくと犬の遠吠えや鳴き声が聞こえてきて、糞尿の臭いが鼻につくようになる。

兄が何やら手続きをし、建物の中に入ると檻が幾つも並び、その

一つ一つの檻に10匹位の犬がみんなおとなしく入っていた。

鳴く犬はいない。みんな不安そうな顔をして僕達を見ている。

僕は「トサ、トサ」と大きな声で何回も呼ぶと正面の奥からワンワンとトサの声がした。

やっぱりいた。

僕は急いでその檻に駆け寄るとトサも他の犬をかき分け檻の最前に姿を現し、嬉しそうな顔をして尻尾を振っている。急いで檻から出してもらうと身体全体が糞尿臭く、とても抱きしめてあげることができなかった。もちろん家に戻り、身体全体をすぐ洗ってあげたが……。

兄が「一週間あの小屋に置かれ、飼い主が現れなければ殺されるんだ」と帰り道で言っていた言葉が、時間と共に恐怖に感じた。

僕の家玄関を出たところの道は、両手をひろげると両方の手が壁に触ってしまうほど小さな私道で、8歩歩くと車2台がぎりぎり通れるほどの家の前の道路に出る。

僕の家は土地が20坪ちよつとでその土地に総2階の家が建っている。土地が20坪ちよつとで家が40坪弱ある。ということは目一杯土地を使って家を建てているということだ。そのため両隣の家とは50センチ位しか隙間がなく、窓から窓、屋根から屋根に移り渡ることもできる。

もともとこの土地は百坪位の土地を5つに分け、そこに目一杯の家を建てた建売住宅であった。

道路に面した家の横幅5〜6メートル、奥行き11メートル前後の小さな土地が5件きつちり並んでいる。

一番南側がかめやという食堂で隣がペンキ屋、その次が僕の家、隣家、鹿島さんというサラリーマンの家。次に僕の家があつて、一番北側が元ヤクザの寿司屋。

お客が来るとこの寿司屋から並寿司を取る。僕達はお客が残す寿司をいつも楽しみにしている。寿司屋の隣には舗装されていない住宅道路が奥に続いている。

僕の家の一階の半分、道路側に面したところは佐山さんに貸していて、佐山さんは妹と姉妹二人で食堂をしている。僕の家の前半分を佐山さんに貸しているので、僕の家は道路に面してなく8歩奥にあるのだ。

食堂がかめやと佐山さんと二つもあるのは、僕の家の前に三和鋼管という百人くらいの工員が働いている工場があるからだ。もちろん工場にも社員食堂があるのだが、社員食堂ではリラックスできないという工員がかめやとか佐山さんの食堂に食事兼酒を呑みに結構来るようだ。

工場といえば、三和鋼管の隣には三和鋼管よりも大きな東京樹脂という工場がある。この工場は入口にちゃんとした守衛室が置いてあり、外部の人間は絶対に中に入れないようになっていたため僕も中を見たことはない。

三和鋼管は日曜日になれが会社は休みなので、そーと中に入れば色々見学もできるし、普段の日でも子供が工場内を少し歩くくらいなら目をつぶってくれるので、工場内がどうなっているかわかるが東京樹脂はまったくわからない。

バス通りには東京樹脂の何倍もある江原製作所という大工場もある。この工場の中には年に一回ある大運動会の時、江原製作所の社員の家族の振りをして入ったがあまりの大きさに迷子になりそうだった。

大運動会は社員の家族に弁当券やお菓子券が配られ、みんな美味しそうにそれを食べているのが僕にはとても羨ましく見え、何とかあのお菓子が食べられないかと大運動会が行われているグラウンドの周りを何周も回ってお菓子券が落ちていないかと探したが、お菓子券どころか弁当券一枚落ちていなかった。

工場といえば大きな工場も三和鋼管位の小さな工場も、工場は全てまわりがコンクリートの塀で囲まれていたため家の南側を歩けばどこに行ってもコンクリートの塀を見ることができた。

僕の家は北側は住宅地域と商業地域だが、僕の家を含めて南側は

準工業地域であつた。なんで住宅が5軒も建っているのに、僕の家
の土地が準工業地域なのかよくわからないが、きっと僕の家地主
が準工業地域でも住宅が建つように上手くやったのだろう。もつと
も僕の親がこの家に来た時、家の周りは工場と畑しかなかったので
明らかに住宅地域や商業地域ではなかったようだ。

僕の親は僕が生まれた年にこの家に来たので僕はこの家で最初に
生まれた子供であつた。小学校に上がった頃でも、まだ裏の小川で
カエルを獲ったりトンボを追いかけてきたのだから町ではなく
田舎であつた。それに畑や肥溜めがあつたのだから、明らかに田舎
だろう。

ある日2番目の兄、弟、妹、僕の4人がトサを連れて畑を歩いた
時、トサが肥溜めの上を歩いた。肥溜めの表面は固くなっていたし、
素早くその上を歩いたのでトサは歩くことができたみたいだ。ここ
ろがトサに続いて妹がその肥溜めの上を歩いてしまった。

妹はまだ3才だったので、肥溜めを判断することはできなかった
みたいで、トサは歩くことができたが、妹は見事に肥溜めに落ちて
しまったのだ。近くにいた僕と弟は驚いたが妹が落ちたことにより、
強烈な臭いが辺りいっぱいになり、その臭いにより、その円形の穴
が肥溜めだとはつきりわかり大笑いしてしまった。

ところがちよつと離れていた2番目の兄はびっくりした顔をして、
「おい、早く助ける」と叫んだ。

確かに早く助けなければならぬ。小さい妹は肥溜めの中に身体
が全て入ってしまったて死んでしまうかもしれない。今はまだ身体
の半分しか沈んでいないが、ゆっくりと身体は沈んでいつてゐる。

しかし、ウンコだらけの妹に触るのはちよつと嫌だったので躊躇
していると2番目の兄が、「早く、助ける」と再び叫んだ。

その声に驚き反射的に妹の手を掴むと思いつ切り引つ張り上げた。
妹はきよとした顔をしている。

2番目の兄も妹をひっぱり上げようと思えば引き上げられるとこ
ろにいたが、糞まみれの妹をつかむのは嫌だつたのだと思う。

家に戻る間、2番目の兄、僕、弟は妹と少し離れて歩き、やつとの思いで家に着くと直ぐにお母ちゃんを探しに行き、「ヨッコが肥溜めに落ちた」と大声を出した。

お母ちゃんは妹を見ると素早く服を全部脱がし、ホースから水を出すと妹の身体に勢いよく浴びせた。

「お母ちゃん、ヨッコの服捨てるでしょ」

誰が見たってウンコだらけの服は捨てるだろうと思い、僕がそう言つと、「洗えば大丈夫だよ」とお母ちゃんは答え、大きな木のタライに妹の服を入れた。お母ちゃんはたくましい。

お母ちゃんのたくましさのエピソード、パート2。

多摩川で口ボソという体長5センチメートル位の魚を、自分達で作った投げ網で何匹も獲って家に帰りお母ちゃんに見せた。

お母ちゃんに見せたのは何か適当な器を出してもらってその中で口ボソを飼おうと思ったからである。

お母ちゃんは口ボソが泳いでいる大きな空き缶を手にすると台所に行き、あつという間に包丁で口ボソの腹を裂き、内臓を取りだした。僕達は抗議する間もなかったが、口ボソはまずくはなかった。

パート3。

祭りの時や特別な日に露天でヒヨコをおじさんが売っている。1匹10円。決して安くはなかったが、そのあまりの可愛らしさから2〜3羽いつも買ってしまう。

もう可愛いくて可愛いくて、寝る時も一緒に寝るが、朝起きると背中の下でペッシャンコになって死んでいるのを見つける。

悲しくてお母ちゃんに、「フーが死んじゃった」と言つと（インスタントラーメンのCMで3匹の子ブタが出てきて、名前をブー、フー、ウーと言っていたので、ヒヨコにもその名前を付けた）、お母ちゃんはフーを拾い上げ、台所に行き、羽をむしり始めた。

「お母ちゃん、フーをどうするの？」

「羽をむかなくちゃ、食べられないだろ」

僕は一生懸命頼んで食べるのは何とか勘弁してもらった。

家のふち、20cmの幅しかない庭にフーのお墓を作ったが、ブーとウーのお墓も一週間以内に作られた。

何でヒヨコはすぐ死んでしまうのかと悩んだが、ある時、ヒヨコは段ボールに入れ、触らなければ鶏に成長するということがわかり、可愛がり過ぎてはいけないということに気付いた。そして可愛がらないヒヨコは数ヶ月で鶏になるが鶏になるとコケコッコーと鳴くので近所から文句が出るようになり、人手に渡すことになる。

「ここで鳴くとうるさいから周りが静かで鶏を飼っているところにあげたから、そこはたくさんの鶏がいるからあの子も楽しいと思うよ」とお母ちゃんは言っていたが、僕には鶏がどこに行ったか確かめることもできなく、ただお母ちゃんの言葉を信じるしかなかった。

家を出て、道路を北に向かって歩くとすぐ右に汚くて大きな木造アパートがある。

僕が小学生の頃、その木造アパートの前はちよつとした空き地になっており、アパートの子供達のためのブランコ等が片隅にあった。木造アパートの空き地はちよつとした公園になっていて僕もよくその空き地でかくれんぼや缶蹴りをして遊んだが、僕が中学生になった頃、このアパートの周りにも鉄筋コンクリートの塀ができてしまった。

僕は一人で退屈な時、三和鋼管の塀や木造アパートの塀の上に立って歩いたり、軟式ボールを当てて一人野球をしたりしていた。

一人野球とは自分が投手になり、壁にボールを投げて跳ね返ってきたボールを打者が打ったボールとし仮定して、それを取ってまた塀にボールを投げ、それがスムーズに取れると一塁アウトということにし、スムーズに行かずボールがどつかにそれたらヒットにしたりする遊びである。

木造アパートはかなり汚い。そしてそのアパートの横の道は結構歩く。

夕焼け、海の夕焼け……

なんとなく鼻歌が出る。スパイダースの『夕陽が泣いている』は僕の好きな歌の一つだ。

汚い木造アパートの先は太陽ベーカーリーというパン屋。このコッペパンは旨く、一斗缶にたっぷり入ったピーナツクリームを塗って15円、よく昼飯代わりとなる。他にもイチゴジャムやバターもあるけど、バターはきつとマーガリンのほずで、名前だけバターとつけているに違いない。

太陽ベーカーリーの前はクリーニング屋、その隣は薬屋。太陽ベーカーリーの先は風呂屋、風呂屋の裏には山と積まれた廃材がある。風呂を沸かす燃料だ。近くに製材所があるので、そこから廃材をもらってくるのだらう。

ここはボイラー室だが奥の扉を開けると浴槽の横に出ることができ、そこは女風呂である。

前に一度、風呂屋のおじさんがその扉を開けるのを見たことがあるが、裸のおばあちゃんがチラツと見えただけで、はつきりとよく室内は見えなかった。

風呂屋の塀は、ノジ板を横に打ってできているため、板と板の間に指の太さぐらいの隙間ができる。よく若いあんちゃんが夕方暗くなる頃、そこに目を当て、中を覗いていた。

風呂屋の前は万屋、^{まんや}小学校4年の時の同級生三沢が住んでいる。その万屋の隣は八百屋、その先の四つ角は肉屋、この肉屋のコロッケは旨い。僕は日本一だと思っている。カレー味なのが普通のコロッケとは違う。

中学生になると色んな町から生徒が来るので、我が町のコロッケ自慢が始まったりする。そんなに旨いのかとあちこちのコロッケを食べたが、やっぱり僕の町の肉屋が一番旨い。

風呂屋の先にある肉屋の前はこみや。ここも万屋だがどちらかというと食品が多い。卵なんか店先に山と積まれている。

僕は卵を買うのは大抵こみやで、それも大きい1個13円のやつを買う。

卵は小さい順に10円玉、11円玉、12円玉、13円玉とあるが、13円玉は大きさに制限がないため、13円玉は時々とてつもなく大きいを見つけることができる。そのため13円の卵を買うのだ。双子の卵を見つけるのは当たり前で、時々三つ子の卵もある。ある日とてつもなく大きな卵があったので、それを買って割ってみたらなんと四つ子の卵であった。とても嬉しい卵に出会える時もあるが、時々腐った卵を掴む時もある。

卵を割ると腐っている卵があるから、卵は一度別の器に割り、腐っていないか確かめてから目的の器に入れる。もし腐った卵を割ってしまった時は、その臭い殻をこみやに持っていけば、新しいのに替えてくれる。

四つ角を右に行くと宮城小学校の正門があり、ずうつとその先は南武線の桃原駅がある。左だと宮城商店街で市場や、酒屋がある。

僕はよくお使いを頼まれるが、魚を買う時とお酒を買う時はこの四つ角を左に曲がる。1本40円で一合ある日本酒を毎日1本、お父ちゃんのため買うのも四つ角を左に曲がって5軒目にある酒屋である。

僕はその二つ手前にある和菓子屋に入りたいのだが、高級すぎてこの店で買い物をしたことは一度もない。

四つ角を越えると右は宮城小学校の校庭で校庭の一番北側にはプールがある。このプールは僕達が卒業したからできたので一度も入ったことはない。

四つ角を越えた左側はずーと住宅街である。

「カワパン、ゆっくり歩いてるな。先、行くぞ」

後ろからサーパンが僕に声をかけるとあっという間に前に出てスタスタ前を速足で歩いていった。

サーパンは小学校4年の時の親友で、『サーパン』『カワパン』というあだ名はお互いが相手に付けたあだ名であった。

サーパンは沢井と言い僕は彼のことをサラダパンとふざけて呼んでいた。サーパンは「川上はカワウソパンだ」と言い返してきた。

カワウソって何のことかよくわからなかったが、動物だと後になって教えてくれた。

サーパンはクラスで一番頭が良かったので、さすが物知りだと感心したものだ。

時間が経つにつれてサラダパンがサーパンに、カワウソパンがカワパンに自然となっていた。

サーパンに声をかけられたので、僕は自然に口から出ていた鼻歌をやめた。

宮城小学校の校庭を後ろに見るようになると道は左にカーブして目の前に道を横切っている新幹線の高架線が見えてくる。

新幹線工事が僕達の町に来た時はみんな大騒ぎになった。家の2階の窓から試運転で走る新幹線を初めて見た時僕は、「カッコいい」と思わず呟いてしまった。

新幹線は慶応の山にトンネルを造ったので、慶応の山に行き山の斜面から線路の工事現場に下りたことがある。日曜日だったので、工事の人はいない。真っすぐ伸びた高いところにある線路はどう表現していいかわからない初めて見る美しさがあった。

トンネルの中にも入ったがひんやりしていて奥の方に歩いていくのはなんとなく怖かったため、20歩も歩いたら戻ってしまった。

新幹線の高架線の隣には神社がある。小さな神社だが夏になると必ずここで盆踊りが行われる。ワルの長瀬は時々この賽銭箱からお金を盗んでいるという噂だ。

高架線を越えると「カワパン」と声がした。声がした方を見るとチンチンだ。チンチンは小学校6年生の時の親友で中学2年になった時、再び同じクラスになった。

小学5年の時、クラス替えがあり、初めてチンチンと出会った。噂は聞いていた。女みたいな男、女としか遊ばない男として有名だった。

「お前、チンチンあるのかよ」と誰かに言われたのがあだ名になったと、吉永が言っていた。

女臭いチンチンは気持ち悪く感じ、しばらくそば寄らなかったが、いつの間にか親友になっていた。

「カワパン、演劇クラブに入ろうよ」

チンチンが朝から元気の良い声を出す。きつとちゃんとした朝飯を食べているからだろう。

チンチンの家は父親が大会社の部長なのでなにかハイカラである。誕生日会をクラスの友達を呼んで開くということもチンチンの家で初めて味わった。

優しいそうなお母さんにケーキとか混ぜご飯、それにお菓子の数々、僕にとっては夢のようなパーティである。僕なんか誕生日会なんてやったこともないし、誕生日すら親はいつも忘れている。

「ねえ、カワパン、演劇クラブに入ろうよ」

僕とチンチンは小学校の時、演劇クラブに入っていた。さっき僕を抜き去っていったサーパンも演劇クラブに入っていて6年の時、主役はサーパンであった。

僕の演技は自分で言うのもなんだが、結構いける。しかし、背が低いので主役にはなれず、2番目の役になってしまう。学年でやる演劇も主役ではなく2番手の役だった。

「川上は背が低いから、お父さん役は無理なんだよ」

先生がなくさめの言葉をかけてくれたが、納得はできない。

そんな訳だから、一度は演劇で主役をしたいと思っていたが中学の演劇クラブには男が一人もない女の園なのである。そんなクラブに入ったら周りからどんな風に見られてしまうか。チンチンは女みたいなものだから抵抗はないだろうが、僕は物凄く抵抗がある。

だからチンチンはことあるごとに僕を誘うが僕の返事は、「やだよ」であったし、今もチンチンにそう返事をした。

「もう、カワパン、ちゃんと考えなよ」とチンチンが言った直後、後ろから、「おはよう」と声がした。中原容子である。

「ようちゃん、おはよう」

チンチンはうれしそうに返事をする。

中原容子も小学六年の時のクラスメートである。今は違うクラスだがチンチンは兄弟みたく、いや姉妹みたく仲がよい。又、彼女は宮城小学校でもベスト3の美人だったし、上原中学でもベスト3に入れる美人であった。

チンチンは容子が来ると僕にはかまわなくなったので、僕は歩く速度を少しずつ落とし、自然に二人の少し後ろを歩くようにした。しばらくすると声も聞こえないほど距離が離れたので、僕は再び鼻歌を口ずさんだ。今度の曲はタイガースの『君だけに』だ。

家を出て、しばらく歩いていると身体もだんだん元気になり、しっとりとした歌より活発な歌を歌いたくなったのだ。

春の陽射しはだんだん僕を元気にしてくれる。それに上原中学校に近づくにつれ、久しぶりに石山と会えると思うとあれもこれも話そうと言葉が沸き上がってきて、押さえられなくなるので、身体の内から元気になっていくようであった。

僕の家の前道を真っすぐ北に歩いていくと、いつかその道は学校通りにぶつかる。ぶつかって左に曲がれば川崎市立上原中学校の正門が見えてくる。

転校生

カワパン

昭和44年（1969年）日本は、40年不況が終わり、いざなぎ景気の真ただ中、この年日本は元気いっぱい、国民はこれからの日本の未来を豊かでハッピーになると、信じて疑わなかった。社会現象となったモーレッツ社員の誕生もこの年で、小川ローザの「oh、モーレッツ」も大ヒットした。

昨年、GNPがアメリカに続き西側で第2位と発表され貿易収支も黒字に変わり、チャールズブロンソンやアランドロンといった外国人タレントがCMに出てくるほど国際的になり、海外出国人数も50万に迫る49万2880人となる。

誰もが、日本から世界へと眼を向けはじめた年であるだけでなく、アポロ11号月面着陸成功により宇宙にも目を向けた年でもあった。エネルギーいっぱいの年は学生達も同じで東京大学、安田講堂を学生が占拠し、それを機動隊が排除する光景はテレビで全国に流れ、その視聴率が95%を記録した。

エネルギーシユに変化していく国土は、汚い川や海、星の見えないう空も作っていた。そんな年、僕は中学3年で中学生生活最後の一年を送ろうとしていたのだった。

新学期校門に足を踏み入れる時、桜の花がどうしたって目に入ってくる。暖かい春の風はなぜか心をウキウキさせ、新しい学年に何か面白い事が起きないかと期待を抱かせる。そんな気持ちだから、目に入った桜の色は遊園地の乗り物の色や、祭りの提灯の色のようを感じる。

僕達の中学校の校門は正門と裏門、それに正門と同じ並びにある東門があり、どの門から入っても桜がよく見えるが、校庭にある裏門は、北側と西側に一列に植えられた桜を一望しながら入るので、

眺めならこの門が一番であろう。しかしこの門を使う生徒は少なく、ほとんどの生徒は正門を使う。

僕達の中学校には、三つの小学校の卒業生が通って来ており、僕が通っていた宮城小学校の半分と、二つの小学校のほとんどの生徒は正門から校内に入る。

僕は東門から入るのだが、下駄箱が裏門近くにあり、結局かなり歩かなければならないため、裏門や正門を使う時もたびたびだ。

今年はいよいよ中学3年。中学生生活最後の年で、高校受験の年でもあるが、1学期からそんな先の事は考えていない。一番考えている事は夏休みの事である。今年こそ泊まりがけでキャンプに行こうと、春休みに入る前、石山と誓いあっていた。

中学2年の夏休み、僕と石山、それに細井、小泉、出川、加山の6人で伊豆にキャンプに行こうと一度計画したが、失敗に終わったのだ。中学3年の今年こそ成功させなければならぬ。だから教室に入ったらずその相談を石山が言ってくるに違いない。ところが、僕は今もつと面白い計画があるので、それを石山にすぐ話そうと考えている。

春休みは、夏休みや冬休みに比べ短い。どこに行く訳でもなく、なんとなく時間を潰していたら終わってしまう。特に、暖かくなると無性に眠くなるので、ほとんど家でゴロゴロ寝ていたようなものだ。ゴロゴロ寝ているといろんな事を考える。一番考えるのは友達のことだ。友達といっても近所の友達ではなく、クラスメイトのことだ。なぜなら、近所に友達を持てるのは小学校までで、中学に入ると近所付き合いは無くなり、友達と言えばクラスメイトに限られてしまうからだ。

僕と一番仲の良いクラスメイトは石山と・・・加山・・・で、石山とは小学校も同じ宮城小学校だったが、石山は3組で僕は4組とクラスが違うから、存在は知っているだけの間柄であった。

石山とは中学1年は別クラスだが加山は同じクラスだった。中学1年の時一番仲のよかったのが加山であったが、2年生の夏休み、

ある事件があり、その後なんとなくくしゃくしゃしている。

石山とは2年の時同じクラスになった。キツイ目に、食いしばった口、丸顔で小さな身体。人を寄せ付けない雰囲気、笑顔を見せようとはしない。小学校の時は不良と噂され、あまり側に寄りたくないタイプであった。

「おい、貧乏揺すりやめろよ」

石山が僕に初めてかけた言葉である。開くか開かないかの口で、ドスのきいた低い声だ。その声に反応し振り向いた瞬間、石山と目が合ってしまった。

こわい、でも目を反らしたら後々までなめられる。

僕は石山の目を見ながら、ゆっくり半回転している上半身を元に戻し正面を向き、貧乏揺すりはやめた。

僕は、暴力は嫌いだが暴力には負けたくない。

石山が立ち上がり僕の側に来て、胸倉を掴んで脅しをかけてきたら敢然と立ち向かうつもりでいる。でもいたずらに揉め事を起こすのも意味はないと考え、貧乏揺すりをやめたのだ。

『決して石山が怖い訳じゃない』心の中で僕は一生懸命そう思ううとしていた時ちょうど、「カワパンも七組なんだ」とフカヒレが声をかけてきたので、石山との緊張感が解け僕はホッとした。

2年になり初めて入ったクラスはゴタゴタし、皆好きな席に座り、誰が入って来たのだろうと辺りを見回している。机に座っている者もいるし、3〜4人固まって話している者もいる。

僕も知っている奴はいるかと辺りを見回していたので、ついそっちばかり気がいつて、足は貧乏揺すりをしていたみたいだ。

新学期初日は自分の好きな席に皆座るが、二日目は担任が席を決めていた。机はスチールの一人用で、男女が交互に座る。

僕は窓際の3列目で、右斜め前に石山が座った。

僕の背は前から3番目、石山は5番目だから二人とも前の方の席になったのだと思うが、その席順が僕と石山井の仲を急速に近付け、一ヶ月もすると仲良しになっていた。

教室のドアを開くと、石山はもう来ている。

「オッス」と僕。

「メッス」と石山。

「キッス」と二人で言うと、唇を突き出しキスする口を二人ともつくった。最近流行りの挨拶である。

「石山、俺、春休みにいいこと考えた」

「世界征服か」

石山は僕が真面目な顔をして話すとすぐに茶化す。

「馬鹿言ってんなよ。面白い計画だ」

面白い計画という言葉に石山は反応した。おそらく彼は、夏休みに計画しているキャンプで、僕が何か面白いイベントを考えたと思ったのだろう。

僕と石山で何かやる時、大抵僕が提案し中身も僕が考え、それに石山が賛同し、仲間が欲しい時は二人で集めるという形態をとっていた。

「あのよ、うちのクラスって幾つかのグループに分かれてるじゃん」

「俺のグループとカワパンのグループってことか」

「石山、真面目に聞けよ」

ちよつと語気を強めたので、石山は、「はい、わかりました」と笑顔を僕に向けた。

いつ頃からだろう、彼の笑顔が毎日見られるようになったのは。

小学校の時、廊下ですれ違ったり、校庭で見かけた事は何度もあるが、いつもしかめ面をしていた。

中学2年の初めて会った時からしばらくは笑顔を見せる事は無かったが、気が付いたら僕の前ではいつもニコニコした笑顔を見せている。

僕は石山と違って、小学校の時からいつもへらへらと笑っている子供であった。

小学校の卒業アルバムを見ると、箱根の金時山頂上でクラスメー

ト5、6人で撮った写真が載せてあり、そこに写っている僕の顔は、これ以上ないといった笑顔である。他の友人達は、くたびれきった顔、ちよつとニコリとした顔ばかりなのに、僕だけは、何がこんなにうれしいのだろうと、本人が見ても笑いすぎじゃないかという顔を載せていた。

先生から叱られる時も「川上、笑うんじゃない」といつも言われる。自分では神妙にしているつもりなのだが、どうも顔はへらへらしているようなのだ。そんなへらへら顔の僕といつも接しているうちに、石山も笑うようになったのかもしれない。

「男はさ、川田、横山、小泉という野球のグループと、ホゾ、フカヒレ、加山」

僕は加山の名前だけをわざとぶっきらぼうに言ったが、石山はそのわずかな違いには気づかないようであった。

「まあ自分達は頭が良いと思っているグループ。うーと、そこに前原も入るかな。それと実藤、古畑、小久保、新城のグループともいえないグループ。後、俺と石山、出川、細井のグループ」

「え、俺達のグループに出川と細井が入るの。俺、嫌だよ」

「俺だって嫌だけど、周りはそう見てるんじゃないか。それに、去年一緒にキャンプに行こうとしたじゃないか」

「それはそうだけど、出川は嫌だな。一緒に仲間に見られたくないよ。あいつとは」

「別に今、班のグループ分けを話しているんじゃないくて、俺らのクラスは一応、こんな風にグループ分けが出来るって話してんだから、おとなしく最後まで聞けよ」

「はい、わかりました」楽しそうな顔をして石山が返事をする。

「カツチン、長原、チンチン、松田が最後のグループ」

「おいおい、草津と石井はどうなっちゃうんだよ」

「あっそうだった。あいつらは誰とくっついてるんだ」

「誰だろう。いつも孤独を楽しんでるよな」

「でも草津は、誘うと俺らに結構付きあうじゃん」

「そうか、じゃあ俺らのグループなんじゃない」

「そういう事にしよう。草津と石井は俺らのグループ。」

でも俺、石井と話した事ないぞ。それでも同じグループなのか」

「石井は草津と仲が良いんだから、別にいいんだよ」

ジリリリリリン。

始業のベルが鳴ったので、石山との話が中断された。ドアが開き、カツパが見た事もない男子生徒を連れて来た。

カツパとは僕達の担任で、髪の毛がカツパの皿のようなカットをし、顎が四角ばって、口が大きく、誰が見てもカツパに似ているので、かなり前からそのあだ名をつけられている。

八つ上の僕の兄も、「お前の担任はカツパがなったか」と言ったから、少なくとも8年以上前からカツパと呼ばれていたのだろう。

「えー、3年生になり今年受験の年でもある。我が上原中学は、例年なら3年になるとクラス替えがあったのだが、今年からは受験の年にクラス替えはマイナスではないかとクラス替えは無くなりました。そのため、又一年、同じメンバーで、僕も再びこのクラスを担当するからよく言う事を聞くように。それから、クラスのメンバーは変わらないが、新しいメンバーが一人増えたので紹介します」カツパはそう言うのを背を向け、黒板に大きく「熊田一郎」と新入生の名前と思われる字を書いた。

あちこちで含み笑いが起きると、新入生は怖い顔になった。

小さな目に、潰れて上を向いている鼻、角張った輪郭にこつい身体。誰が見ても熊に似ているところに名前が熊田なので、あちこちから含み笑いが起きても当然だろう。

「えー、北海道から来た熊田一郎君だ。皆仲良くしてやってくれ」カツパの言葉が終わらないうちに、「北海道のヒグマが来たー」とフカヒレが大声をあげたので、一斉に笑い声が教室内に響いた。

いつもなら大声をあげ、騒ぐのは僕の役目だったが、転校生に意地悪する行為は昔から出来なかった。

「中学生の友」に載っている中学生生活の小説を読むと、必ず転校

生という存在は出てきて、その転校生はクラスメートにいじめられ、主人公がそれを助けるか、転校生が主人公で、そういういじめに負けずクラスメートと仲良くなっていくという話が大概書いてあるのだ、僕は転校生に憧れていた。

出来れば自分が転校生になって、見知らぬ学校に行きたいと本当に夢見ていたが、父の仕事は自営業なのでそんな事は有りえず、それならばと転校生にやさしくしてあげて仲良くなろうと思っていたのだ。

野球部の小泉も、中学1年の時僕達のクラスに転校してきたので、すぐに声をかけ仲良くなった。だから僕は、転校生を皆と一緒に笑わないでじっと見ていた。

転校生の顔は真っ赤になり、心なしか目に涙があるように見えるが、彼はその目をフカヒレに向け睨みつけていた。

「笑うな！」カップの大声が響く。

カップの声に、じっと転校生を見ていた僕も、金縛りが解けたようになり石山を見た。

今日は新学期初日なので皆好きな席に座っているため、右隣に石山が座っているのですぐ目がいったのだ。

石山は僕と同じく笑ってはいなかった。他のクラスメートは大きく笑う者、小さく笑う者とその大きさは違っていたが、そのほとんどは笑っていて、カップに怒鳴られたためその笑い顔が一瞬止まり、そーと元の顔に戻そうとしている顔になっていた。

僕の目が他のクラスメートに移る。神崎も笑っていない。

神崎は女だてらに、クラス委員長を中学二年生の間ずっとやってきた。女子がクラス委員長をするというのは非常に珍しく、他のクラスではないことであつた。

委員長は男性、副委員長は女性、書記は女性が8割、男性2割というのが常識なのだが、神崎は中学1年の時から委員長が指定席であつた。

彼女は常にクラスで一番の成績だから、委員長になっても不思議

はないのだが、成績プラス姉御的な性格が加わっているため、委員長に選ばれたのだと思う。いくら頭が良くてもおとなしかったら、副委員長が女の場合定位置なのだ。

「人の名前で笑うなんて恥ずかしいと思わんか。深田そこに立つてろ」

カッパの怒鳴り声に、教室内はシーンとなった。

「転校生を暖かい気持ちで迎えてあげられないなんて、中学生として恥ずかしくないのか。もうお前達は大人なんだぞ。人の名前で笑うなんて子供のする事だ……。熊田、あの奥の席に座れ」

カッパに指された席に熊田は歩き始めたが、その目はずっとフカヒレを睨み付けていた。

熊田の座った席は、フカヒレと二席しか離れてなく近かったため、熊田の目はずっとフカヒレを睨み付けていたが、フカヒレもその目をそらそうとしなかった。

席が離れていればその視線を外したり、知らないふりも出来るだろうが、これだけ近くてその視線を外すと、明らかにビビッタと周りにから思われるため、フカヒレは視線を外さないのだろう。

カッパは簡単な連絡事項を言うと、すぐに教室を出ていった。

新学期初日は顔見せだけなので、これで終りであるが教室内の初日はまだ終っていないかった。

「おい、お前」

カッパが去った後なので教室内はいっぺんに騒がしくなった。

そのため、熊田の声は近くの者にしか聞こえなかった。しかし、聞こえた者にとってその声はとても恐ろしく聞こえたのだ。フカヒレにも当然聞こえている。

熊田はフカヒレを睨み付けながらツカヅカと歩き、あつという間にフカヒレに近づくと、いきなり右拳を振り上げ左頬を殴った。

後ろに吹き飛ぶフカヒレ。

机が彼を受け止め、ガシャツという大きな音が響くと、近くにいた女生徒がキヤーと叫ぶ。

僕は初めて人がグーで殴られるのを見た。

小学生の喧嘩は相撲のように組みあつて相手を倒し、その上に乗り、組み伏せれば大抵周りの者がその時点で止めに入るので、勝負は終りであつたし、お互いたいしたダメージは受けない。

中学生の喧嘩も小学生の延長でたいして変わらない。ちよつと違ふのは腕をひねられたりするが、その時すこし痛い位で、周りの者が身体を分けてしまえば、身体は興奮しているがダメージはなく、お互いの友達がなだめて終りである。

僕達の中学には、マンガの世界には必ずいる番長や不良はいなかった。

川崎の中学校というと他県の人間は怖がるが、それは市役所がある海沿いの地域で、そこは京浜工業地帯の中心地でもあり空気が悪く、田舎から出稼ぎに来る者も多く競馬場もあり、トルコも多かったので、明らかにガラの悪い人間が集まっていた。

そんなひどい町で暮らしていたら学生も不良が多くなるだろうが、僕達の住んでいる所は東横線沿いの新興住宅地なので、家を買って新しい町に住もうという年代が多く、それなりの給料を貰っている人達が中心の地だから、若々しくとても穏やかな町だったのである。後に小田急線沿いが今の私達の町のイメージになったが、私達が中学生の時、小田急線沿いは完全な田舎で、日帰りか、一泊してハイキングに行くというイメージの場所であつた。

僕の家からは東横線の三島、南武線の清水は同じ距離にあつたが、清水の駅に行くより、三島を使うのがほとんどであつた。

南武線は立川と川崎を繋ぎ、東横線は渋谷と横浜、桜木町を繋いでいる。どちらに出かけたいかといえば、やっぱり川崎ではなく、横浜とか渋谷であろう。

中学の生徒の大半も三島の駅の近くに住んでおり、清水の駅に近い生徒は、宮城小学校卒業生だけであつた。

のんびりして、暴力沙汰のない上原中学校だが、後でわかった話になるが、そんな中学校だったのは私達の時代だけで、私達の前の

世代、又、後の世代は上原中学にも不良がかなりいたらしい。

私達の前の世代はまだ暮らしが苦しく、丁度私達の世代の親が、生活にゆとりがでてきたのだろう。

子供にピアノを習わせたり、お誕生日会にクラスメートを集めたりする家庭がとも多かつたし、若々しいお母さんが多い町であった。そして、私達の後の世代になると豊かさがあたりまえになってきたのかもしれない。

そんな平和な時代に暮らしていた訳だから、人がグーで殴られるなんて有り得ない光景だったのだ。

パーで殴られた奴ならこの中学校にも一人だけいる。それは僕である。

中学1年の時、社会の先生が急に休んだため自習になってしまった。しかし自習の課題は出され、皆、静かに自習をしていた。

僕は自習なんて大嫌いだったので、ケンちゃんと教室内を走り回り遊んだ。

翌日、休んだ社会の先生は僕達の教室に入ってきて、週番の上川純子から、僕とケンちゃん二人だけが騒ぎ皆が迷惑したとの報告を聞いた。

僕は社会の先生に前に来いと言われ、へらへらしながら前にでていった。ケンちゃんは風邪をひき学校には来ていなかったなので、僕一人が前に出ていったのである。

「川上、お前は皆が静かに自習していたのになんで騒いだんだ！」という怒鳴り声が聞こえたかと思うと、僕の身体は右横に飛んで倒れた。

何が起こったかその瞬間はわからなかったが、倒れてから顔を社会の先生の方に向けると、ひっぱたいた後の動作が残っていたのであーあ、僕は今ひっぱたかれたんだとわかった。

「立てー！」

社会の先生の声に合わせて立ち上がると、今度は左横に身体が飛んだ。

「廊下に立つとれー！」

普段はやさしい社会の先生のその形相に驚き、すぐ廊下に僕は出ていった。

ひっぱたかれた頬はじんじんしていたが、痛みは感じなかった。窓から見える教室内では、上川純子がわんわん泣いているのが見える。

彼女もこんな大事になるとは思わず社会の先生に報告したので、この起きた現状に泣くしかなかったのだろう。僕の目からも涙がこぼれて出た。

その平手打ち事件が、上原中学校にとって唯一の暴力シーンだったが、それを上回るシーンが今、目の前で起きたのだ。

フカヒレは目を丸くして驚いた顔をしていたが、事態に気付き怒った顔になり、立ち上がり熊田を捕まえようとしたら、再びグーで殴られ吹っ飛んでしまった。

相手はファイティングポーズをとっているんだから、捕まえに行けば殴られるに決まっている。

フカヒレの身体が机に当たり、ガシャンと大きな音が教室内に響き渡ると同時に、加山が熊田の身体に抱きつき「やめろ！」と、叫んだ。

フカヒレは机に背をもたせたまま座り込み、今度は立ち上がるうとはしていない。興奮している熊田は、加山の腕を解こうともがくが、加山がそれを許さない。

加山は、身長180?の長身で筋肉質の、大人と喧嘩しても負けそうもない身体なので、熊田が多少腕の覚えがあっても、その腕を振り払うことは出来ないでいた。

「もう、いいだろう。2発も殴ったんだから、お前を笑ったフカヒレを許せよ」

加山の声に、鼻から凄い勢いで息をしていた熊田も、落ち着きを取り戻していったが、それでも、鼻息は僕の所まで聞こえてくる。

「離せよ、もう殴らないから」

熊田の声に加山が手の力を緩めると、熊田は加山の手を振り払いフカヒレに近寄り「悪かった」と小さな声を出した。

「いや、俺こそ子供染みたからかいをしてすまなかった」

フカヒレは立ち上がりながらそう言うと、平静を装いわざとらしくニヤリと笑った。

余りにも目まぐるしい展開に、僕は立ちすくんだままだったが、騒ぎが収まったのでフカヒレに近寄り、「フカヒレ大丈夫か」とやつの思いで声をかけることが出来た。

フカヒレの側に行くと、石山がいつの間にかフカヒレの隣にいて、「カワパン行こう」と僕に声をかけたので、僕達はフカヒレの側を離れ、前の席の方に行った。

石山は一番前でドア側の机に腰を下ろすと「フカヒレも殴られたままだと格好悪くて、皆に側にいて欲しくないだろうから、離れた方が良さんだよ」

石山は時々大人びた口を聞く。

確かにフカヒレは周りの者にどういう態度をとって良いのか戸惑っているようであった。

熊田が謝ってきたのに対し、ふざけるなど虚勢を張るのも格好悪いし、いいよいいよと言うのも気が収まらない。それよりも何よりも、簡単にパンチを2発もくらってしまったので、男として情けないっいたらありやしない。そんな複雑な心境だと思うから、ヘタな同情心や慰めはかえってフカヒレを傷つけてしまうだろう。そんな時はそつと、彼の側から離れてあげるのが正解だが、14歳のガキにそこまでの考えは浮かばない。

「あの転校生ちよつとおかしいよな」

僕は小さな声で石山に話しかけたが、時々チラチラとフカヒレの方に目をやった。

「確かに、いきなり人を殴り付けるのは尋常じゃないけど、転校生ってそういう所があるんじゃないのか」

「え！ 転校生ってそういう所があるってどういうこと？」

「知らない人間達の中にいきなり入って行くんだ。ちょっとでも気を許すとなめられてしまうだろう」

僕には石山の言っていることの半分しか意味がわからなかった。マンガの世界には、都会の人間が田舎に転校してその番長にいじめられるということがあるため、なめられない様に転校生は虚勢を張るが、あくまでもそれはマンガの世界であって、現実には考えづらい。だから、なめられないために暴力を振るうということが、理屈はわかっていても現実離れした話に思えて、理解出来ないでいたのだ。

石山の話聞きながらフカヒレの方に相変わらず目をやっていたら、加山がフカヒレと熊田の手を両手に持ち、二人を握手させているのが目についた。

「石山、見てみるよ。握手してるぜ」

「加山が仲直りさせたんだろ。加山は俺達と違って高校生の様だから誰もが兄貴と感^じてしまうんだよな。だからこういう場合も上手く事を収めることが出来るんだよ」

「事を収めるか。石山、洒落た言葉しってるじゃん」

「俺は、カワパンと違って知性が身体中に溢れているからな」

「知性の意味も知らないでよく言うよ」

僕と石山が軽口をたたいている間に、フカヒレの周りにいた人間達もその場を順々に離れていった。

フカヒレと熊田は加山が教室内から連れだしたので騒ぎはすっかり収まり、教室内は帰り始める生徒の騒^ぎがしさが響き始めた。

加山がいなければこの騒^ぎを先生に報告しに行く生徒が必ずいるのだが、加山が仲裁に入ったので誰もが安心してしまったため、この騒^ぎはこれ以上大きくならないのであった。

面白い計画

「カワパン、ところで面白い計画ってなんだよ」

教室内の騒めきが収まってきた頃、石山が今朝の話の内容を知りたくて聞いてきた。

やはり僕の計画を石山は気にしているのだ。

「それぞれ、朝も話した通り、うちのクラスってグループが幾つもあるだろう。」

そこで石山君に出す問題だが、3年7組の学級委員は今回誰になるでしょう」

「そりゃあ、ホゾに神崎に水口だろう」

「なんで!!」

「だって、決まってるじゃん」

「なんで、決まってるんだよ」

「奴らは頭がいいからな。」

学級委員は頭のいい奴がなると、誰もが思ってるだろう」

「そうなんだよ、皆、学級委員は頭が良い奴、成績の良い奴がなると当たり前のように思っている。」

それっておかしくないかい」

「そりゃあおかしいさ。」

本来の学級委員はクラスのリーダーなんだから頭だけで決められるものじゃないよ。

でも皆そう思っているんだから仕方ないじゃん」

「いや、俺が言いたいのは学級委員を決めるのは選挙で決めるだろう。」

成績のいい奴を先生が決める訳じゃないだろう。

あくまでも俺達が決めるんだから、俺達にとっていい学級委員を決めるのが筋だろう。」

「お！カワパン筋ときたか。言うことが凄いな。」

「もう、真面目に聞けよ。」

俺が言いたいのは、俺達が選挙で決めるのになんでホゾと神崎と水口が学級委員になってしまうということなんだ。

ホゾのグループはフカヒレと加山しかいなくて、神崎なんか誰も友達がいなし、水口も立花と土屋しか友達がいなしじゃんか。」

「カワパンそれはないだろう。」

神崎に友達がいなしってことはないんじゃない。

神崎は誰とでも仲が良いし、水口だってそうだよ。」

「いや、俺が言いたいのはグループで分けるとそうなるっていうこと。」

奴等のグループは3年7組で分けると小さいグループなのに、学級委員になれるっていうところがおかしいと思わないかということなんだよ。」

石山は返事をしない。

僕が何を言おうとしているのか把握できないからだ。

「自民党の中で総理大臣になるのは一番大きな派閥からなるんだよ。」

小さな派閥は大臣になるのがやっとなんだ。
それが政治というもので、選挙というものなんだよ」

「派閥……何それ？」

「だからそれはグループみたいなものだよ。
一番大きなグループからクラスの委員長を出すというのが政治と
いうものなのだよ。」

石山君わかる？」

気取った言い方で僕は言う。

「カワパンそれはおかしいよ。」

委員長は一番能力のある奴がやるべきだよ」

「なに真面目ぶってんだよ。」

神崎は成績がクラスで一番かもしれないけど、委員長の能力がクラスで一番とは限らないだろう」

「いや、神崎は、7組では一番委員長が似合ってるよ」

石山は背が低く成績も下の方のため、クラスで目立つ存在ではない。
い。

ただ宮城小学校卒のクラスメートは、彼が不良だったと思っているので、石山を馬鹿にはしていないため、他の小学校卒のクラスメートも何となく石山には一目置いている。

しかし、小学校の時は不良でも、今はそんな姿を何一つ見せていないため、劣等生を馬鹿にするような態度は表面的にはとらないが、心の中でしているものが多い。

石山は勘がいいのでそれは充分感じとっているが、表面的には気付かない振りをしている。

そんなクラスメートの中で、神崎は石山を認めているように石山は感じているみたいだった。

「石山君ってドキってさせられる時がある。

時々鋭いこと言うんだもの」

なんて言葉を石山に言っただためだ。

自分を認めてくれる人間を人は好意を持つものだ。

だから、石山も神崎には好意を持ち、神崎には身びいき的になってしまふのだろう。

「神崎の人物論はもういいよ。

俺が言いたいのは、今まで成績の良かった奴が当然学級委員になるという考え方を壊したいということさ」

「神崎、ホゾ、水口を学級委員にしないということ？」

「そうさ、俺らのグループと女のグループで一番大きなカチャミのグループと手を組めば、今までと違った学級委員を選べるという寸法さ」

「カチャミのグループ？」

石山はげんそうな顔をした。

カチャミはクラス一うるさい女で、彼女に何か文句を言つと何倍もの反撃がマシンガンのような言葉で返ってくる。

カチャミのグループは優等生のグループではないが、かといって

劣等生のグループでもない。

クラスでは女性版の僕達のグループといった所の位置であろう。

カチャミの親友はカチャミとは正反対のおとなしい鶴見。

鶴見はホッペと仲が良く、ホッペは三崎と仲がいい。そして、三崎は杉山と仲が良く、杉山の親友が阪部で、阪部、吉武、杉山の3人は宮城小学校6年3組のクラスメートだったことから今でも仲が良い。

カチャミ、鶴見、ホッペ、三崎、杉山、阪部、吉武の7人は横に繋がったグループであり、7人がみんな仲良しのグループという訳ではなかった。

もっとも僕達のクラスの女の子のグループはほとんどが2人から3人のグループで沢山の人数が仲良しというグループは存在しない。クラス委員長の神崎に至ってはクラスの中に特別仲の良い友人は一人もいない。

ただ彼女の場合、クラスの姉御的な存在なので、誰とも仲良く付き合っている。

「カワパン、カチャミとそのこと話すのか？」

『あのうるさい女と話すのかよ。俺はイヤだな』
という顔をして石山は言った。

「そのつもりだよ」

「よせよせ、カチャミにそんなこと言ったら、『カワパン、頭おかしいんじゃないの』と言われておしまいだよ。

それに、いつ話すのさ。

カチャミはもう帰ってしまったぞ。

明日の朝には学級委員の選挙があるから話す時がないじゃん」

「えー、カチャミもう帰っちゃったの？」

僕は教室内を見回したが確かにカチャミの姿はない。

カチャミだけでなくほとんどの生徒はもう教室内には残っていなかった。

「カワパン、俺達も帰ろう。

カワパンのせつかくの計画も失敗だな」

石山は軽く笑うと机から腰を下ろした。

「加山とフカヒレ達がまだ戻って来てないじゃん。

石山、奴らが戻って来るまで待つてようぜ」

しばらくしてガラツとドアの開く音がしたので、ドアの方を見ると加山、フカヒレ、熊田の三人が笑いながら教室内に入って来た。

「フカヒレ」

大声で呼び掛けるとフカヒレは、

「おー、カワパン。まだいたの、早く帰れよ」

と軽く笑いながら返事をした。

「おい、お前達……」

と僕がフカヒレ達にケンカの結果を聞こうとした瞬間、石山が僕の腕を引っ張り、

「カワパン、帰ろう」

と言い、僕の言葉をさえぎった。

「でも……」

と僕は石山に言ったが、強く腕を引っ張られたので、

「じゃあな」

とフカヒレ達に言い残し、教室を出ていった。

「石山、あの後どうなったか聞きたかったじゃん」

廊下に出るとすぐ右に階段があり、僕はその階段を下りながら石山に話しかけた。

「フカヒレは殴られたんだから、あまり俺達とは話したくないだろうし、仲裁に入った加山もこのことに関しては『もう終ったことだからいいじゃないか』と言いそうだし、あの転校生はいきなり人を殴るんだからやはり異常だよ。」

そんな奴の話をこっちから聞きにいきたくないよ」

石山はそう言うつと顔を少し下に向け、僕と目を合わそうとしなかった。

石山も熊田と同じように自分がなめられたらすぐに拳をふるう人間だったから、自分と似ている熊田を見るのが嫌だったのかもしれない。

裏門を出ると学校に沿って南北に延びている道が一本ある。

車が一台通れる程度の舗装もされていない道であるが、僕と石山が帰る時はこの道をよく使う。

舗装もされてなく、細い道は逆に言うつと車がほとんど通らない道だということだから安心して歩けるためだ。

今日も石山と僕はその道から家に帰ることにした。

「カワパン、明日の朝、カチャミにさっきの計画話すのか？」

桜を見ながら石山が話しかけてくる。

「どうしようかな、もうちょっと考える。もっと時間があれば良かったんだけど」

学校沿いの道を一分歩くと正門沿いの舗装された道に出る。
そこが僕と石山の別れの基点でもあった。

僕は左に石山は右。

「じゃあな、また明日」

「ところでカワパン。」

神崎を委員長に選ばないなら、誰を委員長にするんだ。
カワパンになるのか？」

石山が僕から離れながら言うつと、

「えー、俺が……。俺はやだよ」

と僕は答えてから石山に背を向け、手を振った。

僕は学級委員に自分がなればいいなと考えていた。

石山に計画を話し、石山をのせれば出川、細井も賛成するだろうし、うまくカチャミのグループも協力させれば僕達のグループから学級委員を出すことが出来る。

僕達のグループで学級委員を選ぶとしたら、一番ふさわしいのは僕だと思っていた。

しかし、自分を学級委員にするために考えついた計画ではない。いつも成績の良い奴が学級委員になるということに反発したいために考えた計画である。

でも心の奥底では上手くいけば僕が学級委員になるかもしれないと当然思いながら計画を考えていた。

石山が帰り際に、

「カワパンが委員長になるのか」

と聞いてきた時、はつきり自分にそういう気持ちがあったということに自覚し僕は自分が恥ずかしくなった。

小学生の時、学級委員を僕はしていた。

小学生の学級委員の選び方は一学期学級委員になった生徒は2学期にはなれない仕組みになっていた。

しかし、3学期は1学期同様、クラス全員の中から選ぶため、1学期に学級委員になった生徒が選ばれることが多い。

そのため、その仕組は1年で学級委員になるものは最低六人が選ばれることになる。

僕のクラスで1学期に学級委員になるのはホゾと井上、ヤマで2学期はフカヒレ、鈴成と僕であった。

僕はクラスで6番目にランクされていて、クラスの友達は学級委員のヤマとフカヒレであった。つまり優等生のグループに小学生の時、僕はいたのである。

成績は小学生の時も中学生の時もそんなに大差がない。ただ付き合っている友達が違っていたため、小学生の時は優等生と見られ、今は劣等生に見られるようになったのだ。

中学生のクラス委員は1学期も2学期も3学期も全て選挙によって決められ、一度委員になった生徒でも再び委員になることが出来る。

だからほとんど同じ生徒が1年間委員をすることになる。

僕は中学1年の時、ヤマと同じクラスになり相変わらず優等生のグループにいた。

そのため、クラス委員の選挙ではある程度票が入り、4位から6位ぐらいの位置を常に占めていた。

1年の2学期の選挙では3位に入り委員になりそうになったが、小泉が僕の名前をふざけた書き方をしたため無効になり、3位の生徒が二人になってしまい、二人で決戦投票をしたら僕は負けてしまい、委員になれなかったことがあった。

学級委員になると親に自慢できるし、生徒の中でも特別な位置にいるような気がして、自尊心が結構満足する。

だから選ばれると、

「俺、やだよー」

と言いながら心の中では嬉しがっている。

僕の父は日本一大きな宗教団体の大幹部であった。

そしてその宗教団体が政治に乗り出したので、僕の父も一度は県会議員に選ばれそうになったが、尋常小学校卒という学歴のため外されてしまった。

しかし宗教団体の中では大幹部のため、衆議院候補の後援会長に選ばれた。

そのため僕の家は選挙になると選挙事務所のような感じになり、しょっちゅう選挙用語が家の中を飛びかい、僕の耳にも入ってきたのだ。

それが僕の中でいろいろ膨れ上がり、僕達のグループで学級委員長を作ろうという計画にまでなったのである。

計画を頭の中で思い巡らしている時は楽しい。

自分にとって都合の良いことをどんどん膨らませていって、何もかもうまくいくと勝手に思い込んでいるのだから楽しいに決まっている。

頭の中では自分が神様なのだ。

世界は自分の考え通りに進む。

しかし、現実が違う。

僕の計画に手放しで賛成すると思った石山が全然のってこない。

おまけに自分の恥ずかしいところまで見透かされてしまったようである。

今朝、あんなにウキウキして学校に向かったのに帰りの足取りは重い。

席替えに班作り

「石山 剛」

神崎が投票用紙に書かれた石山の名前を読み上げると、教室内は一斉に歓声が上がった。

「おい、だれだよ、ふざけてるのは」
「石山委員長だ」

ひやかしの声があちこちから聞こえ、その声に対し石山も笑いながら手を上げて応えている。

神崎が何票か票を読み上げた後、再び石山の名前を口に出した。再び上がる歓声、先程の歓声よりも今回の方が大きくひやかしの声も増え、またもや石山はその歓声に手を上げて応えたが、顔は先程に比べ笑ってない。

3度石山の名前を神崎が口にした時、教室内に歓声はなく、石山も無然とした顔を見せた。

「カワパンが出川と細井に言って、俺の名前を書かせたんだろう」
学級委員の選挙が終り、10分間の休憩時間に石山が僕のところへ素っ飛んで来て怒った顔をして言ってきた。

「我が3年7組の学級委員にふさわしい名前を俺は書いたけど、それが石山かどうかはわからないな」
僕は気取って答える。

「馬鹿言つてんじゃないよ。おかげで俺はいい笑い者じゃないか」

「笑う奴がおかしいんであつて、投票されたことに関しては名誉に思つていいんじゃないのか。」

このクラスで3人は石山がこのクラスのリーダーにふさわしいと思つてゐるんだから」

「何言つてゐるんだよ。ただ面白がつていただけじゃないか」

「石山、選挙は神聖なものなんだぞ。」

そりゃ、石山が学級委員になれば面白いとは思つたけど、その面白いというのはこのクラスが面白くなるつてことだから石山を馬鹿にしている訳じゃないぞ」

「カワパンと口で争つても勝てないな、カワパンは口がうまいから」

石山はにこつと笑い、いつものしょうがないなという顔を僕に見せた。

「でも今回、神崎が14票、ホゾが8票、水口が6票でクラス委員になつたんだから、石山にあと4票入れば石山が水口に代わつて学級委員になれたんだぜ」

「そうだな、確かにそうだけど、俺はやだぜ。カワパンか他の誰かがするんだつたらいいけど、でもカワパンにも2票入つてたじゃないか」

「1票は石山が入れたんだろう？」

僕がそう言つと石山はニヤリと笑つた。

学級委員の選挙でいつも僕には数票、票が入る。

誰が入れているのかはわからないが僕の票が読み上げられても、石山が読み上げられた時ほどの反応はクラスにはない。

1、2票くらいなら僕に票が入っても別段おかしくないという評価が僕にはある。

学級委員が決まるとクラスの係を決める。

掃除係とか、保健係とかいった奴だ。

石山は席係、僕は掃除係の責任者に選ばれた。

教室内の掃除はクラスを3つの班に分け、1週間ごとに一つの班が受け持つ。

一つの班に13人もいるので、責任者はリーダー的立場の者が選ばれ、その立場はクラス委員に次ぐものだと思んなに認識されている。つまりクラス委員3人と掃除の班長3人はちゃんとした者が選ばれ、他の係は適当に決められるのが通例であった。

僕達の掃除の班は、男が石山に、細井、出川、小泉、チンチン、松田で、女が坂部、宮武、三崎、杉山、寺本、野口であった。

僕は小泉、チンチンと仲が良く、石山は出川、細井、松田と仲が良い。

小泉は野球部の仲間と仲が良いし、チンチンや松田はカッチン、長原と仲が良い。

そしてカッチンと長原は前原とも仲が良いというふうに僕達3年7組のグループ構成は単純ではなく、それは女子も同じであった。そのためクラスを3班に分ける時の顔触れはその時のノリで大きく変わってしまう。

僕と石山が分かれることはないが、他のメンバーが大きく変わることは充分有り得るのだ。

掃除の班とは別に4〜5人の小さな班も作られることになった。今年は中学生生活最後の年で修学旅行もあるため、小さな班を作っておくと何かと便利だろうとカップパが提案したのであった。

4〜5人ということは男女半々なので僕と石山が組んで女子のペアないしトリオと組むことになる。

一番人気の水口、立花、土屋のグループは早々とホゾ、加山のペアとくつついた。

僕が誰かいないかな々と教室内をキョロキョロしていたら、寺本と目が合った。

寺本は2年の2学期から我がクラスに転校してきた女生徒で今でも前の学校の制服を着ている。

性格は見た目おとなしいが、話をするときいつつかり男言葉を使ってしまう。

僕が後ろに座っていた寺本をからかうと、

「ふざけんなよ、このやろう」

と思わず口にし、その後慌てて口を押さえ恥ずかしそうな顔をするので、僕はその顔が面白くてしよっちゅう寺本をからかっていた。

寺本も僕のからかいを口では嫌がっていたが、顔では楽しんでいるのが良くわかった。

「寺本、一緒の班になる？」

「別にいいよ」

男言葉で寺本が返事をする。

寺本は野口と仲が良かったので、必然的に僕と石山、寺本、野口の班が出来上がった。

本当は水口紀子と同じ班になりたかった。

クラス委員で頭が良く、運動能力も高いので、水口紀子はクラスのアイドルの一人である。

同じようにクラス委員で頭が良く、運動能力も高い女子に神崎祐がいるが、神崎祐はクラス一成績が良く学内でもベスト5には必ず入るほどの秀才なので、僕達の仲間というより、姉御的な存在になつてしまい憧れる存在とはちょっと違う。

水口紀子といつも一緒にいて、今回も水口と同じ班に入つた立花由香はクラス一のアイドルである。

ちょっと冷たい感じのする水口紀子に比べ立花由香はいつも笑顔をふりまき、顔も加賀まり子に似ているのでとても愛らしい顔をしている。

背が少し低いのが難点であるが、キャツキャツ動き回る姿は背が低いゆえに愛らしく、それも魅力になつていた。

もちろん成績も良く、水口と同じバスケットクラブでレギュラーを取っているのだから、運動能力も高い。

「立花、背を高くしようとして、バスケットに入つたのに、全然伸びないなあ」

僕がそう言つてからかうと、

「うるさいな、私は背を伸ばそうと思つてバスケットクラブに入つたんじゃないの。」

純粹にバスケットが好きだから」

とムキになつて弁解していた。

立花が背を伸ばしたくてバスケットクラブに入ったと告白したのは彼女が大人になってからで、子供の頃は絶対にその秘密は彼女の胸の中から出ることはなかった。

アイドルといえば、私達が社会人になった頃、世に出てきた中学生アイドル山口百恵と桜田淳子のイメージが水口紀子と立花由香のイメージであった。

そんな二人だからクラスでの人気は大変なものがある。

二人を好きな男はクラスの中に10人以上はいると思われるし他のクラスで彼女達を好きな男もかなりの数になるだろう。

しかし、表向きその感情を表に出す男はいない。

少しでも出したらクラス全員にからかわれ、恥ずかしい思いをするからだ。

彼女達から好きだと言われるのであれば、多少恥ずかしい思いをしても勇気を奮って告白する者も出るかも知らないが、彼女達が自分を好きだなんて絶対に言う訳ないと誰もが思っているから、その感情を表に出す者はいないのである。

僕もその一人であった。

僕は水口紀子が好きであった。

可愛くて元気があり、誰からも好かれる立花由香に対しては一度も恋心は起きたことがないが、クールで自分の意見をズバッと言う水口にはある日突然恋をしてしまった。

水口はクールであるが、おとなしい訳ではなく、普通の人よりは活発な女の子であった。

その活発な女の子がある日憂いを帯びた目で外の景色を見、切なそうに一日過ごしていた。

たまたまその日はお腹が痛かったのかもしれない。

家族の心配事でもしていたのかもしれない。

彼女の胸の内はわかりようもないが、普段活発な女の子が切なそうにおとなしくしていると、ドキッとしてしまうのが男だろう。

石山にそんなことを言うと、

「それはカワパンだけだよ」

と言いそうだが、僕は男ってそういうものだと思っっているし、それに気付いた僕が彼女に恋しても全然不思議な出来事でないと思っている。

僕の彼女への恋心は誰にも言っていないし、悟られてもいない。もちろん石山にも打ち明けていない。

僕が女の子を好きになったのは小学校4年生からで、今までに2人好きになったことがあり、水口が3人目であった。

最初の二人はクラスのアイドルという存在ではなく、どちらかというとおとなしい子達であった。

僕は、クラスのアイドルはまず好きになることはなかった。

でもクラスのアイドル達はみんな活発で明るい子達だからすぐ友達になることが出来た。

友達になるとそこから恋にはならない。

友達でいることが楽しいから女の子でも男の子のように思っつまうのだ。

恋をする女の子とは遠くから眺めているうちに好きになっていくものだ。

だからほとんど言葉も交わさない女の子を僕は好きになってしまった。

基本的にはおとなしく、神秘的な女の子が好きなのだろう。

そういうことでいうと水口は僕の恋の対象には絶対ならない女の子であったが、切なそうな姿を見つけてしまった時、突然好きになってしまったのである。

立花と争うクラスのアイドルを好きになったなんてミィハー的な安っぽい男に思われるようで石山にもそのことは打ち明けられなかった。

4〜5人の小さな班が5分も経つとほぼ決まってきた。
しかし、一人だけうろちょろしている男がいる。

草津だ。

石山はそんな草津を目にすると、

「草津、俺達の班に来ないか？」
と声をかけた。

「別にいいよ」

草津は軽く言うつと、ゆっくり僕達のところに歩いて来た。

草津と石井の二人は中肉中背の美男子であったが、クラスで目立つ存在ではなかった。

英語の女教師が、

「ハンサムな石井君、これ答えて。

そして次のをもう一人のハンサム君、草津君が答えてくれる？」
と言ったので、

『あー彼らはハンサムなんだ』

と僕はその時気付いたのであった。

クラスでおとなしい子はいくら美少女、美少年であっても目立つ存在とはならず、恋の対象にもならない。だからいくらハンサムでも彼らを好きになる女の子は我がクラスにはいないはずである。

ただ彼らをよく知らない後輩の女の子には、彼らはモテタと思う。

おとなしくて優等生的な石井、それに反して草津は陰があるように見える不良っぽい生徒であった。

石山にしても同じような雰囲気があるため草津は石山の誘いにすぐのれたのだろう。また、石山もどの班からも声がかからない草津に自分と似たところを感じ、声をかけたのだと思う。

「カワパン、どの席に座りたい？」

「やっぱり窓際かな」

「周りの奴は誰にする？」

「うーん、後ろは寺本でいいし、前は立花が面白いかな。

前が立花だと隣は水口になっちゃうのかな？」

「わかった。じゃあ、カワパンの周りはそのようにしてあげるよ」

石山は席係なので、クラスの席順を自由に決められる。

もちろん近視の人を後ろの席にするとか、背の高い人間を前の席にすることとは出来ないが、あまり極端なことをしない限り問

題はない。

石山は中学3年生の1年間ずっと席係をしたので、僕達は常に窓際の席を確保することが出来た。また、冬はストーブの温かさが程よく来る席を確保することも出来たのであった。

石山は僕が前に立花、横に水口と言ったことに対し疑問を持たなかったようである。

立花はクラスのアイドルで明るいから、側にいると楽しく過ごすことが出来る。

水口はクールだが別に暗いという訳ではないし、立花の友達だから横に水口を選んでも不思議ではない。

それに僕が好きな女の子は別にいると石山は思っているから、水口を隣にすると何とも思わなかったのである。

生徒会立候補者

班も決まり、それぞれの席も決まってみんなに落ち着きが出始めた時カップが、

「今年は君達も3年である。

もうすぐ生徒会の選挙があるがどうせなら、このクラスから生徒会長を始め全ての役員をとってみないか？」

と提案した。

するとカップの提案にクラス内は歓声があがり、沸き立つのであった。

生徒会の役員は個人が立候補し、それを全校生徒が投票して決める。

立候補する人は生徒会に関心を持っている人間が主だが、時々おちゃらけで立候補する者も出てくる。

立候補は1年生でも、2年生でも、3年生でも出来るが80パーセントは3年生で当選するのも80パーセントは3年生である。

一つのクラスから大体1〜2人くらい立候補するのが平均だが、3年7組では5つの役員全てに立候補しようというのだから、5人が立候補することになる。

だいたい生徒会という組織は生徒が自発的に運営していくものだから、そこに先生が絡むことは少ない。

だから生徒会役員を全て一つのクラスで取ろうなんて担任が発言するということはとても問題なのだが、カップの発言にクラス全員

が乗ってしまった。

早速、それぞれの役員に誰を立候補させるかクラスで決めることにした。

立候補は個人が決意して決めるものの、クラスで決めようというのは明らかに生徒会の趣旨から外れているが、誰もそれをおかしいとは思えない。

実は3年になったら生徒会役員に立候補しようかと僕は秘かに考えていた。

クラス委員も基本的に立候補を募って選挙をするという形をとるのだが、クラス委員に立候補する者はまずいないので、そのままクラス全員を対象として選挙する。

クラス委員になることは国会議員になることと同じで、国民の下僕となる国会議員、クラスの下僕となるクラス委員というのが本来の姿だろうが、実際はどちらも自分達が特別な存在だと思っている。しかし、クラス委員に限っては自ら立候補するという奴は出て来ない。

うぬぼれていると思われるからだ。

クラスみんながクラス委員をやってくれというのなら、しょうがないからやってやるか、みたいなポーズをとってクラス委員をやるのだ。

しかし生徒会役員となるとそうはいかない。自らの意志がない者に役員になる資格はないからだ。

はっきり自分は生徒会役員をしたいと表明できない者はお呼びで

ないから、クラス委員のようにみんながやれというからやります、という人間は生徒会役員には絶対なれない。

当然生徒会役員とクラス委員では生徒会役員の方が、段違いに格が上だから、クラス委員になっている奴はみんな生徒会役員にもなりたいに決まっている。

ところが僕達のクラスで生徒会役員になろうとはつきり意思表示しそうなのは神崎だけで、ホゾとか水口はまず、立候補しないはずである。

神崎は1年生の時も2年生の時も生徒会役員に立候補して落ちたから、きつと今回も立候補するだろう。

ホゾは人から言われなければ何もやらないタイプで、自ら何かチャレンジしようとする意欲は全くない人間だから、生徒会役員に立候補するなんて絶対ありえない。

また、僕がひそかに思っている水口はバスケット部のキャプテンでクラブ活動を大事に考えている人間だから、生徒会の役員になりたいと思っていけないだろう。

クラス委員以外で生徒会に興味を持っていそうなのは前原で、彼はクラスの討論会では僕と同じくらい積極的に意見を言う。

ホームルームの時間に毎週1回行われるクラスの討論会は、男女交際とか中学生らしい服装などがテーマに上がり、1時間みっちりみんなで意見を出し合うが、意見をいう60%はいつも僕と前原であつた。

そんな前原だからきつと生徒会役員にも興味があると僕は見ているのだが。

「えー、それでは我が3年7組から生徒会役員の候補者を決めた

と思います。

まず立候補する人はいますか？」

神崎がクラス内を見回してはつきりした声で呼び掛ける。
教室内は静まり返って誰も何の返事もしない。

神崎が一呼吸置いて、

「では、私がまず初めに書記に立候補を表明します」
とニコツと笑い、小さな目を細めて宣言した。

教室内に軽いどよめきが起こり、水口が黒板に書記候補、神埼祐とチヨークを走らせた。

「はい」

前原が手を上げ、神埼が前原の名前を呼ぶ。

「僕は生徒会議長に立候補します」
やはり前原が立候補を表明した。

「他に立候補する人はいないですか？」
神崎が教室の隅々まで響き渡る声を出す。

僕はドキドキしていた。
生徒会長はさすがに荷が重いが、副会長もしくは議長に出来れば立候補しようかなと考えていたからだ。

議長は前原が立候補してしまったから、残りは副会長しかない。

「それでは、推薦を求めたいと思います。まず、生徒会長に誰か

推薦者はいませんか？」

神崎の言葉に横山がすかさず手をあげ、

「川田君がいいと思います」

と言った。

クラス内にオーツという歓声上がる。

川田は野球部のキャプテンである。

我が住吉中学校は、スポーツはあまり強くない。

どのクラブも市の競技会で2回戦か3回戦に進めば上出来で、県の競技会に進んだことはない。

そんな弱いクラブの中では一応野球が、一番人気がある。

まあ一応なだけど。

バレーボールもオリンピックで東洋の魔女が金メダルをとったのだから、人気があってもよさそうなのだが、いかんせんかつこいい先輩が誰もいないから人気がない。

クラブ活動の人気度なんて弱いクラブばかりだと、親切な先輩がいるなんていうのが人気のバロメーターになってしまつものである。

川田は3年7組のクラス委員になることはない。

勉強の成績が普通よりちょっといいくらいで成績では目立つ存在ではないからである。

しかし、本人は親分肌を気取ってクラス内ではえばって暮らしている。

石山に言わせると、

「単純で浅はかなのに自分で気付かないんだよな。」

そこがこつけいだよ、あいつは」

という評価なのだが、僕はそんなに嫌いではない。

スポーツや遊びではすぐリーダーシップをとりたがるので、遊びの好きな僕はそんな彼がいると、苦勞なく遊べるから彼は便利なのである。

クラス内は川田の評価でみんながざわめきたっている。

「川田ならトップ当選だよ」

小泉の声がする。

確かに野球部のキャプテンなら全校生徒を対象にした選挙ではかなり有利である。

というより、当選間違いないだろうと僕は思った。

そしてクラスのみんなもそう思ったようだ。

僕はみんなと一緒に川田について、

「あいつなら受かるよ。」

なんてしゃべっていたが、心の中では副会長のことで頭がいっぱいであつた。

石山が、

『カワパンも副会長あたり、立候補したら？』

なんて言ったら、

『そうかな』

と少し考えるふりをして、

『石山がそう言うなら、ちょっとやってみようかな』

と言って立候補するつもりでいた。

すると石山が僕に話しかけてきた。

「カワパン」

次の言葉を息をのみ待つ。

「お昼のパン何食べる？」

おいおい、今、選挙で盛り上がってんだぞ、と思いながら口では「うーん、カレーパン、クロツケパン、焼きそばパンにクリームパン」と言っていた。

「では、次に副会長を誰か推薦して下さい」

僕が石山にパンの名前を言っている時、神埼が副会長の推薦を募集していた。

「横山君がよいと思います。」

神崎の声が終ると同時に今度は川田が手を上げ、横山を推薦した。

お前ら最初から作戦考えてたな。

川田と横山は野球部のレギュラーでありキャプテンと副キャプテンでもあった。

二人の席は斜め隣り同士だから、話し合いはすぐに出来る。

きつと川田が生徒会役員になろうと横山に持ちかけて横山も同意したんだろう。

だから素早くお互いが推薦人となり、発表したのだと思う。

しかし、クラス内では横山の立候補推薦に納得する声が多い。

野球部のキャプテン、副キャプテンで生徒会長、副会長を狙う。

これは全校生徒の支持を得られるのではと考えたからだ。

横山は3年7組では信望が薄い。

勉強の成績は川田よりも良くスポーツも優秀なのだが、キザなの

である。

横山は中学１年の時、私立中学校から石山や立花のいるクラスに転校してきた。

小学校から一貫して私立の学校に通っていたから、一つ一つの動作やしゃべり方がキザに映る。

よくよく観察すると別にキザでもないのだが、先入観があるためキザに見える。

中学３年になると頭に油をつけ、クシで髪をなでるのが流行ったのだが、それを川田や前原がするとカッコつけるなよと囃し立てるが、横山がすると、

「キザだな、あいつ」

と陰口をたたいてしまう。

横山は中学１年の時、立花と噂を立てられ誰もが知っている公認の二人であった。

「お前、立花が好きなんだろう？」

とからかうと、軽く口を開きフツと笑う。

そしてその顔は照れ隠しなのだろうがキザに見えてしまう。

一度真剣に、

「横山、立花が好きなのか？」

と僕は聞いたことがあるが、彼は軽く、

「ああ、好きだよ」

と何でもないように答えた。

上原の中学生で異性を好きだとクラスメートにいう奴はまずいな

い。

やはり私立から来た奴は違うんだなと僕はその時衝撃を受けた。

横山が立花のことを好きだというのはクラスみんなが知っていたが、立花の真意はわからない。

二人が親しそうに話している姿は見たことがなく、立花が横山に特別な感情を持っている素振りを見せたことはないからだ。

「立花、横山が好きなんだろう？」

とからかって、

「そんな訳ないでしょう」

という答えが決まってくるのも、立花がそんなに横山を好きではないんだなと感じてしまう理由だった。

生徒会役員の5つのポストのうち4つは候補者が決まってしまった。

残りは会計のポストだけである。

会計は女子がやるものだと思われているので、もう僕の出番はない。

もちろん一つのポストに複数立候補してもよいのだが、クラスで全ての生徒会役員をとろうと盛り上がりつつある時に、同じクラスで同じポストを争うなんて票が割れてしまうと、裏切り行為にもとられてしまうので、とてもそれは出来ない。

結局、会計は水口に決まった。水口はバスケット女子キャプテンだから川田と同じ理由で誰もが納得した。

クラス委員でホゾ以外の二人の女子委員は生徒会選挙に立候補することが決まったのである。

ホゾの顔に悔しさとかあせりみたいな顔はない。
飄々としている。

彼は学者タイプで世間のお祭り騒ぎには全然興味がないように見える。

誘われれば付いていくし、年賀状や暑中見舞いなどの決められたことに関してはきっちりやるのだが、自ら何か面白いことを探すうとはしないし、別にそれに参加出来なくても悔しいなんて思わない性格なのである。

生徒会役員の立候補者5人が前に行き、それぞれ抱負を語った。
抱負といっても、

「3年7組の名誉のために頑張ります」
とか、

「中学生生活最後の年を有意義な年にしようと考えてます」
程度の抱負なのだが、クラス全員その抱負に拍手で応えた。

一通り5人の抱負が終ると僕はカップに、

「クラス委員が生徒会役員になったら、クラス委員はどうなるんですか？」

と質問した。

5人全員が当選するとは思わないが川田と水口は間違いなく当選すると思ったからだ。

「えー、その場合改めてクラス委員を選び直します。」

「それは全員ですか、それとも当選した人だけですか？」

「公平をきするために改めて全員やり直します」

カップは少し考えて僕の質問に答えた。

ホームルーム終了のチャイムが鳴り終ると教室内はざわめきの埒となる。

特に今日は生徒会役員候補をクラスで決めたので、その余韻がいっつも以上にざわめきとなっている。

女子の体育館での身体検査を覗く

クラスの男子はいつまでもざわついていたが、女子は午前中に身体検査があるので、いつまでもそのざわめきの中にはいられない。身体検査は通常保健室で各クラスごとにするのだが、今年の女子は学年ごとにまとまってすることになった。

約140人の生徒がまとまって検査をするのである。とても保健室では出来ないので、体育館ですることになった。

そのため早めに3年の女子は体育館に集合することになり、女子が身体検査をしている間、男子は自習をすることになっている。

僕達3年7組の教室は一番西側の木造校舎の2階にあり、教室の東側は階段になっているため、離れ教室みたいになっている。

普通の教室は北側が廊下のため、南側しか外が見える窓がないが、僕達の3年7組の教室は一番西側のため、南側と北側両方に外が見える窓がある。

南側の窓からは町の景色しか見えないが、北側は体育館、中庭、運動場が見え、また僕達の教室は2階のため、それらが特によく見える。昼休みなど、よく北側の窓から運動場を眺めながら石山達と無駄話をする。

校庭ではドッジボールをしたり、縄跳びをしたり思い思いの遊びを生徒達がしている。

体育授業での運動は体操着を着ているが、昼休みは、みんな制服で運動している。

風の強い日などは、女生徒のスカートが軽くひるがえり、白いシミーズが見えたりして、それが僕達の秘かな楽しみにもなっていた。

「おい、あの下級生、青いシミーズ着ているぞ。」

ある風の強い日、校庭を歩いていた女生徒のスカートがめくれ、青いシミーズが見えた時、思わず石山が声を上げた。

僕もその青いシミーズを見た。

ドキッとした。

青という色にエロティックさを感じたのは生まれて初めてのことだ。

僕達は中学に入ってから様々な性的なことを先輩や同級生から教えられる。

クラブの先輩から男女のセックスの話を聞き、親を汚らわしく思ったり、女性に生理があると知るのも中学に入ってからである。

中学1年の時、隣のクラスのホゾが、

「カワパン、ヌード写真持ってきたよ」

と女性の裸の写真を見せてくれ、真面目なホゾがこんな写真を持っているのかと驚いたり、ヌードって裸のことなんだ、と、初めて聞くその言葉になまめかしさを感じたりした。

ホゾがヌード写真って言った時、僕はムード写真と聞こえ、最初ムード写真だから裸の写真なのかなと思ったかもしれない。

エッチな話をされた時、友達に対し真面目ぶって嫌がったりする時と、面白がって自分の本能をそのままさらけ出したりする時と、時代時代によって僕は態度が正反対になる。

真面目な友達と付き合っている時は心の底では興味津々なんだが

エッチな話は嫌いだという態度をとり、不真面目な友達と付き合い合っている時は、もっとエッチな話をしてくれと先頭になってスケベな男になっている。

今、石山と付き合っている時は後者のスケベな男の時である。だから、スカートがひるがえってシミーズが見えたり、女生徒が身をかめた時、チラッと見えるブラジャーを見ると身体全体を使って喜びを表す。

新学年が始まり、いきなり自習といっても真面目にやる気にはならない。

僕は机に腰を下ろし、石山と馬鹿話をしていると、川田が「おい、体育館の中が見えるぞ」と声を上げた。

今、体育館では女子が身体検査をしている。

僕と石山はすぐに北側の窓に向かったら、川田が、「カワパン、頭下げろ」と息を殺した声で言ったが、その声は小さくはない。

僕と石山は窓に近づくと慌てて腰を下ろし、そーっと窓の下に行き、窓から体育館を覗いた。

体育館の正面にある体育道具を入れる大きな2枚のドアは全面ガラスで中の様子がよく見えた。

体育館の中では下着姿の女生徒が順序よく、クラスごとに並んでいる。

「おい、神林がいるじゃんか、すげえ」
川田が声を殺して言う。

神林とは学年ベスト3に入る美少女である。

僕が女性に一番性的な興奮を覚えるのは身近なクラスメートや学校内の女生徒達である。

もっとも他に興奮するといっても映画のポスターで肌をあらわにする女優とか雑誌に掲載されている水着の女性、テレビでときたま映るパンチラくらいで多くはない。

また成熟した十八才以上の女性は年が離れ過ぎているためか、エロティックさを感じるより半分気持ち悪さを感じてしまう。

よく熟した甘い果物より、固くてすっぱい果物の方が性的興奮を覚えるのだ。

その一番性的興奮を覚える女達が今、目の先にたくさん動いている。

しばらくはじつと体育館を凝視していたが、

「カワパン、ヨダレが出ているぞ」

という石山の声にハッとし、

「石山こそ、目が真っ赤だぞ」

とわざとふざけた声を出した。

石山の顔を見ると同時に周りを見たが、窓の外にうずくまっている男は4人しかいなかった。

僕と石山、そして川田に熊田だ。

「小泉、来いよ」

僕が小泉を誘うと石山も出川と細井を小さな声で誘った。

小泉は嬉しそうな顔をして窓の下に素早く来たが、出川は

「ふざけんじゃねえよ」

とぼやきながら付き合いだから行くかと乗り気でない顔を見せながらゆっくり来た。

『ふざけんじゃねえよ』は出川の口癖で特に意味はない。

僕と石山が三人を誘うのとほぼ同時に川田も手を振りながらフカヒレや横山を誘っていた。

僕と石山、川田、熊田の四人以外は少し体育館を見てすぐに自分の席に戻り、自習をしている。

また、前原はいくら誘っても自分の机を離れず、額から汗を流しながら自習をしていた。

前原のほかにも実藤、古畑、小久保のおとなしい連中は窓の下に来ようとはしないし、無理に誘う者もない。

しかしその四人以外は少し時間が経つと再びそつと窓の下に来るか、誘うと素っ飛んで来るかしていた。

僕はこの時ほど石山を友達にしたおかげでスケベな自分でいられて良かったと思い、真面目ぶっている奴らを馬鹿な奴らだと心の中で笑っていた。

「川田、生徒会長になろうという奴が覗きなんかしていいのかよ」
僕が小さな声で言うと、

「これも生徒会行事のひとつだよ」
とニヤニヤしながら川田が答える。

前原は生徒会議長に立候補した手前、体育館を覗きたくても我慢しているのかもしれない。

「あ、立花がいる」

全面ガラスの大きなドアといっても実際に体育館の中は一部しか見えない。

それも手前の1組と2組の生徒達が主で、とても奥にいる7組の我が女生徒達は見えやしないのだが、僕はわざと大きな声でクラスーのアイドル立花由香の名前をクラスのみんなに聞こえるように言った。

僕は声を出すと同時に横山の表情も見ていた。

横山は立花を好きだからどんな顔をするか見てみたかったからだ。案の定、横山ははつきりとわかるほど狼狽した顔をした。

横山の向こうで小泉もびっくりした顔をしている。

小泉は六組の古宮が好きなんだからそれほど驚かなくてもいいのにと考えたが、やはりクラスーのアイドル立花だから小泉も興味があるのだろう。

「カッチン、何そわそわしているんだよ」

川田が笑いながら言うと、

「何で俺がそわそわしなくちゃいけないんでえ」

と顔を赤くして口を突き出しながらカッチンが弁解している。

「立花、結構人気あるんだな。カワパンの声に反応した奴、7人はいたぜ」

石山が思ってもいなかったというような顔をして僕にそーっと声をかけてきた。

石山の言葉に僕も驚いた。

立花は横山とクラス公認のカップルである。

人の女に興味を持つ奴がいて、それもたくさんいるなんて、僕にとって人の女はもう恋の対象にはならないから、きっと可愛い女の子の下着姿に興味を持っているのだろうとしばらくして納得した。

「水口だー」

川田の声に今度は僕が驚いた顔をしてしまった。

「カワパン、何びっくりしてるんだよ」

石山の声に「川田の声が大きいからだよ」

と僕はやつとの思いで声を出したのだが、胸の中はドキドキしている。

川田は嬉しそうな顔をしながら、驚いた顔をした奴をからかって喜んでいる。

クラスの女の子が見えるのかと細井が鞆から何か取り出して窓の下に來た。

「カッカッカワパン、ほっ本当に水口がい、いるのか？」

どもりながら細井が言う。

彼は小学生の時からどもりなのだが、それで彼をからかう人間はクラスにはいない。

「ばーか、いる訳ないだろう」

僕がそう言うときささず、

「細井、本当に水口がいると思って來たのか、馬鹿だなー」と石山が言った。

「な、な、何だよ、だまされたのか。」

せっせっかく、こっこれを持って來たのに」

と細いが双眼鏡を手にして僕達に見せた。

「えー、凄いの持って来たな、このスケベ」

石山が笑いながらからかう。

「いつ石山にはかつ貸さない！」

「あー、うそうそ。えらい、細井はえらい」

石山はそう言うと言つて細井の持って来た双眼鏡を奪い取った。

もつとも双眼鏡といつても倍率の低いオペラグラスだ。

「あー、良く見える、すげえ、すげえ」

石山は騒ぎながら僕にオペラグラスを渡したので、僕もすかさずオペラグラスを使って体育館を覗いて見た。

「お、見える、見える」

僕も石山と同じようにはしゃいだが実際のところはそれほど見えてもいない。

中学二年の後半から近視になり始め、遠くが良く見えなくなってきたのである。

オペラグラスは確かに人を2倍くらいに大きく見せてくれるが、ぼやけ具合は肉眼と同じなので、あまり僕には意味がなかった。

しかし、冷めた態度をとるのが嫌なため、わざとオペラグラスの効果を強調し、騒いだのであった。

「カワパン、どうしたんだよ」

いつの間にか川田が隣にいる。

「細井が持ってきたんだ」

「俺にも貸して、細井いいだろう」
細井はうなずく。

オペラグラスを手にした川田は小さな子供がおもちゃをもらったように喜び、それをずっと手にし、細井に返すことはしなかった。細井はわざわざ持って来たオペラグラスを一度も使えずにいるのである。

女生徒の下着姿、下着姿といっても全員シミーズを着ているのでそれほどエロティックでもないのだろうが、僕にとっては世界で一番エロティックな光景なのだ。

そんな世界一の光景を眺めながら、近視のためそれを100%味わうことが出来ない。

僕は体育館と教室を半々で見て回っていたが、ふと前原の顔が目についた。

脂汗を流しながら一生懸命自習している前原の姿は滑稽に見えるが、その時僕が目にした前原は汗をハンカチで拭うため、メガネをはずしている姿であった。

クラスの男子でメガネをかけているのは前原一人で女子は川中一人である。

川中は小学生の頃からメガネをかけていたが、前原は中学3年になってからメガネをかけ始めた。

メガネをかけるということは秀才になったような感じがして、前原はメガネ姿を周りに自慢しているような態度をしていた。

その姿が多少、うらやましくも見え僕は前原のメガネを何となく気にしていたのだが、今、彼のメガネを見てピーンとひらめいた。

「前原、ちょっとメガネ貸してくんない」

僕の頼みにニヤツと笑って、

「いいよ」

と前原は言い、メガネを丁寧にはずすと僕に貸してくれた。

前原のメガネをかけた瞬間、世界の光が2倍になったような眩しさを感じた。

今までぼやけていた輪郭がはっきり見える。

僕は急いで窓の下に行き、そっと体育館を覗いたら、はつきりと女生徒達の下着姿が見えるのであった。

ぼやけて見えていた時は凄くエロティックに見えていたのに、はつきり見えるとその世界はエデンの園のように神々しい世界に見えたのである。

『きれいだな』と心の中でそう思ったが、口では、

「見える、見える、よく見える。すげー、すげー」

と騒いでいた。

「カワパン、よかったな。これで君も大人の仲間入りだ」

石山が笑いながら言う。

体育館を覗いて二十分くらいが過ぎていた。

最初は僕と川田が騒がしくしていたが、だんだんクラス内は静かになっていった。

すると突然教室のドアがガラガラと音をたて開くと、外から十人以上の男子生徒が教室内に流れ込んできた。

「おい、やっぱり見えるみたいだぞ」

「本当か、すげー」

口々に興奮した声を教室内に響かせる。

川畑は嬉しそうな顔をして手招きをしていたが、僕と石山はその場でポカーンとした顔をして固まってしまった。

入って来た男子生徒は3年5組のほぼ全員でいきなり教室内は動物園の如く騒がしい。

「おい、静かにしろよ。頭を下げろよ、ばれるだろう」

石山が怒鳴るが、彼らの耳には届かず、ニタニタ笑いながら全員立ち尽くし、窓にべったり張り付いたようになってしまった。

川田も一緒になって騒ぎ、熊田と僕はどうしていいかわからない顔をして、その場に座りこんでいたが、石山は一人一人強引に窓から引き剥がそうとしていた。

さすがにこれだけの騒ぎになると体育館でも気付く生徒が出てしまう。

僕達の窓を指さしながら気付いた生徒は大声を上げ、先生を呼んだ。

慌てて走ってくる女教師はキツと僕達の窓を睨むとカーテンを素早く閉めたのである。

「やべえ、やべえ」

「逃げろ、逃げろ」

5組の男子は瞬く間に僕達の教室から逃げていった。

「カワパン、やべえよ。野口と目が合っちゃった」

「え、うちのクラスの女達いたのか？」

「ほら、手前で身長測ってたじゃん。

丁度うちのクラスの女達が手前に来たんだよ。

野口とか、増川とか、三沢って背が小さいじゃん。

だからみんなより先に手前に来たんだと思うよ」

「本当かよ。

うちの女達を見たのは、その三人だけか。

立花もチビだから見たんじゃないのか？」

「いや、その三人だけだったよ。

あと五秒遅かったら、立花も来ただろうし、五分後だったらクラス的女達全員見れただろうな」

「あー、もったいない。

五組の奴ら、どうしようもねえよなあ。

あいつら礼儀とか知らない動物の群れだよ」

しばらくするとカップが物凄い形相で教室に入ってきた。

「お前ら、覗きなんて恥ずかしくないのか。

覗いていた奴は誰だ。

手を上げる！」

大声が耳に響く。

僕と石山はそーっと手を上げると川田を始めクラスの大半が手を上げた。

「お前ら、バケツに水を入れ両手に持って、廊下に一列に並び立

つとれ！」

バケツはそれほど重いと思わなかったが、時間が経つにつれ、だんだん重くなるように感じ始め、それが最高潮に達しようという時、我がクラスの女生徒達が廊下を歩き帰って来た。

ほとんどの女生徒はブスツとした顔をしていたが、

「私の裸、見た人いるの？」

と坂部が明るい声で、バケツを持っている僕達一人一人見ながら話しかけてきた。

坂部は色が黒く南方系の顔をした美人で僕達のクラスでは珍しく胸が出ている子であった。

中学3年ともなると全員ブラジャーを着けていたが、本当にブラジャーが必要なのは数人で、その中でも坂部が一番必要としている。

「石山君、見たでしょう。私のバスト」

坂部はニコニコ笑いながら石山の前に立った。

「坂部、お前の胸、偽物だったじゃないか」

「まあ、失礼ね」

石山と坂部は小学校6年3組の同級生だからお互い軽い言葉を交わし合える。

野口と寺本がヒソヒソ話しながらやって来た。
怖い顔をしている。

野口が石山を見つけると、

「最低！」

とひとこと言って足早に教室に入ってしまった。

「エッチ」とか「スケベ」と言われたなら、石山も、

「あー、俺はどうせエッチだよ」

と開き直った言葉を返したはずだが「最低」は、人格を否定した言葉なのでその衝撃度は大きく、石山は見るからに情けない顔をした。

僕も石山に「最低！」と笑いながら言うと、

「あー、どうせ俺は最低だよ。」

ちきしょう、たかだかシミーズ姿を見ただけで真っ裸を見た訳じゃないんだから

とブツブツ言っている。

僕は石山の真っ裸という言葉に反応してしまい、坂部の真っ裸を想像してしまった。

我が3年7組のクラスで可愛い女の子といえば、まず立花があげられ、次ぎに坂部があげられる。

まあまあ可愛い子といえば三崎に土屋、そして水口である。

見方によれば寺本もまあまあ可愛い方にはいるかもしれない。

クラスの女の子の裸が見られるとなったら、当然可愛い子がいいに決まっている。

しかし、立花は人の女だから興味ないので、一番は坂部になるだろう。

だから、女生徒の下着姿を見た後、最初に目についたクラスの女の子が坂部だったのも関係して、思わず坂部の真っ裸を想像してしまったんだろう。

生徒会選挙演説

生徒会役員の選挙は体育館で行われる。

選挙の前に候補者が十分間、全校生徒の前で選挙演説を行う。

生徒会長には4人、副会長、議長、書記、会計にはそれぞれ3人候補者が立った。

合計16人だから演説だけでも160分。

始まりから終りまで3時間以上体育館に座っていなければならなかった。

16人の内2年生が4人立候補していたが残りは全て3年生であった。

川田は極当たり前の演説内容でわかりやすい生徒会を目指すと締めくくって終った。

拍手が大きかったので、川田はもう当選した顔つきになっている。

生徒会長最後の演説に3年4組の大森が出てきた。

彼とは小学校四年の時、同じクラスになったから少しは知っていた。

「今の生徒会ではだめです。

誰も興味を持っていない生徒会、特に1年生は生徒会を自分達のものだとは思えない生徒が多すぎます。

生徒会は先生のものではない。

まして一部の人が運営するものでもありません。生徒全員が自分達のものだと思わなくてはいけないんです。

わたくしは生徒会長に立候補しましたが、生徒会長という特別な人間になりたくて立候補した訳ではなく生徒全員の繋がり接着剤になればと立候補したのです。

生徒会長なんて立派な地位じゃありません。

生徒の雑用係です」

大森の演説は唾を飛ばしながら感情を込めてしゃべっていた。

「あいつ、くさいなあ。

わたくしなんて言ってるぜ。

あー、やだやだ、わざとらしい。

昔からあいつ正義漢ぶっているところあるんだよな」

石山が僕につぶやく。

石山と大森は6年3組の同級生だったから石山は大森のことをよく知っているであろう。

確かに大森の演説は僕が聞いていても演技っぽく聞こえ、好きになれなかった。

ただ、当たり障りのない川田の演説を聞いているより何倍も面白くはあった。

最後に大森は、

「長い時間演説を聞いて皆さんも疲れたでしょう。

ここでひとつ体操をしましょう。

皆さん両手を思いっ切り上に伸ばして下さい。

伸ばしましたか？

はい次にその手を横に持っていつて思いっ切り手を3回叩いて下さい」

と言うと、生徒のほとんどは大森に言われた通り、両手を伸ばし

その後、手を叩いた。

体育館に拍手の音が鳴り響く。

すると大森はすかさず、

「盛大なる拍手ありがとうございました」

と言い、手を上げ、頭を下げ終わらせた。

これは生徒達にうけた。

副会長候補横山の演説も当たり障りがなかったが、川田と違ふところはキザに聞こえてしまふところだった。

前原は一生懸命なのはわかるが、言葉が上滑りしてしまい、聞く方からしてみれば何を言っているのかわかりづらく、前原自身も演説が終り、所定の席に座った時、ガツクリ肩を下ろしてうなだれていた。

水口はハキハキしていて四人の中では一番しつかりした演説に聞こえ、水口は確実に受かるであろうと3年7組の生徒は誰もが思ったに違いない。

最後に神崎が壇上に上がる。

「私は立候補した時、担任の飯島先生に『お前は石鹼だなあ』と言われました。

どうしてですか？と聞くと『石鹼もお前もよく落ちる』と言われました」

会場はワーツと笑い声が響いた。

水口と同じように堅い演説をすると思われた神埼だが、意に反してジョークを交えながらの演説をしたので、生徒達はみんな耳を傾けた。

ただでさえ長い時間体育館に座っているのである。

演説がつまらなければ聞いている顔をしていてもほとんどの生徒は話を聞いていない。

大森のような一人芝居の演説か神崎のようにジョークを入れた演説は退屈な時間を忘れさせてくれた。

生徒会選挙結果

「おい、カワパン。生徒会の選挙の結果が出たぜ」

次の日、教室に入るなり、小泉が嬉しそうな顔をして声をかけてきた。

小泉の嬉しそうな顔を見てすぐに川田と水口が当選し、あと一人ぐらい当選したのかな、と推測した。

「で、どうだったんだ」

イスの上に鞆を置き、机の上に腰を下ろし落ち着き払った声で僕が聞くと、

「神崎が当選したよ」

と、小泉は答えた。

「へー」

と僕は言い、意外な顔を小泉に見せた。

「そしたら、うちのクラスから生徒会役員が3人出たのか」
と僕が言っていると小泉は首を横に振り、

「あとはみんな落ちた」

と明るい声とにこやかな顔で答えた。

「えー、川田も落ちたのか」

「そうなんだよ。」

あれだけ自信たっぷりだったくせに落選だよ。
生徒会長はあの大森が当選したよ。

下級生にあのくさい演説受けたみたいで、相当下級生の票が入ったみたいだぜ」

大森の当選を聞いて生徒会選挙は3年生の票より下級生の票のほうが重要だとわかった。

下級生は3年生のことなんか良く知らないから演説で決まるんだなあと。

それなら僕も可能性があったかもしれないとも後になって思ったが、今は小泉の態度に違和感を持った。

「小泉、川田落ちて嬉しいのか」

川田が落ちたら同じ野球部の小泉は他のクラスメートより残念がるところになぜか嬉しそうな顔をしているので不思議に思い聞くと、

「そんな訳ないだろう。川田が落選したから悲しいよ」とは言う。

「だったらなんでそんな嬉しそうな顔してるんだよ」

「これは神崎が当選したからさ。」

神崎は1年と2年の選挙の時に落選したけど、今回当選して良かったじゃないか。

それも我が3年7組の委員長が当選したんだぞ。

喜ぶのは当たり前だろ。」

確かに小泉の説明に無理はないが、何かが違う違和感を僕は覚えた。

丁度そこに石山が来たので、

「石山、聞いたか」

と、言いながら石山の方に寄って行った。

「あー俺、今、見てきたよ。」

職員室の前に選挙の結果が貼られてたからな。

でも驚いたよなあー」

石山は近くの机に座ったので、僕も隣の机に座った。

「川田がよ、ペケだぜ。あいつ20票しか票取れなかったんだ」

「えー、どういうことだよ。」

うちのクラスだけだって40票くらいあるのに、おかしいんじゃないか」

「カワパン、川田に入れたのか？」

「当たり前だろう。石山入れなかったのかよ」

「あー、入れてない」

「どうして？」

「川田は生徒会長になっちゃあいけないだろう。」

演説聞いただろう。

あいつ生徒会のことなんか何にも考えていないなあってわかるじゃないか」

「でも3年7組の代表だぜ」

「生徒会とクラスは違うよ。」

それに川田は学校の人気者のつもりでいたかもしれないけど、結構嫌われていたんだよ。

だからクラスの半分もあいつには入れなかったんだよ」

「そういえば小泉も嬉しそうな顔していたな」

「そりゃそうさ、小泉、川田嫌いだもの」

「えー、そうなの」

「見りゃあ、わかるじゃん。小泉は川田も横山も嫌ってるよ」

石山の説明に僕はうなずいたが、納得はしていなかった。

クラス委員選挙

始業のチャイムが鳴ると同時に下を向きながら川田は教室に入ってきた。

誰とも目を合わせようとしない。

「川田、ドンマイ、ドンマイ」

小泉が川田の背中を叩きながら、はげましの言葉をかけていたが、顔は笑っている。

3年7組で野球部員は川田、横山、小泉の男子3名である。3人の中でレギュラーでないのは小泉一人である。

だから小泉は川田、横山の前に立つとどうしても卑屈になってしまい、特に川田に対しては見ようによつては子分みたく見える時もある。

もし、川田、横山、の2人が生徒会役員に当選したら小泉の立場はますます落とされていたに違いなく、2人が落選したことは小泉にとって気が楽になったんだと僕は一人考えていた。

教室のドアがガラガラと音をたてて開くと、カップがにこやかな顔をして入ってきた。

「えー、知っている人もいますが、我がクラスの神埼が生徒会書記に見事に当選しました。

神埼、前に来てみんなに一言挨拶を」

カップに促され神埼は席を立つと、カップの横に行きいつもの明るい声で簡単に抱負を語った。

「えー、それで神崎が見事生徒会役員になれたので、クラス委員に一人欠員が出来てしまいます。そこで前もって話してた通り、もう一度これからクラス委員の選挙を行いたいと思います」

カッパはそう言うつと後をホゾに任せた。

神崎は席に戻り、ホゾと水口が投票用紙を一番前の席に置く。

「水口紀子」

ホゾが投票用紙に書かれた名前を読み上げる度に水口が黒板に正の文字の一本を書いていく。

「神崎祐」

ホゾはそう言うつと下を向きながら淡々と、

「神崎さんは生徒会役員になったので、この票は無効とさせていただきます」

と言った。

「誰だよ、神崎に投票したの。」

選挙の時からずつと寝てたんじゃないのか」

ホゾの言葉が終わらないうちに熊田が大声をあげる。

「なんだよ、あいつ。」

うちのクラスに転入してまだ一週間くらいしかたっていないのに、何様のつもりだ」

僕が石山に耳打ちすると石山も頷いてはいたが、顔は笑っていて、「カワパン、今は熊田のことは無視しろよ。」

開票をちゃんと見てよつぜ
と返事してきた。

確かにそうである。

小泉の健闘

今回のクラス委員の選挙で僕と石山は3年7組の大改革をしよう
とこの一週間いろいろ工作をしていたのだ。

「小泉進」

ホゾがその名前を読み上げた瞬間、僕はやったーと心の中で叫んだが、クラス内には笑い声が充満した。

「誰だよ、さっきの神崎といいふざけて投票するなよな」
「またもや熊田が大声をあげる。」

小泉はヘラヘラ笑いながら、
「そうだよ、真面目に投票しろよ」
と小さな声を出す。

何票かホゾが投票用紙を読み上げた後、再び、
「小泉進」
と読み上げた。

小泉の顔は真っ赤になっていたが、目は輝いている。

「小泉進」
続けざまにホゾが小泉の名前を口にする。と教室内にどよめき起った。

ホゾがクラスの半分20票を読み上げた時、小泉の票は4票も入っていた。

1位はホゾで5票、2位に小泉と水口が4票ずつ、それに続いてるのがフカヒレで2票入っていた。

残りの票は立花、加山、川田、神崎、そして僕に1票、票が入っていた。

僕に票を入れたのは誰だろう。

僕はちよつと首をひねった。

小泉の名前が4回読み上げられた時、教室内は静かになった。

3年7組の生徒は40名。

この中で3名のクラス委員が選ばれる時、一番得票が低い者は5票から8票くらいが普通である。

今、小泉は2番手につけ票も4票取っている。

あと2票から3票入ればクラス委員がまず決定になる。

いくらなんでも小泉がクラス委員になる訳ないと3年7組のほとんどの生徒達は思っている。

数人の生徒がふざけて小泉の名前を書いたただだから、いくらなんでもこれ以上票は入らないだろうと思っているが、もしかしたらということも考えられるので、教室内は開票のなりゆきを真剣に見守ろうとしている。

そのため静かになっているのだ。

小泉は相変わらず顔を真っ赤にし、目をギラギラぎらつかせながら、黒板を一心に見ていた。

「小泉進」

とうとうホゾが小泉の名前を5回口にした。

ホゾと同点トップである。

教室内にオーツと歓声があがる。

「小泉進、小泉進」

と連続してホゾが小泉の名前を口にすると教室内はあちこちでみんながしゃべり始めた。

小泉が単独トップで7票も入ったのだからもうクラス委員になるのは決定したようなものである。

熊田の反発

「小泉君がクラス委員になったら、このクラスどうなっちゃうの」
「小泉君がクラス委員なんて他のクラスに対して恥ずかしい」
なんてヒソヒソ声でしゃべる女子もいる。

僕、神崎、熊田、川田に横棒1本、加山が3本、立花が4本、フカヒレが正、水口が7本、そしてホゾと小泉に8本と黒板に記され、最後の1票をホゾが今読み上げようとしている。

「小泉進」

ホゾが読み上げると同時に

「おい、ふざけるんじゃないよ」

と熊田が立ち上がり、大声を出した。

「選挙は神聖なものだろう。」

こんなふざけたことが許されていいのか。

小泉、お前だって嫌だろ。

もう一度こんな選挙やり直したよ。

小泉、お前もそう思うだろ」

と言いながら、小泉をにらんだ。

最後の票が小泉進と読まれた瞬間、口を半開きにし、目を真ん丸に開け、宝くじにでも当たったような顔をしていた小泉であったが、熊田の呼びかけに我を取り戻し

「ぼ、ぼくは……」

と何か言おうとしたが、言葉に詰まり目をぱちぱちさせながら辺りを見渡すと僕と目が合った。

小泉の目がカワパン助けてくれと言っている。

僕はすつくと立ち上がり、

「熊田の方が選挙をバカにしているし、それよりも熊田は小泉と小泉に投票した人に対し、あまりにも差別的で人として許されないだろ」

と熊田に負けなくらいの声できっぱりと言った。
特に差別的に力を入れた。

差別的なんて難しい言葉を使ったのは、次兄が三日前に人種差別の話を友人としていたのを横で聞いて頭に残っていたからだ。

「川上だな、小泉に票を入れたのは。

だからそんなこと言うんだな」

熊田も負けていない。

鼻から息を吐き出し、肩を上下に動かしながら相変わらずの大声を出す。

「誰が誰に入れたかなんて関係ないだろう。

そんなこと言ったら、投票の意味がないじゃないか。

熊田にも一票入ってるけど、誰が熊田の名前を書いたかなんてみんなの前で発表する必要ないだろ」

「僕の名前を書いてくれたのは、きっと真面目な気持ちで書いてくれたんだよ。

でも小泉は違うつて誰もが思ってるだろ」

「熊田の名前だって冗談で誰かが書いたかも知れないじゃん。

それとも自分で書いたのか」

僕がそう言っていると熊田は顔を真っ赤にし

「なっ、何を言ってるんだよ」

と言ったが、言葉に迫力がなかった。

小泉当選

「みんな静かにして」

僕と熊田の言い争いにクラスメートも参加し始め、教室内在騒音に包まれた時、カップがおもむろに教壇に来て一喝した。

「川上の言う通り、選挙の結果は尊重しなくてはならない。小泉がクラス委員になるのはおかしいと思うのは差別だぞ」

カップの声に教室内はシーンとなった。

とつさに差別という言葉は僕は使ったが、その言葉がカップにもクラスメートにも届いたらしく、差別する人間に自分になりたくないという気持ちの小泉の学級委員を認めることになった。

「えー、それでは一学期の学級委員が決定しました。

委員長は小泉君、副委員長は僕こと本田宗一、書記は水口さんに決まりました。

水口君、前に来てみんなに一言どうぞ」

ホゾは相変わらず淡々としている。

神崎が生徒会役員になったため委員長は誰もがホゾだと思っていたし、ホゾ自身もきつとそう思っていただろう。

普通なら悔しくて仕方ないはずだが、ホゾの顔に悔しさはみられない。

ガタツ。

小泉が立ち上がった時、イスの音が大きな音を立てた。

緊張のためか小泉は右手と右足が一緒に前に出るぎこちない歩き方になり、歩き方を忘れてしまったようにもうつる。

やっとの思いで教壇にたどりついた小泉は、クラスメート全員に顔を向けた。

「僕がクラス委員に選ばれたからには、このクラスを立派なクラスにしたいと思います」

あがって何も言えないと思っていた僕は意外とちゃんとした挨拶を小泉がしたので驚いたが、変な違和感が胸の中に残った。

「カワパン、うまくいったな」

昼休み、いつものように机に腰掛け石山と今朝の選挙のことを話し合ったが、声はヒソヒソ声である。

僕と石山が陰で選挙運動をしていたというのが、ばれるとまずいからである。

「しかし、学級委員になるとは思っていたけど、まさか委員長にまでなるとは思わなかったよ」

「そうだな、神崎に流れる票が分散したのと、意外とホゾと水口に票が入らなかったからな」

僕達二人は辺りを気にしながらヒソヒソ話をしている。

すると近くにいた坂部が片目をつぶりウインクした。

僕も素早く片目をつぶりウインクを返した。

僕と坂部のウインクのやり取りは五日前の僕達のやり取りを知らない者が見たら、二人は恋人同士に見えたかもしれない。

選挙の裏工作

生徒会の役員に水口が立候補した時、僕は確実に当選すると思い、そうなるかと学級委員の選挙をやり直すだろうから、かねてからの計画を石山と二人で進めた。

僕達のグループから学級委員を出す。

心の奥底では僕がなりたかったが、裏工作する人間がなろうとしたら、回りから軽蔑されるのは目に見えている。

だから当然僕と石山は候補からはずす。

それならば誰にするか考えると、僕と石山の言うことを聞き、女性から嫌われていない人物となる。

僕達男のグループの票は全部で頑張つて7票。

7票でも学級委員になれるかもしれないが、絶対ではない。絶対にするにはあと2票欲しい。

カチャミのグループは7人いるが、仲良しの人間が横につながつての7人なので、カチャミに話をつければオーケーという訳にはいかない。

又、カチャミのグループにはおしゃべりが多いので僕と石山が選挙の裏工作をしているなんてバレたら大変なことになる。

「カチャミに話すのは絶対反対」

と石山が言ったので、カチャミを仲間にするのはやめにした。

石山はカチャミを仲間にするのは反対だと言っただけでなく、

「坂部を仲間にしたらどうだ」
と提案もしてきた。

坂部と石山は小学校六年の時、同じクラスであった。

不良と噂されていた小学校時代の石山だからほとんどのクラスメイトは彼に話しかけたりしなかった。

そんな中で坂部は石山に親しげに話す珍しい女の子であった。

不良の石山に話しかけることが出来るということは人をうわべだけで判断しない人間といえる。

すなわち信頼出来る人間ともいえるので石山は坂部を仲間にしよ
うと言ってきたのだ。

計画

「坂部か、いいかもな」

僕も坂部を結構認めていた。

小学校の時は別のクラスだったが、1組の立花、2組の水口、3組の坂部と柴崎はそれぞれのクラスのアイドルとして4組の僕でもよく知っていたのだ。

だから中学2年のクラス替えて立花、水口、坂部と一緒にあった時、桃原小学校のアイドルとは全て同じクラスになったんだなあと一人愉快的気分になっていた。

2年の時、同じクラスにならなかった柴崎は中学1年の時同じクラスになり、同じ班にもなって結構仲良くしたものである。

坂部はクラスメートになってみるとひょうきんな部分をしょっちゅう僕に見せ、女にしとくのはもったいないなあと、もし男だったら僕のひょうきんライバルになったかもしれないと一人秘かに考えてもいた。

僕達の計画はまず細井と出川に話した。

この二人は僕と石山の計画にはまず無条件でのる。
今回もやはり無条件でのった。

「こ、小泉がつ、学級委員にすつ、するのおつ、面白そうじゃない、と、細井。」

「小泉の名前を書けばいいんだな。
ふざけんじゃねえよ。そんなことより夏のキャンプはどうなった

んだ」

と学級委員のことなんてどうだっていいといわんばかりの出川の返事。

最初から四票は確実に押さえることは計算できたが、それ以上は多少のリスクを負うことになる。

チンチンは小学校からの親友だから、どうしてもって頼めば僕に協力するだろう。

また、松田もチンチンが仲間になれば僕達に協力すると思う。
しかし二人とも川田の手下になっている小泉をバカにしているの
で、小泉を学級委員にするのは反対かもしれない。

「カワパンがなれよ」

とチンチンはきつと言っだろう。

石山と相談した結果、チンチンと話すよりまず坂部に計画を話そうと決めた。

万が一坂部がこの話にならなくても、坂部なら他の人間にこのことを話さないだろうと思ったからである。

坂部の説得

5日前、学校から帰ろうとする坂部を呼び止め図書館に誘った。

「坂部、頭がいいのが学級委員になるのっておかしいと思わない。クラスのためになる人間が学級委員になるべきだよと僕と石山は考えたんだ。

そこで小泉を学級委員にしようと計画したんだけど、お前もこの話にのってくれないか」

図書館に入り、少し落ち着いてから僕はこう話を切り出した。

坂部は最初笑っていたが、すぐ真剣な顔になった。

「カワパンの言うことはわかるわよ、でもそう思うなら、カワパンが学級委員に立候補すればいいじゃない。

何も小泉君を学級委員にすることないんじゃないの。

カワパンが学級委員になるんだったら、結構面白いかもしれないから協力してもいいけど、小泉君を学級委員にするのは、ちょっとねえ」

僕は最初この計画をみんなに話したら、みんなすぐ面白がつて協力すると思ったが、そんな人間は細井と出川しかいないと、人に話してみても気がついた。

みんなそれぞれ自分の考え方があるのだ。

ただ、面白そうではのってきたてはくれないのである。

つくづくカチャミに話さなくてよかったと思った。

カチャミに話したら

「カワパン、バカじゃないの。信じられない」

と言われ、次の日にはクラス中の話題になり、みんなから僕はバカにされていたはずである。

坂部の言い分にも僕は頭を抱え

「そ、それは…」

と言ったところで

「坂部の言うことはよくわかるし、その通りだよ」と石山が坂部に話しかけはじめた。

「俺達だって最初そう考えたさ。

こんな裏工作みたいなことしたくないよ。

でも学級委員って立候補者と推薦された人をすぐに選挙するだろう。

生徒会だったら立候補して、みんなに充分考える時間を与え、演説も出来るから、自分の考えを言うことが出来る。

でも学級委員はそんなこと何にも出来ないで、立候補したらすぐ選挙じゃん。

仮にカワパンが立候補したとしても誰が票を入れてくれる」

「私は入れるかもしれないわよ」

「それは俺達とこういうふうにしゃべっているからだろ。

カワパンが学級委員になったらって真剣に考えられるからじゃないか。

俺達が何にも言わないでいきなり立候補してもただのおふざけだと思って投票はしないだろ」

石山がそう言うと坂部は黙り真剣な顔で考え始め、少したってか

ら、

「そうかもしれない」
と言った。

「そうなんだよ。」

学級員の選挙はみんな軽く見ているし、頭のいいやつがなればいいんだろうと生徒も先生も思っているんだよ。
それってちよつとおかしくないかい」

坂部はますます真剣な顔つきになった。

「カワパンは今のクラス委員の決め方に問題があるから、もっと真剣に学級委員を決めてもいいんじゃないかと思って小泉を学級委員にしようって言ってるのさ」

小泉のわけ

ホームルームやクラスの行事の話し合いなどに石山は積極的に話すことはない。

「前の人と同じ意見です」
が彼のいつもの意見である。

僕と細井、出川を除けばクラスメートとも饒舌になることはなく、いつもおとなしくニコニコしている。
しかし一旦口を開けばなかなかの論客であり、僕も時々舌を巻くことがある。

そんな石山の饒舌さにクラスメートならびつくりするだろうが、坂部は当たり前という顔をしている。

「じゃあ、石山君がなればいいじゃない」

「俺とカワパンはこうやって裏で動いているから学級委員になるのは男として出来ないよ」

石山の言葉に

「それはそうね」

と軽く言い、坂部は納得した。

「でも、なんで小泉君なの？」

「俺達の言うことを聞きそうなのは小泉だろ。」

そりゃあ、細井や出川だっているけど、あいつらを学級委員に選

ぶのはちよつと思つだらう」

「なるほど」

と坂部は言い、ニコツと笑つた。

「よくわかつた。

カワパンと石山君の言うことはよくわかつた。

確かに二人の言うことも一理あると思う。

でもきれいだけじゃないと感ずるところもある。

でも賛成よ。ところで今仲間は何人なの」

「一応、4人」

「誰？」

「俺と石山、それに細井と出川」

「小泉君は？」

「小泉に下手に話すとあいつすぐ顔に出るじゃん。

学級委員に選ばれた時、俺らが裏で工作しているとすぐばれるからあいつには話してない」

「まあ、それはそうね。

でも私を入れて5票か。ちよつと少ないなあ」

「あと2、3票はなんとかするよ」

「私も吉竹さんに話してみる。彼女なら話にのると思つから」

「杉山は？」

「彼女はだめよ、彼女に話すと絶対三崎さんに言つだらうし、そうなるとホッペにも伝わつて鶴見さん、カチャミまで話が伝わるわ

よ。

そうなるクラス中にこの話が知れ渡ってアウトでしょ」

「そりゃあそうだ」

石山が納得した声を出す。

「だから6票はなんとかなるけど、やっぱりあと2、3票はカワパンがなんとかしなさいよ」

「うん、わかった」

「でも、うちのクラスも面白くなりそうね」

と坂部は言うとかスクスク笑ったが、その笑顔が何ともいえずセクシーで僕はちよつとドキツとし石山を見たら、石山はじつと坂部を見ていたので、僕はそのまま石山を見ていた。

すると石山は僕の視線に気付き、

「何だよ、カワパン」

と言ったが、僕は、

「別に」

と言い、何となく変な雰囲気をごまかした。

最後の仕上げ

次の日、僕は思いきって寺本に僕達の計画を話してみた。

「いいよ、別に」

相変わらずの男言葉で寺本はあっさり承諾し

「野口さんにも話しく」

と簡単に野口を仲間に入れることを引き受けた。

これでまず間違いなく小泉を学級委員に出来ると確信していたが、僕は駄目押しの一票を手に入れるため、チンチンにも話をする事にした。

チンチンとは学校からの帰り道が同じなので、一緒に帰る時、僕一人で話すと石山に言つと、

「大丈夫かよ、チンチンって結構小泉が好きじゃないぜ」

と石山は心配したが、

「大丈夫、俺にはチンチンを説得する隠し技があるから」

と言つと、

「わかつた、任せた」

と石山はそれ以上何も言わなかった。

チンチンと僕は宮城小学校6年4組の時の親友だから自分は余計なこと言わないでいいだろうと思つたのだろう。

「チンチン、俺さ、演劇クラブに入ってもいいぜ。」

学校からの帰り道、チンチンに僕がそう言つと、チンチンは誕生

日会で見せた時の笑顔を僕に見せ、

「本当、カワパン」

とチンチンには似合わない大声を出した。

「本当さ、でも一つ条件があるんだ」

「何？」

チンチンは素早く聞く。

「あのさ、黙って今度の学級委員に小泉の名前を書いてくれない

か」

「小泉の？」

チンチンはそう言うのとチンチンの嫌いな牛乳を飲んだ時の顔をしたが、すぐに、

「オツケー、それが条件なら、小泉の名前書くよ。」

でもカワパン、小泉に何か弱みでもつかまれたのか」

と返事をした。

「バカ言っなよ。」

何で俺が小泉に弱みをつかまれなくちゃあいけないんだ。

小泉を学級委員にしたら、あいつなら俺達の言うこと何でも聞くから、

三年七組が住みやすい教室になるじゃんか」

チンチンの言葉には僕が小泉より下なのかというようなニュアンスがあつたので、思わず僕が小泉を使いこなすんだと思えるようなことを言

つてしまった。

「カワパン、ワルだな」

とチンチンは面白そうに笑い、彼はそのことに関し何も言わなかった。

チンチンも石山とは違った大人の面影が時々見え隠れするが、この時

のチンチンの顔も僕よりずっと大人の顔に見えた。

小泉の横暴

「でも、神埼が生徒会に受かって本当によかったよな。

全員落選だったら、新しく学級委員の選挙も行われなかったから俺らの計画も全て台無しになるとこだったもんな」

僕が相変わらずのヒソヒソ声で石山に話してた時、いきなり小泉が

「カワパンと石山、机から尻をどけるよ。机は本を置くところで尻は椅子の上にのせるもんだよ」

と、みんなに聞こえるぐらいの大声を出した。

「何言ってるんだよ、小泉。お前だっていつも机に座っていたじゃないか」

僕は小泉が冗談を言ってるんだと思い軽く言葉を返したが、小泉は僕と石山に手をかけると強引に机から僕達二人を降ろそうとした。

「何だよ、小泉。本気で怒ってるのか」

まだ僕の声は軽い。

「当たり前だろ。」

カワパンももう中学最上級生なんだから、そんな行儀の悪いことはやめろよ」

小泉の顔は真剣そのもので、口はとがって目はつり上がっている。

「お前なあ、委員長になったらいきなり真面目人間になっちゃったのかよ」

「俺のことはいいだろう。」

机の上に尻をのせるなんて見ていてみっともないと言ってるんだよ。早く降りろよ」

「カワパン、小泉君の言う通りよ。机から降りなさい。」

僕と小泉の言い争いの声が大きかったため、近くの者達も気にし始め、隣りにいた水口は小泉の意見に同調して僕を非難した。

「カワパン、降りた方がいいよ」

興奮している僕をなだめるかのように石山が僕の肩を叩いたので、僕も仕方なく机から尻を降ろし椅子に座った。

「これでいいだろう」

と僕がふてくされて言う

「最初から素直に従えよな」

と捨て台詞を残して小泉は僕達の場所を去った。

「あいつ、何だよ。」

俺達が委員長にしたってわかってんだろ？な、カワパン」

小泉は中学一年生の時、住吉中学校に転校して来たために友達が少ない。

野球部に入っているからクラブの友達はあるがそれ以上に親しい友達は僕ぐらいなものだろう。

そのため小泉のことは僕がよくわかってはいるはずだと石山の言葉は言っている。

キンコーン、カーンコーン。

午後の授業開始のチャイムが鳴るが教室内はまだ騒がしい。

「おい、みんな静かに席に着けよ。チャイムが鳴ったら昼休みは終わりなんだからな」

小泉の怒鳴り声が教室内に響く。

小泉の言っていることは正論なので誰も反対出来ないが、男子生徒は不快感が残る。

小泉の注意はチャイムが鳴り終わった瞬間に発せられた。

軍隊じゃあるまいしそんなすぐに静かになれる訳ないだろう、みたいなことを何となく思っている男子生徒が多い。

小泉の変貌

「起立、礼」

先生が入ってくると小泉の誇らしげな号令が教室内に響く。

僕は午後の授業中ずっと小泉の変身ぶりを考えていた。

小泉に票が入ったのは当然僕と石山が仕組んだものだ和小泉もわかってるだろうし、クラスメートのほとんどの生徒が疑っているだろう。

だからわざと小泉は僕と石山にきつい言葉を言ったんだ。

もし、親しげな言葉や感謝の言葉を僕や石山に小泉が言ってきたら、クラスの反感は凄いことになるからカムフラージュするために今日のところはああいふ態度をとったのだろう。

少し時間が経ちほとぼりが冷めたら、いつもの小泉に戻り僕達の言うことも聞いてくれるに違いない。

僕の結論は出た。

石山にそのことを話したら石山も納得した。

しかし委員長になってからの小泉の暴走はおさまるどころか、ますます激しくなる。

「カワパン、シャツが出てるぞ」

「教室内で口笛を吹くな」

なんて小言はもう一日中言っているし、今まで川田の子分みたいだったのに、

「川田、ちゃんと帽子を被れよ」

なんて偉そうに注意もする。

間違ったことは言っていないが、どうでもいいことを委員長ぶつて言うものだから嫌になってしまう。

一度些細なことで偉そうに小泉が熊田を注意したら熊田がキレて、

「小泉、何偉そうにえばってんだ。」

お前なんか川上達が冗談で委員長にただけなんだから、おとな

しくしてろ」

と、言ってしまった。

小泉は熊田の言葉に顔が真っ赤になり、肩を震わせながら、

「俺はカワパンに何にも頼んでないぞ。

クラスみんなが俺を選んだんだ。

変なこと言うなよ。

自分が悪いことをやって責任転嫁するな、熊田」

と、熊田をにらみつけながら言った。

回りで聞いていた女生徒数人も小泉の肩を持ち口々に熊田を避難したから、

「チエツ、もういいよ」

と熊田は捨て台詞を残しその場を逃げていった。

小泉の言うことは一応いつも正論なので女生徒を味方につけるが、ちよつとしたことでいちいち注意される男子生徒のストレスはたまる一方であった。

「カワパン、小泉が委員長になって一週間たつけど、全然変わらないじゃないか。

それどころかますますひどくなるぞ。

あれは本性が出たのであって、カワパンの言っていたこととは明らかに違うな」

石山の言い分に僕も納得せざるを得なかった。

最初はわざといい子ぶっているか、舞い上がっているんだろうと思っていたが、明らかにそんなことはなく、小泉は委員長になってすっかり人が変わってしまったみたいだった。

「石山の言う通りだ。

あいつ、権力持つとコロツと人が変わるみたいだな」

「そうだよ、今までおとなしく人の言うことはいはい聞いていたのは、猫をかぶってたんだ。

今の姿があいつの本当の顔だよ」

「あいつはヒットラーと同じだな。

楽しかった三年七組がすっかり暗くなったもの」

「カワパンのせいだぞ」

「俺だって小泉があんな性格だって思わなかったんだから犠牲者だよ」

小泉の凋落

小泉が委員長になって二週間がたったが、クラスの雰囲気は最低であった。

もちろんその原因は小泉の委員長にあったのだが、その裏工作をしたのではないかと僕にも冷たい目が向けられるようになった。

が、小泉はそんな雰囲気は全然感じないようで、一日一日元気な顔をしてクラスのあら探しをしている。

しかし、そんな小泉独裁政権もあつけなく終わることになった。

ホゾが体育の授業で鉄棒から落ちてしまい、足の骨を折り、一ヶ月以上入院することになってしまった。

一ヶ月くらいなら副委員長がいなくても問題がないように思えるが、3年7組の男子生徒ほぼ全員が学級委員の選挙をもう一度やり直そうとカップに直訴したらカップもそれを認めた。

小泉が次点のフカヒレを書記にして、水口を副委員長にすればいいと提案したが、大ブーイングが教室内に起こり、それはすぐに却下された。

選挙は委員長に15票入った水口、副委員長に8票のフカヒレ、書記に6票の立花ということになった。

水口が15票もとったのは男子のほとんどが入れたからで、もちろん僕も入れた。

男子のほとんどが水口に入れたのは、水口は小泉に批判的であったし、僕達のクラスはいつも神崎が委員長をしていたので、やっぱり女が委員長になったほうが、クラスが平和になると多くの生徒が感じたからだろう。

39票（ホゾがいないため40票ではない）の内、29票が3人に集中したのは小泉みたいのが、二度と学級委員にならないため、手堅い人間を委員にしようと考えた生徒が多かったためだろう。

それでも小泉と熊田には一票ずつ票が入っていた。

「あいつら、自分で自分の名前書いたんだぜ」

という噂が選挙後しばらく飛びかっていた。

残りの9票は川田が1票、加山が3票、そしてなんと僕に5票が入ってしまった。

投票用紙が配られている時、石山が僕にわからないように細井、出川に目配せし、僕を指差していたのは一瞬目にしたのでわかった。後で聞くと、それに坂部ものつらしい。

でもあと一票は誰が僕の名前を書いたのかわからなかった。

前回の投票の時も僕に一票が入ったのできつと同じ人間だろう、一体誰だろう。

それっただけは本気で僕が学級委員にふさわしいと思っているのか、それともやっぱりふざけているのか……。

昼休み、二週間ぶりで机に尻をのせることが出来た。

教室内の騒がしさも二週間前と同じになっている。

小泉は二週間前と同じく川田や横山のそばに行き、ヘラヘラ笑っていた。

「カワパン、惜しかったな。あと一票で学級委員になれたのに」

「ふざけんなよ、前の仕返しか。」

もう少して学級委員になってしまい、小泉の二の舞いになるところだっただろう」

「カワパンと小泉は違うさ」

「いや、わからないよ。」

俺、本当、今回はつくづく思ったよ。

権力が小泉を変えたけど、俺だってもし学級委員になったら責任感から小泉と同じことをしたかもしれないよ」

「そうかなあ、そうは思わないけど。」

カワパンならきつとクラスの女をみんな教室内ではずっと水着でいるというような法律を作って7組をハーレムにしてくれたと俺は思うぞ」

「石山なあ、俺は真面目なことを今から言おうと思ったのに、ど

うしていつもそうやって茶化すんだ」

「俺だって真面目に言ってるぞ」

石山は僕の言葉に茶々を入れたが、僕の言いたいことはわかっているみたいであった。

学級委員になるということは名誉なことではなく、責任が付いてくるといことなのである。

小泉は暴走したけど、あれは小泉なりに学級委員としての責任を果たそうとしていただけなのだ。

学級委員になることに慣れている秀才は学級委員が何をすればいいのかわかっていするため、必要以上のことをしようとしな

い。これだけのことをしておけば先生も何も言わないということがわかっていからその枠の中でしか行動をしない。

学級委員も、席係も枠の中の仕事と考えると同じなのである。

しかし本来の学級委員とは枠を越えた存在であるし、その責任もある。

枠の存在を知らない劣等生が学級委員になったら、真剣に考える生徒ほど辛く大変なものになる。

僕は小泉を見てそのことがよくわかり、自分の器量では学級委員になつたらその責任でつぶされてしまうと本気で思った。

そんな責任感をあまり考えない優等生が学級委員をやるのがちょうどいいんだろうとわかった。

あと一票で学級委員になれなかったが、それは本当に助かったと思っている。

石山は冗談で僕の名前を書いたのではなく、僕なら学級委員として3年7組を面白いクラスに出来ると本気で思ったに違いないが、やっぱり今の僕には荷が重すぎる。

僕は石山と夏休みのことを考えたりしていた方が、性に合っているのだ。

多摩川園を無料で入る方法

僕の家から一番近い駅は東横線の元住吉と南武線の平間である。名前からしてハイカラな私鉄の東横線、堅くていかにも国鉄が付けそうな名前の南武線。

実際車両も南武線の方は古くさく、工場で働いている汗臭い工員がたくさん乗っているが、東横線の車両は冷房がよくきいていて、スーツ姿のサラリーマンがたくさん乗っている。

南武線沿いは大きな工場が多いし、武蔵中原や、向河原には社員寮も多いから工員が多いのも無理はない。

川崎という土地は地方からの出稼ぎや地方の中学、高校を卒業した学生の集団就職先として有名でそのほとんどの人が南武線沿いに住んでいる。

それに比べ東横線沿いは新興住宅地の集まりである。

もともと私鉄は何もない田んぼや原っぱに鉄道を引いて新しい駅を作り、その駅を中心として町を作るためそのほとんどが新興住宅地にきまっている。

僕達がたまに遠くに遊びに行く時、当然使う鉄道は東横線である。元住吉、南武線と繋がっている武蔵小杉、新丸子、多摩川を越えるとそこは東京で東京の一番初めの駅、多摩川園前。多摩川園前はその名の通り、駅を降りたら目の前は遊園地である。

小学校の時、二番目の兄がよくこの遊園地に僕と弟を連れて来てくれた。

多摩川園は山の中にできた遊園地で裏手に回ると山の頂に着く。山といっても二十メートルぐらいの山だから山という呼び名はおかしいかもしれない。

それに入口から見たら奥に見える裏手は山に見えるが、裏手に回ると谷の中に遊園地があるように見える。

二番目の兄はこの裏手に僕達を連れて行く。

入口から見たら山だが、車が走る道路をゆっくり上がって行くと、裏手に着きそこは二車線の立派な道路が南北に長々と続いているし、道路の向こう側は住宅街でそこはもう山の頂という感じではなく普通の平たん地だ。

南北につづいている道路と遊園地の境界線は延々とフェンスが付けられていた。

遊園地ができた頃は立派のフェンスだったのだろうが、今はかなり老朽化していて大きな桜の木が植わっているあたりのフェンスは穴があいていた。

兄は辺りをキョロキョロしながら、

「行けっ。」

と合図を送り、その合図とともに僕と弟は素早く穴から遊園地に入った。

当然兄もその後にはすぐ続く。

バナナ早食い競争

フェンスの穴を抜けるとそこは森になっている。

木と木の間を散歩しているふりをして僕達3人は何食わぬ顔をして山を下りる。

山を下りればそこは数々の乗り物がある遊園地だ。

僕達3人はそこからそれぞれ別の方向を下を向きながら歩き、乗り物券が落ちていないか必死になって探す。

入場券とセットになっているお化け屋敷の券はすぐに拾うことができる。

この券は間違って落ちているのではなく、お化け屋敷に興味のない人が捨てるから、結構落ちているのだ。

ところが乗り物券はそう簡単には落ちていない。

だいたい一人一枚拾えれば上等なのである。

一度僕は10枚綴りを拾ったことがあるが、その時は飛び上がった喜んだものだった。

乗り物券が拾えない時は仕方がないのでお化け屋敷に何回も入ることにしている。

作り物のお化けは怖くないがお化けの振りをしている人間がいきなり出てくると出口近くで頭から降ってくるお化けの人形はちょっと怖い。

「キヤーツ。」

という叫び声が聞こえてくるのは大抵この辺だ。

そんな話を岩井に話したら、日曜日に行こうということになった。

多摩川園は1年ぶりであったが、裏手のフェンスの穴は相変わらずあった。

「カワパン、本当にあったな。」

石山は嬉しそうである。

僕達は素早くその穴から遊園地内に入ると走りながら山を下りた。下りた場所は催し広場で大勢の人がステージの回りを囲んでいた。僕達もその人込みの中に入っていた。

ステージの上ではバナナの早食い競争が行われていた。

1分で何本バナナを食べられるかの競争である。

バナナは高級な果物でとても値段が高い。

僕は生まれてから3回しかバナナを食べたことがなかった。

僕の夢は腹いっぱいバナナを食べることだから、このバナナの早食い競争は夢みたいな催しである。

「石山、出ようぜ。」

「俺はいいよ、カワパンが出てみるよ。」

石山は絶対に無駄遣いをしない。サイダーやラムネは絶対に飲まないし、流行りのチェリオも飲もうとしない。

飲む物といったら水道の水だけである。

そんな石山だから食べ物に関しても必要な時しか食べようとしな
い。

だからバナナの早食い競争にも出ようとしななんだなと僕は思った。

「よし、わかった。俺は出るぞ。」

と僕は石山に言い残すと、早食い競争の出場者が並んでいるところに向かった。

10本は食べてやるぞと僕の順番が来るまでステージを凝視していたら、1分間で終了した時、きれいにバナナを食べ終わらず半分以上残す人が結構多いのがわかった。

残ったバナナはそのまま持っていったいいみただから、僕も半分くらい残して後でゆっくり味わおうとも考えた。

ステージの上では出場者5人が開始の笛の音が鳴ると一斉にバナナの束から一本一本取って食べていく。

1分で5人出場出来る訳だから、僕の前にたくさん人が並んでいたが、僕の番がすぐにやってきた。

今のところ一番はバナナ7本。よし、それぐらいなら僕は勇んでステージに上がった。

石山がニコニコしながら手を振っている。

笛の音がする。

すぐにバナナを束からもぎ取り皮をむくと口の中に放り込む。

簡単に喉を通ると思ったがなかなか胃に落ちない。

やっとの思いで飲み込むとすぐ2本目を口に入れる。

味なんてしない。

回りも何も見えなくなる。

2本目は1本目より落ちていかない。

無理やり3本目を口に入れる。

口の中はバナナでいっぱいだ。

四本目のバナナの皮をむくがなかなか口に入れることは出来ない。

もうすぐ終わりの笛の音がするはずだ。

無理やり4本目を口の中に入れようとするが、口の中はもうパン

パンでバナナが口から飛び出そうとしている。

僕の左手はバナナが飛び出さないように口を押さえるが隙間から

バナナが出てくる。

バナナの味

ピー。

終了の笛の合図。

僕の右手は食べかけのバナナ、左手は口を押さえ隙間からグチャグチャになったバナナがはみ出ている。

近くで見ていた人が思わず、

「汚い」

と叫ぶ。

恥ずかしくて早くこのステージから逃げ出したいが、司会者がそれぞれ何本食べたか見ている客に知らせなければステージを下りられない。

「3本、4本、3本、2本、4本」

司会者は出場者の前に行きバナナの皮の数を数えてはマイクでみんなに知らせる。

一通り言い終わると参加賞としてバナナ一本をアシスタントが出場者に渡して速やかに退場となる。

アシスタントの女性が僕に参加賞のバナナを一本渡そうとした時あからさまに嫌な顔をした。

『泣きたい』

僕はバナナ一本を引つたくるように受け取ると急いでその場を逃げた。

逃げた先に石山が笑って待っている。

僕は黙って参加賞のバナナを石山に渡すと口をモグモグさせながら右手を振って何も言うなという合図をした。

何しろこの場から早く離れたかったので、速足で歩きだした。

行先はどこでもいい。

なるべく人の少ないところに行きたい。

顔は下を向きながら口を一生懸命動かしながらバナナを胃の中

におとしていく。

目の前に池が見えてくる。

口を押さえていた手を洗いたいと歩きながら考えていた時、ああそうだ、この先に池があったと思い出し、方向をちよつと修正したので、池の前に辿り着いたのである。

池に着いた時には、口の中にあつたバナナは全て胃の中におさまっていた。

池の水で手を洗い、洗った手で口を拭うとやつと顔を上げることができ、石山を見た。

石山はゆっくり僕の後を歩きながらバナナをおいしそうに食べている。

「石山、買い食いはしないんじゃないのかよ。」

「俺、そんなこと言つた覚えはないぞ。」

それにこれは買い食いじゃないだろ。

カワパンのプレゼントじゃないか。

カワパンの好意を無駄にしちゃあいけないから仕方なく食べているのさ」

石山の嬉しそうな顔を見てみると僕もそれ以上何も言う気になれず、右手に持っていた皮がない半分のバナナを口に入れた。

甘い、西洋の甘さだ（後で西洋ではないと分かったが）。

甘さに品がある。

あんこの単純な甘さとは違う高級な甘さ。

ステージ上で食べた三本半のバナナの味は全く覚えていなかったが、今食べているバナナの味ははっきり僕の舌に感じる事が出来る。

川田達のデート

至福の時間を味わっていると石山が、

「カワパン、あれ見てみる」

と池を指差し驚いた声を出した。

石山の指先を見るとボンヤリとボートが池の上に5隻見える。

「あれ、立花だよ。それに横山と一緒に乗ってる」

石山は目がいいが、僕は最近目が悪くなり始め、軽い近眼になっているので、ボートの人間が誰なのかはわからない。

「本当か、立花と横山が一緒のボートに乗っているのか……」。

それって、あいつらデートしてるってことか」

「そうだろ、あそこで勉強している訳でも、飯を食べてる訳でもないだろう」

一般的に言うならデートをしているんだろう」

「石山、見つかるとヤバイからあの木の影に行こう」

僕はそう言うのと素早く走り出した。

「カワパン、川田もいるぞ」

木の裏に着くと石山がそう言ったので、

「えー、本当かよ」

と言葉は口を出したが、頭は混乱してしまっている。

デートという言葉だって最近やっとわかったのに、それをしてい
るやつがいる。

それもクラスメートだ。

『中学3年の友』では確かにデートが一番の山場として描かれて
いるが、現実には身の回りでそんなことが起こるなんて考えてもい
なかった。

女の子を好きになる。

これは中学生になるとほとんどの生徒が経験する。

しかしあくまで好きになるだけで、その後どうしていいのかほと

んどの生徒はわからない。

中学１年の時、３年の先輩が下級生の女生徒と一緒に下校したと噂になった。

「あいつら、付き合っているんだぜ」

仲のよかったワンちゃんが僕にそうささやいた。

『付き合う』なんて甘酸っぱい言葉だろうとそのときは先輩が手の届かない大人に見えたものだった。

女の子と付き合う先にはキスがある。

キスはレモンの味というが、本当にそうなのだろうか。

まさか、立花と横山は、キスはしていないだろうな。

「川田は一人だけなのか」

頭の混乱が少しおさまった時、石山に聞いた。

「いや、四組の茅野と一緒にだ」

川田、横山、立花、茅野は全員バスケットクラブ員である。

だからバスケットクラブの部活の一貫としてクラブ員が多摩川園に来たということも考えられるが、立花と横山、そして川田と茅野は学校公認の噂のカップルである。

これは明らかにダブルデートに間違いないだろう。

「あいつら本当に付き合っていたんだ」

驚きとうらやましさに気のぬけた言葉を僕は発した。

僕と石山はずっと木の影から池を見ていたが、ボートに乗っているのは横山と立花、そしてもう一つのボートに川田と茅野だけで他の部員はいなかった。

「カワパン、帰るか」

石山の言葉に僕もうなずいた。

今日は多摩川園の裏のフェンスの穴からタダで入り、落ちている券を拾って遊ぼうと考えていたが、川田達を見つけたことにより、自分達があまりにもみじめな遊びをしようとしていたことを見せ付けられたために、もうこれ以上ここにいたくなくなったのだ。

帰りの電車で僕は何もしゃべらず、三島の駅をおり、ちよっ

と歩いたところで
「じゃあな」
と言って別れた。

告白

帰り道僕の頭の中は横山や立花達ではなく、水口の姿が占めていた。

僕は水口が好きだ。

夜寝る時、いつも水口に告白する場面を思い浮かべる。

もちろんその先にデートがあり、キスがあるのだが、どういう訳か告白だけでその先を想像したことがない。

僕にとってデートとかキスは海外旅行に行くというくらい遠い存在でとてもそこに自分が行くと本気で考えられない。

ところが告白するということならば、現実的である。

勇気さえあればいつでも実行出来る。

でもその勇気が実はない。

石山がそばにいれば勇気も持てるのだが、女の子に告白する時、友達がそばにいるというのは何か情けない。

横山は立花に好きと告白したのだろうか。

前に聞いた時、横山は立花が好きだとはつきり僕に言った。

あいつはキザで鼻持ちならないやつだけど、そういうところは男らしい。

僕は横山よりも勇気がないのだろうか。

頭の中はずっとそんなことを考えていた。

次の日、石山は横山、川田、立花に昨日のことを話さない。

僕も話さない。

噂のカップルに対しては常に僕が中心になってからかつのだが、噂ではなく本当ならそれは出来ない。

僕と石山は昨日のことなど全く忘れたように日々を過ごした。

いや、僕に限って言えばそうではない。

あの日から水口に告白しよう、告白しようといつも考えている。

受話器を取る。

水口の家電話番号を指で回す。

クラス生徒の電話番号は藁半紙にガリ版印刷されたものが配られたから、それを見れば一発でわかる。

最後の3を回すとすぐに受話器をガチャンと下ろしてしまう。

そんなことをここ2、3日繰り返している。

朝や昼間はそんな馬鹿げたことは出来るわけないと消極的になるのだが、なぜか夜になると一人で盛り上がり今日こそ電話しよう決心をする。

しかし、いろいろ考えると結局何も出来ないで終わる。

ある日、そうだ、何も考えなければいいんだ、何も考えないで受話器を取りダイヤルを回せばいいと考えた。

そしてそれを実行した。

4……、2……、3……。

何も考えないと頭にその言葉を焼き付けダイヤルを回したが、急に僕の家が今この電話の場所に来たらどうしようと考えてしまった。

今日はそこまでであった。

次の日は外に出た。

寿司屋の斜め前には公衆電話があるから、そこから電話しようと思った。

放課後までの憂鬱

ダイヤルを震える指で回す。

寒くもないのに身体が震えるなんて初めての経験だ。

針に糸を通す時、指先が震えるがその震えよりも何倍も震えが大きい。

何も考えない、最後の数字を回す。

ルルルル……。つながった。

「もしもし」

2回で声がした、早い。

「もしもし、あの川上です」

「あゝ、あーあ、カワパン、どうしたの？」

独特のいつもの言い回しではつきり水口だとわかる声が聞こえてきた。

「俺、はつきり言うけど水口が好きなんだ」

『何も考えない』と頭に刻んで電話をかけたから、何を最初に話そうか、まったく考えていなかった。

しかし妙に頭は冴えていたので、これはもうストレートに告白しようと思った。

「え……、そうなんだ」

驚いた声を出したが声は落ち着いていた。

水口はもてるから男の告白に慣れているのかな。
でも僕は初めてである。

この後何を言ったらいいか、何も言葉が出てこない。
『そうなんだ』だけじゃ「そうなんだよ」と言っしかないからそう言った。

「カワパン、わかった。

でも今、家だし、こういうこと電話で長々話せないから明日の放課後話そう。

でも私一人じゃ嫌だからタッチも連れていく。
だからカワパンも石山君か、小泉君でも連れてきて」

タッチとは立花のことである。

男は立花と呼ぶが女同士ではタッチと呼ばれている。
ちなみに坂部は女の子同士ではさわちゃんと呼ばれているが、水口は水口さんである。

同じ宮城小学校のアイドルでもそこにタイプの違いが出ていることがわかる。

僕は水口の言葉に従い、受話器を置いた。

「石山、今日放課後残って付き合ってくれるか？」

「いいけど、何の用？」

「それはその時……」

朝、石山と会うとやつとの思いでそれだけ話した。

石山は何だろうという顔をしたが、それ以上は突っ込んでこなかった。助かった。

授業と授業の間の休み時間や昼休みなるべく誰とも話をしなかったし、顔も見なくなかったので、ずっと本を読んでいた。

本を読むといっても放課後のことが気になるから文字は頭の中に入ってこない。

僕の席は回りに水口、立花、石山と今日の放課後の関係者がみんないる。

立花はもう水口から僕のことを聞いているのだろうか、気になるが立花の方を見る訳にはいかない。

見たらどんな顔をされるかわかったものじゃない。

授業中、これだけ先生が黒板だけを見たのはきつと初めてだろう。それ以外に目をやれないのだから当たり前の選択である。

僕のいつもの授業風景は先生の目を盗んで石山と話したり近くの女の子にちよっかいを出すという時間がほとんどである。

もちろん数学とか、美術など好きな教科の時はちゃんと授業を受けているが、嫌いな教科の時はほとんど遊んでいる。

いつもなら大好きな自習時間が今日はなくて本当によかったと心から思った。

振られる

「カワパン、今日おかしいぞ。どうしたんだよ」

昼休み、たまらず石山が話しかけてくる。

僕は本を読みながら

「別に」

と返事をする。

「本が面白いのはわかるけど、俺の問いにもちゃんと答えてくれよ」

石山にそこまで言われたので、頭を上げ、石山を見たらその後ろに立花がいて目が合ってしまった。

目が合った瞬間、立花はニヤリと笑った。

あ、これはもう水口から話を聞いているな。
すかさず僕は目を本に落とした。

「まあ今は黙って放課後付き合ってくれよ。お願いだから」

小さい声で僕は石山に頼んだ。

僕のただならぬ雰囲気は石山は

「わかった」

と言い、そのまま自分の席に戻ってくれた。

僕にとって最良の日となるのか、最悪の日となるのか。
放課後は時間どおりにやってきた。

早くみんな教室から帰ってくれと願ったら五分もたたないうち僕と石山、水口、立花を残し教室には誰もいなくなった。

僕は学校の授業が終わったらすぐ帰るし、そうじ当番の時もそうじが終わり、みんなが集まって、

「終わります」

という号令をかけたなら、すぐ帰るのでその後の教室の風景は知らなかった。

今日はそうじ当番だったので、石山と二人自然に最後まで残り、「終わります」

と号令をかけた後もちんたらと帰り仕度をしていたら、すぐに誰もいなくなったので、意外な感じがした。

もつと遅くまで教室に残っている生徒がいると思ったからだ。でもこの状態は僕にとってラッキーであった。

僕と石山が前の方にいて、立花と水口が後ろの方にいる。

僕達四人以外に誰もいなくなると、立花と水口が僕達の方に寄って来た。

「カワパン、昨日はありがとう。」

正直、カワパンが私に対してそういう風に思ってたなんて考えたこともなくて昨日は私、何を言っていたのかわからなかった。

でも私を好きだって言ってくれたのは女の子として嬉しいけど、私はカワパンのこと自分の意見がしっかり言える人間だと尊敬はしてるけど、好きだという感情はない」

水口が昨日の僕の告白をはっきりみんなの前で言ったので、石山

は驚いた顔をしている。

「だから、カワパンと友達としてなら付き合えるけど、それ以上となると今は考えられない」

水口はいつものはつきりとした口調で一気にしゃべった。

きつとあれからどういふうに言えればいいか、いろいろ考えたんだろう。

隣で立花がニコニコ笑っている。

「わかった。俺は水口を好きだって言いたかったただだから、気にしないで。

俺の思いを伝えれば俺は満足なんだ」

僕達四人はすぐ学校を後にした。

立花と水口は家が近いので帰り道も同じだが僕と石山は違う。

僕は正門を出ると左、石山は右。立花と水口は目の前の公団住宅の道を真つすぐに行く。

僕達四人は公団住宅の道を一緒に歩いた。

正門の前で分かれてもよかったのだが、立花がバス通りまで一緒に行こうと言ったからだ。

立花は水口が僕を好きではないということをはつきりわかっている。

水口の素直な気持ちを全部聞いているのだろう。

その上で僕を傷つけないためにはどうすればいいのかということも相談したに違いない。

立花は今日僕を見ていて最初は面白がっていたが、だんだん僕に同情し途中まで一緒に帰ろうと言ったのだと思う。

女の子と一緒に帰る。

僕の一つの夢だった。

少し悲しい夢がなかった。

公団住宅の道に入ると僕と石山は立花と水口の少し後ろを歩いていたので、石山が小声で話しかけてきた。

「カワパン、いいのか。」

水口は友達としてなら付き合ってもいいって言っただぜ。

友達でも付き合えるんだから、いいじゃないか」

「いいんだよ、もう。」

俺は水口に好きだって言えばよかったんだ」

と僕と石山が二人でヒソヒソ話をしていると、立花が後ろを振り向き、

「カワパン、水口さんに告白してどうしたかったの。」

付き合いたかったの?」

と聞いてきた。

「別にそういうんじゃないよ」

と僕は言った。

確かにそういうんじゃないかった。

告白できればいいというより、その先を全く考えていなかったの

である。

水口と付き合うということ自体よくわからなかったし、水口とデートなんて本当に外国旅行に行くようなもので、現実感のない話だった。

ただ『中学3年生の友』に描かれている男女交際という甘い響きの言葉に憧れていただけなのだ。

「1回くらい、この4人でデートしてもいいよ」
立花はよっぽど僕に同情したらしい。

「いいよ、本当にそういうんじゃないよ」
僕はそう答えた。

僕の心の中で水口に告白した瞬間がクライマックスであった。そのため、その後は祭りの後の淋しさと同じで、何も考えないばかりとした心になっているため、新たな挑戦は全く考えられなかった。

公団住宅を通り抜けたところで僕達は三手に分かれた。

僕の心は結構晴れ晴れしている。

水口のことはもう好きでも嫌いでもなくなっている。

やはり恋に恋していただけみたいだ。

でも今の僕は理屈的なことは何も考えないで家に向かって歩いている。

ただ、頭の中ではすっきりとし、今までウジウジしていた気持ちはどこかに吹っ飛んでいた。

キャンプ計画

僕と石山の今の関心事は夏のキャンプである。

昨年は親が反対したのと台風のため中止にしたが、中学生生活最後の今年こそ絶対に成功させようと思っている。

新学期が始まると生徒会の選挙や学級委員の選挙で頭がそっちの方にいつてしまいキャンプのことは考える余裕がなかったが、今はだいぶ落ち着いてきたので、キャンプのことを本気で考え始めた。

夏のキャンプでまず肝心なことは資金である。

僕と石山、細井、出川の四人はキャンプ資金のために毎月お金を積み立てることにし、その積立金を銀行に預けることにした。

もちろん四人の名義には出来ないので、僕の名前で通帳を作り、判子は石山が預かることにした。

この預金は僕と石山が両方揃わないと引き出せない。

細井、出川もそれで納得した。

目標は一ヶ月千円。

出川や細いはお小遣いを節約すればいいと言っていたが、僕には毎月の決まったお小遣いはない。

石山も毎月のお小遣いをもらっているなんて言ったことはないの
で、きつともらっていないのだろう。

「石山、毎月千円、大丈夫か？」

と聞いたら

「何とかなるだろう」

と言ったので何とかするのだろう。

問題は僕である。

僕は昼食代として一日百円、母親からもらっている。

昼食に食べる菓子パンが一個十五円、四個買うと六十円。

これに支給される牛乳を飲めば昼食はオツケーである。

百円から六十円を引くと四十円あまる。

これが僕のお小遣いである。

いつもならこの四十円でコカコーラを飲むか、チェリオを飲み大判焼きを食べたりする。

もちろん鉛筆や消しゴムなどの普段使う文房具代も百円の中に入っているから、買い食いはかりは出来ない。

一ヶ月に千円貯めるということは買い食いや文房具類を全く買わないということをしなければ貯められない。

結構それはきついものがあるため、新聞配達をすることにした。

僕は小学校五年生の時から新聞配達をしていた。

初めは2番目の兄の手伝いから始まり、中学校に入ると一人で行なったがここ一年はやっていない。

クラスメートの小久保がタ刊だけ新聞配達をしていて、

「月8百円もらっているけど、もうやめたいんだ。」

けどやめさせてくれないんだ」

と前々から言っていたので、

「それなら僕がやるよ」

と言つて小久保に代り、新聞配達を始めることにした。

これで月千円はなんとかなる。

資金面はなんとかあったから、後は計画だけである。

新聞配達

僕達はキャンプの計画を暇さえあれば話し合ったが、クラスメートの関心事は一ヶ月後の修学旅行だ。

修学旅行の行先は京都。

小学校の時は日光だった。

どうして学校は寺巡りが好きなんだろう。

北海道とか信州でもいいのじゃないのかと不満に思ったが、僕達の中学校は修学旅行といえば昔から京都と決まっていた。

僕の親は宗教団体の大幹部である。

宗教団体といっても普通の宗教団体ではない。

自分達以外の全ての宗教を徹底的に批判する新興宗教であるから、京都の寺に行くなんてとんでもないことである。

僕も絶対寺や神社に行きたくなく、知り合いの宗教団体の幹部に相談したら頭の中で御題目をあげていれば大丈夫だと言われたので少し安心した。

そんな訳で修学旅行よりも夏のキャンプの方が僕にはとても楽しみであるのだ。

僕の配達区域は公団住宅。

公団住宅は全て記号で配達するところから新入りには便利なのである。

メモ帳にA - 42 とかC - 32 という風に配るところを全て書い

ておけばメモ帳さえあれば最初から間違えないで配ることが出来る。

しかし、公団住宅にはエレベーターがないため、四階に配る時など最悪である。

この階段を上ったり下りたりするのが嫌だからみんな公団住宅は配りたがらない。

だからその配達区域が新入りに回ってきて僕がそこを配ることになる。

一度面倒くさくなつて一階の郵便受けに新聞を入れたら、配達所に戻った時にはもう電話が入っていたらしく、新聞配達所の主人から大目玉をくらった。

1階には全ての部屋のポストが並んであり、郵便はそこに入れてもいいのに何で新聞は直接持つて行かなければいけないんだあ、とか言つてもどうしようもない。

そう決まっているから雇われ者の僕はそれに従うしかない。

それにしても僕の配るところは4階が多い。

全く嫌になる。

僕の新聞を配る自転車はお母ちゃんの自転車で車輪の小さいやつである。

五段変速で車輪も大きいサイクリング車が今は流行りで、僕もそれに乗りたいのだけど、絶対にそんなしゃれた自転車は買つてもらえない。

三輪車を大きくしたようなおばちゃんに乗っている自転車をお母ちゃんが見て気に入る我が家では買ったが、新聞配達にその自転車を使うと実にみつともない。

荷台に新聞を括り付けてもがっちり固定されず、気を付けてないとすぐすり落ちてしまつし、荷台がサドルより一段下になっている

ので、格好よく新聞を抜くこともできやしない。

新聞配達の自転車は乗ったまま右手を後ろにまわし、スーツと新聞を一部抜き取りそのままポストに入れるというのが格好よくきまった形だが、僕の場合は段差があるためそんなこと出来やしない。

せいぜい買い物カゴに入れた方の新聞から一部スーツと抜くことが出来るぐらいだが、

ハンドルの前に付けてある買い物カゴに新聞を入れているなんて石山に見られたら、

「カワパン、新聞買ってきたのか？」

とからかわれそうだ。でも新聞屋には余分な自転車はないというので仕方がない。

格好悪くても夏のキャンプのため頑張るしかない。

新聞配達で一番嫌な日は雨の日である。

新聞を絶対ぬらしてはいけない。

ある大雨の日、僕はいつもの通り新聞配達をしていた。

カッパを着ているため身体が濡れる心配はないが、雨の勢いが凄いのので前がよく見えない。

そんな中で道路に空いている窪地に気付かず、勢いよくその窪地に自転車を入れたら、大きく転倒してしまった。

新聞は水溜まりに投げ出された。

水浸し、泥だらけである。

『どうしよう』としばらく落ち込みながら考えたが、そのまま配ってしまった。

『こんな大雨の日だ、お客さんだって多少目をつぶってくれるだ

ろっ」

と考えていたのだが、配達所に戻ると主人がカンカンに怒り、

「もう一度配り直せ」

と言ってきた。

『すぐに電話するやつがいるんだ』

と大雨の中をもう一度配り直すことになった。

雨だから今日は休みなんてことはない。

あくまでも仕事は厳しい。

今日も嫌な雨が降っている。

大雨ではないけれどカッパを着ると身体が妙に蒸し暑い。

やくざの石山

「雨がしとしと日曜日、僕は一人で」

新聞配達の際は、大抵歌を口ずさんでいる。

特に雨の日は結構大きな声を出して歌う。

雨の音で僕の声が回りの人に聞こえないからだ。

僕は結構歌を口ずさむのが好きだ。

小学校の時、お遣いでよく歌を口ずさんでいると、八百屋のおじさんが

「よお、うまいねえ」

なんて言ってきたりしたので、それから一応回りを気にしながら歌を口ずさむ。

それでも時々自分だけの世界に入って歩いている時、知らない間に大きな声を出して歌を歌うことがあり、そういう時は必ず近くにいた人が妙な顔をするので、その顔を見ると少しずつ声を小さくしていく。

でも雨の日は僕の歌う声が回りに聞こえる心配はないので、思いっ切り歌うことが出来るから、それだけは雨の日の新聞配達で唯一の楽しみである。

雨はやまず、日も陰ってきたので、辺りはかなり暗くなってきた。

僕は新聞配達のために配達所に向かっている。

配達所は三島の駅の近くで、石山の家が近くにあるはずである。
あるはずであると言うのは、実は石山から「駅のほうだ」とは聞いたことがあるが、ちゃんと聞いたことはないからだ。

そのため配達所に新聞を取りに行く時、いつも石山の姿を探していたが、今まで石山と会ったことはない。

僕は親友になった友達の家にはしょっちゅう遊びに行く。

小学校の時のヤマの家ではお昼に出前のうどんをよく食べさせてくれた。

出前のうどんのつゆの匂い。

あの匂いは自分の家で作るうどんには絶対にならないおいしい匂いである。

僕の家ではまず出前のうどんなんて食べられない。

僕の記憶ではヤマの家で食べたのがきつと初めてである。

ヤマ以外にもチンチンと小学校の時仲がよかったが当然チンチンの家にもしょっちゅう遊びに行き、時々おやつケーキを食べさせてもらった。

中学一年の時は加山の家にしょっちゅう遊びに行き、加山のおばあちゃんが時々だんごやおはぎを、

「これ、食べな」

と言って出してくれた。

まあ、だんごやおはぎは家でも時々食べることが出来たので物凄く嬉しいとは思わなかったがそこそこ嬉しかった。

小泉の家だつてよく遊びに行く。

ちよつと遅くなると小泉のお母さんがきまつて、

「川上君も一緒に食べていきなさい」

と言うので、夕食を何回も食べたものだ。

でも石山の家には遊びに行つたことはない。石山から一度も、

「俺の家に遊びに来いよ」

と言われたことがないからだ。

石山が一度でも学校を休めば学校からの報告書などを持って石山の家を訪ねることも出来るが、石山は一度も学校を休んだことがなかった。

三島から電車を使って遊びに行つた時、帰りはいつも駅前で、

「じゃあな」

と言つて別れ、石山は細い路地に消える。

細い路地に入つていけば石山に偶然会う確率が高い。

しかし、今までに細い路地に入つたことはない。

なぜなら、その細い路地の先は、いかがわしい店が何件か並び、奥にはやくざの親分の家があると言われているから、危ないから絶対行つてはいけないうと周りから注意されていたのだ。

と言うより、この辺に住む者にとっては路地の先に行かないことは常識であつた。

石山がその路地に入つて行くというのは、いかがわしいところと関係があるのかもしれないと思い、三島で別れるとき、

「家はどの辺なんだ」

と石山に聞くことはできなかった。

今日は思い切つてその路地に入ろうと思つた。

いざとなったら、思いっきり自転車のペダルを漕いで逃げれば良い。

細い路地は突き当たりに見えるが右にカーブしていた。

カーブを超えると派手なネオンが店いっぱいについている『ランデブー』と言う店があった。

3階建てのビルで、その『ランデブー』は良く見ると2階にあるみたいだ。

隣の店もなんだか怪しい雰囲気を漂わす派手な店だ。

一応バーみたいだが、看板の名称が難しくて読めない。

その隣に少し大きな家がある。

これが噂のやくざの親分の家だろう。

立派な門構えで、家は庭の奥に建てられている。

自転車でその家を通り過ぎる瞬間、石山がその家の玄関を出て行くのが見えた。

石山は僕には気づかない。

急いで僕は道を曲がり、そこで自転車を降り、そっと壁から石山の家をのぞいた。

「てめえなんか、息子とは思わない出ていけ」
と言う怒声とともに石山が道路に投げ出された。

「あー、出ていくよ」

石山は玄関に向かって大声を出す。

投げ出されたとき石山は倒れてしまった。

道路は舗装されていない。

石山はゆっくり起き上がると、服の泥をはたき、歩きだし、家の横の駐車場に置いてある自転車に手をかけた。

雨が容赦なく石山に当たる。

石山はカップも着ていなければ傘もさしていない。

僕は見つからないように壁にぴたりと身体をつけた。

石山は静かに自転車に乗るとペダルを漕ぎ出した。

僕もそつとペダルを踏むと石山の後ろに自転車をつけ、石山の後を追った。

最初は石山の自転車に追い付き、

「石山、どうしたんだ？」

と聞くつもりだったが、僕の前を通り過ぎた時石山の顔がよく見え、その顔が何か泣いているようにも見えたのが気になって、追いつくために力強くペダルを踏む気にならなかった。

雨が降っているため視界が極端に悪くなる。

そのため僕が石山の後ろを走っているなんて石山は全く気付かない。

もし雨が降っていなかったら、ずっと後をつけている僕の自転車に絶対気付くだろう。

信号で止まっている時も、後ろの僕に気付く素振りもない。というより一度も後ろを振り向かないから気付く訳がない。

石山が後ろを振り向き、僕に気付けば、

「いや、さつき石山を見つけて追いかけて来たんだよ」

と、言うつもりだったが、そのセリフを言う必要が全く無かった。

石山は真っ直ぐバス通りを川崎方面に走る。

どこに行くのだろうか、途中で引き返してもいいのだが、石山が心配でそのまま後をつける。

バス停を三つ過ぎると変則的な十字路があり、左へ曲がれば南武線の清水駅の方、真っ直ぐ行けば加瀬山、右にいけばバス通りで、川崎方面に向かう。

石山は右に曲がった。この十字路から先はよっぽどのことがない限り行くことはない。

なぜなら僕達上原中学校の学区内はここまでだからだ。

ここから先はよその町、知り合いは誰もいなく、ただバスに乗った時通る場所でバスからでしかこの町の風景は見ない。

石山は止まる素振りを見せず、ただ真っ直ぐ進む。

さつき石山を突き飛ばしたのは、きっと石山の父親だろう。

もしかしたらやくざの親分だ。

父親とケンカし、家にいられなくなって仕方なく自転車で適当に走りまわっているのだろう、と僕は考えた。

家に戻りたくないなら偶然会ったふりをして僕の家に来てきてもいいと僕は考えたが、こんな僕達の縄張りでないところを走ったら偶然を装って石山に声を掛けることは出来ない。

追跡

仕方がないので僕達の縄張りに着くまで石山の後を付けて行こう
と思った。

石山もこんなところまで来てしまったが、きっと突き当たりの信号のところで右に曲がり中原街道までくと思う。

中原街道なら、

「今、小泉のところにいたんだよ」
ということも言える。

ところが石山は突き当たりの信号を左に曲がってしまった。

『こいつ川崎駅まで行くつもりなのか』
と僕は自分の行く末を心配した。

まだ、夕刊を配っていないから、このまま石山について行って川崎まで行ったら、帰ってこられるのは夜七時を過ぎて配達所の主人はカンカンになるだろう。

今から急いで戻ればまだどうにかなる。

『どうしよう、どうしよう』
ペダルを踏みながら悩む。

あの信号で引き返そう。

石山がああ信号を越えて真っ直ぐ行ったら僕はあそこでUターンしようと決心したら石山はそこで止まった。

石山は道路を横切り小さな食堂が二軒並んでいるところの裏に自

転車をつけた。

僕も自転車を止めじっと見てみると石山が食堂の横にある鉄の外階段を登っている。

ボタンとドアの閉まる音がして石山がその建物に入っていた。そしてすぐに手前の二階の明かりがついた。恐らく石山がつけたのだと思う。

僕も道路を渡り、石山が上がっていった階段のところに行くと、その建物の二階はアパートになっているらしい。一階にポストが置いてあり石山と書いてあった。

僕はその場をすぐに離れ今来た道を全速力で戻った。

修学旅行まであと一週間。

教室の中は修学旅行の話題でいっぱいである。

僕と石山は夏休みにキャンプを計画していたが、さすがにもうすぐ修学旅行だと思うと、どうしてもそっちに話題がいく。

あの雨の日の石山の姿は誰にも話していないし、もちろん石山にも話してない。

僕はあの雨の日の翌日、当然石山は学校を休むと思っていたが、いつもの顔で彼は登校してきた。

学校を休めば石山に、

「どうしたんだよ、カゼでもひいたか？」

と聞けば石山も雨の日の話をするかもしれないと思ったが、石山は全くいつもと変わらなかったので、僕もそのままにした。

それから二三日も経てばそのことは僕の記憶の片隅に追いやられ、いつものごとくの学校生活となった。

小泉の幸福

「カワパン、今日家に遊びに来ないか？」

小泉が突然僕のところに来てそう言った。

小泉が委員長になり、横暴な小泉に変身したのを見て、僕達は裏切りにあったと思い、あれからずっと小泉には接していなかった。

小泉もそのことを反省して、僕に謝りたいと思い、声を掛けてきたのだと思う。

「ああいいよ、後で、自転車で小泉の家に行くよ」
僕は軽く返事をした。

小泉の家に遊びにいった後、新聞配達をしなければならなかったので、自転車は必需品だ。

小泉の家に行くと小泉はニコニコした顔で僕を迎えてくれた。

「カワパン、よく来たな、まあ上がれよ」

小泉の家は小さな玄関の先に茶の間があり右に二つ部屋がある。家族は両親に姉弟で五人家族である。小泉は奥の部屋に僕を通した。

六畳ぐらいの小さな部屋に机が一つ置いてある。

小泉の机だが、この部屋が小泉の部屋という訳ではなく、両親の部屋である。

勉強だけこの部屋でするため机が置いてあるのだ。

「カワパン、昨日何があったと思う？」
相変わらず小泉はニコニコしている。

「そんなのわかる訳ないだろう。俺は小泉じゃないんだから」

「カワパンが俺の訳ないだろ、何言っただよ」
ちよつと怒った顔をする小泉。

小泉は石山と違い冗談が通じにくい。
しかし怒った顔は一瞬ですぐにニコニコ顔に変わる。

「何があっただよ？」
という僕の質問に小泉はニコニコしていた顔をますます崩した。

「昨日よ、バスケットの女子部員が来たんだよ」
「ふーん」

僕は気のない返事をしたが、小泉は僕の反応など全然気にせず自分のしゃべりたいことを早くしゃべろうとしている。

「誰が来たと思う？」

『だから俺は小泉じゃないんだからわからないよ』
とまた言いたかったが、きつと同じ返事がくると思い
「わからない。」
と単純に答えた。

「立花と茅野それに木村と久保田だよ」
「ふーん」

再び僕は気のない返事をしたが小泉も再び僕の反応を気にせず言葉が続けた。

「それでみんなでトランプをしたんだ」

「何の？」

「それはどうでもいいんだよ。」

それでな、負けた奴が好きな奴を告白しようっていうことになったんだ」

「あつ、わかった、ばばぬきだろ。」

トランプっていうとすぐみんなあれをやるんだ」

「そうだよ、ばばぬきだよ。」

でもそんなのはどうでもいいんだよ。

要は負けた奴は立花だったということなんだよ」

小泉は本当に友達の付き合い方を知らない。

僕は当然小泉が学級委員長のことで謝るために呼んだと思い、小泉の家にきたのに、小泉は全然そんな話をしようとせず、昨日来た女の子達の自慢話をしようとしている。

学級委員長を小泉がやる前だったら僕も素直に小泉の話にのり一緒に緒になって、

「女の子が小泉の家に来たのか、すげえなあ」

ぐらい言ったと思うが、小泉が委員長になり僕達に物凄い権力を振りかざし、特に僕にはことあるごとに注意をしたのを、僕がとも嫌な思いをしたということをよくわかっていたはずだ。

だから小泉が委員長でなくなった時も僕達は小泉を相手にしない
いた。

小泉も僕達のところには来辛く、全くそばに近寄らず川田の方に
ばかりいていた。

だから当然小泉は僕達に引け目を感じていたはずだし、僕達が怒
っていたことも知っていたはずだ。

だから友達関係を修復したいのならまずそのことをはっきりさせ
なくてはいけないのに、そのこととは関係ない話をしようとしてい
る。

僕が話にのらないんだからその辺を察すればいいのに僕の態度な
んか全くお構いなしに自分の話をしようとしているのだから、本当
にこいつは友達の付きあい方を知らない。

小泉の姉のシミーズ姿

「立花はさ、最初なかなか好きな奴を言おうとしないんだ。そこで木村なんかが、じゃあ10人名前をあげてっていうのさ。つまり10人、まあ立花がいいと思っている男をあげろっていうことさ。」

まず川田の名前があがって次に加山、フカヒレ、それに俺。ウヒヒヒヒヒ」

『おまえはばかか、立花が好きなのは横山に決まってるじゃないか、小泉には言っていないけど俺と石山は二人がデートしているところ見てるんだよ』
と言いたかったが黙っていた。

「カワパン、お前の名前もでたぞ、良かったな」

『ばか言つてんじゃないよ』
と思つたが黙っていた。

「あとバスケットの川村と風間、神田あとはえ」とそうそうホゾそれに…」

「横山だろ」

「まあな」

小泉は嫌そうな顔をした。

「まあいいんだよ、それは。」

そしてな、次にその10人を4人に絞ろうということになり、そ

の10人の中でも特にいいと思っている男を4人選べっていうことになったんだ。

その4人が加山と、カワパン、お前も入ってたんだぞ、嬉しいだろ。

ベスト4だぞ。

そして俺、ウヒヒヒヒヒ」

小泉は思い出し笑いをしたらしく嬉しくて仕方ないという顔を僕に見せた。

『この野郎は立花の選んだベスト4に選ばれてこれだけ嬉しそう
な顔出来るのかおめでたい奴だ』

「まあ、あと横山」

表情が一変する、

『こいつの顔の構造はどうなってんだ』

ガラッ

いきなり隣の部屋の仕切りとなっているふすまが開いた。

「あら、川上君来てたの」

驚いた女性の声と驚いた僕の顔。

小泉の姉さん代志子だ。

なぜ驚いたかというと、小泉の姉さんはシミーズ姿だったからだ。

僕が中学1年の時、小泉の姉さんは学校一のマドンナと言われた

程の美人であった。

色白でタレントの真理アンヌに似ている顔はちょっとハーフみたいであった。

小泉も姉に似てかわいい顔をしているが、背が低いのと頭がそれほど良くないのが災いしてクラスではそれほど人気がない。

ただ女には愛想がよいのでまあまあの人気はあるようだ。

だから小泉が委員長になった時、男は全員大ブーイングであったが、女は結構役にたつ小間使いぐらいに思っていたみたいであった。

僕は小泉の家に遊びにいくと、小泉の姉さんともよく出会ったので、まあまあ仲がよい。

小泉の家は台所と茶の間を除くと部屋が二つしかないが、僕がいくと茶の間ではなく手前の部屋にたいてい案内される。

その部屋で遊んでいると小泉の姉さんが帰ってきて僕は茶の間に移るということがよくある。

なぜ茶の間に移るかという到着替えるからだ。

着替えが終わると再び僕は手前の部屋に移る。

今日僕は奥の部屋にいて話に夢中になったため、小泉の姉さんが帰って来たのに気付かなかった。

小泉の姉さんは小泉の母とおしゃべりしながら着替えをしていたので僕達の声に気付かなかったみたいだ。

「よしちゃん、みつともない姿で、早くそっちいってくれよ」

偉そうな小泉の声によしちゃんは笑いながら、

「わかった、わかった。川上君あんまりこっちはかり見ないで」と僕に微笑みかけた。

よしちゃんにそう言われ、僕は慌ててよしちゃんから視線を外した時、ふすまの閉まる音がした。

「全くしょうがないなあ。それでどこまで話したっけ」

僕の頭の中はよしちゃんのシミーズ姿で占められ小泉の話なんかどうでもよかったが、そんな僕の心理を知られると恥ずかしいのでわざと明るい声で、

「立花の好きな男ベスト4」と言った。

小泉を選んだ立花

「そうそう、それでいよいよ二人に絞られたんだ。誰だと思う？」

「うーん、まず横山だろう。それに加山だな」

よしちゃんのことがあったので僕は小泉の話しにわざと乗っている声をだした。

「加山は違うんだな。もちろんカワパンでもない。俺なんだよ、ウヒヒヒヒヒ」

まあ、立花も小泉の家に遊びに来たんだからサービスで加山ではなく小泉の名前をあげるだろうなあ。

「そうか、よかったじゃないか」

まだまだ僕の声はのっている声だ。よしちゃんのスリップ姿の後遺症は抜けていない。

「それでよ、とうとう最後の一人を立花が告白するということになったんだ。カワパン、ウヒヒヒヒヒ」

『最後の一人は横山だろう。』

なんで小泉は嬉しそうな顔をしているんだ。本当にこいつの頭の中はわからん』

「どっちだと思う。カワパン、ウヒヒヒヒヒ」

「そりゃ、横山だろ」

僕は多摩川園での二人のデートを思い出した。

「違うんだよ、俺なんだよ。」

[illegible]

びっくりにした。

横山と立花のデート現場を見てからまだ二週間しか経ってないのだ。

僕は水口が好きだったが、告白したらその気持ちはなくなってしまう。

立花も横山を好きだったけど、デートしてみたら熱が冷めて好きな気持ちは消えたのだろうか。

僕がびっくりして無言でいると、

「どうしたんだよ、カワパン。」

驚いた。俺も驚いたんだよ。

でな、その後またランプ、まあばぬきをやったんだが、今度は俺が負けちゃったんだ。

それで俺も十人好きな子をあげたんだ」

3年7組のアイドル立花に告白されたら、そりゃあ男として嬉しいだろ。

僕だって立花に告白されたら嬉しいと思うけど、その瞬間困って
 しまっただろう。

だって僕は立花を好きじゃないし、小泉も中学1年の時同じくら

スだった宮城小学校のアイドルの一人柴崎を好きだから同じだろう
と思い、少し小泉に同情した。

「水口、神崎、土屋、立花、木村、久保田、茅野、川口、吉田、
片岡の10人だよ」

水口、神崎、土屋、立花以外は女子バスケット部員なので僕はよ
く知らない。

立花が3年7組の男を7人もあげたのに、小泉は3年7組の女は
4人であった。

その4人はクラスの中心的な女達で、頭が良く、明るい、そして
運動神経の良い三拍子揃った女達ばかりであった。

僕だったら、立花、水口、神崎、土屋は10人の中に入れてとし
ても、面白くかわいい坂部、おとなしいが頭が良く人を差別しない
村田、すぐ男言葉を使う寺本、小学校の時仲の良かった三崎と8人
は3年7組の女の子を選ぶだろう。

どうせ本命の一人以外は本気ではないのだから、クラスの女の子
を選ぶのが礼儀じゃないかと思っている。

でも小泉は単純に自分の好みの女の子10人あげたみたいだ。

バスケット部員の中には2年とか1年もいるらしい。

でも何かおかしい、僕はちょっと考えて、

「小泉、柴崎が入っていないじゃないか」
と言った。

小泉は中学2年の3学期にはつきりと僕に

「柴崎が好きだけど、柴崎は6組だから心配だよ。

他の男にとられちゃうかな」

なんて言っていたから間違いなく小泉は柴崎を好きはずだ。

「カワパン、いつの話してんだよ。柴崎はとつくの昔に好きじゃなくなってるよ」

とつくの昔といったって4〜5ヶ月前だぜと言いたかったが、

「そうなんだ」

と口では答えた。

「そうだよ、それでな、次にベスト4を言うことになったんだ。茅野と立花、木村に久保田と俺は言ったら、もう凄く盛り上がったよ。大変だったよ。」

木村なんか自分がベスト4に残ったからもう喜んじやって、目の前にいるからお世辞で言ってるのにわかんないのかなあ。

本当は俺のベスト4にお前が残る訳ないだろ、と俺は言いたかったけど黙ってたよ。

俺ってフェミニストだろう。ウヒヒヒヒヒ」

「そしてな、とうとう二人に絞ったんだが、立花と茅野の名前言ったら、もう木村なんかすっかりしちゃって。

あいつ鏡見たことあるのかな。

ベスト2に木村なんか入れたら俺のプライドが無くなっちゃうだろ。

カワパン、そう思わない？」

『フェミニストって意味知ってんのかよ。

お前のプライドって何だよ』

僕はずっと黙っていたが、小泉は全然気にせずずっと一人で盛り上がり喋り続けていた。

小泉絶頂

「そしてとうとう最後の一人を言うよう木村達に迫られたんだ。恥ずかしかったから俺も下を向いちゃってさ。」

そしたら木村と久保田が早く早くって急かすんだよな」

茅野は川田が好きなんだから普通に考えると立花の答はもう決まっているようなものだ。

「でも、俺も恥ずかしくって恥ずかしくって、でも、とうとう最後に右手で下を向きながら立花を指差したんだ。」

そしたら、もう盛り上がって盛り上がって大騒ぎだったよ、ウヒヒヒヒヒヒ」

「小泉、立花に先に告白されたら男としてお前もすぐにお前が好きだって言うべきじゃないのか」

「カワパン、何言ってるんだよ。」

みんながいたんだぜ。

いたいけでおとなしい俺の身になってみるよ」

「でもよう」

と僕が言ったところで、隣からよしちゃんの

「こっちでお茶にしない？」

という誘いの言葉がきたので、話はここで終わった。

茶の間での時間、僕はまともによしちゃんの顔が見られず下ばかり見て、お茶を何杯も飲んだ。

僕の湯呑み茶碗がカラになると、よしちゃんが微笑みながらすぐ注ぐので、顔を上げられない僕はそのお茶を飲むしかなく、注ぐ、飲むの繰り返しは何回も行なわれたのだ。

自転車の帰り道、今日一日のことを冷静に思いだしながらペダルを踏んだ。

よしちゃんは、今、高校二年である。

成熟した下着姿の女性を見たのは、生まれて初めてであった。もちろん映画や雑誌ではある。

しかし生で見るのは全然色が違うのだ。シミーズの白が光り輝いて見えた。

その姿はエロティックというより神々しい姿であり体育館の中を、メガネをかけてみた時もそれは感じたのだが今回は目の前で起こったことであり、体育館よりも何十倍インパクトがあった。

そして、それは女神が目の前に下り立つたぐらいの感覚であった。家に帰る道程の半分くらいはよしちゃんのシミーズ姿を思い浮かべていたが、だんだん小泉の家にきた立花達の不自然さに気付いてきた。

『最初から立花達は仕組んでたな。トランプやろうとか、バツゲームをしようなんて最初から計画していたことなんだ』

小泉は自然の流れで告白合戦になったと言っていたがそんな訳ない。

きつとあの三人が、立花が小泉のことを好きだということを聞い

てこの計画を考えたのだろう。

茅野は立花と一緒にダブルデートをしたぐらいだから茅野が立花からいろいろ相談されていたのだろうなあ。

横山が好きだったけど、多摩川園でのデートの後、好きではなくなったと相談し、今は小泉が好きになったのだけどうしよう、ときっと言ったのだろう。

茅野もいろいろ関わっている関係上なんとかしなくてはと考え、木村や久保田に相談したのだと思う。

小泉や茅野達は野球部とバスケット部でよく交流をしていたから小泉の立花に対する気持ちは見ていてわかったのだろう。

両想いなら告白ごっこをすればいいと作戦を立てたんだ。
家に着く頃にはこう結論がでていた。

僕は自分から水口に告白した。

小泉は立花の方から告白されてから実は自分もと告白した。

絶対僕の方が男らしいと思うのだが小泉の方が物凄く羨ましい。

僕の頭の中から今日のこと小泉の横暴な委員長のこととは消えていた。

寺本への誘い

六月初めいよいよ中学生生活最大のイベント修学旅行である。

僕と石山は夏のキャンプが最大のイベントだと考えているが、クラスみんなは違う。

修学旅行が最高のイベントなのである。

修学旅行では斑で行動することになったので、僕、石山、草津それに女子の寺本、野口が一緒に行動することになった。

僕は修学旅行に行く前に斑の結束を高めようと斑のみんなでおやつを買いに行こうと提案した。

もちろん石山はすぐその案にのったが草津は、

「子供じゃないんだぜ、おやつ買っぐらい自分で買っよ」と賛成しなかった。

寺本は沈んだ顔をして

「ちよつと考えさせて」

と言ったから、

「わかった。行くのは今度の日曜日。嫌な奴は来なくていいよ」とちよつと怒った声をだしてしまった。

放課後、石山に僕は愚痴を言った。

「お菓子を買いに行くことが目的じゃない、班の結束を強くする

ことが目的なのになんでみんな賛成しないんだ」

カバンに教科書を詰め込みながら僕が怒った声を出すと、

「まあまあワパン、草津の言う通り俺達はまだ子供じゃないんだからいろんな考え方があってもしょうがないよ」
と石山は僕をなだめるように言った。

しかし僕は納得出来なかった。教室を出てすぐ、
「誰も行かなかったら二人で行こう。いいじゃんそれでも」
と石山が言ったが、僕は何としても全員参加させてかった。

野口は寺本が行くと言えば一緒に行くと言うだろう。

野口と寺本が行くとなったら草津もぶつぶつ言いながら一緒に行くはずだ。

問題は寺本だな。

僕の結論がでた。

寺本を説得すればいいのだ。

今日これから寺本の家に行つて寺本を説得しよう。
そう心に決めたら、なにか心が晴れ晴れしてきた。

寺本の家は本月4丁目で小泉の家の方だ。

住所はガリ版ですつたわら半紙を見ればわかる。

僕は結構住所から家を探すのが得意である。

特に本月は宮城と違い新しい町なので、番地がきつちりと四角整

理されているから、電信棒に書いてある住所を見ながら簡単に探すことが出来る。

案の定寺本の家を見つけるのに大した時間はとらなかった。

寺本の家はすぐ見つけることが出来たが、家を見つけた時僕はがく然となってしまった。

寺本の家は十軒位同じ家が縦横同じくらいに並んでいる集合住宅というよりバラックが集まった家というような感じであった。

家は全て平家で一軒に二つ玄関があるから二家族住んでいるのだろう。

終戦直後バラックの家がいくつも集まっているところがテレビのドラマにでてくるが、そんな感じである。

家と家の間にある道は水はけが悪いのか泥だらけである。まるで白黒の黒澤映画のようだ。

突然、僕は寺本の制服姿を思いだした。青のブレザーである。

「寺本の制服、セーラー服じゃないな」

僕が石山に言うと

「あー前の学校の制服だろ。」

一年の時横山も私立のブレザーとかいうやつ着ていたぜ」

「ふーん、セーラー服よりあっちの方が都会的だから着てるのか

な？ 寺本に聞いてみるか」

「カワパン、そういうの訊くのよせよ。
人にはいろいろ事情があるのだから」

そんなやり取りをしたのも思いだした。

寺本は石原中学校の制服が買えなかったのだ。

石山の言う通り何も聞かなくて良かったと思うのと同時に

『なんで石山はそういうことがわかるのだろう』

と思った瞬間、新聞配達所の近くにある石山の家と自転車で追いかけて行ったアパートを思いだした。

石山は寺本を同じようなおいを感じるのかもしれない。

だから石山は寺本のこと的理解できるのかもしれない。

僕が玄関の前で寺本を呼び出して良いか躊躇しているといきなり引き戸がひかれた。

驚いた顔の寺本の顔。

「やつ、さっきのことでもう一度話したいと思ったからきた」
何かしゃべらなくてはと急いで僕は口を開いた。

「わかった」

と寺本は言う、一度家の中に入り少し経ってからまた出てきた。

「ちょっと向こうに公園があるから」
と言うと僕の前を歩きだした。

公園はブランコとすべり台があるだけの小さな公園だ。
寺本はブランコに腰を掛けると、

「うち、弟と妹がいて日曜日は私が面倒見なくちゃいけないの。
何とか親に頼んで日曜日行けるようにしようと思ってるんだけど
……あんまりおやつ買ってお金もないから……きっと私が付き合
ってもみんながつまんないと思うだろうから」
と下を向きながら僕に説明した。

みんなでサンエーに

「あー、そうなの」

と僕は言い、そのまま黙ってしまった。

どうも僕の友達には貧乏人が多い。

僕の家だって結構な貧乏である。

毎日のお小遣いはもらえないし、正月のお年玉もまわりの友達に比べると半分以下だ。

小学校の卒業写真の時、ズボンにあて布を縫った跡があり僕は恥ずかしくてずっとそこを右手で隠していた。

その日に写真撮影があるのはわかっていたから、まわりの友達みんなきれいな服を着て来たのに僕にはそういう服がなかった。

中学に入り、詰め襟の学生服になった時はこれでみんなと同じ服が着られると安心したものだ。

僕の家はなんて貧乏だと思ったが、小泉の家に行った時はうちより貧乏だと思つたし、石山のところなんて金持ちか貧乏かわからない感じだし寺本もうちより貧乏だろう。

「俺さあ、寺本と一緒にややつ買いに行きたい。

別にいくら買うなんてどうでもいいじゃん。

みんなで行きたいんだよ。

何も買わなくていいんだよ。

買いに行くところだって三島のサンエーでいいんだから、お金も

かからないだろう。

お母さんに話して1時間でも何とかなるんだったら行こうよ」

少し落ち着くとスラスラと僕の口から言葉がでた。

寺本は僕の言葉が終わると、今まで見せたことのないような嬉しそうな顔をして、

「そうだね。2〜3時間なら許してくれるかも。

何とか頼んでみるよ。

明日結果言うからさ」

と言うと、ブランコを降り家に向かって歩いて行った。

「カワパン、ありがとう」

寺本は少し歩いたところで、振り向きそう言つと、

「あんまり外にいられないから、じゃあね」

と言つて帰って行った。

翌日、寺本は3時間なら大丈夫だと言い、野口もそれなら一緒に行く…となったので草津もしぶしぶ一緒に行くことに決まった。

サンエーは三島の西側に出来た大きな新しいスーパーマーケットである。

大きな店といえば川崎とか横浜まで行かなければならなかったのに三島に造られたときは、大騒ぎである。

新聞の折り込み広告にサンエーのチラシが入っていた時はみんなサンエーに買いに行く。

商店街で買うより全然安いからだ。

僕達がサンエーで買うのは、安いということもあるが品数が豊富だからである。

三島の駅にみんなで集まりサンエーに向かう。

駅からサンエーまでは歩いて3分ぐらいだ。

僕は歩きながらそつと石山に話しかけた。

「石山、いくら持ってきた？」

「学校で決められたのは500円だろ。
だから500円持ってきたよ」

次に草津にもそつと聞いたら、草津も500円だと言つ。
野口もやつぱり500円持ってきていた。

僕は親から500円もらい、新聞配達の給料をちよつどもらった
時なのでそこから500円持ってきて計1000円持ってきていた。

「石山、その500円俺に渡して」

「何でだよ」

「500円ずつ全員集めれば2500円になるじゃん。
2500円でいろいろ買おうぜ。」

その方が種類も増えて楽しめるだろ。
班で行動するってそういうことじゃないか」

「なるほど、それは面白いかもな」

意外と石山は簡単に僕の案に賛成してくれた。

石山がグダグダ言々とサンエーに着くまで僕が昨日の夜考えた作戦が上手くいかないから、僕は安心した。

石山さえ賛成すれば草津はぶつぶつ言っても反対はしないし3人が賛成すれば野口も従う。

サンエーに着いた時、僕は全員を集め石山に言ったことをもう一度みんなの前で言った。

「みんなが持って来たお金を全部一緒にして全員でおやつを買うことにしました。

おやつは同じ物をみんなで食べることにすれば、僕達の班の結束が強くなると思います。

会計係は寺本、おやつ保管係は僕と野口がします」

僕が一気に言つと寺本が不安そうな顔をしたので、僕は一気に、

「お金集めるよ」

と言い石山から順々に金を集め草津、野口、そして僕のお金を全部寺本にみんなに見えないように渡し、

「無くさないようちゃんと持っていてくれよ」
と言った。

寺本は不安そうな顔から困った顔になり何か言おうとしたので、
小声で、

「大丈夫」

と寺本に言い、

「さあ、行こうぜ」

と大声をだしてサンエーの中にみんなを押し入っていった。

寺本の手には2500円ある。

僕は500円じゃなくて集めた金の中に1000円入れたからだ。

僕達がお菓子を選んでいる時、寺本が小さな声で、

「ありがとう」

と僕に言った。

カワパンの読み

僕は昨日、寺本の家に行き、寺本がなぜ前の学校の制服を着ていたのか、また、すぐに男言葉を使ってしまうということも何となくわかった。そして、みんなでおやつを買いに行くのをためらったのも弟や妹の面倒を見るといっただけではなく、おやつ代のことを気にしていたのだらうと僕は推測し今日のこの作戦を考えたのだった。

もし、僕の読みが外れれば、寺本は泣いて僕を非難するだらう。読みが当たったとしても、寺本の家を見て寺本に憐れみをかけたという風にとられ、これもやっぱり泣いて非難するかもしれない。

このことは、昨日のうちに覚悟を決めた。

人は何かをする時に勝負を賭ける時があるのだと昨日僕は一人で盛り上がった。とはいっても全て強引にやるつもりはなかった。

三島の駅で石山に会いそこからサンエーまでの間に石山を説得出来なければ諦めるつもりでいた。

石山の家に電話があれば昨日のうちに説得出来たが、石山の家には電話が無い。電話がなくても小泉の家みたいに石山の家に気楽に行けるのであれば、夜遅くても石山の家に行っただらう。でもそれは出来ない。だから今日の一発勝負に賭けたのであった。

僕は約束の時間より20分も早く三島の駅に行った。石山が早くくれば相談出来るからだ。しかし石山は、「みんな、早いなあ」と言いながら最後にやってきたので僕は80%以上この作戦は諦めた。ところが上手くいった。次は寺本の反応だ。

僕は班でみんな仲良く楽しみたいと思っている。これは寺本もきつとわかってくれるはずだ。

寺本に同情している訳ではない。いや、本当は同情している。でもそれは決して僕が寺本より高い位置にいて同情している訳ではない。そういう微妙な僕の気持ちを寺本ならきつと僕はわかってくれると信じた。

寺本は頭がいい。それは、学校の成績のこともあるが人の話を素速く理解出来るということも頭の良い基準だ。

僕が冗談を言うとすぐに笑ったり突っ込みを入れたり出来るのも頭の良さの基準である。

3年7組でそういう頭の良い感性を持っているのは寺本と石山だけで、他の生徒はちよつと感性が違った。

学校の成績なら頭のいい奴は沢山いるが、人の話の理解力や判断力をもっている奴は少ない。

石山と寺本は数少ない両方を持ち合わせた人間である、と僕は思っている。だから寺本は僕の気持ちを理解してくれるはずだと僕は確信していた。

寺本の「ありがとう」と言う言葉を聞いた時、僕の確信が当たったことを意味していたので心の中で「よし！」と叫んでいた。もちろん表面上はお菓子を選んで嬉しそうな顔をしているカワパンの姿を見せている。

修学旅行

「音の速さは一秒間に大体340m、時速に直すと1200〜1300km位か？そんなに速く走れる乗り物は、今の地球上では口ケツトとか戦闘機ぐらいだろう。だから、戦闘機の速さでマッハという言葉がでてる。

マッハは音速のことで、音の速さのことだ。『こだま』は音の速さのことだろう？ということは、新幹線こだまは1000km以上のスピードを出すように思えるが、もちろんそんなことはない。

あくまでもイメージだ。そんなことをいつたら光は一秒間に地球を7周半だから、新幹線『ひかり』は一瞬のうちに世界中のどこにでも行けることになる。

新幹線の走る前の特急の名前は『つばめ』だからイメージだけは随分速くなった。実際、特急と新幹線では2倍位速さが違うのだから、それぐらいイメージとしては違うかもしれない。

それでも『こだま』と『ひかり』では全然速さが違うと思うが、音の速さと光の速さは太陽と月の関係のように対のものだから問題はないだろう。

雷が光って少し経ってから轟音が聞こえるなんて、まさに光と音が対になっていることを表している。

この世界で光よりも速いものはないのだから、今の新幹線より速い列車が将来出来たら名前はどするのだろう。

光より速いものをあえて言うならタイムマシンだからタイムマシンとつけるのだろうか」

なんて話を、修学旅行で僕達が新幹線に乗るということで誰かが話していた。

僕達の修学旅行は新横浜から新幹線『こだま』に乗る。

東京から乗れば『ひかり』に乗れるのに、と細井は格好つけて

言っていたが、僕はひかりでもこだまでもどっちでもいい。新幹線に乗れるということが嬉しい。

何しろ僕が家族で初めて新幹線に乗るのだから家族にも鼻が高いし自慢でもある。きつとお母ちゃんも周りの人に「息子が今度新幹線に乗るんですよ」と自慢して歩くだろう。それほど今回の修学旅行で新幹線に乗るということはポイントが高いのである。

新横浜には三島から菊名に行き、そこで乗り換えればすぐに着く。周りにはみんな原っぱで、大きな道が碁盤の目のように駅前から中原街道まで続いているのだけがよく目立つ。

長兄が「こんな所に駅を作ったってしょうがないだろ。新幹線の駅が出来たからここは坪50万もするんだぞ。高くて誰も買わないからここはずっと原っぱだよ」と言っていたが確かにこの風景を見ると納得してしまう。

新幹線の駅前は大広場となっている。

『集まってる、集まってる』3年生全員だから300人近くの生徒が来ているはずだ。これだけいると7組の生徒をすぐ見つけることは難しい。

兄から借りたボストンバッグはパンパンで凄く重たい。

パンパンなのは僕達の班のおやつの半分が入っているからで、重いのは米が9合もボストンバックに入っているからだ。

米は京都で泊る旅館に渡すので、旅館までずっと持っていかなくてはならない。

「カワパン、こっちだ」

フカヒレの声がする。

フカヒレは7組の生徒を一ヶ所に集めようと歩き回っているらしい。学級委員だからしているのかなと思ったが、立花も水口も何もしていないから自ら率先してやっているのだろう。

フカヒレは熊田が転校してきた時、熊田をからかったが、普段は結構面倒見がよい。しかし、人をからかうのは好きで時々それが度を過ぎてしまうことがあるが、クラスメートはそういうフカヒレの

性格をよく知っているので、度が過ぎても「仕方ないな」で終わらせてしまう。

ただ熊田の場合は転校生だったのでケンカになったが今ではもう仲のよい友達になっていた。

初めての新幹線

フカヒレの方にいくと、もうクラスの半分位は集まっていた。

「オッス」

照れ臭そうに寺本が声を掛けてきた。

「オッス、石山や草津はまだ来ていない？」

「まだみたい」

石山がいなくて何か落ち着かない。言葉も詰まってしまふ。

『早くこいよ』僕はキョロキョロしている。落ち着かないのだ。

立花が、横山や川田と嬉しそうに話している。これから修学旅行なんだ、誰だって嬉しそうな顔をするだろう。

目を移動させると小泉が目についた。立花達の方をきつい目をして凝視している。

あいつ、立花達の方に行かないのかな。横山や川田と小泉は同じ班だから近寄っていてもいいのに。

僕がそんな事を思っていると「カワパン、早いな。昨日は嬉しくて眠れなかったから、早く来たんじゃないのか」と石山がいつの間にか僕の後ろに来て声を掛けてきた。

「ばか言ってるじゃないよ。たかが修学旅行でそんなことある訳ないじゃん、子供じゃないんだぞ。そんなこと言ってる俺のバツクの中にある物、石山には食わせないぞ」

「きつたねえなあ。カワパン、だからおやつを持つ係になったのか」

「当たり前だよ。昔から食糧を持ったものが権力を持つことが出来たんだから、おやつが欲しかったら、石山は俺の家来になるしかないんだぞ」

「カワパンの家来になるなら、俺は野口の家来になる」と石山は言う、ちょうど来ていた野口のそばに行き、「野口、俺を家来にしてくれ。そして、あの悪いカワパンを退治してくれ」と言ったの

で、野口は面食らった顔をして何を言っているのかわからない顔を見せたが「ばか言ってるじゃないよ」と言う野口の言葉でこの寸劇はすぐに幕を閉じた。

ヒュー

風のように新幹線ひかりが新横浜の駅を通り過ぎていく。

目の前で新幹線を見たのは初めてだし、その速さを目にしたのも初めてだった。

僕の家の一階の窓から新幹線は見えるが、こんな風のような速さではなかった。確かに他の電車よりは早いけど、今通り過ぎた弾丸のような速さとは全く別で身近に見るとこんなに凄いのかと乗る前からワクワクしてきた。

僕達が乗るこだまは、何本か新幹線が新横浜を通り過ぎてからホームに入ってきた。

一番に入りたかったけど、順番に並ばれているのでそうはいかない。

プシュー

外のドアが自動なのはわかるが、中のドアも自動なのは驚いたというより最先端の列車なんだと実感した。

広い、きれい。初めて新幹線に乗った人は必ずそう思うだろう。

こんな立派な席に座っているのかなと僕はちょっと躊躇したが、出川がどかっと座席に腰を降ろし「まあ、いいクッションだな」と偉そうに言ったので、僕も気が楽になり、座席に座った。

座席も班で座るようになるから、お馴染みの班のメンバーが同じ並びに座る。

細井が「このイス、ま、回るんだぜ。お、俺、前も乗ったからわ、わかってんだ」と言い、座席をクルリと回したので僕と石山は大喜びで座席を回し向かい合わせの席を作った。

「これで班の人間全員が同じ所にいられるな」と僕は満足そうな声をあげた。

「さあ、トランプやろうぜ」

席が向かい合わせになったので、トランプをやるにはもってこいである。

最初、班の5人でしていたのが、チンチンや長沢も「まぜてくれ」と入ってくると、次から次へと集まってきて、気が付いたら10人位でトランプをやっていて、まだ一緒にやりたいと言う生徒が周りを取り囲んでいた。

仕方がないので僕は一時離れることにした。

席を離れると、僕達の塊と同じような塊が奥に見える。川田や横山、ホゾにフカヒレ、加山もいるし、熊田もニコニコしながらトランプを握っている。ニコニコしているのは、立花に水口、土屋といった7組のアイドル達がいるからだろう。

平凡パンチ

「カワパン、ちょっと」

僕の姿を見つけた小泉が僕の方にやってきて、そのまま僕の手を引つ張り自動ドアを抜けて洗面所のところへ連れてきた。

「カワパン、頭にきちゃうよ。立花の奴、横山とずーと嬉しそうにしゃべっているんだ」

洗面所に着くなり小泉は僕にぐちをこぼし始めた。

「それが凄く嬉しそうな顔をしちゃってさ。立花は俺が好きだって言っただから、俺と仲良くするべきだろう。昨日も立花に電話したんだよ。その時『俺はずっと見てたのに何で無視するんだよ』って言ったら、『気付かなかった』って言うんだよ。だから『そんな訳ないだろう。俺のこと気にしてたらすぐに気付くはずじゃないか』って言っただよ。カワパンもそう思うだろ。好きだったら視線なんかすぐ気付くよな。それなのに立花は『しょうがないでしょ。気付かなかったんだから』なんて言うんだよ。」

信じられるか、それまでは上手くいったんだよ。毎日お互い電話し合って、2時間位話し合ったりしていたんだよ。さすがに1時間過ぎるとよしちゃんが『いい加減にしなさい』なんていつも邪魔なこと言ってくるんだ。『毎日学校で会ってるんだから、学校で話しなさい』なんて言うんだけど、学校じゃあ話せないから電話で話してるんじゃないか、全くわかってないよな。

だから凄く俺達上手くいったんだけどさ、横山の野郎がいけないんだよ、あいつ立花にしょっちゅう話しかけてるじゃん。それに立花も微笑みながら応えちゃってさ。

無視すればいいのに、それが俺に対しての礼儀だと思わない。

立花は誰にでもいい顔する淫売だよ。あんな奴だとは思わなかったな。

「小泉、淫売は言い過ぎだろう」

僕は立花は性格は良いと思っていたので小泉に苦言をした。

「カワパン、良いんだよ、それくらい言っても、でもカワパンがそう言うのなら八方美人に変えるよ。」

俺は立花が淫売・・・いや、八方美人に見られても仕方ないから立花に注意しようと電話したのに、あいつ、全然わかつちやいないんだ。それでな、カワパン、一番頭にきたのは」と、小泉が機関銃のように喋ってた時、石山が「こんなところに二人で来て何やってんだ。ホモか」と声を掛けてきた。

石山が来なかったら小泉のお喋りはどこまで続いていたのだろう。もしかして京都まで続いたかも知れない。

石山がくると「じゃあ、またな」と言っただけで小泉は去っていった。

委員長のことがあってから小泉は石山としゃべるのを苦手としていたので、すぐにいなくなったのである。

「どうしたんだよ」

「どうしたんだよじゃないよ、小泉と仲直りしたのか」

「仲直りしたという訳じゃないけど何となくな」

「ふーん、まあいいけど、本山が隠れて平凡パンチを見ていたぜ」

「本当かよ。見に行こう、石山」

本山とは3年7組の副担任で、今年上原中学校にやってきた若い先生二人のうち一人だ。もう一人は小西といい、明るくて、ユーモアがあるので生徒からの評判がすこぶるいい。しかし、本山は暗くて冗談も通じない堅い先生なので全く生徒から人気がなかった。そんな堅い先生が平凡パンチを見ている。

平凡パンチといえば、Hなグラビア写真が載っているのが有名だが、僕はまだ本の中を見たことは一度も無い。

そーっと本山の近くに行くと確かに手元に平凡パンチが置いてある。

本山がトイレに立ったすきに急いで平凡パンチを見ると、そこには裸の女性が…。

石山はすかさず僕達の座席に戻りボストンバックから鉛筆を取り

だと、すつとんで戻ってきた。そして、裸の女性の胸に矢印を書き『ココ見ちゃいや〜ん』と落書きした。

「石山、本山来るぞ」

僕はすつと扉を見張っていたので石山にそう言つと、石山は平凡パンチを元あつたところに戻し、何食わぬ顔をして通路に戻った。

本山は生徒を眺めながら戻ってくる。

僕達は近くの座席に座り、本山の動向を見ていたが本山がグラビアページを見ることがなくそのため石山の落書きに気付くこともなかったので、がっかりしてしまった。

「本山はむつつりすけべだな」石山にひそひそと言つと「あの黒いメガネがすけべを顕してるよ。大体メガネを掛けてる奴はすけべが多い。前原もいかにもむつつりすけべという顔してるじゃないか」僕は体育館の覗きを思い出し「そうだな」と言つて笑った。

修学旅行はカップルばかり

新幹線は確かに速かった。新幹線の中でまだまだ遊びたかったのに、いつのまにか京都に僕達のこだまは到着していた。

京都の駅に着くとそこからは大型バスに乗り換える。

バスはクラスごとだが目的地に着くと他のクラスとも一緒なので結構ごった返し、クラスメートはみんなばらばらになってしまう。

しかしそんな時こそ班での行動が必要になってくるのに草津は、「ずっと班のみんなと一緒にいるのはかんべんしてくれよ。集まる時はすぐ来るから、それ以外は好きにさせてくれ」と生意気なことを言ってきた。

「そうすると草津、俺達のお菓子食べられないぞ」

「いいよ、みんなと一緒にいる時食べるから。ずっとみんなと一緒ににいないといけないかと思うと息が詰まるから」と言い、片手をポケットに入れてもう一方の手を軽く上げて「じゃあな」と言って去っていつてしまった。

「草津の言うことも一理あるよ。一日中ずっと班のみんなでないくちやいけないというのは、確かに肩が凝るよな。」

なあ、カワパン、なるべく班で行動するけど、お互いの自由行動は尊重するということかどうか」と石山が提案したので、僕は寺本に「どう？」って聞いた。

「別にいいわよ」寺本の答えはいつもあつさりしている。

実際、4人とか5人でしょっちゅう一緒にいるのは大変だし、面白くもない。

班で行動していると他の生徒と交わるのも難しくなるし、それよりも違うクラスの人間と接することはまず無理になってしまう。

僕は水口にふられた後、4組の後藤が好きだと石山に言った。水口にふられた後、急に後藤が好きになった訳ではなくむしろ逆で、後藤が好きだったけど急に水口が好きになってしまい、後藤はちょ

つと心の隅っこに隠してしまっただけで、水口のことを好きでもなんでもなくなった時、再び隠れていた後藤が心の中心に來ただけであった。

「石山、やっぱり後藤がいいよなあ。」

「カワパンは変わり身が早いなあ、さすが小泉の友達だよ、よく似てる」

「やめてくれよ。俺と小泉じゃあ根本が違うよ」

「同じだよ同じ。君達は似たものグループだ」と、石山には散々いわれたけど、今の僕の好きな子は後藤だと石山も認識している。

石山は1年の時同じクラスだった宮沢が好きだと僕に言った。

二人とも7組の女生徒ではなく他のクラスの女の子が好きのため、こういう他のクラスの生徒と接する機会は大チャンスなのだ。

実際、野球部のキャプテンの川田はしょっちゅう五組の茅野と一緒にいる。

まわりから激しい冷やかしが起こると思ったが、全然そんなことはなかった。

こういう旅行に出ると学校内とは違い、みんな違う感覚になるのかも知れない。

「川田と茅野、一緒に写真撮ってやるよ」なんて、あの冷やかし大好きなフカヒレが言ったりするんだから驚きだ。

それだけではない。よくまわりを見ると男と女が結構一緒に行動している。

別に班で行動している男女ではなく、気の合う男女が一緒にいるみたいだ。

小泉のライバル横山と我が7組のアイドル立花と一緒に楽しそうに話しているところも見た。

まわりは立花が小泉に告白したことを知らないから、積極的に二人をくつつけようとしている。

川田なんか二人の写真を撮ってあげてもいる。

川田は茅野から小泉と立花のことを聞いていないのだろうか。知

つていても川田は横山の味方をしているのかも知れない。

僕はなぜかわからないが、そんな立花を見て物凄く頭にきた。

小泉の言い分が全部正しいとは思わないが、仮にも二人で告白しあったのなら、お互いの存在を認め合い、こういう時こそ二人でいるべきだろうと思った。

実際、川田と茅野はそうしているし、他にも何組かのカップルがそうしている。

僕も出来れば後藤とカップルになりたい…と自由行動の時チョロチョロしたが、後藤を見つけることは出来ない。

一日の大半は団体行動だが、少しは自由な時間があるのでそういう時はしゃかりきにチョロチョロする。

後藤には会えなかったが、宮沢は見つけた

僕は大きな声で「宮沢さん」と叫ぶと、石山が「やめるよ」と怒ったような、困ったような顔をして言った。

宮沢は僕の声に気付き僕達の方を見た。「あら」と言うような言葉を発したと思う。その声はあまりにも小さかったので僕達には聞こえなかった。

宮沢は「石山君」とこれは僕達に聞こえる声を出し、手を振った。石山は軽く手を上げると、僕の服を引っ張りその場をスタスタと去ってしまった。

「なんだよ、石山。チャンスだったじゃないか、何で逃げるんだよ」

「俺はカワパンと違うんだ。別に宮沢とどうにかなりたいたいと思っ
てないし、喋りたいとも思っ
てないんだよ」

石山は少し怒った声を出した。

「何だよ、それ。よくわかんねえ」

「いいんだよ、わかんなくても、俺はそうなの。俺、先にバスに行
ってるから」

石山はスタスタと早足で僕から離れていった。

『なに怒ってんだ』と僕は思いながらゆっくり歩いている。

石山が本気で怒っているとは思えないので別に気にはしていなかったが、僕はゆっくりバスに戻ろうと思っていた。

まだ集合時間には十分位時間があるから急いで帰ることはない。すると我が七組のアイドル立花の姿が見えた。どういう訳か一人である。

僕は立花の姿に気付いた瞬間、立花の方に歩いていき、「立花、少しは小泉のこと考えてやれよ」と言ってしまった。

誰かが立花のそばにいれば、話し掛けることはなかったはずだし、石山が一緒にいれば近くに行くこともなかったはずだが、二人とも一人でいたのが僕を立花に近づけ、尚かつ小泉のための言葉を立花に投げつけることになってしまった。

「何言ってるの」

立花は戸惑った顔をしている。

「小泉から聞いたよ。立花、小泉のこと好きなんだから、それならもつと小泉のこと考えてあげてもいいじゃないか」

「そんなこと、カワパンに関係ないじゃない。」

立花がそう言ったとき、水口の姿が見えたので、素早くその場を去った。

バスに戻ると、石山が楽しそうにバスガイドのお姉さんと話をしている。

「よっ、カワパン、遅かったな。後藤いたか」と石山はニコニコした顔で僕に声を掛けてきた。

僕は立花と言いつ争いをしたために凄く興奮していて石山のジョークに付き合う余裕はなかった。

「どうしたの、カワパン。あつわかった、後藤にふられたんだ。中沢さん、カワパン振られたみたい」

中沢さんとはバスガイドの名字である。

僕と石山はバスの席を一番前に取り、しょっちゅうバスガイドの中沢をからかって喜んでいた。まだ、二十才位の中沢もそんな僕達を迷惑がらず結構話にのってきたりしていた。

大浴場の争い

京都の観光巡りはほとんど寺を回る。僕と石山はさつと早足で境内を回ると、いつも一番にバスに戻るの、バスガイドの中沢と話をする機会が多かったのである。

僕は京都の寺は邪宗の寺だと思っていたので、なるべく早く出なければと心の中で題目をあげながら回ったが、石山はなぜかそんな僕に付き合い一緒に早く歩いてくれた。

僕はずっとバスの中で黙っていた。そんな僕の態度に対し石山は『どうしたんだろう、宮沢のことで怒っているのかな』という顔をずっとしていたのが、僕にはよく分かった。

僕はバスが走り出し、しばらくして気が落ち着いた時「石山、何でもないよ。ちよつと、カッ力することがあっただけ、それは石山とは関係ないことなんだ」と弁解した。

「何だよ。俺と関係ないことって、教えるよ」と石山は言ったが、「ひみつ、ひみつ」と茶化した声を出しごまかしたので、石山もそれ以上突っ込むことはなかった。

僕は反省していた。なんで立花にあんな余計なことを言ってしまったのだろう。何か言うにしても違う言い方があっただろう。あれは小泉の感情をただ代弁し感情をぶつけただけで、何の問題解決にもならない。

バスの中でチラッと立花を見たら、いつもニコニコしている立花の顔が、口を真一文字に閉じてきつい顔をしていた。けれど、夕食の時にはもういつものニコニコしている立花に戻っていたので、ほっとする僕であった。

京都の旅館は大きく、僕達の上原中学校だけではなく九州の中学校も来ていたが、生徒のガラが悪い。

「わいどま、どっから来たっや？」

ロビーの中で熊田に九州の生徒が強面の声を掛ける。

「川崎だよ、お前らは」

熊田も強面の声をだした。

九州の生徒は川崎という地名を聞いてびくつとした顔をしてそのまま「ふ〜ん」と言つて去つていった。

川崎という地名は、地方に不良の町として知れ渡っている。

夕飯の前は風呂である。旅館の中には百人位入れそうな大浴場があり、それが修学旅行の楽しみの一つである。

ウキウキしながら風呂場に入ると、僕達上原中学校が入る時間なのに、九州の生徒10人位がまだ入っていて、女子風呂を覗いているところを熊田達が目撃した。

初日は5組から7組の生徒が先の時間に入ったので、僕達のクラスが九州の生徒とぶつかつてしまったのだ。

特に熊田とフカヒレ、川田は「一番風呂に入るんだ」と言つて風呂に入つたので、もろに九州の生徒とぶつかつてしまった。

「お前ら何やつてんだ」熊田が叫ぶ。

「なんや、わいどんがまだ入つてくつとの早かつちやなかつや」

熊田の声に振り向いた男は、さっきロビーで出会つた奴だ。

「ふざけんじゃねえよ、早く出ていけ」

熊田も負けていないが、相手はもつと負けてない。10人位がさーっと熊田、フカヒレ、川田の周りを取り囲んだ。

丁度その時、次々と上原中学校の生徒が風呂に入ってきた。僕と石山も何か風呂の中が騒がしいなと思ひながら、風呂に入った。

20人以上上原中学校の生徒が入ってきたので、さすがに九州の生徒達も「どけ、どけ」と言いながら、風呂場から出て行こうとした。丁度その時に、脱衣所から風呂場に入ろうとしていた僕と石山にぶつかった。

「何だ、あいつら」と僕は言いながら風呂場に入ると、湯船の真中で熊田が思いつきりの笑顔を見させているのが見えた。

「熊田凄いやなあ、あいつら追つ払つたぜ」

出川の声がよく響いて聞こえてくる。

熊田の武勇伝は、その日のうちに上原中学校の生徒達全員に知れ渡る。

熊田は3年になってから転校してきたので、彼を知らない生徒がほとんどのため彼の容姿がかなり美化されて噂された。

英雄になった熊田

夕食の時、女生徒達が僕達のクラスを注目する。噂の主、熊田を探しているのだ。

熊田を知っている男子生徒が熊田を指差すとがっかりする顔とやっぱりなという顔に分かれる。

よその学校の不良が女風呂を覗いたのを、毅然として注意した人物というイメージなら当然カッコイイ二枚目だろう。ところがその学校の不良とケンカしそうになったということなら熊田はピッタリだ。同じ穴のムジナということだ。とはいっても熊田が注目されているのは事実で、それは当然熊田も意識している。

いつも下品な熊田がとても上品なのだ。

「あ、すまないけれど、そのしょう油取ってくれませんか、出川君」なんていうんだ。

「出川、そのしょう油取ってくれよ」と、どすのきいた声で頼むというより命令口調でいつもは言うのに全然違う。

熊田のその態度は次の日の朝食も続いたが、だんだんぎこちなくなっていくのが目に見えてわかり熊田をよく知っている7組の生徒は笑いをこらえるので必死になった。

背筋をピシッと伸ばし食事をしていたが、だんだん背中が曲がってくる。曲がってくるのに気付くと再びピシッと背中を伸ばす。そんなことを何回も繰り返し返す。

ご飯を食べるのに口をあまり開けずゆっくり噛み少しずつ胃の中に落としていくが、夢中になると大口を開け、口をグチャグチャ動かし、お茶をグワツと飲む、そこではっとした顔をし、そつと湯呑みをお膳に置くと、また、ご飯を少し口の中に入れ、ゆっくり噛んでいく。しかし、また、夢中になるとガツガツ食べ、それに気付くといけないという顔をして、おとなしく食べる。

そんな食べ方を3回繰り返し返した時、さすがに目の前にいる中山が

くすつと笑った。するとそれが合図かのように立花が大笑いして、7組の生徒全員が大笑いした。

熊田はきょとんとしている。何でもみんなが大笑いしているのだからとキョロキョロしているが、原因がわからない。すると我が7組のアイドル立花が「熊田君、なに気取って食べてるのよ、いつものようにガツガツ食べなさいよ」と言ったから、さすがの熊田も状況がわかったようで顔を真っ赤にし「なにを言ってるんだ、いつもの通りだよ」と弁解したが、熊田が口を開くとまたどつと笑い声が部屋いっぱいに広がった。

「俺はいつもこうだろ」

どーっという笑い声。

「やめろよ、他のクラスの人間が誤解するだろう」
どーっという笑い声。

熊田殴られる

京都の名所を廻るのは全てバスで、僕達は点から点へと移動するということになるので、京都の町の概要を掴むことが出来ない。

寺や神社もそれぞれの特徴があり一つ一つみんな違う顔を持っているのだから、僕にはみんな同じに見える。なにしろ寺と神社だって似たようなものだと思うているのだから、両方とも邪宗の建物だ。

前原なんかは「ここが本願寺か、本願寺には東と西があるんだぜ」なんて寺に入る度にうんちくを述べるが、周りにいる生徒は「うんうん」と頷いているが、何にも聞いちゃいない。

女達はおしゃべりに夢中だし、男どもは何かいたずらをたくてその材料を探すのに夢中だ。

寺の壁にいたずら書き等見つけるともう大変だ。次々、いたずら書きをその壁にする。

いたずら書きといっても『京都って最高』とか『俺に京都は似合ってるぜ』程度のものだ。

似たような景色を見学していたが、清水寺の舞台だけはちよつと感激した。

そりゃあ三十三間堂の廊下も、龍安寺の石庭でもそれなりに面白かったが、清水寺の舞台は自然を巻き込んだ景色なので自然の好きな僕はしばらくそこにいた。

石山も僕と同じような感動を覚えたらしく、二人で静かな風に身を置いていた。

もちろん二人だけでここにいるのなら、静かな風に身を置いていたという表現がぴったりかも知れないが、実際は、人、人、人でありは自然を楽しむ雰囲気ではない。

こういう時はなるべく周りを見ないようにし、目を遠くに向けていればいい。

「おい、わい昨日宿におった奴やろが。こつち来てんの」

いい気持ちで風の音に耳を澄ませていたら、ドスのきいた声が聞こえてきたので振り返ると、熊田の脅えた顔が見える。そのまま見ていると熊田が五人の学生に衿を引っ張られ連れ去られようとしていた。

「石山、あれを見ろよ」

僕の声に恍惚とした顔を見せていた石山は、ゆっくり首を動かすときつい目をした顔になった。

熊田と五人の男はゆっくり人込みを離れていく。知らない人間が見たら仲の良い六人グループに見えるかも知れない。

『何で熊田は一人だったんだろっ』と思いながら、僕と石山は六人の後を付けていった。少し歩くと木がうつそうと生えている場所に着いた。

遠くに人の声はするが見回した限りでは人はいない。5人の生徒に気付かれないよう、そっと僕と石山は近くに行く。

「おい、昨日はがらい恥じばかかせてくれたね。わい、英雄になったっげなね」

同じ旅館に泊ったが食事する場所は違ったので、あれからあの九州の学校の生徒と一緒にすることはなかった。しかし、同じ旅館の中だ。噂だけは彼らにも聞こえたのかも知れない。しかし、熊田はツイていない。例えば噂が彼等に聞こえたとしても、それから出会わなければ何も起こらなかっただろう。

彼らにしてもわざわざ熊田を探して歩き、昨日のおとしまえをつけようとしていた訳でもないだろう。たまたま今日偶然に熊田一人で見るところを見つけたので昨日の仕返しをする気になったのだと思う。

「ぼ、僕は別にあなた方に恥をかかそうとは思っていなかった」
熊田は必死になっている。

「ほー、そぎゃんたいね」と昨日熊田とやりあった男が言うと、いきなり肘で熊田の頬を殴った。

手でひっぱたくとその大きな動作で、ひっぱたかれると予想出来るが、肘の場合は動きが小さく済むので、その動きを予想することは難しい。

後ろに熊田は吹っ飛んだが、周りを囲んでいた男が吹っ飛んできた熊田を支える。

「今なんて言っただや、よー聞こえなかったな。もういつペン言っただの」

一発殴られ、5人の男が周りを取り囲んでいるので、熊田の顔にはもう戦意が無かった。

「いえ、別に」

熊田はやつとそう言う

「いえ別にや？そいなら、わいは自分が悪かと反省しとつたかね」

「反省してます」

「よし、わかった。なら慰謝料ばやれ。今持つとつ有り金ば全部やれ」

「え！そ、それは」と熊田が言った瞬間、再び肘が飛び熊田はまたまた吹っ飛んでしまった。

僕と石山はもうすぐそばまで来ている。

熊田が吹っ飛んだ瞬間、石山はスパーっと5人の男の前に出たが、僕はあつけにとられその場に立ち尽くしてしまった。

5人の男はいきなりの石山の出現に戸惑っているため、後ろにいる僕には全然気付かない。

「てめえら、誰を脅してんだよ」

今まで聞いたことのない石山のドスのきいたヤクザ声に、僕は驚いたが、5人の男も驚いたようだ。

「わい、なんや」と言いながら熊田を肘で殴った男が石山の前に出ると、石山は目に見えぬ早さで頭を下げると、そのままその男の腹に頭突きをかました。

不意をつかれたのできれいにその一撃は決まりその男は「うー」

と言いながら、腹を押さえながらお辞儀をした格好になると、今度は膝でその男の頭を石山は突き上げた。

そのまま後ろに倒れる男。まわりの4人はどうしていいのかわからない顔をしている。おそらくその男が5人のグループの大將なんだろう。大將が倒されたのでどうしていいのかわからなくなったのだと思われる。

「てめえら、俺らは川崎の上原中だぞ、わかってんのか」

再びヤクザ声を張り上げる石山。ただ川崎に強いアクセントを付けた。

川崎と言えば地方には不良の住んでいる土地として有名だ。何やら恐い中学だと、知らない人間には思わすことができるので、確かに恐そうだ。

石山の脅しに明らかに5人の男達は動揺している。

「俺達だつて修学旅行で無益な争いをしたなんて思つてない。こんな時間はなるべく平和に過ごしたい。でもやるって言ふんだつたらてめえら袋だぞ。後ろを見る、てめえらの態度次第では仲間を20人呼ぶことになつてんだ」と石山が僕を指差した。

5人はそれぞれに僕を見る。僕は両手をポケットに入れ、なるべく震えているのがばれないよう、また、顔が引きつっているのがばれないようにした。

「おい、その寝転がつてる奴。お前うちのものに二発食らわしただろう。だから俺もお前に二発食らわした。これでチャラだろ」

石山はニヤリと笑った。

その顔は映画にでてくる石原裕次郎みたいだった。

明らかに石山はこういう場に慣れている。

相手の五人は石山の持つている気に押されたようで「わかった」と言い、そのままいなくなつた。

「熊田、大丈夫か」

石山の呼び掛けに熊田は小さな声で「ああ」と、言った。

「そろそろ集合時間だから行こつぜ」

石山の言葉に僕は「そうだな」と明るく声をだしたが、熊田は何も言わず黙って歩きだした。

カップルからあぶれた熊田

「俺、おやじがヤクザなんだ。だから結構慣れてんだよ、ああいうの」

熊田はさつさとしてしまったので、石山と二人でゆっくり歩いている時、石山が僕の方を見ないでボソボソと言った。

「そうか」石山がやくざの息子だというのは分かっていた。そうはいってもヤクザなんて僕は一度も見たことはないし、接したこともない。だから、いきなり石山がヤクザの息子だと言われても、どうしていいのかわからない。僕達二人はそれから何もしゃべらないで夕食まで過ごした。

「石山、おやじと一緒に暮らしているのか」

夕食の時、隣の石山にボソボソと聞いた。

雨の日、殴られて家の外に投げ出された石山がずーっと気になっていたので、思いきって訊いてみてしまった。

石山は、かなりの間を置いてから「どっちとも言えない」と答えた。

「そうか」と、僕は言う。「まあ人生いろいろあるからなあ。それより熊田を見ろよ。昨日と違って背中を丸めて飯食ってるぜ。」

あいつがあんなにシヨボンとしているの初めて見たよ。あいつ右頬殴られてるからアザ出来てるじゃん。カップパに何て言ったとう？と、わざと明るい声をだしたので、ずっと暗かった石山の顔にも明るさが戻ってきた。

「何て言っただんだ？」

「トイレで滑って便器にぶつかったって言っただけだよ」

「何だよ、もっとまじな言い訳すればいいのに、そんなくさい言い訳しか思い付かなかったのか」

「うまい、石山。確かに臭いよな。でもなんであいつ殴られたって言わなかったんだろ」

「そりゃあ、あいつにだってプライドがあるだろう。よその学校の奴にやられたなんてみんなに知れたら、昨日の英雄が今日の弱虫になってしまっただろう」

「そりゃあそうだな。あいつ、結構カッコマンだしな」

熊田の話をしだしてから、僕と石山は二人で飯を食いながらひそひそ話をずつとしていた。そして、夕食が終わる頃には、いつもの石山とカワパンになっていたのである。

修学旅行も三日目になると自由時間の時男女ペアになって動いているもの達が多くなった。

野球部のキャプテン川田と茅野は初日からペアになっていたが、フカヒレとアイドルグループの一人、土屋もペアで動いている。

加山はベンチで僕を振った水口と話しているし、小泉のライバル横山は相変わらず立花を追いかけている。

委員長のホゾは生徒会書記に当選した神崎と行動を共にすることが多いみたいだが、これは7組の委員長と生徒会役員の関係で一緒に行動しているみたいだ。

驚いたことにめがねの前原が杉山と歩いているのを見てしまった。

「前原は小学校の時から杉山が好きなんだよ」と、石山は二人を見た時言っていたが、僕はそんなこと何にも知らなかった。

クラスの噂のカップルに関して僕は全て把握していたと思っていたのに、シヨックである。

「昨日、熊田が一人だったのは、こういうことだったんだな」

石山が僕におかしそうな顔をして言ってきた。

「あいつ溢れたんだ。溢れたうえに殴られたんじゃないやあ、踏んだり蹴ったりだな」

熊田は転校してきてから日が浅いが、何人かとは仲良くなっていた。一番仲が良いのは加山とめがねの前原で、その次にフカヒレと委員長のホゾ、それにキャプテン川田と小泉のライバル横山ともまあまあ仲が良い。その仲の良い友達が全員女と一緒にいる時が多くなり、昨日は気が付いたら一人になっていたのだろう。

熊田が殴られた後、僕は熊田に、「なんで、一人でいたんだよ」と訊いたが、熊田は何も説明せず、「別に」と言っただけだったが、今その訳がわかった。僕は熊田の事を笑っていられなかった。

こういう3年生全員で動いている時こそ4組の後藤に近づくとチャンスなのに、彼女を見かけることもここ二日間出来なかったのだ。

後藤を呼び出す

「カワパン、今回は一緒に動こうよ」寺本が声をかけてきた。

「そ、そうだな」と僕は返事をしたが本心は嫌であった。

寺本や野口が一緒だと後藤に出会ってもなんにも出来ない。

僕の返事が曖昧なので寺本は嫌な顔をしている。

「カワパンは後藤と仲良くなりたいたいから一人で行動したいんだよ」石山がニヤニヤ笑いながら言うと、寺本はびつくりした顔をして、

「え！ 後藤さん」とびつくりした声を出した。

「寺本、後藤知ってるの」石山の質問に、「だって、同じクラブだもの」と、寺本は答えた。

僕は二人がアニメーションクラブに入っていたのはよく知っていた。時々寺本と後藤が肩を並べ学校から帰るところを何回も目撃もしていた。

「そうなんだ。それなら寺本、カワパンと後藤の仲を取り持ってやれよ」

「別にいいよ、後藤さん呼んでくる」

石山は面白がって言っていたが、寺本は無表情で喋っていた。

「よせよ、別にいいよ。今日は班で動こう。一日位、班行動しようぜ」

修学旅行は基本的に班行動であったが、それを守っている班はない。カップルで動いている奴もいるが、ほとんどが仲の良い男のグループ、女のグループで動いている。

「カワパン、こんなチャンスないじゃん。寺本と後藤が、仲が良いななんて神様のお導きだよ」

僕も少しチャンスかなと思った。

「どうするの、カワパン」寺本が怒った声で僕に聞く。

「どうしようかなー」と僕はヘラヘラ笑っている。

「わかった、今、後藤さんに話してくる」

寺本は明らかに怒っているのだが、いつも男言葉を使っているため怒っている言葉には聞こえず、いつもの男言葉にしか僕には聞こえなかったので、僕はズーとヘラヘラしていた。

石山が僕を突つつくが、僕は後藤の事で頭が一杯だから気が付かない。

「じゃあ言うてくるから、本当に行くよ」

「寺本やめろよ、冗談だよ」と、僕はヘラヘラしながら言ったが、寺本は踵を返しスタスタと行ってしまった。

「石山どうしよう。本当に後藤を連れてきたら」
相変わらず、僕はヘラヘラしている。

頭の中では寺本が後藤を連れてきたらどうしよう、僕と石山と寺本と後藤でダブルデートをしてもいいな、なんて考えていた。

「カワパン、寺本怒ってなかったか」

「なんで」

「いや、何となくいつもと違うような」

「寺本はいつもああじゃん」

「そうかなあ」

5分もすると寺本は本当に後藤を連れてきた。

「じゃあ、上手くやって。私は野口さんが待っているから。じゃあね」

寺本はそう言った瞬間、怒った顔をして僕達の前を逃げるように去っていった。

「俺もちようど用事があったんだ」

石山も逃げようとしたが、僕は石山の腕を離さなかった。

「あの、どういう用事なんですか」

後藤が不安そうに質問する。

「寺本、なんて言うてたの」

後藤のそんな顔を見て石山が聞いた。

「あの、私に用事がある人がいるから来てと言われて」

「そうなんだ、用事があるのはカワパンなんだ。俺は関係ないか

ら。じゃあな」と石山は言ってまた逃げようとしたが、僕は絶対石山の腕を離さなかった。

「あの、用事ってなんですか？」後藤が僕に聞いてくる。

寺本がいれば「みんなと一緒に行動しない」とも言えるけど、寺本はさっさといなくなってしまった。

最後まで責任持てよと寺本を恨んだが、恨んだけじゃあ今どうしていいのか結論はでない。

僕がもじもじしていると、「いや、4組に中西っているじゃん。

あいつ一年の時の友達なんだけど、おとなしいからちゃんと修学旅行楽しんでるかなって気になっちゃって、どうかな」と石山が訳わかない事を言った。

「まあ、楽しんでいるとは思いますが、私はよくわからない」

「そうか、それならいいんだ。わざわざ悪かったな」

石山がそう言うのと、後藤は何がなんだかわからないという顔をして去っていった。

「石山どういう事だよ」

後藤が見えなくなると、石山に僕はちよつと怒った声で言った。

「カワパンこそ、後藤を呼んでどうしたかったんだよ。二人で付き合いたかったのか、告白したかったのか、デートしたかったのか水口の時は告白したかったとはつきりしてたじゃないか。だけど今回をよくわからないよ」

「それはほら、最初は寺本と石山と僕と後藤でダブルデートするとか…そうじゃないか石山」

「寺本はいなくなっちゃったじゃないか」

「そうなんだよ。あいつ何考えてんだか。冷たいよな」

「寺本にダブルデートしようって、カワパン頼んでないじゃないか」

「そういうのは、俺の気持ちを察してわかるものじゃない？」

「言わないとわかんないよ。それに寺本はいなくなっちゃったんだから、カワパンのとり道はデートに誘うか、告白するかどっちか

だろ」

「そんな急に心の準備が出来てないよ、わかるだろう、石山」

「そりゃあいきなりだからな。だから仕切り直しをするために後藤にまあ言っただ。カワパン、水口の時みたいに自分の気持ちをはっきりさせとけよ」

「だって、いきなり寺本が後藤を連れてくるなんて思わないじゃん」

石山は、もうわかったという顔をして「行こう」と言い、歩きだした。

僕は石山の後をちんたら歩き、集合場所の大型バスが何十台も待機している大駐車場に向かった。

京都には全国から修学旅行にやってくるし、今の時期は天候が良かったため一番修学旅行をする学校が多い。当然、各観光地にはあちこちの中学生が入り交じって見学している。

大型バスの駐車場にも、5〜6校の大型バスが停っているのだ。大型駐車場には何十台もの大型バスが停っているのだ。

自分達のバスを探すのは結構大変である。いつものバスガイドを見つけると安心するが、今日からはバスガイドが変わるので、それを目印にすることは出来ない。

寺本失踪

「上原中学校3年7組の生徒さん」

バスガイドが旗を持って僕に聞いてきたので、「そうです」と言う
うと、バスを指差し、「乗って下さい」と言った。石山はもう乗っ
ている。

「前のバスガイドの方が綺麗だったな」

石山が笑いながら言うので、「そうだな」と僕は言ったが、声に
力がない。まだ、後藤のことが尾を引いているからだ。

「みんな揃ったか？」

本山がバスの中に入り声をかける。

「寺本さんがまだ来てません」野口の声が後ろでする。

「おかしいなあ、俺達より先に寺本はバスに行った筈なのに」

石山が僕にそう言ったが、近くにいた本山にもその声は届いてい
る。本山が腕時計を見ながら、「運転手さん、ちょっと待って下さ
い」と言ってバス外に降りたが、2〜3分も経つと又バスに戻り、
「寺本来たか」と僕に聞いてきたので、「まだ」と僕は答えた。

バスに乗った時は後藤の事で頭がいっぱいだったが、だんだん寺
本のこと心配になってきた。

「先生、俺ちよつと見てきます」

「心当たりがあるのか」

「いや、さつきまで一緒だったので、その辺を見てこようかなと」
「それなら先生も一緒に行く」

僕と本山は、さつき寺本が後藤を連れて来た所に行ったが誰もい
ない。バスに寺本が来ていますようにと願いながらバスに戻ったが
石山が「まだ来てないよ」と言った。

それから十分待つても寺本は来なかった。

本山が「私がここに残ってますから」とカップに言い、本山を残
しバスは出発することになった。

修学旅行の見学予定は簡単に変える事は出来ない。全て時間が決まっているのだ。

バスの中は始めの5分間位は寺本を心配する声もあったが、すぐにいつものうるさいバスに戻った。

「クソでもしてるんだろ」熊田の言葉に、「いやだあ、熊田君は」立花が声をあげたが、結構そんなものだろうとクラスのほとんども思っているみたいで、本気に心配しているクラスメートは少ない。

僕と石山は同じ班だし、さっきまで一緒にいたのだから、クラスメートとは違いずっと心配していた。

「カワパン、やっぱり寺本がいなくなる時ちよつとおかしかったよ」

石山がそう言うのと確かにいつもの寺本とは違っていたかも知れない。

「寺本、今日は一緒に行動しようって言ってたじゃん。ここまでの修学旅行そんなに面白くなかったんじゃないのか」

「そうかなあ」

僕は曖昧な返事をしながら寺本の修学旅行を思っていた。

新幹線の中では楽しそうだった。しかし、その後は普通であった。教室でいつも見せている態度を寺本はしていた。しかし、いつもの寺本を見るのは食事の時間だけで、自由行動の時は石山といつも一緒にいたので寺本がどこで何をしていたかは全くわからない。

僕と石山はずっとハイテンションで修学旅行を楽しんでいたが、寺本や野口は学校生活そのままを修学旅行にもってきている。

寺本と野口は、きっと修学旅行の間ずっと一緒に行動していたのだろう。

寺本が話しかけなければ野口はまず自分からは何も話さない。野口が話す時は、寺本が、「あの庭凄かったねえ」と言うと、「そうねえ」というように、ほとんど相槌みたいな言葉しか言わない。そのため寺本もそれ以上その話題を話すことが出来ない。もともと寺本もおとなしいが、野口はもっとおとなしい。

おとなしい子でも、おとなしい子同士集まるとそれなりにお喋りをするのだが、野口は全然そんな事はない。そんな野口だが、寺本は学校にいる時それが性に合っていて野口となると落ち着くみたいだった。

しかし今は学校じゃない。修学旅行だ。

修学旅行は学校の時と違ってみんなハイテンションになる。だからカップルが何組も出来るし、喧嘩もある。きっとあちこちで、「君が好きだ」なんて告白している奴も何人もいるに違いない。

みんな中学生最大のイベントで、一番の思い出を作ろうとしているのだ。

寺本と野口を見てみると、とても一番の思い出を作っている風には見えない。

フカヒレのグループや川田のグループは一番の思い出を、はたから見ていても作っているように見える。

優等生グループは修学旅行というアイテムを上手く使っているが、劣等生グループはただ先生の決めたコースを見学するだけが修学旅行となっている。寺本と野口は劣等生ではないが、おとなしいので劣等生と同じ様な修学旅行なのだ。

親友

僕はかなり反省した。そして、心配した。修学旅行での自由時間の行動は班でするのが決まりだ。それを守っている奴はいないが、寺本は班で動きたかったのだと思う。

昼食の時、本山が寺本を連れて食堂に入ってきたので、僕はホツとした。

寺本は神妙な顔をして野口の隣に座ると、野口が「大丈夫？」と聞いてきたので「うん」とだけ答えると、その後は何も言わなかった。

午後は自由行動となる所もなく、淡々と旅程をこなしていったが、寺本はずっと口を開かない。寺本が口を開かなければ野口も何も言わないので、どうして寺本が遅れてきたのか理由はわからないままだった。

「どこ行ってたんだよ？」と僕が聞けばいいのだが、朝あんな別れ方をしたので声を掛けづらい。

寺本が遅れてきた訳は夕食の時わかった。熊田が先生達のひそひそ話を聞きてきたからだ。

夕食はいつも旅館の大広間で食べる。300人近い生徒と先生が全員一緒に食べる事が出来るように長いテーブルが縦に五つくっついていて、それが8列並んでいる。一つのテーブルに向かい合わせで16人食事が出来るので、一列80人が食事出来る。

それが8列並んでいるので僕達の学校だけでなく、他校の生徒も一緒に食事をとることとなるから、その騒がしさといったら尋常じゃない。

通常の座布団より一回り小さい座布団が自分の陣地である。物凄く狭いのでちょっと変な動きをするとすぐ隣の人とぶつかってしまう。

ご飯は大きなお櫃にたっぷりと入っているので何杯もおかわりは

出来るが、おかわりは自分で盛る。おかわりのご飯を盛りに行くときが大変だ。みんなの座っている背中と背中の中のわずかな隙間を上手く通り抜けなくてはならない。それをするのが嫌なのか、女はまずおかわりをしない。

僕と石山は必ず2回はおかわりするし、大きな黄色いアルミの鍋に入っているみそ汁も1回はおかわりする。

ご飯を並べる時は旅館の中居さんが何十人もせわしく動き、長いテーブルにかがみながら、ご飯やおかずを置いていくが『いただきます』がこだますると、大広間からはいなくなる。

600人近い人間が一同に食事するのだ。それもうるさい盛りの中学生。もう大広間は訳がわからない状態になっても不思議ではないだろう。そんなに騒がしいのに先生達は何も言わない。先生達だけに特別置かれたとつくりの酒をちびちび飲んで、結構先生同士楽しそうに喋っている。

食事が始まってすぐに熊田が「寺本、お前間違つて、違う学校のバスに乗っちゃったんだってな」とクラス全員に聞こえるような声を出した。大広間全体はもう五月蠅いの一言だから、熊田がどんな大きな声を出しても他のクラスにその声が届くことはないのだが、7組の生徒には熊田の声は届いた。

熊田が寺本の来なかった理由を知っている。7組のみんなは耳を澄ました。

「お前、ブレザーなんか着てるからだよ」と熊田が言うと、近くにいた中山が「どういうこと？」と聞いたので、熊田は得意満面な顔をして「違う学校に、ブレザーが制服の学校があったんだよ。そのバスに間違つて乗ってしまいバスが走り出してしまったんだってさ」と言い、さらに「お前、大体なんでセーラー服を着てこないんだよ。そんなにブレザーを自慢したいのか」と言つたが、寺本は下を向いたまま何も言わなかった。

「お前のせいでみんな迷惑したんだぞ。ちゃんと謝れよ」
熊田はしつこいぐらい寺本のことを罵る。

「30分もみんなの時間を潰したんだ。お前がブレザーなんか着ているからだぞ。みんなに謝るのが筋だろ」と熊田が言った時、寺本は小さな声で「みんな、ごめんなさい」と言った。

寺本の謝る切ない声を聞くと、「謝ることなんか無いよ」と僕は大声を出した。

「何を着ようと個人の勝手だろ、熊田がとやかく言うことなんかねえだろ。生徒手帳見てみる、制服のところは学校指定の学生服を着ることと書いてあるが、セーラー服を着るとは書いてないぞ。学校では静文堂がセーラー服を売っているので、いつのまにかセーラー服が学校指定のように思われているけど、ちゃんとした指定は無いんだよ。だから学生服だったら問題は無いんだ。」

寺本だってみんなを困らせようとして、わざとよその学校のバスに乗ったんじゃないだろ。間違いだったんだ。お前は人の間違いを指摘するほど偉いのか。クラスメートならまず寺本の無事を喜ぶのが普通だろ」

自分でも信じられないが言葉がスラスラ出てきた。

「カワパン、寺本のことかばうけど、お前は寺本の何なんだよ」僕の言葉に7組の生徒は賛成しているような顔をしたものがほとんどだったので、形勢が悪くなったと感じた熊田は話を変えてきた。僕の答え次第では『カワパンは寺本が好きだからかばうんだ』と言って、話を僕と寺本の恋愛関係にもって行って、自分が寺本を非難したことをごまかそうとしているのだと思う。

「俺と寺本は親友だよ」

とつさに僕はそう答えた。

その答えは熊田の予想外の答えであつたみたいだ。

みんなで修学旅行

「な、なんだよ、親友ってお前達男と女じゃないか、男と女に親友なんてあるか」

熊田の言葉は、つつかえ、つつかえだ。

「あるよ、ここにあるよ」

「そ、そんな勘違いだよ」

「勘違いかどうか30年後もう一度俺にその質問を言えよ。30年後も俺と寺本は親友でいるから、その時はつきりするよ」

「な、なに言ってるんだよ、カワパンはな」と熊田が言った時、石山が「静かにしろよ、今は食事中だろ」と怒鳴った。

熊田は石山の顔がちゃんと見られない。九州の中学生にやられた時、助けてもらったからだ。

「わかった、わかった、ご飯食べよ」と熊田は下を向きながら言い、この件は終わった。

生徒手帳に学則が書いてあるが、読む生徒はほとんどいない。

一週間前、石山が『生徒手帳に書いてあること面白いぞ』と言ったので、一緒に隅から隅まで読んだ。その中に服装のことが書いてあり、男子は学校指定の詰め襟の学生服で、女子はセーラー服を着用と書いてあったが、そこには『基本的には』と書いてあった。つまり例外を認めるということだろう。

熊田がちゃんと生徒手帳を読んでいたら、そのところを突っ込まれ、ややこしくなったが、僕のハッターが効いたようで無事に済んだ。

静文堂とは学校の隣に店を構えていて、学校で使うものは何でも売っていた。

体操着、帽子、上履き、文房具、パン等、全てこの店でほとんどの生徒は学校生活の買物をする。

学校の中にも静文堂の小さな売店があり文房具と昼食の菓子パン

がここで売っていた。学校と完全に癒着した店が静文堂である。

翌日は修学旅行最終日だ。僕は石山に今日一日は班全員で行動しようとして提案し、石山も同意したので、寺本と野口に朝一番でそのことを伝えた。

石山は草津にそのことを伝えにいくと「カワパン、草津がぐたぐた言ってたから連れてきたぜ」と、草津の手を引きながら、旅館のロビーに来た。

僕は、草津、石山、寺本、野口の前で「今日は一班全員が一致団結して修学旅行を楽しむことにします」と宣言した。

「別に一致団結はいんじゃないか」

「石山、何言ってるんだよ。一致団結が重要なんじゃないか。寺本そう思うだろう？」

「うん、思う」寺本に明るいい顔が戻った。

「草津もそう思うだろう」

「くだらない、思う訳ないだろう」

「何、思わない？」僕は草津を羽交い絞めにして、石山に「やれ！」と命令したら、草津のお腹や胸を石山は笑いながらくすぐり始めた。

「やめろよ、カワパン。石山もやめろ。子供だぞお前ら」

「そうだよ、俺達は子供だ。今日は子供になったつもりで楽しむんだ。草津も賛成しろ」僕がそう言う

と石山も「そうだ、そうだ」と思いつきりの笑顔を見せて草津をくすぐった。草津はすぐ降参し「わかった、わかったよ。全くひどい班に入っちゃったよ」と、ぶつぶつ言った。

草津はそう言ったが、奴もこの三日間、修学旅行がそんなに面白くなかったはずだ。一人でプラプラしているのを、何回も見ていたから、それは確信出来た。

途中から石山も僕が思っていた事がわかったみたいで、全面的に僕に合わせてくれた。

5人での行動は特に凄い事件に出会うとか、面白い体験をすると

いう訳ではなかったが、寺本と野口はずっと楽しそうな顔をしていた。

僕と石山の漫才のような掛けあいに退屈している時間は全く無く、時々出る草津の一人ブツブツもみんなの笑いを誘った。

「カワパン、今日は良かったな。修学旅行で一番良かったよ」

帰りの夜行列車内で石山はしみじみ言ったが、僕は「そうだな」と答えたが、すぐに遊びに夢中になった。

夜行列車は四人掛けの対面座席で直角の背もたれだから眠れる訳がない。

トランプやったり、しりとりやったりと考えられる遊びは何でもやった。

夜9時になると明かりが暗くなるが、そんなの何でもない。しかし、さすがに11時を過ぎると寝る者も多くなる。

「カワパン、気付いていたか。あそこに後藤がいるぞ」

石山が指差した方向に確かに目をつぶって寝ている後藤が見える。遊びに夢中になっていたのと、僕の背中の方にいたから気付かなかったらしい。

『かわいい』

後藤とは小学校4年の時同じクラスになったことがある。

おとなしく、まるで若草物語にでてくるベスのようだと僕は中学になって思った。中学になって思ったというのは中学になって若草物語を読んだからである。

若草物語では四姉妹が登場する。四姉妹で主役は次女のジョーだが、僕は身体が弱くやさしいベスが一番好きであった。

そんなベスに似ている後藤を見ていると胸がキュンとなる。

とうとう夜中じゅう一睡もしなかった。そのツケはすぐにきた。夜行列車が川崎に到着し駅に降りると僕は吐いてしまったからだ。それでも、家に着きひと眠りして、ご飯は腹いっぱい食べるとすぐに元気になるのだから、若いて素晴らしい。

夜、おみやげに買ったスルメのとりくりをお父ちゃんにあげると

予想以上に嬉しそうな顔をしたが、お母ちゃんにあげたこけしは、
「食べ物の方が良かったよ」であった。

次兄の影響

僕の次兄は人と少し違う。

どういう風に違うのかと質問されると説明もできないのだが、自分が凄い人間だと思っているのが強い人間だ。アイデアもたくさん出すし、行動力もある。

次兄が中学生で僕が小学生のとき、近くの製材工場に捨ててある廃材（置いてあるだけなのだが、其の廃材は風呂屋のまきになるので捨ててあるのと同じだと僕たちは思っている）を拾ってきて二階の天井裏の三角スペースに部屋を作った。

三角スペースは高いところで1メートル20センチくらいしかないから、ほとんどのところで背を伸ばすことができない低い空間であった。

僕たちの家は5人兄弟、7人家族が住んでいる家だから部屋が狭い。

僕のプライベートスペースは二段ベッドの上のベッドだけであつたから自分の部屋にはとても憧れがあつた。

次兄は僕と弟、そして次兄の部屋を其の三角スペースに作り、次兄の部屋は郵便局にした。

部屋といつてもたたみ半畳くらいで座るくらいのスペースしかないのだが僕たちは嬉しかった。

埃は凄かったけど、そんなこと僕らはちつとも気にならなかった。

次兄は天井裏に張り巡らせている電気配線から電気を取り電球をつけ三角スペースを明るくし、壁のトタンを切り、窓も作った。

僕たちの家はノジ板にトタンを貼ってあるだけなので、冬寒く、夏熱い家であつたし、屋根裏はそれが倍化され夏は蒸し風呂のようであつた。

次兄が自分の部屋を郵便局にしたのは切手売り出すためである。わら半紙に切手の形を書き、其の中にトサの絵を描いて5円切手を

発行するのである。

僕たちはその切手を買わされ、小遣いがなくなるということになる。

切手を貼って手紙を出すこともでき、ちゃんとポストもある。と言ったって、屋根裏の部屋間にしか郵便配達はないのだが。

だから1回しか郵便は出さなかった。

次兄は「記念切手と同じようにこの切手は将来値上がるから使わなくなっていくんだ」と言ってたくさん買わせようとしていた。

『見返り美人』に『ビードロを吹く娘』なんかは高くてコレクションにすることは絶対無理だし、第一次の国立公園シリーズも高くて無理、せいぜい二次の国立公園シリーズが宝物の僕と弟はトサシリーズの値上がりを願った。

僕たちは頻繁に天井裏の部屋に上がったので、一度、弟が片足を、屋根裏を渡してある桟から踏み外し天井に大きな穴を開けてしまった。

僕たちは紙を貼って何食わぬ顔をしてごまかし、数日は怒られるだろうとドキドキして過ごしたが不思議と何も言われなかった。

僕たちが小学生低学年のとき、次兄はよく湘南富岡に潮干狩りにもつれて行ってくれた。といっても僕たちは小学生以下の振りをして電車賃は払わないで行ったのでお金はかからない。

親から僕たちを連れて行くからお金をせしめ、それは全て次兄の懐に入るから弟思いで連れて行ってくれているわけではない。

一度デパートのレストランでラーメンを食べたくて、次兄がラーメンを一杯注文し、半分食べて、レストランの外にいた私を手招きし、僕が入ると（腰を落とし店の人に見つからないように入った）次兄は去り、僕が半分食べると今度は弟と代わりラーメン一杯を皆で食べたことがある。

とてもドキドキして食べたけど其のラーメンは凄く美味しかった。僕たちの親はどこにも連れて行ってくれたことはないので長兄や次兄が遊びに連れて行ってくれるだけであつた。だから両兄の影響

は
大
き
い。
。

キャンプが中止になった理由

長兄は僕に漫画と花札、ポーカー麻雀を教えてくれ、僕を遊び人に仕立てた張本人で、次兄は発想の違うやり方を教えてくれた。其の発想の違う例が夏休みの宿題で、次兄が中学生のとき岩石標本を夏休みの宿題で出し、かなりの評価を得たのである。

虫の標本、貝の標本は誰でもするが、岩石の標本なんて聞いたことがなかった。珍しい発想だから評価も大きかったのだと思う。だから、僕もいつか中学生になったら岩石標本を夏休みの宿題で提出しようと考えていた。

岩石標本のことを中学2年の夏休みに入ったとき加山に話したら「カワパン、俺、夏休みの宿題何も考えていないから岩石標本を俺がやっていいか、俺、今回はどうしてもいいものを提出したいんだ」と聞いてきた。

僕は3年になったらやろうと思っていたので「いいよ」と答えた。しばらくして加山から「カワパンキャンプ行けなくなった」と電話があった。理由を聞くと「岩石拾いに行くから」と言う。

「別に岩石拾いなんていつでもできるじゃあないか、何でキャンプの日に岩石拾いに行くんだ」と語気を強めて僕は言った。

「いや今年の夏は色々前から予定が決まっていて、もうそのときくらいしか自由な時間がないんだ。悪いなあ、みんなで楽しんできてくれよ」と言うのでそれ以上は説得をあきらめた。

加山が行けなくなり僕はキャンプが急につまらないように感じてしまっていた。

中学2年の1学期は石山とも仲良くなり始めた時期だけど、やっぱり加山が一番の親友だったから、加山のいないキャンプは行く気がなくなってしまったのである。

キャンプの三日前、小泉のところに皆が集まり最後の支度確認をする予定だったので、其のときにキャンプは止めにしようと提案し

ようと思った。

加山が行けなくなったからと言う理由だと皆が納得しないだろうから、父が子どもたちだけでは行っては駄目だと言ったから行けないと言おうと考えた。

当日、加山は用事があつて来れないと皆に言ったら皆はそれ以上の理由は聞いてこなかった。そして父が子どもだけでは駄目だと言ったら、細川と出川も同じことを言いだした。やつらもキャンプには行けないと言つつもりだったらしい。

石山だけはもう一度両親を説得しようと言案し、最後まで行こうと主張した。小泉はどっちでもいいよという態度だった。

それでもう一度両親を説得し、何とか行くよう頑張ろうということになった。

キャンプ前日に最後の決定をする事になったのだが、キャンプ前日は朝から嵐で夏の台風が関東を襲い、

明日のキャンプは天候的に無理となったので、両親の説得はもう問題ではなく、キャンプは中止となった。

中学1年のときの夏休みは加山の家にかなり遊びに行ったのだが、中学2年のときはまったく行かなかった。

キャンプに行かないと加山が言ったのも行かなかった理由の一つだが、何度か電話して「遊びに行つていいか」と聞いたとき、「今日はまずいよ」ということが2回あり、それ以上は電話もしなかったし、加山からの電話もなかった。

夏休みが終わり、夏休みの宿題に加山は岩石標本を提出し、それがクラスで一番評価を受け、市の展示会に出品されるところまで行った。

僕はキャンプに加山が行かないと言ったのはまだ許せたが、加山が僕のアイデア（本当は次兄のアイデアだが）で、市の展示会まで行ったのが癪に障っていた。

加山は中学2年生の夏から体つきも人との付き合いも大きく変わっていった。

身体なんていっぺんに一回りは大きくなった感じである。

元々大きいほうだったのに、そこから一回りだから完全に大人の体躯になっている。

夏休みが終わると加山は優等生グループと積極的に付き合うようになった。

僕は石山と付き合うようになったから必然的に劣等性グループとの付き合いが多くなる。

加山とは夏休み以降、付き合いがなくなったというわけではないが、何となくぎこちない付き合いになっていった。

中学3年になったとき一番の親友は石山で加山は本当のところは二番にも入っていなかった。

自分の本心を探れば加山を思う気持ちは強かったのだが、加山の方で僕を親友とは思っていないだろうなあと感じていたので、僕から加山に近づこうという行動は取らなかった。

僕は小学校の付き合いを考えればチンチンもフカヒレもホゾも友人だったし、中学1年の付き合いなら加山と小泉が友人であった。

でも今は石山だけが一番近い存在で、それは石山も同じで僕が一番近い存在であった。他の友人は他のグループにも友人を持っていた。だから何かをやるのにも僕と石山は常に一緒だったが他のメンバーは面白そうな企画なら乗るものもいれば乗らないものもある。

この夏に企画したキャンプは、僕と石山は主催者だから参加するのは当然であったが他のメンバーは流動的であった。そんな状況だから僕が加山を誘わなくても別に誰もおかしいとは思わなかったのである。

キャンプの行き先

修学旅行が終わるとクラスの関心事は夏休みの過ごし方だが、まだ二カ月先なので本気で計画を練る奴はいない。しかし僕と石山は夏休みにキャンプを計画しているので本気で計画を練っている。

一番の問題はどこに行くかだ。

そりゃあ北海道とか九州なら最高だろうが現実性がない。現実性のあるところといったら、富士五湖と箱根であろつ。

箱根は小学校の林間学校でも行つたし、長兄に何回か連れていってもらつたことがあるから、パス。だから、富士五湖が本命。

富士五湖といっても河口湖、山中湖、西湖、精進湖、本栖湖とあり、その全ての湖にキャンプ場はある。ところが僕達はキャンプも目的の一つだが、山登りが一番の目的であつた。

富士五湖で登山といえば、富士山である。しかし富士登山は僕達のイメージと違う。

「富士山のまわりにある山に登ろつ。そしたら富士山がきれいに見えて最高じゃん」と言う僕の意見で、富士山のまわりの山に登るのが第一本命と決まつたが、まだ決定ではない。夏休みは二カ月先にあるからまだまだ時間はある。

行き先の決定はもう少し後にすることにし、山登りの為の装備とかキャンプに必要な物の準備をすることにした。

その全ては登山地図に載っているの、それを見ながらチェックする。

一番の問題はどこに行くかなら、二番目は誰と行くかだ。

僕と石山、細井、出川は去年の流れから決定している。問題は小泉だ。

小泉も去年のメンバーだったが、委員長のことがあつたからキャンプには誘いたくないと、石山、細井、出川は思っているの、どうしようか悩んでいる。

小泉以外に誘いたい人間がいる。誘いたい人間といっても　さ
んというように、はつきりした人間ではない。はつきりした人間で
はないというのは何かというと女だ。とりあえず女なら誰でもいい
から誘いたいのである。

後藤や宮沢を誘えば最高だが、それは現実的ではない。現実的
に考えればやっぱり7組の女達だろう。

立花、水口、土屋のアイドルグループを誘い、オツケーしてくれ
たら最高だろう。坂部、杉山、三崎でもいいし、寺本、野口でもい
い。

計画に魅力があれば一緒にくる可能性はある。そのためにも誰も
が行きたがる計画を立てなければならぬのだ。

加山がライバル

季節は梅雨に入っている。憂うつな日が続くが、空さえ晴れば、僕達は運動場に出る。最近7組の男子達にはS字という遊びが流行っているためだ。

S字は地面に大きくSの字を白墨で書くが、白墨が無ければ、釘とか棒で書く。8の字なら（丸）が二つ上下に出来るが、S字だと二つだが、の端が消える。その消えたところから出入りしてゲームを始める。

二つのそれぞれ敵味方が入り、の奥に宝のマークをつけ、それをお互い相手のの中に攻め入り、足か手で触れば勝利となる。の中から出る時はケンケンして（片足を上げて歩く）進み、S字の外に四つのを書き、そこに入れば上げた足を着くことが出来るし、四つののうち二つは中立の、ここでは争ってはいけない、という遊びである。

僕達のS字は丸く作らず四角く作っている。そして、出入り口は一人が通れるほどの幅にしている。

僕は攻撃より守りの方が得意である。なぜなら、守りの陣地では守備側の人間は倒れても死んだことにならないが、攻撃側は相手の陣地で倒れると死んだことになる。

僕は足をからませ相手に抱きつきその倒れた力を使い相手を倒すのが得意だから、守りの方が得意なのである。

相手を殺すにはどうしたらいいかというと、今、説明した通り、自分の陣地で相手を倒すか、S字の外に出す。又は、S字の外でケンケンになっている奴を倒すか、片足以外のところを地面に着かせれば殺せることになる。

ルールは単純だが結構肉弾戦になって、面白い。

S字が始まるとまず10人以上男は集まる。集まると一番強い奴か、弱い奴を二人決め、そいつが自分のチームにしたい奴をお互い

順番に選んでいって、チームを二つに分ける。

一番強いのは文句無しに加山だ。加山だけには誰もかなわない。

加山が一人で攻めてきた時、最低3人いないと絶対に止めることは出来ない。

二人だと簡単に弾きとばしていく。一度僕は正面から加山を迎えた。足を絡ませて相手に抱きつき自ら倒れて、倒してやれ、といったもの通り上手くやったが、加山は抱きついた僕をそのまま抱きつかせたまま、一直線に宝に向かい、足で踏んで勝負を終わらせた。僕はまるで大木に止まっているセミであった。

だから加山を選ばなかったチームは、その時のナンバー2とナンバー3を無条件に手に入れることが出来るし、集まった人数が奇数だった場合一人多く取ることが出来る。

頭もよく、これだけ強い体躯を持っているのに、加山は7組で目立つ存在ではない。その証拠に学級委員になったことはない。いつも一番後ろのはじっこが加山の席の指定席になっている。

席係は大抵、石山がやるので「石山、俺の席、いつものところにしてな」といつも加山は石山に頼んでいる。

身長が180センチある加山に頭を下げて頼まれれば断る奴はいないし、石山もそうだ。だからいつも加山は教室で一番目立たない席に座る。

ホームルームの討論会でも自分から意見を言うことはなく、授業でも答がわかってもらえず手を上げない。なるべく自ら目立たないように学校生活を送っているのだ。

僕はそんな加山が好きであつたが中学2年生の夏休みから近づくとはしていない。でも加山のよさはよく分かっていた。

加山が今一番仲のよいのは、ホゾとフカヒレそれに前原になっていた。そして熊田も最近仲間に加わった。

フカヒレと熊田のケンカを加山が上手くまとめたから、そこから仲良くなつたらしい。

熊田は全ての面で加山には勝てないので加山の前ではおとなしく

しているし、あの凄い鼻息もさせないでいる。
そんな加山のグループが僕達のグループとライバルになった。

キャンプの予定

僕達は夏休みのキャンプ地を本命の富士五湖から東伊豆に変更した。女を誘うにはやっぱり海だろう、という単純な理由だ。湖と山より海と山の方が絶対、女達はのつてくると思った。

東伊豆なら今井浜にキャンプ場があり天城山系の万二郎岳なら山登りとしても面白そうである。

万二郎岳の頂上からちよつと下ったところにキャンプ場があるのも決め手となった。

初日は海でキャンプをする。昼間スイカ割りをしたり、ビーチボールで遊び、夜は花火をする。これは絶対楽しいだろう。次の日は万二郎岳に登り頂上を極めたら、そこから少し下り、高原のキャンプ場で二泊する。

一泊目は夜に着くから、一泊だと高原を味わえないため、高原では絶対二泊必要だ。

海で楽しく遊び、登山で山の喜びを知り、高原で疲れを癒す。これほど完璧な計画はないだろう。

僕達はこの完璧な計画をよりパーフェクトにするため、保護者を一緒に連れて行くことにした。昨年のキャンプが中止になったのは、台風がちょうどその時来たのもあったが、保護者がいなかったため、親が反対してだめになったことになっているからだ。最も、本当に保護者がいなくて泊りがけのキャンプを許すのは石山の家くらいなのだ。中学生だけの泊まりのキャンプは、まだ早いというのがこの家庭でも常識であった。実際、中学2年の夏休みのキャンプのときも親に反対はされていた。

「かわいい子には旅をさせろっていうじゃない」と言っても

「かわいい子じゃない」と言われたし、

「親に迷惑はかけない」と言っても

「行かなければ迷惑を掛けることは絶対ない」と言われてしまっ

たので、お手上げであつた。でも、どんなに反対されても行くつもりだったから、親の反対は僕には余り大きな問題ではなかった。でも、保護者を連れて行けば親ともめることもない。

今年は大人を一人連れていく。そうすれば参加者は安心して参加できるし、きっと女達も安心して参加するに違いない。

僕は親が反対しても絶対行くつもりでいたし石山も行くだろう。でも問題は女だ。女が行けるようにしなくては。

保護者のお願い

僕達にはアテがあった。それは今年から上原中学校に赴任してきた熱血教師の中山であった。中山は、本山と一緒に今年の四月から我が校に来た若い教師で生徒に絶大の人気を誇っていた。ユーモアがあり明るく兄貴的な中山は、僕と石山も大好きな先生で僕達と一緒にキャンプに行ってくれと頼めば絶対オッケーと言ってくれと確信出来る先生であった。

僕と石山が代表で職員室に行き頼みにいくことにした。職員室の引戸を引く時はいつも緊張する。僕達生徒にとって職員室は聖域で気楽に入れる場所ではない。ちなみに校長室は神様の部屋ぐらいに思えるから覗くだけでもいけない場所だと思っている。

教室では騒ぎまくっている僕と石山だが職員室に入ったとたん神妙になる。中山がタバコを吸って椅子に座っている。僕達は真っ直ぐ中山のもとに歩いていった。手にはキャンプ計画書が握られている。

「中山先生」僕が声を掛けると「おつ、どうした」とさわやかに声を掛けてくれた。

「あの、僕達夏休みにキャンプを計画しているんですけど、先生と一緒にいってももらえないかと頼みにきたのです」出来るだけ丁寧に僕は喋った。

「夏休み、キャンプ、ダメダメ」

中山の返事は早かった。僕のお願いを聞いてから一秒も考えていない。

「そこを何とかならないですか」

今度は冗談ぽくお願いする。中山先生ならこういう言い方の方が逆に真剣に考えてくれるのではないかと頼み方をすぐ変更した。

「ダメダメ、じゃあな」

返事も答え方も一緒であった。考えてもくれなかった。

あの熱血先生が、生徒のことをとても大事に考えていると思っていた先生の返事が信じられず、僕と石山はそこに立ち尽くしている。きつと、この後5秒後に「な〜んちゃって、うそうそ」と笑いながら言つて「川上、手に持つているのは計画書か、よし、ちよつと見せてくれ。なにに伊豆か、う〜ん、いいなあ。いい計画書だ。よし、先生も一緒に行くぞ」と言うに違いない、と思つたが「用事はそれだけか？ それじゃあ帰りなさい」と言われてしまった。

「中山先生、伊豆の山を登るんです。登山は好きじゃないんですか？」

僕は必死に声を出した。その声は職員室全体に響いた。

「だから、ダメだと言つただろう。もう、ダメはダメ」

全く考えてくれなかった。断るにしてもじっくり考え、スケジュールを確認して欲しかった。

がつくり肩を落しながら、僕と石山は職員室をトボトボ歩き、出ようとした瞬間、英語の国吉先生が「本山先生、登山好きみたいだから頼んでみたら」と言ってくれた。

本山、あんな暗い奴やだよ。僕と石山の思いは同じであつた。

しかし、保護者は必要だ。中山はあんな断り方をしたのだから、本山に頼みにいったらどんなひどい断り方をされるだろうと考えると、保護者は必要だけど頼みにいくのは嫌であつた。

『なんで先生が、川上や石山とキャンプに行かなくちゃならないんだ』と断られるか、一言『嫌だ』で終わらせられるかも知れない。でも、行くしかない。

計画書

授業が全て終わった後、僕と石山は再び職員室へ。

僕は付添いの大人がいなくても行けるよう親にどう頼むか、午後の授業ですつと考えていた。あの暗くて意地悪そうな本山が僕達の頼みを聞いてくれる訳ない。

職員室の引戸を引くと正面が中山の席でその右奥が本山の席である。昼休みに中山を訪ねた時、本山はいなかったが、今は逆に本山はいるが中山はいない。

「あのー、本山先生」

「おつ、なんだ、川上か」

本山はびつくりした顔を僕に見せた。

上原中学校に赴任してから誰一人本山を訪ねる生徒はいないはずで、生徒が職員室に自分を訪ねてくるなんて考えられなくてびつくりしたのだと思う。

「あのー、僕達、夏休みに登山をしようと思うのですが、本山先生も一緒に行ってもらえませんか？」僕はやっぱり丁寧に聞いた。

「登山か、どこ登るんだ」

「伊豆の万二郎岳です」

「伊豆というと天城か…いいよ、行っても」

「本当ですか？夏休み入ったらすぐなんですけど。これが計画書なんです」

「へー、計画書まで作ったんだ。見せてくれるか」

僕は右手に持っていた中山に見せようと思っていた計画書を、本山に見せた。

予算…四千円（これは毎月銀行に積み立てたお金を使う）

お小遣い…基本的に自由

お菓子…リュックに入るのが基本。リュックに入らないお菓子は持

つてこない。

米…一人八合

飯ごう…石山、川上、細井担当

鍋…川上担当

水筒…各自持参

地図…石山担当

テント…みんなで考える

寝袋…各自持参

水着…各自持参

ビーチボール…細井担当

トランプ…川上担当

ランプ…細井担当

缶切り…出川担当

梅干し…細井担当

コンパス、望遠鏡、食器、新聞紙、雨具、歯ブラシ、歯磨き、石鹸、

タオル等は

…各自持参

買う物…割りばし、花火、蚊取り線香、マッチ、スイカ、玉ネギ、

ジャガイモ、

人参、カレー粉、缶詰

【予定】昭和四十四年七月二十二日（火曜日）出発

七月二十二日

朝六時…元住吉集合

十時半…今井浜到着

十二時…各自持参の弁当を食べる

十二時半…スイカ割りをしてそれをデザートにする

三時…おやつ各自が持ってきたお菓子と残ったスイカを食べる

四時…夕食作り 食事係 川上、石山（カレーを作る）

まき集め火を炊く係 細井、出川

六時…夕食ミカンの缶詰を開ける

七時…後片付け係 細井、出川

八時…花火

九時…消灯

七月二十三日（水曜日）

朝六時…起床顔を洗う歯を磨く

六時半…朝飯作り、昼のおにぎりも作る

食事係 出川細井

ご飯を炊いてみそ汁を作る、おかずサンマのかばやきの缶詰

七時半…食事

八時後…片付け係 石山、川上、出川、細井はテントをたたむ

八時…今井浜出発

八時半…伊豆急に乗る

九時…到着

十二時…景色の良いところで朝作ったおにぎりを食べる

四時…万二郎岳頂上

五時…キャンプ場 細井、出川テント係 川上、石山食事係

七時…夕食おかずは豚汁、ももの缶詰を開ける。肉は缶詰の肉を使

う

八時…後片付け係 出川、細井

八時半…キャンプファイヤー

十時…消灯

七月二十四日（木曜日）

朝七時…起床顔を洗う、歯を磨く

七時半…朝飯作り 食事係 出川、細井 ご飯を炊いて（昼のも炊

く）、

みそ

汁を作る（昼のために多めに作る）、おかずサバのみそ煮の缶詰

八時半…朝食

九時…後片付け係 石山、川上

九時半…キャンプ場のまわりで遊ぶ

十二時…朝作ったのもので昼食 おかずクジラの缶詰

十二時半…後片付け係 細井、出川

一時…キャンプ場のまわりで遊ぶ遊びはキャンプ場に行ったら決める

四時…夕食作り 担当全員

六時…夕食 おかずは残った缶詰全部（イワシの缶詰は残す）

八時…後片付け係 石山、川上

九時…告白大会か、恐い話大会

十時…消灯

七月二十五日（金曜日）

六時…起床顔を洗う、歯を磨く

六時半…朝飯作り 食事係 出川、細井

七時半…食事

八時…後片付け係 石山、川上 出川、細井はテントをたたむ

九時…出発

本山は計画書を見ながら「毎月銀行にお金を積み立てていたのか、修学旅行みたいだな」と、笑いながら、僕に言った。

小泉もキャンプに参加

本山は笑うとメガネの奥の目が優しくそうに見えた。

確かに積立金は修学旅行も毎月お金を茶色の封筒に入れ、学校に持っていったので、それを真似たのである。

「テントは大学に頼めば貸してくれるかも知れないなあ」

「本当ですか、凄い」

テントは悩みの種だった。小さな四人用のテントはあるが四人用のテントといっても二人で寝るともういっぱい、4人寝ると荷物の置場も無くなるのだ。だから二人用のテントも持っていこうと話合っていたのだが、大きなテントが手に入れば一つで済むからキャンプが一段と楽しくなる。

本山は楽しそうに計画書を隅々まで見て「楽しみだな」と、優しく言った。

いつも優しく本山は僕達生徒に語りかけていたのかも知れないが、僕達には気難しそうに言っているように聞こえ、声を聞くのもイヤだったのが、本山の見方を変えると、その言葉が違って聞こえてくるのがおかしかった。

僕は本山に心の奥では感謝しているのだけど、職員室を出て石山にすぐ言った言葉は、「本山も俺達がキャンプに連れてってあげるんだから嬉しいだろう」と、おふざけの言葉であった。そして、石山も「あいつ、ラッキーだよな。夏休みキャンプに行けて」僕と同じようにおふざけの言葉を言った。

二人とも本山に感謝しているが、素直に感謝する性格ならクラスのお茶かけペアなんて言われやしない。

教室に戻り、細井と出川に報告するとこの二人は素直に喜んだ。

「よ、よかったよ。や、やっぱり、ほ、保護者がいないと、お、親が許さないからな」

「ふざけんじゃねえよ。本当にこれでキャンプに行くことになっ

ちゃったじゃんか」

しかし、素直に喜んだのはキャンプに行けるということで、本山に感謝は全くしていないようであった。

「保護者が一緒に行けるとなると、女も行く気になるな」

僕が教室で大声を出した。

教室内は掃除をしている班の人間が多少残っていただけで5〜6人しかいなかったから、大声を出すのに気を使う必要がなかったからだ。ところが残っていた5〜6人の中に小泉がいた。

小泉は僕の声を聞くと近くに寄ってきて、「カワパン、夏休みキャンプに行くのか？」と、訊いて来た。小泉は去年キャンプに行こうとしたメンバーの一人である。

「保護者って誰だ」

「本山だよ」

「何だよ、本山かよ。でも、本山が行くなら、確かに保護者同伴になるから、女も行くかもな」

小泉も去年のキャンプで保護者がいないと親が反対することはよく知っていた。

「まあな」

僕が得意そうに返事をする、すかさず小泉は「俺も行くよ、いいだろ、カワパン。去年は俺も行く予定だったんだから」と、言ってきた。

僕達がキャンプに行くことはクラスのみんなに内緒にはしていない。むしろ、積極的に言ってきた。小泉だって当然知っていたが、今まで一緒に連れてってくれなんて、頼んでこなかったのに、いきなり僕達の仲間になりたいと言ってきたのだ。きっと保護者同伴となると、女が行くと思ったから自分も参加したいと思ったのだろう。

「どうする、石山」

僕一人で決められることではないので、石山の顔を見た。

「俺は別にどっちでもいいけど、細井と出川は」

「お、おれは、い、いいよ。」と、細井。

「小泉かよ、ふざけんじゃねえよ、お前お金あるのかよ」
いいとこ突く出川。

「あるよ、お年玉がまだ残ってるよ」

小泉のその答えが、小泉もキャンプの仲間になることの決定を意味していた。

「おい、女は誰誘うんだ？」

小泉が嬉しそうに言う。

「まず、寺本と野口だろ」

僕の答えを聞いて、明らかに嫌な顔をする小泉。

「もっと、明るい奴を誘おうぜ。そうじゃなくちゃ楽しくないじゃん」

「じゃあ小泉、誰がいいんだよ」

小泉の誘いたい女はみんなが知っているが、みんなあえてその名を言わない。

「そんなのわかってるじゃん、なあ、カワパン」

「じゃあ、小泉が誘えよ」

「俺が？ 俺って、ほら、シャイじゃん。だから無理だよ」

「お前、立花と上手くいったんじゃないのか。上手くいったなら、誘うなんて簡単じゃんかよ」

僕が立花の名前をだすと、事情を知らない石山達3人は驚いた顔をした。

委員長のことがあったから、僕以外の3人は小泉とほとんど付き合っていない。だから、小泉の情報は何も知らない。あれから初めて知った小泉の情報が、立花とうまくやっている、じゃあ驚くはずだ。

「それがよ、立花の奴、最近冷たいんだよ」

「ふられたのか？」

「いや、ふられたとかそういうんじゃないよ。立花ってほら、八方美人じゃん。あちこちにいい顔するから、俺のことちゃんと考えてくれないんだ」

淫売より八方美人の方がましたが、好きな女の子に使う言葉じゃない。

「じゃあ、小泉が立花を誘えば、ちゃんと話せて、上手くいくじゃないか」

「それは、ほら、俺のプライドもあるし、カワパンがそこは上手くな、頼むよ」

これ以上話しても堂々巡りなので「わかった、わかった。誰が誰を誘つか後で決めよう。でも言い出しつぺは俺だから、俺がまず立花を誘う。でも失敗したら、次はこの内の誰かが女を誘えよ」と、僕は強く言った。

「俺はやだよ」と出川が言うと、その言い方に腹が立ち「ふざけんじゃないよ。全員平等に女を誘おうぜ。みんな一回は誘うことにしようぜ」と、決めつけて言った。

「そうだな、カワパンの言う通りだよ。それじゃ順番をジャンケンで決めようぜ」

小泉はそう言う手振りかざし「ジャンケン」と、ゆっくり言い出した。

結局、ジャンケンで順番を決め、明日は女を誘うことをみんなで確認し合い、その日は解散した。

立花を誘う

夏休みまであと2週間で、期末テストはすぐそばにきていた。

3年生になると受験がどうしても生徒にプレッシャーを与え、1学期の期末試験は大事な試験なのだが、僕達にはキャンプの方が表向き大事であつた。

僕は受験勉強が重要で大事なことだと、よくわかっていたが、どうも受験勉強が基本的に出来る体質ではないらしい。毎日、家に帰ると教科書を出し、一日3時間勉強すると目標を立てるのだが5分もすると、頭の中は勉強とは違うことを考え、気が付くとマンガを見ているかテレビを見ていつも寝る時、自己嫌悪に堕ちている。

明日の朝早く起きて勉強しよう。『人間、朝起きてすぐ勉強するのが一番頭に入るといふしな』と寝る時、明日の朝こそは勉強するぞと誓うのだが、その誓いを守ったことはない。

勉強が出来ないモヤモヤとキャンプに行く楽しみがごちゃごちゃに混じりあいながら7月を過ごし、今はそれプラスどうやって立花を誘うか、と言う事も頭の中に入ってきたので、頭の中はめっちゃくちゃになる筈なのにどういふ訳か『コント55号の裏番組をぶっ飛ばせ』を見て笑っている。まあ、面倒くさいことは明日考えよう。

家での暮らしは学校で何があってもいつも同じだ。情けなく自己嫌悪にしょっちゅう堕ちているが、大事なテレビとマンガは必ず見る。

我が7組のアイドル立花はクラスの中でも気楽に声を掛けられる女の一人だ。しかし、キャンプに誘うとなると気楽に声は掛けられない。別にデートに誘う訳ではないのだが、女の子を遊びに誘うのはやはりドキドキしてしまう。

「立花、夏休みキャンプに行くんだけど、行かない？」と声を掛けたのは、昼食が終わった昼休みであつた。

「キャンプ、どこ行くの？」

「伊豆の海。伊豆の海は凄くきれいだぞ」

僕は神奈川に住んでいる。だから海といえば、湘南の海である。湘南の海は波が高くて、海水は汚く、とても良い海水浴場とはいえない。しかし、日帰りで行けるのは、湘南の海なので、夏休み海水浴と言えば、湘南の海に行くことが多い。

僕達があこがれる海水浴場は伊豆と千葉の海水浴場で、その海水浴場に行った生徒は、その海がきれいだったことをみんなに自慢する。だから女の子に伊豆の海に行こうと誘うのは結構有効なのであった。

「伊豆の海」伊豆と聞いて明らかに立花の目は輝いた。

「誰が行くの？」

「えーと、俺じゃん、石山に細井と出川、それに小泉と本山先生」小泉と聞いて立花は複雑な顔を見せるが、口では「本山先生が行くんだ」と、言い「カワパン達がキャンプに行くというのは知っていたけど、伊豆に行くのか、いつ行くの？」と、訊いて来た。

「7月22日から7月25日まで」

「えー、泊りなの、日帰りじゃないんだ」

「そりゃあそうさ、キャンプだもの」

「伊豆の海でずっとキャンプするの？」

「いや、そのあとは山に登り、高原でキャンプ」

「そうなんだ、泊まるんだあ」

泊まりだとだめだと立花は言いそうになったので、「いや、泊まるのが無理なら、日帰りでもいいんじゃないか、10時半には伊豆の海に着くから」と、慌てて言った。

「10時半に着くの、うーん、女の子は誰が行くの？」

「それは今日初めて立花を誘ったんだから、まだ決まってるない」

「そうなのか、水口さんとかツンツンが行くと言えば私も行ってもいいかな」

ツンツンとはアイドルグループの一人、土屋のことで、女の子同士だとそのあだ名で呼ぶ。

「じゃあさ、水口と土屋と相談してよ。伊豆の海を強調してな」

「わかった」と、立花はいつものニコニコ顔を僕に見せた。結構いい感触だ。泊まりは無理でも日帰りなら行くかもしれない。

立花、水口、土屋が一緒に行くとすると、これは最高のキャンプになるぞと僕は思い、キャンプに行く仲間に話したら、みんな同じ気持ちなんだろう、嬉しそうな顔をした。

次の日、立花から返事を聞けるかなとワクワクしながら教室に入ったら、教室内は興奮した騒がしさで包まれていた。

加山がライバル

「カワパン、加山達も夏休み、伊豆に行くらしいぞ」

僕より早く来ていた石山がすっ飛んできて興奮した顔を見せた。

「ふ〜ん、そうなんだ」

去年のキャンプを思い出し、ちょっと怒りが出たが、「別に加山達も伊豆に行ってもいいじゃないか」と、僕は冷静に返事をした。

「加山のおじさんが伊豆の白浜に別荘を持っていて、そこに泊まるらしいんだけど、友達も呼んでいいということになったんで、今みんな大騒ぎしているんだよ」

「え〜」と、僕は声を上げたが、まだ状況を把握していなかった。「それで当然フカヒレやホゾ、前原に熊田も行くっていうことになつて、今、女達も誘っているみたいなんだ」

「おもしろそうだな。俺達も連れてってくれって言おうか？」

「ばか、カワパン、何言ってるんだよ。あいつら行くのは7月22日なんだぜ」

「7月22日・・・俺達と一緒にじゃないか」

「そうだよ、俺達と一緒にの日に行くらしいんだ。白浜までの電車代さえあれば、後は食事もみんな加山のおじさんが出してくれるらしいぜ」

「いいなあ」

「そうだろ、誰だって行きたくないし、女達なんかもう大騒ぎだよ」

「でも当然行ける人数は決まってるんだろ」

「10人ぐらいだつて、さっきフカヒレが言ってたよ」

「もう、決まってるのか？」

「だからさっき言ったじゃん。フカヒレにホゾ、前原に熊田は行くつて。それに女達も誘ってるつて、きっと神埼に水口、立花、土屋を誘う筈だぞ」

「立花は昨日、俺が誘っていい感じだったぞ」

「俺等のキャンプと、加山のおじさんの別荘じゃ、勝負にならないよ」

それはそうだと僕も思った。まさかこんな形で加山が僕達のライバルになるなんて思ってもみなかった。

その日はずっと教室内に熱気を感じていた。

昼休み、小泉が俺のところに飛んできた。

「カワパン、聞いたか、加山の別荘のこと」

「加山じゃないよ。加山のおじさんのだよ」

「そんなことどうでもいいんだよ。俺が知ったのは2時間目の時点でさ、さっき加山のところに俺も連れてってくれて頼んだら、もう人数が決まっちゃったって言うんだよ」

「小泉、加山達が行くのは7月22日だぜ」

「だから」

「7月22日は俺達もキャンプに行く日じゃないか」

「ああ、そうだったな」小泉は軽く言った。

「お前、俺達を裏切って、加山達の方に行こうとしたのか？」

「カワパン、人聞きの悪いこと言うなよ。行く日にちまで考えていなかっただけじゃないか。同じ日だとわかっていたら、加山に頼みになんか行かないに決まってるじゃないか」

小泉はそう言ったが、怪しいものだと思った。

加山がオツケーと言っていたら、小泉はこの場で僕にキャンプに行けなくなっただって言うに違いない。

僕は何だかメラメラと加山に対してライバル心が出てきて、そのまま小泉を置いて我が7組のアイドル立花のところに行き、「どう、水口達と相談した？」と、努めて明るい顔で聞いた。

「それが、カワパン。加山君がさ、水口さんに伊豆の別荘に行かないかって、さっき訊いて来たのよ」

「それで当然断ったんだろ」

「何、言ってるのよ、カワパン。伊豆の別荘よ。加山君のおじさ

んって、すつごく金持ちだから、すつごくステキな別荘らしいのよ。
それを断る訳ないじゃん」

立花はすつごくを強調し2回も嬉しそうに言った。

「じゃあ、加山達と行くのか？」

「それは親に聞いてみないと。親がいいと言ったら、行きたいに
決まってるじゃん」

「俺達のキャンプは、花火大会やスイカ割りをやって、楽しいぞ」
僕は精一杯の抵抗をした。

「もうカワパン、子供なんだから。加山君のところはバーベキュー
よ」

バーベキューという言葉に、大人と金持ちという言葉が詰まっ
ていて、僕はとても太刀打ち出来ないことを、立花の顔を見て悟った。

寺本への誘い

午後の授業は、立花達の幸せそうな顔と、それを見て羨ましそうな顔をする女の子や、妬ましそうな顔をする女が、入り混じって授業を受けている。神田先生は不思議な顔をしていた。

放課後、キャンプに行く仲間が集まって作戦会議をした。

「どうする？ カワパン。キャンプやめるか」

「小泉何言つてんだよ。女と遊びに行くことが目的じゃなくて、キャンプに行くのが目的なんだぞ」

「だって、女がいないんじゃないかよ」

「確かにそれはそうだけど。別に立花達じゃなくなたっていいじゃないか」

「そりゃあ、そうだ」僕の言葉に石山が賛同すると、

「そ、そうだよ。ほ、ほかの女でもいいぜ」と、細井も賛同する。
「じゃあ、立花達はだめになったから。昨日決めた順番で女達を誘うっていうことにするか」

僕の意見に、小泉はしぶしぶ納得し、他のメンバーも最初の取り決めだからと言って賛成した。

その日の放課後。

「だ、だめだ」細井。

「ふざけんじゃねえよ、カワパン」出川。

「俺は精一杯やったぜ」小泉。

「頑張りました」ニコニコ顔の石山。

全員女を誘うのは失敗した。

「しょうがねえなあ、もう全員女は誘ったのか」

「カワパンのために、寺本と野口は残してる」

「石山が誘えばいいじゃんか」

「順番はカワパンだろ」

来週から期末テストである。テストが始まればみんな浮かれた気

分はなくなり、テストに集中する。それは小泉、細井、出川も同じだった。ただ石山は、テストなんてどうだっていいと考えているのか、真剣にテストのことを考えているのを見たことがない。

石山は別にして、皆テストで頭が一杯になるから、来週になれば、キャンプの話は一時凍結になる。メンバーの最終決定はあと二日しかないのだ。

次の日、最後の望みとして寺本に話しかけた。

寺本の親がキャンプの費用を出してくれるとは僕には到底思えなかった。寺本がキャンプに行く気になればみんなでお金を出し合い寺本の分を出してもいいと考えていたが、どうやってみんなにそのことを言おうか、悩みどころである。

「寺本、夏休みの始めにキャンプに行くんだけど、行かないか？」

「キャンプ…誰が行くの？」

「俺と小泉、石山、細井、出川、それに本山」

「本山先生も行くんだ。じゃあ、安心だ」

「本山が一緒の方が不安だよ。でもあいつも行きたいって言うから仕方がないんだ。何とかみんなに迷惑を掛けないといいんだけどさ」

「何、言ってるのよ」と言って寺本は笑ったが、「私は無理だな」と結論の言葉を最初に言った。

「どうしてさ」

「ほら、うち弟と妹の世話、私がしないとだめじゃん。だから、遊びになんて行けないよ」

「でも、三、四日なら、なんとかなるんじゃないのか。せつかくの夏休みになんにも遊べないなんてつまないじゃん。親だって頼めば、わかってくれるよ。お金だって全然かかんないしさ」

「カワパン、いつもそういうの気にしてくれるね。ありがたいけど、結構苦しいよ。人にはさ、それぞれの幸せがあるんだよ。カワパンからすればキャンプが幸せかも知れないけど、私には弟と妹を世話するのが幸せなんだ。人には与えられた環境で、どういう風に

幸せを探すか、という勉強もあるんだよ」

「それは、わかるけど、キャンプ行ってみなければわからないじゃない」

僕はちつとも寺本が言っていることがわからなかった。ただ、寺本が凄く大人の言葉を言っているという感じがして、それは僕がどう頑張っても勝てないな、とわかっていた。

「それはそうだ…でも、私は私で夏休みちゃんとやるから。カワパンはカワパンで夏休みちゃんと楽しんで。カワパン、私の知っている限りでは、一番優しいけど」

寺本はそこで喋るのをやめてしまった。僕はそれ以上言うとは寺本が泣くのではないかと感じ、「わかった、諦める、じゃあな」と、言って寺本のそばを離れた。すると寺本が「カワパン、親友だよ」と笑いながら言ったので「おー」と僕も手を上げ、そうだよ、というポーズをした。

出発

期末テストが終わると、加山が僕に話しかけてきた。

「カワパン達も伊豆に行くんだろ。白浜に来ないか」

僕達が行く今井浜のキャンプ場と白浜は、近い所にあつたので、

加山は誘ってきたのだろう。

「いや、俺達は俺達で結構忙しいから白浜まで行けないよ」

ちよつと悔しい気持ちが僕にそう返事をさせた。

本当は白浜に行きたい。そして、女の子達と一緒に遊びたい。ク
ラスのアイドルグループ立花、水口、土屋と神埼が、加山達と一緒に
行くということは小泉から聞いている。

「そうか、せっかく同じ伊豆に行くのにな、俺、カワパンとちよ
つと話したいことあつたんだ。カワパン達、今井浜だろ。カワパン
が来られないなら、俺がカワパン達の所、遊びに行つていいか？」

「別にいいよ」

断る理由はない。それに女達を連れて来てくれるかも知れない、
というスケベな気持ちも働いてそう返事した。

「良かった。きつと7月22日の夜行くからさ、待つてくれよ」

「夜ならきつと花火大会をやつてるよ」

花火大会と言つとけば絶対女達が来るだろうと僕は考えた。

『女達が来るかも知れない』僕は一人興奮してすぐ石山や小泉に
言おうかと思つたが、当日驚かしてやろうと思つて、黙っている事
にした。

梅雨が終わり、空はこれ以上ないという青空を見せている。

昨日は早くから寢床に入つたが、興奮しているためなかなか寢
付けず、5時半にセツトした目覚まし時計が鳴るのを今か今かと待
っていた。

家から元住吉の駅まで歩いて15分、朝起きて顔を洗い、服を着
替えるのが10分、5分はゆとりの時間として、6時に元住吉に行

くのは、5時半に起きればいい。

支度は全て昨日のうちに済ませておいた。朝飯は食べている時間が無いので、昼のと合わせ5時半までにはお母ちゃんがおにぎりを作ってくれる約束だ。

全て問題なく進んだが、一つだけ誤算があった。リュックが異常に重いのだ。缶詰は小泉に、リュックは細井の係として渡したから、僕のリュックは彼等から比べれば軽い筈なのに、異常に重い。

家から数10メートルも歩けば、もう肩が痛くてリュックを降ろしたくなる。こんな誤算のため15分で着くところが25分かかってしまったが、起きてから家を出るのに5分とかからなかったので、予定の6時には無事着くことが出来た。

朝は涼しい風が吹く。昼間の暑さから比べれば、天国だ。

まだ6時だというのに空は真つ青。僕が数分前に駅前の待ちあわせ場所に着いた時、小泉を除いたメンバーはみんな集まっていた。

本山は綱島の駅で合流する。綱島の駅の近くで住んでいるらしい。「小泉、遅いなあ」僕達がイライラし始めた頃、線路沿いの車一台通れるぐらいの道を走りながら、小泉が来た。

走るといつても重いリュックを担いでるので、ほんのちよつと歩くのより早い程度だ。

「よしちゃんが、もう朝ごはん食べてけってうるさくて、食べてたら、遅くなっちゃたよ」

「小泉、言い訳はいいよ。早く電車に乗らないと間に合わないぞ」小泉にみんな文句を言いたかったが、そんな時間はない。

朝六時だというのに東横線の電車の中はまあまあ人が乗っている。日吉を過ぎると、次は綱島だ。

僕は本山を見失うまいと一生懸命窓の外を見ているが、小泉は、細井を相手に、「明日のためのそのいちだ」と言っ、右手を細井の左手に向かい叩いている。少年マガジンで連載されている『明日のジョー』は僕達の間で凄い人気になりマンガを真似するのが流行っている。

僕はちばてつやの描いたマンガは『ハリスのかぜ』の方が好きだったが、それはもう連載していないので、今は少年ジャンプの『男一匹ガキ大将』が好きであつた。もちろん明日のジョーも嫌いではない。

「おい、ちゃんとみんな窓の外を見てろよ。もう駅に着くぞ」と僕が怒鳴ると、「いいよ、本山なんか、置いてっちゃおうぜ」と小泉が相変わらず細井の左手を叩きながら言う。

「ばか、言ってるなよ、もうやめろよ」

電車は綱島のホームに入っていく。本山の姿はすぐ見つかった。

「おはよう」

口数の少ないこの先生は余計なことは言わない。普通の先生なら『朝飯食べてきたか』ぐらいは言いそうだが、かろうじて朝の挨拶だけである。

僕達もそんな本山の性格はよくわかっているので本山が何も話してこなくても気にしない。

アポロ11号

「あ、あれ見たか、い、石山」

本山も合流して全員揃ったからとりあえず、余計な注意をしなくてもよくなった時、細井は言いたくて言いたくて仕方がなかったことを話題にしようとした。

『あれ』でそれが何を意味するか今日なら世界中の人がわかる話題である。

「おー、見た見た。凄かったな。エルサルバドルとホンジュラスのサッカーの試合がそのまま戦争になったやつだろう」

石山の『あれ』の答えに何が何だかわからない顔をする細井。

「な、なんだよ、え、えのさるとほ、ほんぎゃあつて」

「何だよ、全く細井は無知だなあ。あんなに大騒ぎになったのに、たかがサッカーで」

「お、おれが、い、いいたいのは、ア、アポロだよ」

「あー、そっちの方が」

石山は明らかに細井をからかっている。

今日、絶対話題になると言えば月面着陸のアポロ11号である。

昨日の午前十一時五十六分にアポロ11号は月に着陸し、その模様をテレビが延々と映していたので、僕も延々とテレビを見ていた。

「ガー、こちらヒューストン、ガー、こちらヒューストン、ガー」

同時通訳は日本語でアポロの乗組員とNASA管制室の言葉をテレビで流してくれたのでとても臨場感があり、何時間もテレビの前を離れられなかった。

今日の新聞はこれが第一面だが三面記事の小さなニュースにサッカーで戦争という記事が載っており、石山は目ざとくそれを見つけたのであった。

「私にとっては小さな一歩だが、人類にとっては大きな一歩だ」と僕は言い、吊り輪にぶら下がり月面を歩くまねをした。

横浜駅にはいつの間にか着いていた。話に夢中になり本山が「降りるぞ」と言わなければ終点の桜本町まで行っていたかもしれない。横浜から東海道本線で熱海まで車内は四人が向かい合わせに座れるボックス席だから、嬉しくなってしまう。朝ご飯のおにぎりも食べられるし、トランプも出来る。

昨日はなかなか眠れず今朝も早く起きたけれど僕は元気に騒いでいたが、本山は目をつぶり眠っているようだった。

今井浜海岸の駅に着くとすぐ店が目につく。お土産を主に売っているがジュースも売っている。

「俺、サイダー」

「俺も」

「俺も」とみんながサイダーに手を伸ばす。まだ時計は十時だが太陽はギラつき汗がにじみ出てくるため、水分が欲しくなるのだ。夏は甘ったるいジュースより、やぱりすっきりとしたサイダーを飲むと気持ちが良い。

僕がサイダーを口につけると石山は駅前にある蛇口を開くと噴水のように水が上にでる水を飲んでいいる。相変わらず買い食いはいしな

い。
「おい、海に着くまでに八百屋を探せよ。スイカ買ったから」
みんなに聞こえるように僕は大きな声を出した。

大きな声を出したのは自分に力ツを入れるためでもあった。何しろリュックが重いのだ。少しでも気を抜いたら背中から倒れそうになる。こんな重いリュックを担いで山に登れるのだろうか？

八百屋は海水浴場に隣接しているキャンプ場から歩いて5分もかからないところにあつたので、本山が、「スイカは先生がおごつてやる。みんなはキャンプの用意をしていなさい。八百屋が開く時間に先生が買って行くから」と言ったから、本山に何の期待もしていなかった僕達は大喜びである。

今井浜でキャンプ

砂地にテントを張るのは難しい。

下地が砂のため鉄杭が簡単に入ってしまい、テントを支える役目をしないからだ。

キャンプ場は砂浜から少しはずれた所にあるが、地面に砂は多い。おまけに出川や細井はテントを張るのは初めてで何の役にも立たない。

「おまえら、テントはいいから薪でも集めてろよ」

「薪ってどこにあるんだ」

「周りを見てみるよ、あちこちに木なんか転がってるじゃないか」
テント張りに何の役にも立たない出川と細井に焚き火のための木を集めると言っても彼らはキャンプ自体初めてなので、何をどうしていいのかわからず、砂浜に打ち上げられているたくさんの枯れ木も目に入っていないみたいだ。

「あれが薪なの、あれ燃えるのか」全く出川は使えない。

「出川、物は何でも店屋で売っていると思ってるんじゃないのか」

「何だよ、ふざけんじゃねえよ。そんなことないぜ」と出川は言ったが、あいつはそう思っていたに違いない。だから薪を集めると僕が言った時、それはどこに売っているのか僕に訊きたかったのだ。薪がもしどこかに売っているとしても、それは「俺に訊くんじゃなくて自分で探せよ」と僕は出川のすぐ人に頼る態度に腹を立て石山にブツブツ言いながらテントを張っていた。

「お湯わかしてお茶作るだろ」と小泉が言ったので「そうだな、小泉、水汲んで来てくれよ。俺、テントを張り終わったら火をおこすのを作っておくから」と答えた。火をおこすのを作るとは竈を作るということだ。

キャンプ場の周りには人間の頭くらいの石がごろごろあるので、それで周りを囲み、鉄の棒が火の上に掛かるように小枝をYとして

鉄の棒がかかるように作る。

鉄の棒も探せば結構見つかるものだし、それを支える丁度いい木の枝もキャンプ場の中や周囲には転がっている。

僕が小学校の頃、よく家の前の道路の端っこで古木やゴミを燃やしたものだっただ、最近は何で火をおこすということはほとんどない。焚き火をした後はサツマイモを入れ焼きイモを作るがここ数年はその焼きイモも食べた記憶がない。

キャンプでは焚き火でご飯も焚くし、おかずも作る。そして最後は焼きイモだ。ただ焚き火をするだけでも楽しいのに火が消えた後でも楽しむことが出来る。

鼻歌まじりで竈を作っていると本山が大きなスイカを持ってきた。昼食は家から持ってきたおにぎりにお茶だけだが、楽しい食事に文句を言うやつはいない。

「今ごろ加山達は別荘に着いたかな」

せっかく楽しい気分だったのに、小泉が余計なことを言う。誰だってテントを張ったキャンプより金持ちの別荘の方がいいに決まっている。それにクラスのアイドル達が一緒ならそこは天国だろう。なるべくそのことは思わないでいたのに。

「なあ、飯食ったら加山の別荘に遊びに行こうか」

小泉の提案にグラツときたが、夜に加山が女の子達を連れて遊びに来ると言っていたから、こっちから行く必要はない。

女の子達を連れてくるとは言っていないがきつと連れてくるだろう。しかしそれは驚かすためにみんなには言っていないから小泉みたいに加山の別荘に遊びに行きたくなるのはわかる。

「ばか言ってるじゃないよ。むこうはむこう、こっちはこっち。最初からキャンプをするために計画したんだから加山の別荘は関係ないよ。小泉行きたいなら一人で行けよ」

石山が怒り気味に言ったので小泉もそれ以上、その話題をみんなの前で言わなかったが、食器を洗っている時こっそり僕に「石山はかたいよな、カワパンだって行きたいだろ」と言ってきたが僕が「

別に」と答えたら、当てがはずれた顔をして今度こそ本当にその話題は口にしなくなった。

溺れる

今井浜の海は波が荒いが、海の中に入っても自分の身体が見えるぐらい海水はきれいである。海の中に入って身体が見えるのは当たり前のように誰もが思うだろうが、湘南の海は濁っていて海に入っても身体が見えないし、よく潮干狩りに行った湘南富岡の海なんて真っ茶色の海で海から上がると身体がヌルヌルするのだから海水に顔をつけるなんて絶対出来なかった。

「カワパン、台風が日本の近くにあるらしいぞ」

「知ってる知ってる。でもこっちの方には来ないみたいで、九州とか台湾の方に行くみたいだぜ」

天気予報はキャンプに来るまでいつも気にしていた。去年は台風でキャンプは取りやめたし、海と山でキャンプするのだから台風にあえば中止しなくてはならない。幸い日本の近くに台風は来ているようだが、本州に上陸する気配はなかった。

「そうみたいだけど、台風は上陸しなくても近くに来れば海は荒れるから、下手すると海水浴禁止になるかもしれないから良かったよな」

腰の高さまで海水がくる所に僕達は歩いて来た。ビーチボール遊びをするためだ。昼飯を終え、スイカ割りを楽しんで一息入れた後、早速海の中に入ろうと僕達ははりきった。

今年初めての海水浴である。場所は伊豆の海、もう身体がウズウズしてしょうがない。ビーチボールは柔らかくて軽いから海の中で遊ぶには最適だ。遊ぶといっても丸く広がりビーチボールを打つだけなのだが、結構面白い。取れないボールに飛び付いても海の中だから危なくない。これが土の上でやったら飛び付くなんて出来ないし、もしやれば絶対身体はどこかを擦りむいたり、痣をつくってしまう。

夢中になってビーチボールを追っていると女の声がした。

「ねえ、私達も仲間に入れて」年上の大人の女だ。

「いいよ、いいよ」小泉が嬉しそうな声を出す。

僕が遠くに飛んだビーチボールを取りに行つて振り返ると三人の大人の女がにこやかな顔をして僕達の輪の中に素早く入っていた。僕がビーチボールを打ち上げるとさつきとは違い、キャツキャツという黄色い声が響く。

「おねえさん、大学生？」

小泉が隣の女性にニコニコしながら聞くと「そうよ」という答え。

「しょん便臭い女よりやっぱり大人の女だな、カワパン」暇を見つけて小泉が僕に耳打ちしてきた。

さつきまで5人で遊んでいたので、ボールを打つ回数が多く無駄話をする暇などなかったが、8人もいると結構暇な時が出てくる。

「何、そこ、おしゃべりしてるの」

女子大生の打ったボールが勢いよく僕目掛けて飛んできた。

このようなビーチボールで遊ぶ場合、普通は上に上げるトスを打つのだが、今はスパイクが飛んできたので僕は受けそこない頭に当たってしまった。

「オーモーレッツ！」

僕が思わず叫ぶと女子大生の三人は大笑いした。

小川ローザのCMで、スカートがひらりとめくり上がり、その時オーモーレッツと言うのだが、それが今流行っているのだ。

楽しい時間はすぐに過ぎた。女子大生達も少し遊んだら「じゃあね」と言つて去つてしまった。

「細井、まだ遊ぼうつて誘えよ」と小泉が言ったが「や、やだよ」で簡単に却下されていた。

女子大生がいなくなると小泉と出川も浜辺に戻つていった。

ビーチボールも飽きたので、残った3人はもう少し深く、ちょうど波が白くなる所まで行き、波に巻き込まれ流れていく遊びを楽しんだ。そこまではよかった。

さすがに遊び疲れ浜辺に戻る時、僕は危ない目に合った。右足が

つつたのだ。石山や細井は僕の前を歩いてたが、片足をつつたぐらいならなんとか浜辺まで戻れるだろうと左足を踏ん張り、歩いていった。

踏ん張ったのがいけなかった。今度は左足までつつてしまったのだ。つまり両足をつつてしまったから、当然その場に倒れてしまった。結構浜辺に近いところまで来ていたから大声を出せばみんなに声は届く。石山も細井も小泉達のすぐそばまで行っていた。

「おーい、両足つつた」

僕は出来るだけの大声を出して倒れた。

みんなはまた僕がふざけているのだろうと指を差して笑っている。海水は膝ぐらいの深さだから両腕を突っ張れば顔を上げることが出来るが、波が来るたび顔は隠れる。

「おーい、冗談じゃないんだ。助けてくれー」

まだみんな笑っている。

「ふざけてるなよー」という声も聞こえてくる。

一体何回くらい波を頭からかぶっただろう。誰も海面が膝ぐらいの所でおぼれているなんて思いやしない。浜辺で仲間が笑っているからふざけているとしか周りの人間は思わないだろう。

「おーい、本当につつてるんだ」

最後にふりしぼった声、この声が芝居には聞こえなかったのだろう。本山が慌てて海の中に入ってきた。本山の慌てぶりにみんな大笑いしている。

『カワパンにだまされて本山は馬鹿だなあ』と思っているに違いない。

僕は本山が走ってくる姿は見えなかった。ただ大声を出した後、ほんの少し経って「大丈夫か」と知らない男性に腕を引っ張られホツとした。

「両足をつつてしまつて歩けないんです」

やっこの思いで僕がそう言った時、ハアハア言いながら本山が来た。

「川上どうした」

「先生、両足つつて歩けないんです」

さすがに浜辺にいたみんなもおかしいなと思い始めたようで、笑い声はしない。

「おーい、誰か来てくれ」

本山の声に石山が飛んできたが、僕がまだふざけているのだろうと半信半疑の4人はゆっくり海の中を歩いて来た。

本山は僕を助けてくれた男性にお礼を言い、石山が来るまで僕を支えていた。

石山と本山に支えられやつの思いで浜辺に着くと一応みんな神妙な顔をして僕を迎えたがその顔はまだ僕がふざけているのではと疑う顔でもあった。

「ひっかつた、ひっかつた」と僕が言い砂浜を走って逃げて行くだろうと期待の顔もある。

「おまえら、何で助けに来ないんだ」

僕がみんなを非難すると石山も「そうだ、そうだ、おまえら友達が助けを呼んでいるのに笑ってただろう」と怒った顔をして言った。

「石山、おまえが一番笑ってたじゃないか」

小泉の言い分に「ばれた」といつもの屈託のない顔を見せ「でも本当におぼれているなんて誰も思わないよな。あんな浅い所で」と弁解した。

「俺だつて、初めてだよ。片足つるのはよくあるけど、両足つるなんて、もう少し深いところでおこつたらどうなつてたか」

昨日はよく眠れず、朝も早くから起きて全く休まないで海の中で遊んだため、いくら若いといっても身体に変化が起きたのだろう。

少し休んだらもうそのことは僕を含めみんなの頭から飛び去り、夕飯の仕度に興味が移っていた。

飯盒ご飯

なにしろ自分達で全部作らなくちゃあいけないし、ガスコンロも電気釜もないのだ。

米は飯盒で炊く。細井や出川は米をといたこともないので、米に水を適当に入れ火にかければご飯が炊けると本気で思っていたのだから恐れ入る。

「飯盒でご飯を炊いた時は最後に火から下ろし、ひっくり返すんだぞ」

僕にも兄がいるが石山にも兄がいて、その兄に飯盒炊飯の注意を石山は聞いてきたらしい。しかしおかず作りは兄に教わることは難しい。小泉には姉さんがいるから、教わってきてもよさそうだが、小泉は結構男尊女卑のところがあり、男が台所に立つなんて考えられないという人間なので、小泉も全く期待できない。細井と出川は問題外だ。特に出川は薪で火をおこすことも出来ないし、飯が炊けているか確認しようとして平気で火にかかっている飯盒の蓋を素手で開けようとし、蓋に手をつけた瞬間「あっちい」と言っただけ火傷をするような間抜けだ。そんなメンバーだからどうしてもおかず作りは僕が中心になる。

カレーなら何度か作ったことがあるから簡単だ。石山と小泉は意外と器用なので、野菜の皮を結構うまく包丁でむいていく。

「カレー粉は包丁で細かく切った方がいいぞ」と小泉が僕にそう言ったので、僕が「へえー、よく知ってるな」と言ったら

「よしちゃんがカレーを作るならって教えてくれたんだよ」と答えた。小泉も家でキャンプのことをいろいろ話したのだろう。

僕はお母ちゃんにキャンプ行くよと言って行く場所を教えただけで兄弟達にはこれといってキャンプのことで話はしなかった。下手なことを言っただけのお菓子の取り合いをするのをおそれたからだ。もっとも長兄はもうお父ちゃんの仕事を手伝っているので、

仕事が忙しく、僕とほとんど話もしないし、

次兄は今高校三年生で大学受験の勉強で頭がいっぱいだから僕のことなどかまっている余裕はない。だからキャンプの仕度も全部一人でしたし、兄達が持っていたキャンプ道具はお母ちゃんが見つけてくれたので、問題はなかった。

兄達が持っていたキャンプ道具でも基本的に親が買ってくれた物は家族の物でその所有権は親にあるため親にことわればいいことになっている。だから僕のリュックを弟が親にことわれば勝手に使っても僕は文句を言わない。ただ僕が使おうと思っている時、弟が持っていたらお母ちゃんに文句は言う。お母ちゃんは僕達のスケジュールを全て知っているからだ。

カレーは思った以上に美味しかった。僕と小泉は三皿も食べた。僕は飯盒の蓋で食べたから三皿というのか、三蓋というのかはつきりしないが、いつもの倍食べたのはつきりしている。どうして外で食べるとこんなに美味しいんだろう。

食事を食べ始めた時はまだ周りにはなんとか明るかったが、二蓋目に入ると暗くなってきた。しかしそれは食事にはいい方に作用した。外での食事は飯の中に虫や灰が結構入ってくるので食べる時それを見てしまうと食べる気がなくなる。真っ暗だと飯の中は全く見えないから、気にせずただ味だけを楽しむことが出来るから、暗くて良かったのだ。

家で食事した場合、僕はご飯やおかずにとえ小さな虫でも入っていたら全体がもう食べられなくなってしまうし、お母ちゃんの化粧のにおいや食器洗剤の匂いが少しでもついていたらそれも全く食べられなくなってしまう。だから家の中でこんな食事をしたらきつと僕は全く食べられなかったかもしれない。しかし、今は暗いということが大半を占めるが、自分達で作ったということも食事に対して粗末に出来ないという気持ちが出てきてちよつとぐらいの虫や灰が何だという気持ちになっている。

加山たち来訪

夕飯が終わると僕はソワソワしはじめた。加山が女の子達を連れてくる。みんな連れてくるのだろうか？

電車で来るなら結構時間がかかってしまうから、女の子達は来ないと言って結局中止になるかも。下手に「加山が女の子達を連れて夜来るぞ」って言わなくて良かったかもしれない。よく考えたら、同じ伊豆でも白浜と今井浜じゃあ歩いて来られる距離ではないから簡単に遊びに来られる訳ないな。

加山一人が来るということも考えられるが、さすがに加山のおじさんの別荘にみんなを置いて加山が一人で来ることは出来ないだろう。

食事が終わり、腹が重くて砂浜に寝転んでいる時、そんなことをずっと考えていたが気持ちはソワソワしていた。

「そろそろ花火しないか」

食器を洗い終えた出川と細井が戻って来ると小泉がテントに入り、手には花火を持ってそう言った。

「そうだな」

「やろう、やろう」

みんなそれぞれの言い方で賛成するが僕は何も答えない。もし加山が女達を連れて来るなら花火はその時やりたいと思っているからだ。

「カワパン、どうしたんだよ。ノリが悪いじゃん」

小泉が今にも花火に火をつけるぞとマッチを手にし、言ってきた。

「小泉、ちょっと待てよ。実は加山達が遊びに来るかもしれないって言ってたんだ」

「かつ加山が」

加山イコール立花という計算式を小泉の頭は作っているから、びっくりした顔をしている。

小泉がびつくりした顔を見せたその時ちょうど「おーい、カワパン、どこだあ」と大きな声がした。フカヒレの声だ。グッドタイミング、加山達がちょうど来たみたいだ。

「ここだよ、フカヒレ」

僕も大きな声で答える。すぐにフカヒレが懐中電灯を持って焚き火をしているところに現れたが、すぐ後ろに神崎と立花がいる。

「カワパン、楽しい？」

ニコニコした顔で立花が声をかけてくる。

「カレー、作ったんだ。美味しかった？」

神崎がまだ鍋に残っているカレーの匂いをかいでいる。みんなびつくりした顔をしていたが、石山が「食べるか？」と言った。

「もうお腹いっぱい。夕方の五時から加山君のおじさんがバーベキューやってくれて、たくさん肉食べたからもうお腹いっぱい」

嬉しそうに神崎が言う「こんばんは」と知らないヒゲをはやしたおじさんが声をかけてきた。

「おじさんなんだ。車で送ってくれたんだよ。車ならここまで10分とかからないからっておじさんが言ってくれて」加山がヒゲのおじさんの紹介をする。

ヒゲのおじさんは本山に挨拶をすると手に持っていたワインを見せ「飲みませんか」と誘った。

本山は嬉しそうな顔を見せ「これはフランスのワインですか」と訊くと「ボルドー産です」とヒゲのおじさんは答えた。

本山はフムフムと頷きながら「ボルドーか」とつぶやき、しげしげとそのボトルを見ていた。

きつとボルドーなんて言葉、何が何だかわからないくせに知ったかぶりをしているのだろうと僕は横目で眺めていた。

立花たちが来る

「バーベキューの残りを持ってきたのよ、食べるでしょ」立花の手には

皿いっぱい焼かれた肉の山。

「こつちに遊びに来たい者って誘ったら、フカヒレと立花と神埼が手を

上げたから4人で来た。あとのみんなは疲れたって言って白浜の家で休ん

でる。」加山がみんなに話しかける。

「今日ね、ヨットに乗ったの。凄かった。波の上をピューって走るのよ」

立花が、今日みんなが疲れている理由を楽しげにしゃべる。

「沖に出てみんなで海の中に入ったの。もちろん私は浮き袋を使つたわ

よ。でも、加山君、カッコよかった。浮き袋なんか使わないでスイ

ースイ

ーって泳ぐの。凄く速かった」

立花の心境は複雑だろう。最初僕達の誘いを受け、少しはその気になっ

たが、加山のおじさんの別荘の話を、そっちの方が断然いいから乗り換え

てしまった。だから僕達に負い目が多少あるから、バーベキューの肉をせ

めてもの罪滅ぼしにと持ってきたのだろう。でも加山には世話になったか

ら、その意識が立花を必要以上におしゃべりにさせているようだった。

「さあ、みんなみんな、食べて。これ、私が焼いたのよ。薪でお

肉を焼

くなんて私初めてだから結構焦げてしまったところも多いけど、おいしい

わよ。なんとたつて牛肉だから。牛肉なんて私、ここ何ヶ月も食べたことな

いから感激しちゃった」

僕なんか何年も食べたことない。すき焼きの肉はいつも安い豚肉を使う

し、肉料理といえば豚の細切れを使う料理が我が家の料理であつて、決し

て牛肉を使うことはなかった。もちろん宗教上の理由なんかではなく値段
的な理由だ。

立花が持つてきた肉に小泉が一番に飛び付いた。次に細井出川、

石山が

続いたが僕は躊躇した。なぜなら、お腹がいっぱいでこれ以上何ひ
とつ入

りそうもなかったからだ。小泉も僕と同じくらい食べているはずな
のに、

凄いやつだ。でも僕の躊躇も20秒ぐらいのものだ。

「カワパン、食べないのか？」と誰かが不思議がつて声をかける
前に、

僕の手は箸を掴み牛肉を一切れはさんでいる。

小泉はカレーを三蓋食べたのにまだそんな食うのかというぐらい
牛肉を

食べているが、「カワパン、カレー三杯も食べたのにまだそんなに
食うの

かよ」と逆に小泉に言われてしまった。

「どうキャンプ楽しい？」

神崎が石山に話しかけると石山も今日起こったことを一生懸命神

崎に話

している。小泉は立花に加山のおじさんの別荘のことやヨットのこ
とを一

生懸命聞いている。フカヒレと細井、出川は淡々とお互いの今日一
日の出

来事をしゃべっている。本山はヒゲのおじさんといい気持ちになり
ワイン

を飲んでいる。必然的に僕と加山が話をすることになった。

「カワパン、ちょっと歩かないか」

僕は腹がいつぱいでとても歩くことなんか出来やしない。でもわ
ざわざ

来てくれた加山に誘われると石山や小泉に返事するような「ふざけ
るなよ、

腹いつぱいで動ける訳ないだろ」なんて言えず、「わかった」とし
か答え

られなかった。

加山の変化

焚き火を離れると海の音が急に聞こえてくる。あれだけ人の声であたりは充満していたのにほんの少しその場を離れただけで、音が変わる。

「星がきれいだな」加山に言われ、初めて上を見上げた。

加山の言う通り満天の星である。田舎に行かなければ見られなかった天の川もよく見える。

「ここまで来れば星がきれいだろうと思ったから歩いたけど正解だったな」

僕はあまりの美しさに「みんなを呼ぼう」と言っただが、「むこうはむこうで盛り上がってるから、今邪魔するのは悪いよ」と加山が言っただので、加山の言っただことを考えた。

盛り上がってる……何が……立花と小泉か……そうかも。石山も神崎と話してて楽しそうだった。なるほど加山っているいろいろ見るのだなと改めて見直した。

加山と初めて出会ったのは、中学1年の時である。ガタイのよいやつがいるなあが第一印象であった。僕は小学校からの流れでヤマと仲が良かったんだけど、ヤマがてっちゃんと仲良くなり、てっちゃん親友が加山で、四人で遊ぶことが多くなり、それが段々と僕と加山が二人だけでも遊ぶようになっていった。そして1年生の後半はもう一番の親友になっていた。

1年のときも2年のあの夏までは加山はあまり目立つ存在ではなかった。いや身体が目立ち始めてはいた。でもそれはクラスメートからしてみればただ身体が大きくなったというだけで、目立ってきたということでもなかった。

それが、夏休みが終わると明らかに加山は変わってきた。でもその変化は僕だけが分かる変化かもしれない。きっと他のクラスメートは加山の変化には気づかなかっただろう。3年になり急に誰もが

わかるくらい加山は目立ってきた。熊田とフカヒレのケンカを止めたのも加山の変化の一つだ。確かにあれだけの身体を持っているのだから、ケンカも止められるだろうが、そんな度胸があるとは誰もが思わなかったからだ。気が弱くておとなしいと思っていたがとんでもない。能ある鷹は爪を隠すであつた。

能ある鷹は爪を隠すといえ、7月初めに行われた学年でやる期末試験の一斉試験でなんと一番になったということももう一つの爪だ。これには3年全ての生徒が驚いたし、先生達も驚いたようだ。

2年の時も決して成績が悪いということではなく、クラスで5、6番にはつけていた。しかしクラスで5、6番ということは学年で40番前後ということである。

2年の時は、学年一斉試験は行われなかつたので、40番前後としか順位を予想できない。中間試験や期末試験はクラスごとで採点し、順位をつけて通信簿にその評価を載せていたが、3年の1学期期末試験だけは3学年全生徒の結果に順位をつけ職員室の廊下に貼り出されたのである。

貼り出されたのは上位50名だけだから僕の名前は出ていなかった。7組で50名に入つたのは5位に神崎、7位にホゾ、23位に水口、35位にフカヒレ、38位に立花、50位ぎりぎりに熊田が入つたので、加山も入れ7人であつた。

加山はいきなり1位である。もしこれが生徒会役員の選挙の前に行われていたら加山は川田を押しつけ生徒会会長に7組の代表として出て見事に当選したかもしれない。

学年一斉試験が発表されてから加山の人気はうなぎ登りになり、そんなところに加山のおじさんの別荘に行こうだから、立花達はメロメロになつてもしょうがないだろう。

加山の告白

「加山、学年トップになったから凄いよな」

思わず僕は加山を褒めてしまった。クラスの人間を褒めるなんて僕は絶対しないタイプだ。それが褒めてしまったのは加山に対してのコンプレックスなのか、素直に認めたのかは自分にもよくわからなかった。ただ、キャンプに来て自然な海の音と星の美しさに感動して素直になったのだろうと後で思い返した時、結論した。

「あれはおじさんのおかげさ。おじさんがテストに出そうなところを全て教えてくれて、一ヶ月みっちり僕に勉強を教えてくれたんだ。実は2年の夏からおじさんが僕に色々教えてくれていたんだ。おじさんは勉強の教え方が凄くうまくて、カワパンもおじさんに教わったら一番取れるさ」

加山の言葉に僕は何も言えない。

「そうか、俺今回は凄く頑張ったからな」ぐらいの言葉なら「そうか、凄く頑張ったのか。凄くがよかったんだな」なんて1年のときのように軽口を言えるのだけど、それを凄く真面目にしゃべる加山に対し、軽口をたたけないなと思ってしまい、何も言えず黙ってしまったのだ。

「カワパン、水口に告白したんだろ」と加山が次の言葉を言った時、これには驚いて僕は言葉を言えなくなった。

誰に加山は聞いたのだ。僕の頭は犯人探しをするが加山は僕の頭の中のことはおかまいなしに言葉を続ける。

僕の犯人探しの結論はすぐに出たが、「立花に教えてもらったんだけど」と僕が出した犯人を加山はすでに口にした。

「カワパン、凄いなあと俺は感心したよ。実は俺も水口に告白したんだ」

びっくりした。加山は誰もが大人だと思い、大人にまだ成りきっていない7組の生徒なんか相手にしないと思っていたからだ。もち

ろん僕が告白した水口に加山も告白したということも驚いたが、比べれば大人の加山が中学生に告白したというイメージが僕にはどうしてもおかしく感じ、そっちの驚きが大きい。

「水口は俺の申し出を受けてくれて、付き合うことを承知してくれたんだ。水口と付き合っている時、立花とも結構話するようになって、特に修学旅行でいろいろ話すうちに、カワパンの話になってその時間いたんだ」

僕は相変わらず何も言えない。夜で良かった。それに月明かりがなくて良かった、とつくづく思っている。もし、少しでも明かりがあったなら今僕は1万円落とした時よりも情けない顔をしているだろう。

「カワパンのこと2年のあの夏の時から気にしていたよ。俺、自分で勝手にカワパンを過小評価してたんだ。おじさんが友人は選べと忠告してたから自分なりに選ぼうと思い、あの夏から変えたんだ」
加山の告白は僕を馬鹿にした告白だったけど其のときは正直加山が何を言っているのか理解できずにいた。

加山の独り言のような告白は続いた。

「でも、俺気づいたんだ。カワパンは凄いつて。カワパンは、ホームルームではいつも手を上げて自分の意見を言うし、しょっちゅう面白いことを言っってはクラスみんなを笑わせているだろう。そういうことって唯のお調子者だと馬鹿にしていたけど、それは、実は凄いことなんじゃあないかとこのごろ思うようになってきたんだ。俺が水口に告白し、立花からカワパンも最近水口に告白したと聞いて、同じ人を好きになったんだなあとか妙な連帯感をカワパンに持つようにもなったんだ。

修学旅行の夕食の時、カワパンが寺本をかばって熊田と衝突したじゃん、俺感激したよ。特にカワパンが寺本のこと親友つて言った時、俺泣きそうになった。俺もああいうことをみんなの前で言いたかったって。カワパンに自分の中で求めているものを見た思いがしたんだ」

僕が寺本に親友だと言ったことに感激した人間がいる。僕にすればとっさに出た言葉で熊田が僕を追い詰めてきたから親友だって言っただけだ。

寺本のこと『好きだから』とは、そんな感情がないから言えないし、同じ班の人間だからじゃインパクトが弱い。女の子に親友はおかしいかなとも思ったが、ほかに言葉が見つからなかったから寺本を親友だと言ってしまったに過ぎない。その言葉は熊田に対抗して思わず出た言葉であって、加山が感激するというものではないのはと僕は思った。実際、周りのクラスメートはみんなカワパンが苦し紛れに寺本のことを親友だと言ったのだろうと思っている。

僕は変な気持ちである。『瓢箪から駒』的な僕の行動に感激されても思っている。

仲間と友達

「カワパンが、生徒手帳に書いてある校則を使い熊田を言い負かしたじゃん。俺、あの時はちよつと笑った。俺も生徒手帳の校則は読んでいたから。結構、上手いハツタリをするなあと笑ったけど感心もしたよ。ああいう場面でハツタリが出来るなんてたいしたもんだった。」

30年後って言った時も凄かったよ。30年後なんてよく考えたら余りにも長すぎて、本当に30年後になつたらもうそんな話は忘れているだろうから、実際意味のない約束だよ。

でもあの時カワパンが言った30年には凄く重さがあり、感激したやつも結構いたと思うよ。寺本なんか本当に嬉しかったと思う。修学旅行でもカワパンのこと凄いなあと思ってたし、こうやって自分達でキャンプの計画を立て、それを実行するのも凄いと思う」

僕は凄く照れ臭かった。自分が褒められるなんてほとんど経験したことがなかったからだ。勉強も運動も普通よりちよつと上というレベルでは人から褒められるところは何もない。自分は人とは違う、いつか自分の力を世の中に示すことが出来るとか、もっと凄いと自分が世界の中心だと心の中で思っている人はたくさんいると思う。僕もそうだ。しかしそう思うのと同時に自分の現実の姿を見て、せめて人並みの学校に行き人並みの会社に入って世間の落ちこぼれには絶対なりたくないという思いも心の中にはある。いつも世間から落ちこぼれることを恐れ、人並みの暮らしが出来ればとりあえずいいのではと考えていた。中学生のくせに。そんな僕の心の奥底を加山はくすぐってきたのだ。

「カワパンは、寺本を守ったように優しさがあるし、水口に告白したように勇気もある。そして熊田に向かっていった正義感と熊田を打ち負かした知恵もある。それにキャンプをこのように出来ただから実行力もある。そしてリーダーシップの資質も当然みんなを

キャンプに連れて来たのだからあるだろう。人間として素晴らしい長所がたくさんある」

僕は自分で自分を褒めたってこんなに素晴らしく自分のことはいえない。いったい加山って何なのだろうとポカーンとしてしまった。僕の思考能力では加山という人間を量ることは出来ない。

暗闇が加山を隠してくれているから僕はなんとか自分を保ってられる。

「俺、随分ペラペラしゃべるからカワパン驚いただろう」

僕は頭を縦に振るがそれが加山に見えたかはわからない。

「俺、一年のときはそんなにお喋りでなかったけど本当は結構おしゃべりなんだ。でも二年の夏からは俺本来のお喋りが出始めたみたいなんだ。

ホゾはよく俺のことが分かっているけどホゾってそういうこと人に話さないだろう。だからクラスの皆には俺が実はお喋りなんて分かっているやつはあまりいない」

もう加山は僕の想像出来る範囲を越えてしまっているので、僕は加山の話に割り込むことは出来ない。話が終わるのを待つしかない。最初波の音がうるさかったが、今は加山の声しか聞こえない。

「おじさんは凄い人なんだ。事業で成功して凄い金持ちになって、俺もおじさんみたいになりたいって言ったら、おじさんみたいになりたかったら中学生からそのことを意識して生きろって言うんだよ。普通の中学生みたいな学生生活をただ何の目的もなく楽しむのではなく、意識を持って中学生生活を送れっていうんだ。特別な世界を目指す人間は中学生から特別な生き方をしているってさ。

プロ野球を目指すなら中学生からそれを意識して練習した方がいいし、歌手を目指すなら中学生の時からプロにならった方がいい。若ければ若いほど基礎が身に付き、後でそれが自分にとって最高のものとなるって言うんだ。それは何となくわかるだろ、カワパン」暗闇で頭を縦に振るが本当のところはよくわからない。加山の言っている意味はわかる。でも実感が無いのだ。プロ野球の選手とか、

歌手になるなんて僕の周りで本気で考えているやつなんかいないから、実感を持ってない。

「じゃあ、おじさんみたいになるには何を意識すればいいのって聞いたら、まず人間を観察しろって言うんだ。客観的な目でクラスの友達を見ろって、するといろんなことがわかるはずだから。それがおじさんに近づく第一歩だって言うのさ。」

自分が主観的になったら、その世界に入ってしまった、本当に正しいことを見失ってしまう。それが事業で一番悪い結果をもたらすと言ってた。この辺のところは俺にもよくわからないけど、おじさんがいつも俺にそのことを話してくれるから、意味はわからなくても覚えてしまってるんだ」

僕もよく意味はわからなかった。ただ本当はよくしゃべる加山だけど、それもきつとあのヒゲのおじさんの影響なんだろうなあということはわかった。

「三年になってももう客観的に人を観察しなくてもいいって言われ、自分の好きなように友達と付き合いなさいって言われたんだ。でもいきなり好きなようにって言われてもそう簡単には無理だろ。でも嬉しくて、友達と好きなこと言い合ったり、クラスで目立ってもいいのかって聞いたら、好きなようにしなさいって。ただ中学生生活は後たった一年だから、自分に合った仲間を一人でも見つけると後の人生において絶対プラスになるから、仲間を見つけることを意識しろって課題を出されたんだ。」

仲間はクラスに結構いるよって言うと、それは友達だろう、友達と仲間は違う。仲間とは信頼出来るやつを言うんだ。そして友達は大切に存在だとも言っただけど、俺にはその違いがわからなくておじさんに質問した。カワパンはわかるか」

加山の言っていることはわかるが意味はよくわからない。『信頼』も『大切』も友達には必要なことだろう。

「信頼って信じられるってことだろう。『走れメロス』ではそのことを教えてくれてるよな。だから友達とは信頼することが大事な

んじゃないか。信頼しているから友達を大切にすることとは当たり前じゃないか」

加山は僕のことを認めてくれるようなことをずっと言ってくれていた。ここで何か言わなきゃと思い、何でもいいから口に出さなければと考えると、友情といえば『走れメロス』だと思いとっさにそのことを言った。

「カワパン、その通りだよ。俺とおじさんのは何回も話し合っているんだ。今はそれを全部つないで話してるけど、本当はおじさんが友達とは何か考えなさいとかいうようなことをいつも宿題に出して、それを俺が考え、次に会った時、その答えを言うってことでやってるんだ。」

友達は大切にする、仲間は信頼するという宿題で俺も『走れメロス』を考え、カワパンと同じような答えをおじさんに言ったんだよ。やっぱりカワパンは俺と感性が合うのかな」

僕はしゃべることによって落ち着くことができ、加山の話がさつきよりはわかるようになった。

「おじさんは仲間と友達は違うって言うんだ。大切にする友達はたくさん出来るだろうが、信頼できる仲間はなかなか見つけれない。一人見つけることが出来れば人生は物凄く変わる。」

仲間とは人生と一緒に生きていける人間だから感性が合わなければ無理だ。友達なら感性が合わなくても性格が合わなくても何も合わなくても友達になれるけど、仲間はそうはいかないって。だから家が近いからとか、クラスが一緒だから、席が近いというようなことと全部取っ払って人を見て、誰が仲間になれるかよく観察して探せって。

俺もおじさんの言うことよくわかんないけど、友達と仲間の選び方は違うんだなっていうことはわかった。年をとっていけばどんなそのことがわかるはずだけど、そのことを意識するだけで本当の仲間を見つけることが出来るって言うんだ」

加山がここまでしゃべったが、ほめてもらった気持ちよさとか何か

が違つという気持ち悪さが両方僕の気持ちに起こつた。でもそれを言葉にできない。ただ素直に加山に同調できない自分もいた。

「おーい、カワパン」という小泉の声が聞こえた。

「小泉が来たみたい」と僕が言つと「俺だけ早口でいろいろしゃべつちやつたけど悪かつたな。どうしても今カワパンに話したかつたんだ。続きはキャンプから戻つたら話そう」と加山が言つと小泉はもう目の前に来ていた。

「おまえら、何やってんだよ。みんなで花火するから探しに来たよ」

ハアハア、言っている小泉。走つて来たからだ。

「おー、わかつた、行こう」

僕の頭はクラクラしていた。加山の話は中学生の話ではない。

僕も結構友達とは何か、友情とはなんて喋りたがるが、加山はレベルが全然違つ。そんな加山に僕が他のクラスメートとは違つようなことを言われたらそりゃあ嬉しくなるが……。

じゃああの二年の夏休み、キャンプを断つたのはそれが理由なのか。嬉しさと怒りが同居する。でも加山のヒゲのおじさんは金持ちだから、加山と仲良くなつたら結構いい目が見られるかもしれない。なんてことも考えている。

もつとも、いい目といつてもスキーに連れていってもらつとかしか思い浮かばないが。何しろ加山は僕とは違い大人の世界に入っているんだ、ということだけは加山との話で僕の脳裏に焼き付いた。

花火をすると加山達はヒゲのおじさんと帰つていった。

加山の話聞いて、僕はまだそのショックから抜け出せずにいたため、花火は面白くなかつたし、いつの間にか終わつていた。ただ目には小泉が花火の時はしゃぎ周り、立花が車に乗った時、残念そうな顔をしたのが、映画を見ているように映つていた。おかしいもので一晩寝たらもう頭の中は今日の山登りのことであつた。いっぱいになつていた。

登山

昨日のテントの中でシュラフにくるまって5分もたたないうちに僕は寝てしまった。みんなも僕と似たり寄ったりだったみたいで、みんな目をつぶったらすぐに寝てしまったようだ。寝る前はシュラフに入っても眠れないだろうと思っていたが、みんなアツいう間に寝てしまった。相当疲れていたみたいだ。

一晩寝ると昨日のモヤモヤは全て吹っ飛び朝の仕事をテキパキこなしていった。

重いリュックを担いで山に登るのだ。

昨日は平地を百メートル歩いただけで一休みしてしまったのに、坂道を何時間も歩かなくてはならないのだから、いったいどうなってしまうのだろうか。

今井浜海岸の駅から伊豆熱川の駅へ着くと車が通る舗装された普通の道を山に向かって登っていく。登山道を最初から歩くんだと予想していたから少しずっこけた。

不思議なことに山に登るのだと意識したら重いリュックを長い時間担ぐことが出来た。とはいっても30分歩くと、全員リュックを我先にと下ろし、5分休んだ。

2回目の休みの後、歩き出すとみんなバラバラになりだし、僕と石山は一番最後を歩くようになった。

「みんな最初から飛ばしてどうすんだよ」

「ペース配分が出来ないんだよな」

一番後ろを歩いていてもまだまだ元気だから、ペチャクチャしゃべりながら歩く。時々車が僕達を追い越していくが、数分に1台だからそんなに頻繁に車がこの道を通っている訳ではなかったし、スピードを出している車も少なかった。

「石山、トラックが通ったら、乗せてってもらわないか」

僕と石山はゆっくり歩いていたので、いつの間にかみんなの姿は

見えなくなつてしまい、それを挽回しようと僕が石山に提案すると「そりゃあ、いい考えだ」と石山は大賛成した。

僕達がそう話して1分もたたないうちにトラックが後ろから来たから、不思議だ。

僕と石山は両手を振ってトラックに合図をした。トラックは地元の人なのだろう。ゆっくり走っているから、すぐに僕達に気づき、ゆっくり止まってくれ、「どうしたんだい」と訊いて来た。

「万二郎岳に登るんですけど、入口まで乗っけてってくれませんか」と僕が言くと「林道の入口までなら乗っけてってやるぞ」と言うので、僕と石山は大喜びで荷台に乗り「すいません、僕達の前にも4人いるんですけど、乗っけてってもらえませんか」と言うとトラックの運転手は気軽に「いいよ」と言ってくれた。

トラックはゆっくり走る。きつとこの運転手さんの性格なんだろう。荷台に乗っている僕達はそれが嬉しく、トラックの取っ手を掴んで立ち上がり、正面からの風を楽しんだ。

スピードが速ければ立つことが出来ず座ったままトラックのどこかにしがみついていただろう。

トラックが少し走るとすぐに前に行く4人が目についた。

「すいません、あれです」

僕が言うより早く、運転手さんは気づいたみたいで、4人を追い越すと静かに止まった。

4人を追い越す時、僕と石山は「後から来ーい」と大声を上げた。するとすぐに小泉が「きたねえ」と大声を出したので、本山をはじめ全員が、トラックに乗っている僕と石山に気づいた。そして気づいた瞬間、トラックが止まったのでみんな嬉しそうにトラックに集まってくる。

「トラックに乗せてくれるって」

「林道まで連れてってくれるってさ」

僕と石山が重なるように声を出すとみんな大喜びである。本山もまだ登山道ではないので、いいかという顔をしてトラックの荷台に

乗り込んできた。

トラックは少し走っただけですぐに林道入口に着いた。しかし、これだけの距離を歩いたなら2、30分はかかったかもしれない。

こんな登山道ではない一般道を歩いても全然山登りという感じがしなかったから、とてもラッキーだったと言えるだろう。

一輪車盗む

林道は今までの一般道よりはましだったが、それでも登山道という感じはしない。ただ舗装されているかされていないかぐらいの感じにしか見えない。

「またトラックが来たら乗せてもらおうぜ」と石山に言ったが、林道なので車は一台も通らなかった。

「畑がこんなにあるんだから、きつとトラックは通るよ」

石山も僕にそう言ったが、やはり車は一台も通らない。

トラックを期待していたので僕と石山は再びビリになり、みんなはだんだん見えなくなり、しばらくすると全く見えなくなるぐらい離れてしまった。

「カワパン、いいのがあるぞ」

石山が指差したのは畑の隅に転がっている一輪車であった。

石山はさっさと畑に下りる。畑といっても一輪車が置いてあった場所は何も作物を作っていない。だから畑というより原野かもしれない。しかしその原野の隣は何やらわからないが確かに作物と呼ばれそうなものが規則正しく植わっているからそこは畑だろう。

石山は一輪車を手にするとさっさと林道まで持ってきた。これが畑に一輪車が置いてあったら、持ってくるのはためらったはずだが、原野に置いてあると捨ててあるように見え、捨ててあるなら持ってきても良いのではないかと多少罪の意識はあるが、その罪の意識は簡単に払えたので持ってきてしまったのだと思う。

「カワパン、これにリュックを乗せようぜ」

「ナイスアイデア」

一輪車にリュックを載せ、それを手で押して林道を歩くのは背中の重みがとれ楽である。楽だからスイスイ林道を登っていく。すると5分もすると前の4人が見えてきた。また僕達がトラックを捕まえてくるかもしれないと小泉は時々後ろを振り返っていたのだろう。

僕達の姿と、一輪車を発見し「きつたねえ、なんだよ、それは」と大声を出した。僕と石山はヘラヘラ笑って「いいだろう」と得意げに言った。

小泉の声に本山を始めみんな振り返り僕達の一輪車を見つけた。

本山が怖い顔をして僕達の方にさつと走ってきた。走るといつてもリユックを担いでいるから歩くのよりちよつと速い程度だ。

「おまえら、それどうしたんだ」

「捨ててありました」

「うそをつけ、捨ててあったのではなく、置いてあったんだろう」

「そうかもしれません」

「すぐに元にあつたところに置いてこい」

キャンプに来て初めて見せる本山の怒りの顔。今までは僕達が好きなようにしていたのを黙って見ていたのに、いきなり学校の先生になった。

僕と石山は学校の先生になってしまった本山にはかなわない。

「わかりました」と言つて一輪車を引っ張つて元来た道を引き返した。後ろで小泉と出川の罵声が聞こえる。

「おまえら、ズルするなよ」

「悪事はすぐばれるぞ」

「ふさけんじゃねえよ」

「悪の栄えた時はない」

「世の中のルールを勉強しろ」などなど気持ちよさそうに大声を出している。

「本山のやろつ、何様だと思つてるんだ」

「連れてきてあげたということを自覚してないよな」

「ばかに言つてもしょうがないけど」

「俺達は大人だからな」

みんなが見えなくなるまでヒソヒソ声で僕と石山はしゃべった。自分達が悪いことをしたのはわかっている。それに対し反省もしているし、本山が注意してくれて心の隅に引っ掛かっていた罪悪感

がなくなりホッと安心もした。しかし、その反動が本山の悪口として口から飛び出した。照れ臭くて心の中のことを素直に口に出せないのである。

「ここに置いてもう戻るか」

石山がまだ半分くらいしか戻っていない場所で反省のないことを言った。

「そうだな、ここならあの畑からそんなに遠くないし、きっと持ち主がいるなら気づくだろう」

僕もつい反省のない言葉で石山に同調したが、やっぱり元の場所まで持っていった方がという思いもあった。しかし、ほとんど捨ててあったように見えたから、あそこまで持って帰らなくても大丈夫だという考えもあった。

自分の考えがはつきりしない時は相手の意見に賛成してしまう弱い僕がいる。リュックはさつき本山達と合流したところに置いて来たので、一輪車を置くと手ぶらである。何にも持っていないければ林道を歩くのは全く苦にならない。スキップでも踏んで行きたくなるような気持ちで登っていくと、本山をはじめみんなまださつき合流したところにいた。

僕と石山の計算ではもつと先に行っているからリュックを担いでゆっくり追いかけるつもりだったのに計算違いだ。

「おまえら、どこに置いてきたんだ。もとの場所にちゃんと置いてきたのか。戻って来るのが早すぎるぞ」再び本山の怒りの声。

「えっあの、ちょっと……」と僕は言い、そのまま回れ右をして一目散に一輪車を捨ててきたところに駆けていった。もちろん石山も一緒だ。再び小泉と出川、そして今度は細井も加わって好き放題の罵声を後ろから飛ばす。

「信じられねえな、本山」

「執念深いやつだな、本山」

一輪車を押しながら、また石山と二人でブツブツ言いながら下っていった。

今度はちゃんと元に置いてあつた場所に一輪車を置き、リュックを置いた場所に戻った。戻ってみるともう誰もいない。

「全くあいつら薄情だな」

「そうだよ、一人くらい待っててくれて、本当に本山が怒ってたか教えてくれてもいいのに」

「あいつら、友情という言葉を知らないんだよ」

再び僕と石山はブツブツいいながら、リュックを担ぎ歩いている。しかし、しばらくするとしゃべることは辛くなり、ほとんどしゃべらなくなった。

湧き水

遠くにみんなが休んでいる。

「おい、カワパン、石山。早く来いよ、湧き水があるぞ」

小泉の声が聞こえる。あいつはいつも嬉しそうな声を出す。

「カワパン、湧き水がおいしいぞ」と小泉は湧き水をグイッと飲む。

湧き水なんて飲んだことがない。水は水道から出るものを飲むものだと物心ついた時から思っていたから、

湧き水なんて不潔そうで飲むと病気になるのじゃないかと思い、飲めるものじゃない。小泉はよくそんなものを飲めるなと小泉のたくましさにちよつと感心した。

小泉の次に本山が湧き水を手にするとうまそうに飲み「うん、この水はおいしい、山を登ると必ず湧き水に出会うんだけどそれが楽しみなんだ」と言い、小泉に続き僕達に湧き水を飲むのを勧める。しかし、みんな躊躇して誰も湧き水に手を伸ばさない。すると本山が自分の水筒の水を全部捨てて空にすると湧き水を水筒に入れ始めた。

「水道の水なんかより、湧き水の方が断然うまいぞ」

本山はそう言うのを再び「一口でも飲んでみたら」と勧めるので、石山が湧き水に手を入れゴクツと一口含むと「うん、うまい」と言い「カワパン、西山、堀金、飲んでみるよ」と石山も勧めてくる。

僕は思いきつて湧き水に手を当てた。冷たい、こんなに冷たいのかと驚く。口に含むとその冷たさはおいしさとなって喉を喜ばす。

「うん、確かにうまいなあ。本山先生、これ汚くないんですか？飲んで身体は大丈夫ですか？」

一口湧き水を飲んでうまいとはわかったが、やはり心配で本山に訊いた。

「大丈夫だよ。土の中で濾過されたものがこうやって出てくるの

だから、出たばかりの水は清潔さ」

確かに本山の言う通りだなと頭では理解したが、まだ僕の身体は完全に理解出来ないみたいでおいしい水だと感じてもらう飲みたいと思わないようだった。だから五口まで飲んだが、それ以上は飲めず水筒の中を入れ換えることもしなかった。

「細井も出川も飲めよ」

今度は僕が二人に勧める。

橋の上から川に飛び込む度胸試してみたいで、どうも飲んだ順から次のやつに勧めたがるみたいだ。

「俺はいいよ。まだ水筒にたっぷり水が入ってるから」と出川は僕の勧めを断り、出川の返事に続き細井も「お、おれもいいや」と湧き水を飲むことを拒否した。

二人の気持ちはよくわかるので、誰も無理強いはいしない。

「それじゃあ、行くか」と小泉が先頭を歩き出したので僕もそれにすぐ続いた。一休みして喉も潤ったから元気が少し出てきた。

「カワパン、昨日加山と何話してたんだ」

小泉の隣りを歩くとすぐに小泉は声をかけてくる。

「ちよつとな、そんなことより立花とはどうなったんだよ」

加山と昨日話したことはたとえ石山にさえ上手く説明出来そうにない。

「立花か……、昨日は結構よかったよ」小泉の顔がほころぶ。

「おまえら、うまくいつてるのか」

「まあまあだよ」

「小泉が立花のこと淫売だなんて言うから、俺も修学旅行の時、小泉のこともとって考えてやれって言ったんだぜ」

「俺、立花のこと淫売だなんて言ってるぞ」

「言っただよ」

「言ってるないよ」

「言っただよ」

「まあいいよ、そのことは。それより昨日、加山のおじさんと話

したけど、あのおじさんいい人だな」

「ヒゲのおじさんか」

「そうそう、あのヒゲカッコいいよな。俺も大人になったらヒゲのばそうかな、どう思うカワパン」

「どうでもいいよ、ヒゲのおじさんと何話したんだ」

「いろいろとな」

そこまでしゃべると小泉の足取りはちよつと遅くなる。

僕は先頭に立ち力強く前に進んだ。しばらくすると小泉はだいぶ後ろの方に下がり、代わって石山と細井が僕の近くに迫ってきた。

それにしても暑い。汗がしたたり落ちてくる。その汗で目が痛くなるし、視界も悪くなる。林道の道は幅も広いし、上りの角度も大きくはない。だから一般の山道に比べれば登りやすいのだろうが、変化がないので精神的に辛い。それに道が広いということは太陽に当たる面積が大きいため、直射日光が当たる時間が長くなり、汗を大量にかいてしまう。

遠くにカーブが見える。あそこまで行けば景色が大幅に変わるのではとも期待してカーブまで行くが、その先に再び同じようなカーブが見えるだけで景色は何も変わらない。

リュックの中身

一人で黙々と歩く。隣に誰かいてもしゃべることは出来ないだろう。視線もだいぶ下がってきて足元のちよつと先を見ながら歩くのが大半になってきた。

誰ともしやべっていないと、昨日の夜、加山が僕に話したことを思い出す。加山はなぜあんなことを僕に言っただろう。僕に何を求めていたのか。友達になりたいということか……。いや、友達ではなく、仲間になりたい……。その二つは同じことで、ただ言葉が違うだけの気がするけど。カレーライスとライスカレーの違いのようない気がするけど。

「カレーライスはカレーとライスが分かれていて、ライスカレーはご飯の上にカレーがかかっている。だから同じカレーでも全然違うものなんだ」とホゾが得意げに言っていたけど、僕には同じ食べ物に思える。

「カレーライスの方が洒落てて、ライスカレーは大衆的だから、値段が違うし、味も洒落た味と大衆的な味に分かれる」ホゾのカレーの解説にフカヒレが付け加えた解説だ。

加山が言っていた友達と仲間もその程度の違いじゃないのか。

友達は大切にする。仲間は信頼する。石山はどうだろう、小泉はどうだろう。

小泉は学級委員長のことで信頼を失った。立花の話でも自分の言葉に責任を持っていない。とても信頼出来るやつではない。でも僕にとっては大切な人間だと思う。そうになると小泉は仲間ではないが友達なのか。

石山はどうだろう。石山は約束を破ったことはないし、修学旅行で熊田が不良にからまれた時、カッコよく助け出したりもした。だから信頼できるというより頼りになる。当然僕には小泉以上に大事な人間だ。だから友達というより親友というべき存在だろう。仲間

とか友達より親友のほうが格上だ。親友とは何だろう。

大事にする、信頼する。その人間のためには命まで投げ出す。うーん、そこまでは出来ないか。片足ぐらいなら……足より手ならまだいいかな。片手がなくなったら不便かな……。指の一本ぐらいなら親友のために失っても……、ちよつとせこいな……。

加山のおじさんなら明確な答えを持つているのかな……。

加山はどこまでそういうことがわかつているのだろう……。

加山は、背は高いし馬力は凄い。頭もいい、クラスのリーダーになれるどころか、学校のリーダーになれる器を持っているのに、わざとそういうのから遠ざかる生き方をしている。

僕が好きだった水口に僕と同じように告白し、僕はふられたが、加山はうまくいった……。

加山のことを考え、一步一步大地を踏んでいったら、いつの間にか開けた場所に出た。適当な木陰にリュックを下ろすと肩の力がスーッと抜けていくような感覚になりホツとする。後ろを振り返ると石山と細井の姿が「おーい、景色がいいぞー」僕が叫ぶと二人は歩く速度を速めた。

「おー、いい景色」

「か、風がき、気持ちいい」

もちろん二人ともすぐにリュックを下ろす。

「あー、極楽、極楽」

「いてててて」

石山は僕と同じホツとした顔をしたが、細井は顔をしかめる。

「どうしたんだ、細井」

「リ、リュックのな、中に入っているか、缶詰がか、身体に当たって、痛いんだよ」

「どれ、ちよつと見せてみる」

石山がリュックの紐をほどき、中を点検すると「おい、これじゃあ、痛くなるに決まってるよ。目茶苦茶な入れ方してるもの」

「そ、そうか」

「リュックは段ボールとか厚い紙で周りを囲んで形をしつかりさせないと中の物があっちに行ったり、こっちに来たりして目茶苦茶になるんだよ。カワパン、新聞紙持ってないか」

石山にそう言われ僕はリュックから新聞紙を取り出し渡した。石山は自分のリュックからも新聞紙を取り出し、その新聞紙をリュックの内側に囲うように置き、リュックの形を固定させ缶詰とか一番重いものを下に置き、その上に次に重い物というふうに順々に入れ多少ガチャガチャやっても中の形が変わらないようにした。

「これで、さっきよりましになったと思うけど、本当は新聞紙より段ボールの方が丈夫でいいんだよな。リュックの紐も肩に担ぐところを通せばもっとしかり固定されるよ」

石山はしゃべりながら紐を上手く通していく。

「これでリュックを担ぐ時、肩にタオルをいれとけばいいよ」

細井のリュックから取り出しておいたタオルを石山は細井に渡す。

「サ、サンキュー」

細井が石山に礼を言っている時、本山と小泉が着いた。

「出川は？」僕が聞くと「もうすぐ来る」と小泉は辛そうな顔をしてハアハア言いながら答えた。

小泉の言う通り、十秒もしないうちに曲がり角に出川の姿が見えたが、出川の顔も死にそうな顔になっている。

「先生、ここ風が吹いてて気持ちいいから、お昼にしようよ」

その広場の南側は大パノラマになっていて向いの山がきれいに見える、とても開けているので風が強く吹いている。

僕の提案に本山も時計を見て「そうだな」と言った。

腕時計は本山と細井だけが持っているので僕は時間はわからなかったが、腹時計は12時になっていたので昼食にしようと言ったのだが、20分と狂っていなかったようである。

山彦大会

昼食は朝、飯盒で炊いたご飯のおにぎり。飲み物は水筒の水がなまぬるい。家では絶対に飲みたくないぬるさだが、身体が水分を欲しがっているので喉越しなど関係ない。

おにぎりは手に持って食べられるので歩きながらも食べられる。僕は一番見晴らしのいい所に行き額に心地よい風を受けながらすくつと立ちおにぎりを食べた。

「おい」

「おい、おい、おい……、向いの山に大声をぶつけたら山彦が返ってくる。山彦が幾重にもぶつかるから僕の声は5、6回聞けた。僕が面白いことをやっているなど見て小泉もすぐ僕の隣りに走ってくる。」

「ヤッホー」

「ヤッホー、ヤッホー、ヤッホー……。出川、細井、石山も来る。」

「石山だー」

「イシヤマダー、イシヤマダー、イシヤマダー……。」

「出川だー」

「デガワダー、デガワダー、デガワダー……。」

「ほ、細井だー」

「ホ、ホソイダー、ホ、ホソイダー、ホ、ホソイダー……。」

みんな大笑いである。

「何だよ、自分の名前呼んだって仕方ないだろう」

小泉の文句に対し「ヤッホーなんて、おまえ古いこと言ってんじやないよ」と石山は応酬する。

「じゃあ、何て言えばいいんだよ」

「そうだな、じゃあ好きな女子の名前を叫ぼうぜ」

石山の提案に僕がすぐ賛成した。出川と細井は「そんな子供じみたことやめようぜ」と言うが小泉も石山の提案にのったので、多数

決で好きな女の子の名前を叫ぶことになった。すぐに5人でジャンケンをする。順番を決めるためだ。

1番は小泉、2番は石山、3番出川、4番細井、5番が僕という順番になった。

「立花が好きだー」

タチバナガスキダー、スキダー、タチバナガー……言葉が長いとこだまが重なり合ってしまう。

小泉が立花が好きだということはみんな知っているので、誰も冷やかさないし驚かないから注目もしていない。

2番目は石山だ。石山は誰が好きなのか誰も知らない。

僕は宮沢だと思っているが、もしかしたら違うかもしれない。みんなが石山の叫び声を期待する。

「園まりが好きだー」

ソノマリガスキダー、スキダー、ソノマリ……

「ふざけてんじゃないよ。好きな歌手を叫ぶなんて汚いぞ」
小泉が怒る。

「だって俺、園まりが好きなんだから、しょうがないじゃん」
石山が応酬する。

「ふざけんじゃねえよ」

「い、石山、な、何だよ」

出川も細井も小泉に味方し、一斉に石山を非難する。

「俺は恥ずかしいけど、ちゃんと好きなやつ叫んだぜ。石山、男らしく俺を真似しろよ」

みんなが石山を非難するので、石山も観念し、「わかったよ、今好きな子叫ぶから……男らしくな……。でも小泉の真似じゃないぞ。小泉の真似だけは絶対嫌だからな」

石山は笑いながらそう言う。「何でもいいよ」と小泉は舌打ちする。

向いの山に身構える石山。両手を頬の横に置き、「宮沢が好きだー」

ミヤザワガスキダー、スキダー、ミヤザワガー……と僕が予想した女子の名前を叫ぶ。

「誰だよ、宮沢って」

小泉が聞くと出川が「一年の時、同じクラスだったやつだよ」と答える。

「知らないやつ叫んでもなあ」

小泉が文句を言うが、「しょうがないだろ。さあ、次は出川だ」と石山は言い、自分の番は終わったという顔をしている。

「俺はいいよ」と最後まで出川は抵抗したが、結局他のクラスの女子の名前を叫び、細井は結構喜びながらこれも他のクラスの女子の名前を叫んだ。

僕は当然後藤の名前を叫んだが、「みんな俺の知らないやつばかりじゃないか」と小泉がブツブツ文句を言った。石山が笑いながら「しょうがないだろ、好きなんだから」で山彦大会は終わった。

2回目の湧き水

午後の陽射しは午前中と同じように強いが、林道を登って行くのは慣れて来たのか、午前中より楽になった。とは言ってもしたたり落ちる汗の量は半端ではなく、大事に飲んでいた水筒の水もだんだん中身がなくなっていく。

「誰か水をくれないか」

出川が昼食後、二回目の休みの時、周りに聞く。

「お、俺のをす、少しやるよ」

細井が気前よく水筒の水をふるまうが出川はまだ飲み足らず再び水をくれと周りに頼む。

「出川、ちゃんと計算して水を飲めよ。おまえみたいに喉が渴くと水筒の水をガブ飲みしてたらすぐなくなっちゃうだろう」

石山の注意を「わかったよ、もういいよ」と出川は素直に聞いた。2回目の休憩所を離れてすぐ、「出川は甘え過ぎなんだよ。みんなちゃんと考えながら水を飲めるのに」と石山は怒り気味に言う。

山登りで水は貴重品だ。下手をすれば命の分かれ目になることだつてある。山を登る時、常に大事なものは水だぞ、と兄から聞かされている僕や石山は水の大切さを考えながら水を飲んでいるが、出川は何も考えない。なくなったら誰かからもらえばいいと考えている。石山が怒るのは当然だ。

歩き始めてすぐは石山もブツブツ言っていたが、だんだんそんなゆとりはなくなり、しゃべることはなくなった。そしてそれは石山一人ではなく、全員そうであった。

出川と細井は午後一番では威勢よく歩き出し、トップを歩いていたが、3回目の休みからだんだん後方に下がるようになった。

出川と細井がトップから下がると代わりに石山がトップをしばらく歩いていて、5回目の休みから小泉がトップを取り、僕は2番手を歩いている。そしてそこからはしばらく僕と小泉が代り番に

トップを競い合い、8回目の休みから二人でトップを張り合いながら並んで歩いていった。

右側に車が10台ぐらい止まれそうな広場が見える。

「小泉、あそこで休もうぜ」

僕の提案に小泉も「そうだな」と言って賛成する。

その広場の周りは草が生い茂っていたが、中央はそれほどでもなかった。時々走る車がここでUターンしたり、休憩するので草があまり生えてこないのかもしれない。

「おい、水の音がするな」

僕の声に小泉は耳を澄ました。

「遠くに川が流れてるみたいだな」

遠くに川が流れているような音がするが、よく耳を澄まさなければ聞こえない。

リュックを下ろし、地面に腰を下ろすと気が緩むので、結構おしゃべりをしてしまう。そのため水の音は普通なら聞こえなかったのだが、その時はあまりにも疲れていたため話もせず、地面に寝転がって休んだため聞こえてきたのだ。

「寝てるなよ、カワパン」

石山がやってきた。次に本山、だいぶたつて細井、その少し後に出川。僕と出川とではだいぶ差がついていた。

「さあ、行こうぜ」

僕が腰を上げると「まだ俺、着いたばかりだぞ。ふざけんじゃねえよ」と出川が息をハアハアさせながら言う。

「もう少しみんなで休もう」

あまり先頭と最後が離れてはまずいと考えてか、本山が僕を止めた。

「しょうがねえな、出川、もう少し頑張れよ」と僕は言って、腰を下ろした。

「先生、水の音が聞こえるでしょう」

僕の声に本山は耳を澄ます。

「うん、聞こえるな。下の方に川が流れているんだろう」

「川だったら、飲めますかね。」

「いや、川の水は飲まない方がいい。湧き水なら安心だけどな」

本山は笑顔ひとつ見せず答える。学校の先生の顔だ。

出川の疲労が多少とれた頃、全員で出発したがすぐに僕と小泉のトツプ争いになった。僕と小泉は十分に休んだので、出だしは強い。
「カワパン、湧き水だ」

僕と小泉がトツプ争いをしてすぐに左側の切り立ったところから湧き水が出ているのを発見した。

さつき休憩した場所から5分ぐらいしかたっていない場所で運良く湧き水を見つけたのである。すぐにリュックを下ろし休憩をした。みんなもすぐ後ろに来ていたので、僕と小泉が湧き水を飲むのを見ると走るように湧き水の周りに集まった。最後の出川もほとんど同時にみんなの後に続き湧き水の所に着いた。

「うまいなあ」

湧き水は2回目なので、今度は躊躇しないで僕は口に含み、満足な声を出した。

出川と細井も水筒の水がカラなので、さすがにこの湧き水は口に含んだ。こわごわだが。一通り腹の中に湧き水を流し込むと今度は水筒に湧き水を入れる。

はじめの湧き水を見つけた時、本山は水道の水を全て湧き水に変えたので半分くらい水筒の中には水が入っていたが、石山の水筒にもまだ三分の一くらい水が入っていたのには驚いた。他の4人はみんな水筒に水は入っていなかったからだ。

自然の中でキャンプ

水筒に水を入れれば出発である。水を思う存分口に入れることが出来たので、みんな元氣を取り戻した。

相変わらず先頭争いは僕と小泉であつたが、ビリと先頭の僕達との差は見える範囲なのでそんなに差はついていない。

20分くらい歩くと万二郎岳登山道入口の看板があつた。

やっと林道が終わり、ちゃんとした登山道を歩くことが出来る。

登山道は狭い道である。林道みたいに全員が横一列に並んで歩くなんてことは絶対に出来ない。二人並んで歩くのも結構無理がある狭さなのだ。当然一人ずつ縦に並びながら進むことになる。

登山道に入るといきなり辺りが暗くなる。木々が周りを囲んでいるからということもあるし、日がだいぶ傾いてきたからということもある。

登山道を歩き始めて5分もたたない所で本山は腕時計を見ると、

「さつき、みんなで休憩した広場に戻るぞ」と言った。

「何ですか」と素早く僕が聞くと「あそこで今日はテントを張る。近くに湧き水が出たからちようどいい場所だ」と本山は答える。

確かにテントを張るには広さもあるし、近くには水もある。しかし、まだ日もあるし頑張ればキャンプ場まで日があるうちに行けるだろうと僕と石山と小泉は考えブツブツ言いながら登山道を引き返した。特に僕と石山はこのキャンプに対し今までずっと計画を立て、ちゃんと距離と時間を計算し、今日はキャンプ場まで行けると確信していたから、本山の決断におおいに不満であつた。特にせっかく登った距離を失うことが頭に來ていた。

「全く、あいつには冒険心がないよ」

「石橋を叩いて渡らないタイプだな」なんて好き勝手なことをヒソヒソ言いながらもと來た道を下りていく。

上りはきついからしゃべることが辛かったが、下りは歩くのが楽なので口から言葉は幾らでも出てくる。

「細井、今何時」

「よ、4時だよ」

「ほら、まだ2〜3時間はあるよ。2〜3時間あれば楽勝でキャンプ場まで行けたよな」

「キャンプはキャンプ場でいたいよー。こんな何にもないところでしたくないよ」

僕と石山のヒソヒソ話に小泉も参加する。

本山は一人で先頭に立ち、さつさとしてしまったので、僕達とはかなり距離が出来てしまい、好き勝手なことが言えるのだ。

さつき休憩した広場に着くと細井と出川がテントを張る場所を作っていて「遅いぞ、ふざけんじゃねえよ」と僕達3人に文句を言ったが、誰も出川の言葉なんか相手にしない。

「よし、俺テント張るよ。小泉、さつきの湧き水の所に行つて米をといて鍋に水を入れて持つて来てくれよ」

「いいよ、でも一人じゃ無理だから」と小泉はみんなを見渡す。

「俺、テント張るから、細井と出川は小泉と行けよ」

石山はこれ以上歩くのが嫌だから、テントを張る方がいいと考えたのだろう。僕もそうだった。しかし出川と細井はあっさり「いいよ」とオツケーした。

きつとあいつらはテントを張るのが面倒で水を取りに行くのはただ歩くだけだから、何も考えなくていいと思い、水の方を選んだのだろう。

テントを張るのは2回目だから楽であった。地面が砂ではなく土なので鉄杭を木槌で打つのも気持ちが良い。

テントはアツという間というほどではないが、まあまあ簡単に張れたので今度は竈の用意をするのだが、本山がすでにそれは一人で終わらせていた。

「先生、さつき水の音がしたから、それ探しに行つていいですか」

出川達はまだ戻って来なかったもので、時間を持て余していた。

「いいけど、声が届かない所は行くな」

僕達は「わかりました」と言い、水の音に神経を注いだ。

「どう聞いてもこの辺だよな」

テントを張った広場の北側は崖になっている。崖といっても木や草が生えているので下りようと思えば、下りられる。水の音はその崖の下から聞こえてくるのだ。

「よし、この崖、下りようぜ」

僕と石山は二手に分かれ、草や木に手をかけながらゆっくり崖を下りていった。下りるのに厳しいところは最初だけでそこをクリアしたら後はすっかり気をつけて行けば楽に下りて行けそうであった。

「おーい、石山」

「聞こえるぞー」

時々大きな声を出し、お互いの所在を確認する。そして大声を出した後、耳を澄まし水の音に神経を集中させる。

『あまり水の音の大きさは変わらないなあ』僕が神経を集中させていると石山の声が「カワパン、川があつたぞ」

僕は大急ぎで下ってきた所を今度は上り、テントを張った広場まで戻った。少しして石山も戻って来て、「ここを少し下りていくと小さな川があるから食器を洗うことが出来るぞ」と報告した。

「そんな近くにあるのか」

「おー、驚いたよ。あんな近くにあるとはな。結構水の音って遠くに聞こえるもんだな」

小さな川だから遠くに感じたのだろう。

満天の夜空

パチパチ音がする。本山が火をおこした音だ。しばらくすると小泉達かにこやかな顔をして戻ってきた。重いリュックから開放されて、背中には何も重しがないことがその顔を作っているのだと思う。「今日が海のキャンプだったら、このまま海に入って身体の汗を流したいよ」

小泉の言葉に全員うなづく。疲れて頭を縦に振らないやつも心の中では振っているだろう。汗は下着をビショビショにしたが、暑い陽射しはその下着を乾かした。だから身体も下着もガビガビ状態である。

「下に川を発見したから身体を洗ってきたらどうだ」

石山が小泉に言っていると、小泉はちよつと考え「いいよ、川の水冷たいだろ」と答えた。

『俺達は男である。これくらいの汗臭さは何ともない』そんな男達だから当然誰も川で身体を洗おうなんて言う奴はいない。

おこした火で飯盒の米を炊き、鍋の中にいるいろんな野菜をぶち込み味噌汁を作る。

食事を食べる時にはもう太陽は空に見えない。辺りはまだ明るい。がすぐに暗くなるということは誰にでもわかる明るさである。

食事が終わる頃にはもう真っ暗で焚き火を離れると本当に一寸先も見えぬほどの暗闇だ。

「食器洗いは明日の朝だな」

石山の言葉に「当然だよ。俺、おしっこしたくなつた」と僕は言う。と、テントの中から懐中電灯を取りだしテントを張った広場の道路を挟んだ反対側に行った。

「カワパン、俺も俺も」

石山が僕を追いかけてきて、二人で連れションをする。おしっこをするとなぜか、上を見上げたくなる。別に夜空を見ようと顔を上

げたものではなかったが、目にした夜空に思わず驚きの声を上げた。

「すげえ」

昨日、加山と一緒に見た夜空を思い出す。

僕の驚いた声に石山も空を見上げた。

「すげえ」

石山もまったく僕と同じ台詞をはいた。

「カワパン、懐中電灯消してみな」

すぐに懐中電灯を消すと、夜空には無数の星明かり、こんなにたくさん星を僕は生まれてから一度も見ることがない。昨日よりもっと凄い。

しばらく夜空を見上げてからテントの方に目を移すと、焚き火の周りだけは明るい、そのほかは真っ暗である。懐中電灯を点けなければ歩くのは一歩でも怖い。

「おい、みんな来いよ」

僕の呼びかけにゆつくりとみんな焚き火を離れて来たので僕は懐中電灯で足元を順々に照らす。

みんなが揃ったところで懐中電灯を消す。当然みんな驚きの声。

「何でこんなに星が出るんだ」

小泉の疑問に「きつと台風が日本には上陸しなかったけど、近くまで来たので雲をみんな吹き飛ばしたんだ。それに今日は新月だから。」本山は中学の先生らしく答えた。

「新月って」と出川の声。

「おまえ、習っただろう。月が出ていないっていうことだよ」

小泉の得意そうな声。

自然の暗闇はこんなに深く、空にはあんなに星があるということ。学校では絶対に教えてくれない。僕達のキャンプはたった二日間だけど、教科書とは違う自然の勉強をたくさん僕達に与えてくれた。一日中林道とはいえ、山道を歩いたのである。それも肩に食い込むリュックを担いで。星を見て感激したが、その感激の興奮より疲れの方が勝り、アツという間に僕達を睡魔が襲う。

天然クーラー

朝の仕度も二日目になるとだいぶ慣れてくる。キャンプ場だと水道が引かれている洗い場があり、トイレもあるがこの場所でも自然がトイレで川が洗い場なのでそれほど困らない。ただ川で洗う時は何人かが協力して手渡しで食器を運ぶということをしなくてはならないが、時間はかからないので朝の出発が遅くなるということはない。

「昨日もここ歩いたのにな」

「本当、もつたいないよな。あのまま行ったら今ごろキャンプ場でのんびりしてたんだぜ」

「こんなところじゃ、ウンコも出来ないよ」

テントを畳み、朝九時には出発したが、朝早いとどうしても馬力が出ず、ちんたら最後を石山と一緒に歩き、相変わらず二人でブツブツ本山の悪口を言っていた。それでも登山道入口に着く頃には元氣も出てきて、登山道の先頭を僕は歩くことにした。

細い登山道である。先頭とラストを歩く人間はしっかりした者でなくてはならない。ラストは本山が歩くことになったので、先頭は自分だと考え「俺が先頭行くから」とみんなに言ったが、誰も反対する者はいないので、先頭を力強く歩き始めた。

登山道の始まりは楽であった。道は狭いが別に道を踏み外しても草むらを踏むだけだから、何の危険もない。しかし、そんな道は最初だけで、そのうちにだんだん山の斜面のへりに出来た道を歩くようになりはじめた。

斜面の角度がきついとへりの道はとても危険である。足を滑らせて道を外れて落ちればただでは済まない。それに斜面の角度がきつくなればなるほど道幅も狭くなるので、危険度は増す。

斜面の道をしばらく歩いていると道が大きくカーブしているのが見えてくる。いわゆる山の谷側にある登山道だ。大きく曲がってい

る道は一直線ではないので、道としてはかなりの距離があるのだが、行先はすぐ近くに見える。つまりUの字に道が出来ているということである。そのUの字の下からモクモク霧が上がってくる。朝だから起きる現象なのか、上から霧が下がって来るのではなく、下から上がって来るのである。

今日も朝から暑く、あせもビツシヨリかいているので、その霧は僕達には冷たいクーラーのような感じで「わー、天然クーラーだ」と言って喜んだ。

涼しくなるのは有り難かったが、霧のために視界が悪くなり歩くのがとても困難になる。リュックを下ろして休むには余りにも道が狭い。道の左側は崖なので足を踏み外すと死ぬことはないと思うが、大ケガはしそうである。そんな訳で霧が多少晴れるまでリュックを担いだまま立って休む羽目になる。有り難いのか、迷惑なのか何とも言えない霧の来訪は3回続いた。

片方が切り立った崖の道は1時間あまり続き、こんな危ない道だったのかと思い、昨日あのまま進んだら、思い掛けない事故に遭ったかもしれないと少し反省した。

片方が崖の道を越え、しばらく歩くと十字路にぶつかり、標識が倒れていた。

「この標識どこに立っていたんだろう」

左の道は明らかに万二郎岳頂上に行く道ではないが、真つすぐか右なのか標識が倒れているためわからない。結局真つすぐ行くことにしたが、一時間後にはその道が間違っていることに気が付いた。いくら歩いても頂上に着かないからだ。おまけに上りがきつくないのも明らかに頂上に向かう道ではない。ここまでキャンプをしたところから3時間が過ぎた。昨日、あのまま登っていたら、丁度この辺りで日が落ちていた計算になる。こんな狭い道しかない所でてもじやないが、テントは張れない。昨日の本山の決断は正解だったとここまで来ると全員にわかった。

「まあ、あれだなあ。いわゆる亀の甲より年の功というやつかな」

と訳のわからないことを僕は石山に言ったが、石山も「そうだな」と言ったので、僕の言いたいことはわかったみたいだ。僕と石山は反省して、本山の悪口は言わなくなった。

ゴルフ場に到着

時刻は12時を過ぎたので、腰を下ろせる所を見つけ、朝にぎつたおにぎりを食べることにした。

「ちきしょう、やつぱ右だったんだよ。右行つてれば、今ごろ頂上で飯だったのに。この道どこ行くんだよ」

小泉がおにぎりを食べながら、ブツブツ言うつ「この道は迂回路だと思ふからきつと頂上に行った道とどこかで交じりあうと思ふぞ」と本山は小泉をなぐさめるように言う。

僕達は訳のわからない登山道をそれから一時間余り歩いた。歩き続けるとだんだん道が狭くなり、とうとうブツシュで埋もれてしまった道を歩くようになってしまった。ブツシュで埋もれているが道は確かにあるから、道に迷った訳ではない。

昼食を食べてから道は草や小枝に囲まれてはいたが危険性はないので、縦の列に差がつき始めた。僕と小泉が先頭に立ち残りの4人にかなりの差をつけている。

ブツシュに囲まれた道も余り長く続くようだったら、一度そこでみんなを待つつもりだったが、いきなり開けた所に出てしまった。

「おい何だよ、ここ」

辺り一面きれいな緑色。とても美しい所だ。

「カワパン、ゴルフ場だぞ、ここ」

小泉がそう言った瞬間、僕にもここがゴルフ場だとわかった。

何で万二郎岳の頂上を目指して登っていたのに、ゴルフ場に出るのだと思つたが、足はいきなり楽な所に出たので、元気よく歩いている。

「カワパン、あそこに休憩場があるぞ」

小泉が指差した所には小さな小屋があった。近づくところには売店兼休憩場だとわかった。ゴルフをプレーした人が途中で少し休む小屋だ。

「カワパン、水もらおうぜ」

小泉に同意し、二人で小屋に入り、すぐ「すいません、お水もらえないでしょうか」と頼んだ。

「あら、あなた達、どこから来たの」

ゴルフ場の中である。この小屋に来る人間はゴルフをプレーしている人間に限られているから、リュックを担いだ中学生が現れたらびつくりするに決まっている。

小屋の中には40代ぐらいのおばさんが二人いた。

「あの万二郎岳を登ってて、そしたらいきなりここに出ちゃったんです」

「まあ、どこから出たのかしら」

僕が出てきた場所を指差すと「あの七番グリーンの横から来たのね。そしたらフェアウェイをずっと歩いて来たんだ。ゴルフをプレーしてる人と会わなかった」

小屋のおばさんは早口で聞いてくる。僕と小泉は大きく首を振る。「まあ、よかった。ボールが身体に当たったら大変なことになるからね。でもゴルフコースの真ん中を歩いて来たんだから、気持ち良かったでしょう」

「もう、最高でした」

僕がにこやかに笑いながら大きな声で言ったので、二人のおばさん達は嬉しそうな顔をした。

「はい、お水」

早口のおばさんの隣にいた緑の帽子をかぶったおばさんが、僕と小泉に氷の入った冷たい水を渡してくれたので、僕達はその水を一気に飲み干してしまった。のどがカラカラだったので冷たくておいしい。

「そんなにのどが渴いてたんだ。僕たちカルピスも飲む」

早口のおばさんが、優しく聞いてくる。

「はい」

「はい」

僕と小泉が元気よく答える。

カルピスは大きな透明グラスに入れてくれたので、普通のコップの一杯半ぐらいある。ちゃんとストローも入れてくれたし、もちろん氷も入っている。今度は二人ともゆっくり飲んだ。

「あのキャンプ場に行きたいんですけど、どう行ったらいいんですか」

「キャンプ場……、今日はそこでキャンプなんだ、いいわねえ。キャンプ場はゴルフ場の隣だから、その目の前のところを向こうに真っすぐ歩けばすぐわかるわよ」

緑の帽子を被ったおばさんが、小屋から出て指を差して教えてくれた。

「あそこまではゴルフ場だから、はじっこを歩いていってね」
緑の帽子を被ったおばさんはそう言うと言いつつ小屋の中に入っていた。

僕と小泉は、小屋の外でゆっくりストローからカルピスを吸っていると、僕達が出たブッシュから本山を始め全員姿を現わし、ゆっくり僕達のいる小屋に向かってくる。

「おーい、今頃来たのか」

僕と小泉は、カルピスの入ったグラスを右手に上げ、嬉しそうに呼び掛けたが、みんなは疲れているのか返事もなく黙々とフェアウェイを歩いている。

「この先を行くと、キャンプ場だって」僕が指差して言うと「分かった」と、テンションの低い返事を石山がした。

僕達が嬉しそうにカルピスを飲んでいるのが、非常にムカついているみたいだ。本山もムカついた顔をして、フェアウェイを挟んで小屋とは向かい側のラフを歩き、通り過ぎていく。全員、僕達の近くにきて言葉を交わそうとしない。

「あいつら、怒ってるのかな」小泉が不安そうに聞く。

「カルピスぐらい飲んだっていいだろう」

自分達も飲みたかったら、この小屋に寄ればいいのに。

「カワパン、俺等も早く追っかけよう」

小泉はそう言つと、急いで残りのカルピスを一気に飲み、小屋の中に入りお礼を言つてリュックを担ぎ追いかけていった。僕もこれは早く追わないとまずいと思い、小泉と同じようにお礼を言つて追いかけた。

僕達がみんなに追いつくとすぐにキャンプ場の入口に着いた。本当にゴルフ場の隣にキャンプ場はあったので、さっきの小屋から数分しか歩いていない。

キャンプ場に入りリュックを下ろし一休みすると、本山をはじめ怒っていたみんなは、いつもの態度になっていた。みんなもカルピスを飲みたかつたが、全員で小屋に行き「カルピスを飲ましてくれませんか」なんて乞食みたいなこと恥ずかしくて言える訳がない。だからこそ、勝手にカルピスを飲んだ僕と小泉に腹を立てたのだろうが一休みしたら冷静になり、『しょうがないな』と怒るのにはからしくなったのだろ。

高原のキャンプ

「さつき、キャンプ場の受付の所で薪が売ってたな」

石山がそう言うので、二人で受付まで行ったら、薪の束が売店の横に山のように積まれていた。大きさは、50センチ位に切られた丸太がいくつにも割られているのが、縄で一束にくくられている。一束の太さは、電信棒を二まわり位大きくした太さだ。一束70円。けっこう高いが薪の束なんてすごくカッコよく見え、二束思い切って買おうと石山に提案したら、石山は「薪なんて拾えばいいじゃないか」と反対する。これが一束20円位なら石山も買うことに賛成しただろうが、ちよつと僕達の予想を超えた値段なので、買うのを躊躇しているのだ。

「おい、お前ら薪を買いに来たのか？」

いつの間にか、本山が僕達のそばに来ていた。

「そう思ってたんですけど、ちよつと高くてその辺の木を拾おうと思ってたんです」

僕の返事に本山は「よし、先生が薪を買ってやるから持っていけ」と気前よく言ってくれたので「四束いいですか？」と僕は思わず言うてしまった。本山は一瞬ひるんだが「まあ、いいぞ」と、無理した顔をして言った。

僕と石山は、両手に薪の束を持ってテントまで戻ったが、けっこう薪の束は重く、疲れた身体にはちよつとしたきつさがあった。しかし逆にその重さが嬉しくも感じた。獲物を仕留め持って帰る猟師の喜びみたいなものである。

キャンプ場に着いたので気が緩んだのか、テントを張り終え一息ついた時にはもう4時になっていた。今までてきぱき動いていたのに、だれかしらどっかに遊びに出掛けたりするし、テントを張るのものんびりやったので時間があつと言う間に過ぎてしまったのだ。もつとも今回のキャンプのゴールがこのキャンプ場なので、何事も

急いでやる必要は全く無いと全員思っているからゆつくりテントを張ったことに反省する奴はいない。今まで一生懸命動いていたのを、今度は逆にのんびり最後の場所を味わおうとしているのだ。明日の朝には、ここからバスに乗って帰らなくてはいけないのだから。そんな気分だから、夕食作りもゆつくり支度をした。

残った食材は明日の朝食分を残し、全部使い切ってしまう。飯盒に入れる米も少し多めにした。このキャンプ場は今井浜のキャンプ場より全てにおいて設備が整っていたので何をするのにも気持ちが良い。

静かな湖畔の森のかげからもう起きちゃいかかとカツコーが鳴く――

このキャンプ場に湖はないが小さな池はある。そして森の中だからこの歌のイメージそのままでつい鼻歌がでてくる。今までキャンプした場所はただテントを張ったという感じだったが、このキャンプ場はまさしく夏高原の涼やかなところで、ちよつとリッチな気分になさてくれる。高原と言っても原っぱではなく森の中だが、太い木々に囲まれている方が、いかにもキャンプという感じで、僕達の気分は最高に高揚していた。

「おい、本物の薪だぜ」小泉は嬉しそうにそう言った。

食事が終わるとまだ薪が余っていたのでキャンプファイヤーをした。ちゃんとしたキャンプ場、ちゃんとした薪によるキャンプファイヤー、昨日のキャンプも将来大人になったときつといい思い出になるのだろうが、今は断然こっちの本物のキャンプがいい。

燃えろよ燃えろーよ 炎よ燃えろ

隣のテントでもキャンプファイヤーをやっており、そこから歌声が聞こえてくる。遠くの方でも歌声はする。そうだよ、これだよ、この楽しい雰囲気はキャンプだよ。これなら加山の別荘でやったバーベキューにも負けないのに、立花達、絶対こっちの方が楽しかったのに。この後、本当にこの歌のとおりなるとは思わなかったが、隣や遠くで聞こえる歌声には女の声もする。その声を聞くと、僕達

のキャンプにも女がいたら楽しかったのにと悔しくなってしまう。

キャンプファイヤーの炎が段々小さくなる。明日のための薪を確保したら、もうこの炎の中に入れる薪はない。

ホー、ホー、

ふくろうの声だ。初めて聞く。

「おい、今の聞いたか」

石山が言うが、みんな『何言ってるの』って顔をしている。

「ふくろうの鳴き声だよ」石山が言う。「聞こえないよ」と小泉があっさり言う。

「ふざけんじゃねえよ。何かの聞き間違いだよ」と、西山も言う。
『いや、俺も聞いた』と僕は口に出さない。なぜなら、炎がだんだん小さくなるにつれて、僕の身体のエネルギーも段々小さくなってしまうからだ。

「俺、もう寝るよ」

僕はそう言うのとテントの中に入り、一番奥の寝袋にゆっくり入っていった。急に疲れが出てきたのか、寝袋に入るともう身体が嬉しそうに、全ての力を抜いている。

「おい、蚊取り線香は出川の番だぞ。最後にちゃんとテントの入口に置いとけよ。蚊が入ってくるからな」

石山の声が涅槃の近くで聞こえているようだ。

みんながガサガサやっているところまでは意識があったが、その後は深い眠りに僕はついた。

テントが火事

「カワパン、起きろよ、カワパン」

誰かが僕の耳元で激しい声を出す。

『誰だよ、眠いなー』僕の意識はほとんど向こう側にいつている。

「カワパン、起きろ、火事だ」

『火事………』

「カワパン、火事だつて」石山の声だ。

火事………まだ半分は意識が向こうから戻ってこないの、回路がつかない。

「カワパン、目を覚ませよ、火事だ」

石山の必死の声………目を開けて見る。渦を巻いた煙がテントの天井をうごめき回っている。

『ああ、火事が起こったのか』。

「みんな、早く外に出ろ」

本山が外で怒鳴っている……『眠い、火事は消したんだろ、そんなに慌てなくてもいいじゃないか』。

「カワパン、早く起きろ」

石山が強引に僕を寝袋から引つ張り出す。上半身を嫌々起こすと二つ隣りに寝てた細井も今やつと起きたようでのんびりと寝袋から出ていたところが見えた。

「もう、消えたんだろ。俺眠いから、寝るよ」

テントの外では必死になって本山が「早く、外に出ろ」と壊れたレコードのように繰り返し返している。

「カワパン、何言ってるんだよ。外に出るぞ」

天井に煙は充満していたが、火は見えないし、寝ていれば煙を吸うこともないと考えた僕は、そのまま寝る方を選択したかったが、石山が強引に手を引つ張りテントの外に出そうとするので、力の抜けきった僕にはそれに逆らう力はなく、しぶしぶ外に出た。

テントの外に出ると風が頬をうつ。涼しいというより、ちょっと冷たい。

テントの目の前で本山をはじめ全員腰を下ろし、茫然とした目でテントを見ている。その後ろには、いつの間にか集まったやじ馬達、ワイワイ何やら好き勝手なことを喋っているが、何を言っているのかわからない。

僕も小泉の隣で腰を下ろしテントを見た。黒い煙がテントの尖った先端から、モクモクと勢いよく出ている。火は消えたのに何でまだこんなに煙が出るのだろうと疑問に思うが、それ以上にこんなに煙がテントの中に充満していたのだとびくりした。最後まで中で寝ようとしていた自分に恐ろしさを感じる。

恐ろしいと思った瞬間、僕の意識は完全に戻り冷え冷えとした冷気を身体全体に感じた。

「どうも蚊取り線香の火がテントに燃え移ったみたいだ」

僕の目がちゃんとしたなと石山もわかったのだろう。火事の説明を冷静にしてくれる。

テントに火が移ったのを一番初めに気付いたのは本山で、急いで火を消すと同時に大声を出し、みんなを起こしたそうである。そんな騒ぎ全然気付かなかった。疲れがひどく深い眠りについていたようだった。もし、誰もいなく一人でテントに寝て、火事にあつたら、僕は死んでいたことになる。危なかった。

「出川、お前ちゃんと蚊取り線香を置いたか？」

小泉の問い詰めに「置いたよ。俺はちゃんと決められた場所に置いたぞ」と出川は答えた。

原因は蚊取り線香の火だと推測出来たが、なぜ、蚊取り線香の火がテントに移ったかは、わからなかった。しかし、わかる必要もなく誰かの足か手が誤って蚊取り線香を倒したのだろうと予測は出来、その犯人を探したところで寝ていた時のことだから罪もなく結局みんなで決めた蚊取り線香の場所が悪かった訳だから、責任は全員にあると言えるのだ。

煙がテントの中から全て抜けるのには意外と時間がかかった。目はすっかり覚めている。

「さあ、寝よう」

煙が全く見えなくなった時、本山が力なくつぶやく。

テントの入口は焼けただれ、三角の壁が完全に無くなっていた。

そして、そこから外気がテントの中に入り、というより、ほとんど外で寝るのと同じで外気も内気もない。ただ屋根があるという状態だったので、寝袋から出ている顔がひんやりしている。これは簡単に眠れないなと思ったが、5分後には簡単に眠っていた。

本山殴る

次の日、朝起きた時気分は最低であつたが、5分もすると普通の気分に戻っている。燃えたテントは本山の卒業した大学から借りてきたので、テントに対し誰も責任を問われない。ただ一人本山を除いて。だから、5分もすると普通の気分には僕はなつたが、それは本山を除いて全員そうみたいだつた。

ニコニコしながら、「昨日は凄かつたな」「カワパンと細井ずつと寝てるんだもの、お前らおかしいよ」「ふざけんじゃねえよ、お前ら」なんて、軽口を叩いているのだから、誰一人本山が暗い顔をしているのを気付かなかつた。

キャンプの最終日、もう何の予定もない。朝食を食べ、テントをたたんだら、バスに乗って帰るだけである。そのため、全てのことをのんびりやっていた。今までせわしく動いていたのと対照的に、最後のキャンプの時間をかみしめていた。

「カワパン、このキャンプ場、温泉があるぞ」

朝食をとっている時、小泉が口を激しく動かしながら、言ってくる。昨日の夜、あれだけのことがあつたのに逞しい奴だ。

「温泉があるのか、飯食つたら行こうか」

よくみんなの顔を見ると、ススだらけである。昨夜の火事で顔にススが付いたものと思われる。

「石山、温泉行こう」と僕は隣の石山に言い、小泉は隣で細井を誘い、石山は隣の出川を誘って、食事が終わる頃には、みんなの頭の中は温泉でいっぱいになった顔をしている。

「先生、温泉があるんですけど、入ってもいいですか？」

食事が終わった時、本山に聞くと「温泉か」と少しつぶやいた後、「まあ、いいけど。テントをたたみ、帰る支度を全て終わらせてかな」と、力の無い声で言つた。

「先生は、入りませんか？」

「先生は残っている。みんなで行ってこい。ただ、バスの時間には遅れるなよ。１０時半だぞ」

「わかりました」と、そばで聞いていた全員元気よく返事をし、俄然やる気になって、食事の後片付け、帰り支度をしたが、本山はうつろな目ですつとテントを見ていた。

当初の予定では昨日一日をキャンプ場で楽しむ予定だったが、山登りが思ったより時間がかかってしまい、キャンプ場で楽しむ時間が無くなってしまったので、温泉はこのキャンプ場で楽しむ唯一のイベントになってしまったそんなわけだから、浴槽で温泉をかけてはしゃぐは、潜ぐりっこをし、誰が一番息を止めていられるかとか、身体を洗うのをほつといて遊んでいた。

わいわいしゃべりながら笑顔いっぱい温泉を出ると、本山が恐い顔をして待っていた。

「お前達、バスの時間は１０時半だと言っただろう。今１０時半なんだぞ。今からどんなに急いだって１０分はかかる。なんで約束の時間を守らないんだ」

本山は僕達を横一列に並ばせ、怒鳴った。

本山の怒鳴り声が止むと、ミーン、ミーンと蝉の声が響いてくるが、本山にその声は聞こえないだろう。

本山は一番はじに立っている小泉から順々に平手を頬に打った。

やさしい平手打ちではないが、そんなに痛くはない。最後に僕を平手打ちした後、がつくり肩を落とし「もういい、帰る支度をしろ。」

先生は帰りが遅れたので電話をしてくる」と寂しそうな背中を見せ、森の道を歩いていった。

「おい、本山イライラしていないか？」

小泉が何にも考えないで聞く。

「当たり前だろ。あれ大学から借りたテントだぞ。入口まるまる焼いたんだから、頭の中はどうしようって、いっぱいさ」

石山が無神経な小泉の発言にあきれ顔で答える。

「ふざけんじゃねえよ」

出川は意味なく意味がわからないことを言うが、誰も出川の言葉をまともにとつていないため、無視している。

「でも、ぶたれるとは思わなかったな」僕が言うと、「先生だって人間だぜ」石山が大人ぶったことを言う。でも確かにそれは正解だ。僕達は本山を先生だと思い接しているが、社会人で考えればまだまだ新米先生で、大人の1年生みたいなものだ。人間的成長はこれから的人生で作っていくもので、今はまだ始まったばかりなのだ。僕達の前では一生懸命先生として接してくれたけど、テントが燃えたことで、一個人になってしまったのだろう。

今日は帰るだけだからバス的一本や二本僕達は遅れても全然構わないと思っていた。大体このキャンプ自体計画通りに行なわれたことはない。また、計画通り全て行おうとしたら無理が生じ、楽しくないし、事故が起こるかもしれない。昨日までの本山はそのところがよくわかっていて、僕達の好きなようにやらせてくれていたし、僕達の行動に文句を言うことは無かった。ただ、危ないことが起こりそうな時だけ、僕達を注意したり計画の変更を指示しただけで、基本的には僕達の行動を僕達に任せていた。だから、10時半のバスに乗り遅れたって、昨日までならそれもよしとして、次のバスに何も言わず乗っただろう。

加山が海に落ち行方不明

リュックはキャンプ場の受付に預けているので、そこに向かっているが足取りは重い。リュックを担いだらもうバスに乗るしかないのだ。次のバスまでまだ四十分もある。まだまだこの辺を遊び歩きたい。キャンプ場のまわりは面白いことがいろいろありそうだが、もうそれも確かめられない。昼食をキャンプ場で食べて午後出発してもいいのだが、リュックを担いだらもう帰るしかないだろう。

本山があんな状態でなければ、「まだ、もう少しいきましょうよ」と言えば、本山も黙ってうなずくだろうが、あんな状態だと黙って帰るしかない。

受付でリュックを受け取るとみんな黙りながらバス停に向かい、バス停に着いても「ふざけんじゃねえよ」と出川が小さな声でつぶやく以外誰も喋らない。祭りの後の淋しさを全員感じているのだ。

下を向いて本山が来るのを待つ。

下を向いているといっても時々顔を上げる。何度か目の顔を上げた時、本山が走ってこちらに来るのが見えた。何をあんなに急いでいるのだろう。バスの時間はまだまだあるのに。

本山はハアハア言いながら、僕達の前に来るとすぐ何かを言おうとしているのだが、ハアハアという息づかいが強く言葉が出てこない。それでも何とか口を開く。

「大変だ、加山が海で行方不明になった」

本山が何を言っているのか、きつと誰も理解しなかったと思う。僕をはじめみんなポカーンとしていたからだ。

「昨日、加山がヨットに乗っていて、海に落ちたらしいんだ」

本山の次の言葉でやつと事態が飲み込めた。

「それでどうなったんです？」

「加山は見つかったんですか？」

「まさか死んだという事はないですね」

みんな一斉に本山に質問をぶつけるが、みんな一斉に喋ったので、本山も何を答えていいのかからず「今のところわかってるのは、それだけだ。先生はこれから白浜にある加山の叔父さんの別荘に行こうと思うから、お前達はバスに乗って修善寺に行き、帰れ」とみんなの質問を無視し答えた。

加山が海で行方不明。意味はわかるが現実感がない。僕の今まで生きてきたなかで、知りあいが大病する、事故に遭う、死んでしまふ、ということはほとんど無い。敢えて上げれば、小学2年の時、クラスのかずえちゃんが、バス通りを斜めに渡ろうとして車にぶつかり腕の骨を折って全治一カ月。小学3年の時、担任の村上先生に赤ちゃんが出来て一週間入院。そして僕が一番上の兄が、オートバイで倒れて足の骨を折って二カ月ギブスをしていたくらいだ。

加山が海に落ちて行方不明になったということはそれらの事故とは比べものにならないほど重い。昨日海に落ちたならもう一日余り加山は海の中にいることになる。大人の体力を持ちそれに何日だって泳ぐことが出来ると聞いたことがある加山なら、たった一日ぐらい海の中にも死ぬことはあるまい。

本山はバスの案内所に行き、東伊豆に行くバスがあるか調べにいった。

「俺、本山と一緒に白浜に行くよ」

石山にそつと言うと、石山も一緒に行くと言う。みんなにも白浜に行くと言うと、小泉も行くと言い、細井も行くと言ったので、迷っていた出川も行くと言った。

本山が戻ってくると全員で「ついでいきたい」と言ったら、本山も「わかった。バスはすぐ出るみたいだから急いで切符を買おう」と言った。

バスに乗ってから段々事の深刻さが襲ってくる。それは僕だけでなく全員同じみたいでみんな言葉数が少ない。普段ならバスの外の景色を見ながらあーだ、こーだ喋ったり疲れた奴は眠ったりするのだが、みんな一様に口を閉じ、目を余り動かさない。

頭の中は冴えている。スクリーンとしている。何でこんなに頭の中が冷静で落ち着いていられるのか。みんなに今、僕の頭の中を見られたら、友達のことを心配しない非人に思われるかも知れない。

バスの窓から見える景色も凄くはつきりいつもより見える。色がとても鮮やかに見えるのだ。こんな時は動揺して加山の安否だけを願うのが普通なのだろうが、いろいろなことを考えてしまう。もちろん加山の安否も一番考えているのだが、加山が死んでいたらどうなっちゃうのだろうとか、水口はもうこのことを知っているのか、もし加山が死んだら葬式には何を着て行けばいいのだろうかなんて、本当にばち当たりな事も考えてしまうのだ。

加山のおじさんの別荘

加山とは2年の夏から親しくはしていなかった。ただキャンプ初日、加山から褒められ、僕と仲間になりたいみたいなのを言ったので、これから僕と再び特別な仲になったかもしれない。3カ月後には、あの加山の様子なら、何かしらの関係になっていたであろう。でも今はまだ2年の夏の前と同じ関係にもなっていない。ただ、加山という人間の大きさには憧れているし、又、仲良くなれたら素敵なことだとはわかつている。

僕の複雑な心境は、いろいろなことを頭の中に浮かばせる。これが石山なら、単純に身の安否だけを考えていたかもしれない。

「カワパン、今井浜のキャンプの時、加山達が訪ねてきたけど、あれカワパンが呼んだのか？」

バスの中で隣に座っている石山が小さな声で聞いてくる。

「いや、加山が遊びに来たいと言ったんだよ」

「ふーん、そうか。あの時、加山と何話してたんだ？」

「加山、俺達と仲間になりたいとか言ってたさ、そんなこと話してた」

僕は、僕と仲間になりたいとは言わず、僕達と仲間になりたいと嘘を言ってしまった。そっちの方が石山も加山に対し、悪感情は持たないと思ったからだ。

「そうか、加山、俺達の仲間になりたかったのか。何となくわかるな」

石山はしみじみというと、また口を閉じた。

バスは1時間で、僕達の登山の出发点伊豆熱川の駅に着いた。

僕達はまっすぐ万二郎岳を目指し歩きそこからゴルフ場にたどり着いたが、大まわりに舗装された道が天城高原ゴルフ場まで運行していたのだ。

一泊二日かけてやっとたどり着いた所から1時間で出発点に戻っ

た僕は、そのまま伊豆急に乗り下田に行った。昼食の時間は過ぎていたが誰も飯のことは言わない。

下田の駅に着き、本山は前もって聞いていた加山の叔父さんの別荘の住所を、タクシーの運転手に見せる。タクシーに乗るなんて、僕は生まれて初めてである。

「川上、お前は石山と小泉と一緒に後ろのタクシーに乗れ。ちゃんと住所も言ったし、先生のタクシーを追いかけてくるから大丈夫だ」と本山は言う、出川と細井を後ろの座席にさせる。

トランクにはリュックが二つしか入らなかった、細井と出川の間にリュックを一つ入れていた。僕達も同じようにリュックを載せると、急いでタクシーに乗った。初めて乗るタクシーに、心はしゃがない。

加山の叔父さんの別荘に近づくにつれ段々胸に圧力がかかってくる。息をするのも苦しい。タクシーは重苦しい雰囲気のをせ走る。

10分位経っただろうか、白浜の海岸が見えてきた。

国道が白浜の海岸に平行して走っている。その国道を直角に山に登ってすぐのところに加山の叔父さんの別荘があった。

真っ白な家だ。タクシーを降りると下に白浜の海がきれいに見える。歩いて数分で行けそう。

白浜の海はエメラルドグリーン、砂浜はそれこそ白くて、僕はこんな美しい海を見たのは初めてであった。今井浜と白浜はすぐ近くで車なら10分位で行くことが出来る。それなのに全然海の色も砂浜も違う。立花達も当然この海に感激したのだろうか、全然そんなことは言っていなかった。

ゆっくり話せば海の色の話や砂浜の白さの話もしたかも知れないけど、立花達にはヨットとバーベキューが一番印象に残り、それを一番に僕達に伝えたかったのかも知れない。それに夜になって僕達のキャンプ場を訪ねたのだから、今井浜の砂浜も海も色がついておらず、同じような海だと勘違いして、すぐに言う必要はないと思ったのかも知れない。

もし僕達もキャンプに行かず加山の別荘に来ていたら、この海を何のわだかまりもなく感動出来ただろう。このちょっとした高台からずっと海を眺めていても退屈しないし満足出来たと思う。

みんなもこの海の色を当然見ているのだが、それに対し何か言う者はいない。

タクシーからリュックを降ろすと本山は別荘のチャイムを押す。扉のドアが静かに開くと本山は「上原中学の教師で副担任の本山です」と静かに言うと、応対に出た人は「中にどうぞ」と僕達をリビングに案内してくれた。

玄関の広さに普段の状態ならびつくりするだろうし、リビングにはもっと驚くだろう。照明はシャンデリア、ソファは柔らかそうな皮で包まれている。壁には何やら高そうな絵が掛っているし、食器棚には見たこともない皿やティーカップがきれいに飾られている。大きなテレビから音がしているので見てみると色がついている。

カラーテレビだ。

新聞のテレビ欄にカラーという文字が番組によってついている。

僕はカラーテレビが見られるのかと、そのカラーとついていた番組にチャンネルを合わせたが全然色はついていなかった。カラーテレビという値段の高いテレビを買わなければ、色のついた番組が見れないと知ったのはだいぶ経ってからである。

ソファの下には豪華に見える絨毯。きつと値段が高くて高価だと思う。台所には大きな冷蔵庫が見える。あれはきつとアメリカ製だ。日本製であんな大きな冷蔵庫は見たことない。大人四人位いないと運べそうもない大きさに見える。

リビングに入いると部屋の中が涼しい。扇風機による風の涼しさではない。万二郎岳を登った時、下から沸き上がってきた霧の涼しさだ。あの時は天然クーラーであつたが、これは本物のクーラーである。

「カワパン…カワパン達も来たのか」

フカヒレが僕達を見て近寄ってきた。

いきなり別世界に入ってしまった、オドオドしていた僕は、フカヒレの姿を見てホッとした。

「今、キャンプ場から来たんだけど、どうなんだ？」

僕がそう聞くと、本山も状況が知りたくて、フカヒレのところに来た。リビングの中は20〜30人、人がいたので、本山も取りあえずどこに行くか迷っていたみたいだ。

「まだ、見つからないんだ」

フカヒレが喋り始めた時、ホゾ、神崎、前原、熊田、土屋という加山の別荘に遊びに来ていた仲間が集まってきた。水口と立花はどうしたのかとリビングを見回すと、暖炉の横で頭を垂れ、肩を丸めている水口と、その隣で水口の肩に手を置いて慰めている立花を目にした。

「俺達も今日の午前中に来たんだ。加山が海に落ちて行方不明になったと知ったのは、昨日の夜九時頃で、取りあえずこの別荘に遊びに来た奴に連絡して、今日の朝一番で来たんだよ。カワパン達と別れて次の日俺達ヨットに乗せてもらったんだけど、その時は、少しは波がたっていたけどそれほどひどくはなかった。だから、みんな楽しく喜んで家に帰ったけど、加山はこの別荘に2週間いる予定だと言うから、下田の駅で別れたんだ。そして、昨日いつものように加山の叔父さんと下田港からヨットに出て、午後の2時頃海に落ちたらしいんだ。

台風は日本に上陸しないで九州の沖の方に行っただけど、昨日は結構波がたっていて、海は荒れていたらしい。それでも加山はしょっちゅうヨットに乗っていたらしいから、まさか海に落ちるなんて…。悪いことに昨日も結構暑かっただろう。思わず救命胴衣を外して汗を拭っていたらしく、そこに波が当たってヨットがドーンと傾いた瞬間、海に投げ出されたらしいんだ。

昨日の夜中のニュースと今朝のニュースでもそのことがテレビで流されたから、もうほとんど学校の連中もこのことは知っていると思う。カップと校長ももうすぐここに来るらしい。

今、テレビついてるじゃん。情報があれば電話がすぐ来ることになってるんだけど、一応テレビのニュースもつけておいた方がいいと言っこととでつけてるらしい」

フカヒレがひと通りの説明をすると本山は僕達のそばを離れ、リビングの中に入っていく、知らない大人のところに近づいていった。フカヒレからひと通りの説明は受けたが、他の情報も知りたくてホゾや神崎からも話を聞いた。それによると、加山のヒゲの叔父さんはヨットだけでなくクルーザーも持っていたらしく、そのクルーザーで加山を探しているらしい。そして、加山の両親は下田警察署で安否を祈っているらしく、今この別荘にいるのは、加山の父の妹の叔母さんがいるらしい。

この別荘にいる他の大人達は加山の親戚、加山のお母さんの親戚、ヒゲの叔父さんの会社の社員、そして警察と消防署と役場の人間も、一人ずついるそうだ。

本山は大人達の中を歩き回り、加山の叔母さんをやっと探して、あいさつをしている。

この別荘にいる人達は、ただ加山が助かることを祈って待つしかなく、時々鳴る電話のベルにビクツとなり耳をそばたてる。

加山はまだ死んだとは決まっていな。死んでしまったなら、自分の気持ちに浸り、ただ、頭を下げて嘆き悲しむこともいいかも知れないが、今はまだわからないのだ。ただ、この別荘で連絡を待ち、重苦しい雰囲気の中で加山の無事を祈っているだけというのは、僕にとってもとても苦しい時間であった。

漁船で搜索

加山を助けるため、今なら何か出来ないかと考えた時、急に海に探しに行こうと閃いた。

「石山、俺、加山を探しに行こうと思うんだけど、キャンプで残ったお金あったら出してくれよ」

閃くとすぐ石山に相談した。

「カワパン、海に行つてどうすんだよ」

「船を出して海を探すんだよ。船を借りるとなるとお金がいるだろう」

「ボートだと無理だぞ」

「そりゃあそうだよ。漁船とかエンジンの付いてる船を借りるさ」

石山は承知すると小泉、細井、出川を呼び、僕の言ったことを説明し、みんなからキャンプで残ったお金を集めた。お金は僕のお金も入れ全部で1万1500円集まった。

「今から、カワパンと俺とで行くから、本山やみんなには上手く言つてくれ」

石山はそう言う僕に「さあ行こう」と言い、さつさと玄関に向かった。石山も僕の提案に賛同し、自分も一緒に行くとすぐ決意したのだろう。ただ、待っているより、動いていた方がいいのは、石山も同じだったのだと思う。

別荘の玄関扉を開いて外に出るとホツとする。さっきまでの重たい気持ちはどこかに素っ飛んだ。加山を助けようということだけ考え動くのは、エネルギーが湧いてくる。別荘から海に向かっての下りの道を走っていったら、そのまま海岸まで着いた。海岸に隣接している国道は車がびっしり詰まっついていて渡るのには苦労したが何とか上手く擦り抜けた。

海岸は海水浴客で賑わっている。みんな楽しそうな顔をしているが何かそれが今の僕には不自然に見える。

「すいません。この辺で船を借りる所ってありませんか？」

取りあえず目についた海の家に入り、そこのおばさんに聞くと「あそこにあるよ」と手漕ぎボートを指差した。

「違うんです。エンジンの付いた船を捜しているんです。友達が海で行方不明になって、それで海を捜そうとしているんです」

いい加減に聞いていたおばさんは、僕の必死な声と行方不明の言葉に反応し「ちょっと待ってて」と言い、店の奥に入っていた。

そしてすぐに男の手を引っ張ってきて「あなた、ほらテレビのニュースでやってたでしょう。中学生がこの辺で遭難したってこの子達同級生みただけど、船で探しに行きたいんだって」と早口でそのおばさんのだんなと思われる男に言った。

「そうか、そりゃあ大変だ。でもこの海岸に船はないぞ。隣の港か下田の港に行かなくちゃな。そうだ、ちょっとここで待ってる」と言つと、その男は海の家を飛び出し、道路の方に駆けていった。

海の家のおじさんがいない間、海の家のおばさんは僕達にサイド―と焼きとうもろこしを渡し「食べなさい」と言ってくれた。

とうもろこしを食べていると、海の家のおじさんは、真っ黒に焼けしわくちやの顔をしたこれこそ海の男の見本というような、歳はとっているけど年齢がわからない顔の男を連れてきた。

「おい、坊主達。このおじさんにさっきのこと言つて頼んでみな」海の店のおじさんに言われ、僕はとうもろこしを思わず口から離した。

本当にさっきまではお腹が空いていなかったのだが、加山を助けるのだと加山の叔父さんの別荘を飛びだし一生懸命走ったら急にお腹が空いたようで、海の家のおばさんの出した焼きとうもろこしがとてもいい匂いがして、思わず食らいついてしまった。

「あの…」

焼きとうもろこしを食べるのに夢中になっていたところに、いきなり説明しろと言われたので、頭が真っ白になっている。それに連れてきた男はいかにも恐そうだ。

「えーと」と僕が口ごもっていると「友達が昨日海に落ちて行方不明なんです」と、石山が喋りだした。

「僕達なんとか友達を助けたいんです。それで、船を捜してるんです」と石山が喋り、海の男の反応を見た。全くさつきと変わらず口を真一文字に結んでいる。

「加山君は、泳ぎが上手いんです。一日や二日なら泳げるんです。だから、まだ海の上で泳いでると思うから、何とか助けたいと思ってるんです」

僕は石山に続き頼んだ。喋った後、ちらつと海の男を見たが、顔は変わらない。

「あの、これ僕達の全財産です。このお金で走れるだけ船を出してくれませんか？」

僕はそう言いながら、ポケットから千円札を１１枚と百円玉５枚を出して見せた。

「ついて来い」

海の男は初めて口を動かした。動かすと同時に踵を返しさっさと歩いていく。

海の家のおじさんは「ついていけ」と言ったので、サイダーの空き瓶とともろこしの芯を店に置き、慌ててついていった。

海の男はどんどん歩く。国道に出ると海を右手に見ながら国道を少し歩き、また、海に向かって歩くと、漁船が五、六隻つないである小さな漁港に着いた。

海の男の歩くスピードは変わらない。僕達も必死についていく。海の男は変わらないスピードで漁港に着くと、そのまま船に乗り、隣りの船とつながっているロープを手際良く外していく。

船は大きくは無い。全長十メートル位だろうか。操舵室は天井があるが後の部分は吹きさらしだ。

僕と石山は埠頭で立ち尽くしていると、「早く乗れ」と海の男が命令する。海の男の声は恐い。僕と石山は、慌てて船に飛び乗った。

僕達が船に乗ると海の男はロープを二本持ってきて、僕と石山の

腹にそれぞれ結び、片割れのロープを船に結びつけ「このロープの範囲でしか動くなよ」と言った。

このロープは救命胴衣の代わりなのだろう。これなら間違って海に投げ出されても船から離れないので安心だ。

海の男が操舵室に行くと、すぐにエンジン音がして船がゆっくり埠頭を離れていく。そして湾を越えると波がでてきた。船は波を乗り越える度に大きくたてに揺れる。しばらく船が海の上を走ると、陸地が段々小さくなる。

「友達の名前を呼べ」海の男が叫ぶ。

エンジン音がうるさく船の上では大声を出さないと声が通らない。僕と石山はエンジン音に負けないぐらい大声で、「加山ー」と、叫んだ。

左舷には石山、右舷には僕、お互いが半分ずつ受け持ち、叫びながら海面を凝視する。沖に出ると波も少し緩やかになったが、それでも波が邪魔して海全体を見るのは難しい。これが風の日なら一面見渡してすぐ次の場所に移動出来るだろうが、波があるとそうはいかない。

「加山ー」

「加山ー」

果てしなく僕と石山の叫び声は続く。すると遠くの方にキラリと光るものが、僕は急いで海の男の所に行く。ロープが身体にくるまっているが、僕達の場所から操舵室までは5歩も歩けば着くので問題はない。

「おじさん、あそこに光るものが」

僕が指差すと船は方向を変えあつという間に光るものの所まで行ったが、それはただの流木であつた。がつくり肩を落とす僕と石山その後、海のおじさんが6個、僕と石山が2個漂流物を見つけた。

流木、浮袋、ビニール、段ボール……ズボンを見つけた時はみんな色めきたつたがその代わりズボンとわかった時の落胆は他の漂流物以上だった。

船を走らせて1時間以上になる。加山のおじさんの別荘を出たのが2時前だから、きつと今は3時半から4時位だと思う。ぎらつく太陽はほんの少しだけど、ぎらつきが少なくなった。しかし、僕達の疲労は極限まできている。

海のおじさんがビールを僕達に渡し「飲め」と言ったので、どの渴きには勝てず飲んでみた。とても苦い。こんな状態でなけりやあ一口しか飲まないだろうが、石山と二人で一本飲んでしまった。石山は旨そうにビールを飲んでいる。その飲み方は飲み慣れているという感じだ。喉が潤うとまた声に力が入る。

「加山―」

「加山―」

遠くに白い船が見えるとその船はどんどん大きくなる。どうやらこっちに向かつてきているみたいだ。

ブルルルル―、ジャー

エンジン音と波をかき分ける音がどんどん近くなる。白い船は僕達の船のすぐ近くに来了。真っ白なクルーザーだ。こっちの漁船に比べると明らかにカッコいい。西洋の白亜の御殿と僕の家位の違いがある。クルーザーから男が大声を出す。

「この辺で男の子が流れていなかったですか―」

よく見ると加山のヒゲの叔父さんだ。あのクルーザーはヒゲの叔父さんのクルーザーで加山を探しているのだ。

海の男は船のエンジン音を小さくして「こっちも捜しているんだ―」と叫んだ。

クルーザーのエンジン音も小さくなった。

「どういことです」

ヒゲの叔父さんの問いに「こいつらに頼まれた―」と海の男が答える。

船が止まっているので僕と石山はデッキにつかまりながら立ち上がり、ヒゲの叔父さんにおぎをした。ヒゲの叔父さんは僕達の顔をじっと見て「ありがとう」と言い、エンジンの音を大きくして、

あつという間に去つていった。

それから一時間位の間に漂流物を全員で4つ見つけたが、加山の姿は見つけることが出来なかった。

「加山―」

僕と石山の声はすっかりかすれ、喉が痛くなっている。あれからもう一本、海の男はビールをくれたが二人とも少しずつ口に含むことにした。ビールで酔っ払うことを恐れたためだ。

もう時刻は6時を過ぎているだろう。西に浮かぶ太陽がそれを教えてくれる。太陽が、ある角度から下に落ちていくと、いきなり海が見づらくなる。

「もう、今日はここまでだな」

太陽が傾いてきたことと僕達の疲労を見て、海の男は優しく言う。初めて聞く海の男の優しい声だ。それはきつと慰めるつもりの声でもあつたに違いない。

「でも港に着くまでずっと捜します」

かすれた声で僕が言う。「わかった。ゆっくり走るから、よく見ろ」とまた優しく言うてくれた。

船はゆっくり海の上を走る。大分遠くに来たみたいで、なかなか出港した港には着かない。太陽がだいぶ西の空に落ちていく。空の色が静かに変わっていく。波がいつの間にか出てきた。

「加山―」

僕も石山も涸れた声を振り絞つて出すが、段々それが涙声になつていく。諦めが涙となつたか、悔しさが涙となつたか、僕にはわからないし、きっと石山もわからないだろう。

船が小さな漁港に着く頃には、太陽が今にも沈みそうな位置にあり、空がだいたい色になっていた。西側だけでなく空一面がだいたい色なのだ。

「もう誰かが見つけてるかも知れないぞ」

海の男が優しく僕達に言う。確かにそうかも知れない。今頃にこやかな顔をした加山が別荘で冒険話をみんなにしているかも知れな

い。まあそこまではなくてもどこかの病院で疲れ果てて寝ているかも知れない。

船が漁港に着くと、僕はポケットからお金を全て手に持ち海の男に渡そうとしたら「そんなのもらえる訳ないだろ。海で遭難した奴は仲間だ。仲間から金はもらえねえ」と海の男は言い、お札を持った僕の手を押し返した。

船から降り、海の男にお礼を言うと言海の男は、「あきらめるなよ。お前達があきらめなければ、友達もあきらめねえ」と、ゆっくりと船の上から僕達に叫んだ。再び僕は涙が出てきた。

涙が出てくる理由なんかわからない。身体は波しぶきをかぶつて、ずぶ濡れである。乾いた道路を歩くと濡れた足跡がつく。

石山とは声がかすれているということもあって、一言も喋らない。ヒゲの叔父さんの別荘に着く頃にはすっかり陽が落ちてわずかな明かりだけが残っていた。力なく別荘のチャイムを押し玄関ドアを開けると、フカヒレや小泉をはじめ、たくさんの人が出てきた。

「カワパン、どうだった？」

小泉がすぐ声をかけてきたが、僕と石山は首を横に振った。

「あなた達、和ちゃんのために探しに行ってくれたの。ずぶ濡れになって早く入いりなさい。すぐお風呂に入って着替えなさい」

玄関には入ったが、ずぶ濡れのため、上がるのをためらっている。と優しいおばさんが僕達のところにきて手を引っ張りながら声をかけてくれた。

僕と石山は靴と靴下を脱ぎ、ズボンのまだ乾いてそうなところに足の裏をあて水をぬぐい家の中に入った。

「加山の叔母さんだ」小泉が僕に耳うちする。

「加山はまだ見つからないのか」

かすれて声が出ないが、やっとの思いで小泉に耳うちする。

「見つからない」小泉は短い言葉で答える。

「小泉から話は聞いた。今度から先生に相談してから行動を起こせよ」と、本山が歩いている僕達に声をかける。

加山の叔母さんは僕達を風呂場に案内してくれたが、僕達は場所がわかると、リュックに着替えを取りに行き、それから風呂に入った。

広い、全て大理石で出来ている。湯船は僕と石山が二人で入ってもまだ、空間が余る。

身体が結構冷えていたようで湯船に入ると凄く気持ちがよく疲れが一辺に出てきた感じがした。

「石山、身体洗うか」と言っただけだが、声が音になって出ない。

湯船につかり安心したのか、今までガチガチだった身体がほぐれた代わりに声も出なくなっていた。

「カワパン、声出ないのか」

石山の声もかすれてほとんど音にはなっていなかったが、かろうじて意味はわかり、僕は頭をたてに振った。

僕達が風呂から上がるとみんな近くに寄ってきたが、石山が「声が出ない」とかすれた声でかろうじて言うと、みんな「大変だったな」「頑張ったな」といろいろ言っ、おにぎりとかみそ汁を持ってきた。

腹がもの凄く減っていたがあまり食べる気はしない。

「カワパン、少しでも食べないと」

立花が優しく言う。神崎が冷たいオレンジジュースをグラスに入れた持ってきてくれたが、それは一気に飲み干した。不思議なものでジュースを飲むとおにぎりも食べられるようになり、二個すぐに胃の中に入れた。本山が近くに寄ってくる。

「みんな8時になったから家に帰りなさい。ここにいてもみんなが泊まる場所がないからな。取りあえず家に帰るように。」

石山と川上には言っただけだったが、8時まではここにいて、連絡がなかったらひとまず帰ることにみんなで話し合っていたんだ。下田までは車で送ってくれるみたいだから早く支度をして」

本山の言葉を合図に、みんな荷物を持って玄関に歩きだした。

「お前達が戻ってくるのが遅かったら、近くの旅館にでも泊めようと思ってたけど、まだ、電車に間に合うから早くリュックを持ってくるように」

本山は、僕達にそう言うと言分のリュックを担いだ。急に海の男の言葉が甦る。

『あきらめるなよ、お前達があきらめなければ、友達もあきらめねえ』

僕は本山の手を引っ張ると「まだ、帰らない。今日はテントに泊まる」と言つたが、声にはなっていない。

本山は僕が何か言おうとしているので、ポケットから手帳と鉛筆を取り出した。僕は急いで鉛筆を取ると、手帳に『テントで泊まる』と書いた。するとそれを見ていた石山も「僕もテントに泊まる」と、かすれた声を出した。

「先生、俺もテントに泊まるよ」

小泉が本山にはつきり言つた。本山は少し考えたが「だめだ今日は帰れ。小泉、さっき相談して決めただろう」と強く言つたので、玄関まで行つていたフカヒレ達も何があつたかと思ひ戻つてきた。

僕は頑として「いけない」と口を開き、手を振つた。もちろん「いけない」という言葉は声にならないが、思ひはみんなに届いた。

「先生、家に電話して親がいいって言つたらいいでしょ。」

小泉の意見に本山も折れ、親の承諾を得ればいいと言つことになつたので、フカヒレや熊田も残ると言い出した。結局、親に順々に電話し、残ることになつたのは僕と石山、フカヒレ、小泉、熊田であつた。

僕の家には小泉が代わりに電話して、オッケーをもらった。熊田とフカヒレは西山と細井から寝袋を借り、小泉は加山の叔母さんから毛布を何枚か借りていた。

僕達を今井浜のキャンプ場に車で送つてくれたのは、立花達を下田の駅まで送つたヒゲの叔父さんの会社の社員だつた。車だと今井浜のキャンプ場は近い。ここでキャンプの初日にテントを張つたの

で、暗くても要領はわかっていて意外と簡単にテントは張れた。

テントの穴の開いた入口は小泉が別荘から借りてきた毛布を上手く紐でくくりつけ塞いだ。

本山は上原中学校から来た校長、カップと一緒に白浜の旅館に泊まる予定だったらしい。しかし、旅館に寄り、そこで食事をしていた校長とカップに事情を説明し、僕達と一緒にテントに泊まることにしたようだ。

校長とカップは僕と石山が出た後、夕方に別荘にきてひと通りのあいさつをし、しばらくは別荘にいたが6時を過ぎた頃、本山を残し旅館に行ったようである。

テントが張られるとみんなすぐに寝袋を出し、その中に入った。疲れているが眠れない。それは僕だけでなくみんなそうみたいだった。

「俺よう、今まで3回も転校してるんだ」

いきなり、熊田が寝ながら喋り出した。

テントの外ではキャンプを楽しんでいるたくさんの声が聞こえるが、熊田の声を遮るほどではない。

「だから、いろんな奴にあつたよ。でも加山みたいな奴は初めてだった。フカヒレとケンカした時、加山が俺を掴んで止めただろう。俺、身動き一つ出来なかったよ。凄い力だった。」

他の学校だったら仲間がやられたら、そのクラスで一番強い奴が向かってくるんだ。俺はいつもそいつとケンカしてやつつけてやったさ。だからフカヒレを殴った後、次はこいつだと思ったけど、俺を掴んだ力の強さにビビってしまったよ。

そんな加山が、『フカヒレも悪気があつた訳ではないんだ。いつもならそんな人の悪口言う奴ではないんだ』って一生懸命言っただけにフカヒレと一緒に謝るんだよ。

今までの学校なら加山が俺を殴って終わりだよ。それだけ力の差があつたから、でも加山はそんなことしない。あいつは本当にいい奴だ。

加山、最近、俺に『いつまでも友達でいようぜ』って言ったんだぜ」

そこまで言うとな熊田はピタツと喋らなくなった。

『ヒック、ヒック』と、熊の吠え声のような泣き声が聞こえてくる。

「俺にも『卒業しても友達でいようぜ』と言ってた」

フカヒレが熊田の泣き声を隠すように喋り出した。

「加山は身体もでかいが心もでかった。自分のことより友達のことを大事にする奴だった。あいつほど友情を大事にしてた奴はいないよ」

フカヒレの声も段々涙声になる。

僕は隣で寝ていた小泉の耳に口を持っていき「フカヒレや熊田に、友達ではなく仲間でいようって言わなかったか聞いてみてくれ」と言った。

声は出ないが耳元ならスースーした空気の抜けたような声が何とか聞こえると思ったから耳元で喋ったが、思った通り小泉にはちゃんと聞こえ、僕の言ったことを熊田とフカヒレに質問した。当然最後に「カワパンが訊いてる」と付け加えている。

「仲間なんて言わないさ。友達だよ。友達でいようって言ったさとフカヒレが言えば、熊田も『ヒック、ヒック』言いながら「そうだよ、仲間なんてものじゃなくて親友でいようって、言ったんだよ」と答えた。

僕と石山がちゃんと喋れないので、みんなの言葉は段々少なくなりいつの間にか誰も喋らなくなった。

加山の死

次の日の朝、外が明るくなると同時にテントから一人また一人と起きて出ていく。みんなほとんど眠れなかったのだろう。僕もとうとうとしてどこかで何回かは寝ていたかも知れないが、自分の意識はずっと起きてた。

僕がテントの中で起き上がるとテントの中には誰もいない。ゆっくりテントを出るとやわらかな光が辺りを照らしているが、まだ、キャンプ場内はひっそりとしている。

キャンプ場を離れるとそこは海岸である。

『ズババーアン』

波の音が急に大きくなる。

砂浜に座り海をじつとみんなが見ている。僕が歩いて近づくと小泉が気付く、「カワパンも起きたか」と呟く。もしかしたら、波の中で加山が手を上げてこちらに向かってくるのではないか、とみんなは海を見ているのかも知れないし、ただ海に癒されたくてポカンと海を見ているのかも知れない。誰も喋らないから、何もわからないが、僕は起きたばかりなのでポカンと海を見ていた。

波の向こうに太陽はでていない。天気が悪いのではなく、まだ太陽が昇っていないのだ。太陽が昇ってないのに、まわりが明るいなんで僕は今まで思ってもみなかった。

正月に日の出を見にいくということがよくあるが、僕は行ったことがないし、朝早く長兄に連れられ横須賀の海に釣りに行ったこともあるが、水平線は雲が多く、太陽が顔を現わすのはかなり時間が経ってからなので、僕は太陽が水平線の上に昇ってきて雲の中に存在しているから明るくなったと思っていた。

今、水平線に少し雲はあるが太陽が昇ればわかるくらいの雲しかない。そんなことを少し思っていると、太陽が顔を出してきた。

海にひとすじのだいたい色が走る。みんなの目が輝きはじめ、顔

がだいたい色の下敷きで見るような色になる。

太陽は昇りはじめると思ったよりずっと早く顔を見せてくる。全て見せるのに対して時間はかからなかった。

日の出を見ることによってひとかけらの希望を持つことができた。そしてきつとみんなもそう思ったに違いない。

太陽がかなりのところまで昇り、まわりの明るさもしつかりしてきた時、小泉が「俺、テントたたんどくよ」と言ったので、熊田とフカヒレも「俺も行くよ」とそれぞれ言って、小泉についていった。3人がいなくなると海岸には僕と石山が残っている。

「カワパン、どうだ」

相変わらずかすれた声だが昨日の夜よりはいいようだ。

「何とか」

僕の声も何とか音にはなっている。

9時にヒゲの叔父さんの社員が車で迎えにくることになっているがその時間はかなり先だ。普段ならひと眠りすればそんな時間あっという間にきてしまうけど、今は時の流れが遅い。

「戻るか」と石山の言葉にそのまま従い、キャンプ場に戻るとテントはきれいにたたまれていた。熊田とフカヒレは火をおこしている。

「昨日、加山の叔母さんにおにぎりはもらったから、お茶を湧かして朝飯にしようぜ」

フカヒレの言葉にうなづく僕と石山。みんなじつとしているのが嫌なのだろう。何かしら動いて頭の中をそれに集中させなければ、どうしても嫌な事を考えてしまうから何か仕事を見つけたいのだ。

朝食が終わり、後片付けが終わっても何か動いていたくて、海岸に行って流木を拾い集め焚き火を延々としていた。暖まるのが目的ではないし、料理の火でもない。全く意味の無い焚き火であったが、みんな黙々と海岸に行っては流木を拾ってくる。

8時を過ぎた後キャンプ場は一番騒がしくなる。寝ぼけ眼でテントから出てくる奴、張り切って朝食を作っている奴、楽しそうにみ

んなで朝食を食べている奴、と表情はいろいろだが、キャンプ場は完全に眠りから覚めている。

「本山先生」

本山を呼ぶ声が遠くで聞こえる。みんなは気付いていない。僕が本山に知らせようと思った瞬間、再びさつきよりは大きな声で「本山先生」と言う声が聞こえ、本山が「ここです」と返事した。

ヒゲの叔父さんの社員が厳しい顔をしてこちらに走ってくる。本山を見つけると「先生、和広さんが見つかりました」と暗い顔で言う。

「それで」

本山は加山の生死を聞きたいのだろうが、はっきりそれを言葉に出せない。

「三浦半島で見つかったらしいんですけど、息はしてないみたいです」

「息はしてない、それはどういう事です」

「私にもよくわからないのですが、そのような電話が入ったので、すぐお知らせに来たのです。社長とお兄さま夫婦は今、車で病院に向かっているところです」

『息をしていない』ということだろう。死んでいるということなのか。生きているけど何かしらの理由で息をしていないということなのか。訳がわからないのは僕だけではなく本山をはじめみんなそうであるのが顔を見ればわかった。

急いでヒゲの叔父さんの社員と一緒に車で別荘に向かった。別荘にはすでに校長とカップパが来ていて、本山が別荘の中に入るとすぐに二人が飛んできた。

「三浦半島まで流されたらしい。今、身元確認でご両親が病院に向かっている」

カップパが本山に説明している。僕達も本山の側に行った。

「息をしていないとはどういうことです」本山の質問に「それは医学上の言い方だろう。基本的に死亡というのは、病院で医者が死

んだのを確認して、初めて死亡と発表するんだ。だから、病院に運ばれるまでは、死んでいても死んだという言い方はしないんだよ」とカッパは淡々と説明する。

カッパの答えは非情な答えであつた。本山をはじめ全員、万が一の期待をもっていたから、とどめを刺された思いである。

その衝撃度は崖から落ちて地面に激突したほど凄かつた。

「加山は死んじやつたんですか？」

フカヒレがカッパに必死になつて言う。

「だから、それはご両親が病院に確認しに行つてゐる。三浦半島に流されたのが加山なら諦めなくてはならない」

それから一時間位経つただろうか。重苦しい別荘の中で自分が何をしていたのか、後で考えると何も思い出せない時間を過ごしている。と、電話のベルが鳴つた。別荘の中には加山の叔母さんもいなくて、ヒゲの叔父さんの社員が電話を受けていた。

「はい、そうですか。はい、はい、わかりました。残念です」

最後の言葉で家の中にいた全員は事態が飲み込めた。社員は電話を切ると、くるりと振り返り「今、和広さんだと確認されました。あまり傷がなくきれいな身体だつたそうです」と必死になつて喋っているのが誰にもわかつた。この社員も加山のことをよく知つていたのかも知れない。社員は電話の報告をすると目に涙がにじんでくのが、僕にもわかつた。僕の目にも涙が出てくる。

『ウォーン、ウォーン』

熊の遠吠えのような熊田の泣き声が部屋いっぱいに広がつた。小泉も石山もフカヒレもみんな泣いている。

それから僕達は、本山に連れられて家に歸つたのだが、その時のことは何も覚えていない。ほとんど何も喋らなかつたし、目は何も見ていない感じだつたからだと思うが、何で何もおぼえていなかったのか自分では理由がはつきりわからない。どこかの精神科の医者ならその時の僕の状態を説明出来るだろうが、僕の記憶では家に戻つて、お母ちゃんに「加山が死んじやつたよ」と言つたところから

しか覚えていなかった。

最終回

昨日の夜のニュースも、今朝のニュースも、加山が死んだことを流していた。中学生がヨットで死ぬということは、ワイドショーでも絶好のネタなのか、三浦半島の加山が流れ着いた現場に女性リポーターが駆けつけて喋っているのがテレビから聞こえてくる。

加山の遺体が家に戻ったのは昨日の夜になったそうで、その間病院で死因を探すために解剖されたいらしい。昨日僕達が家に戻る間、加山は身体を刻まれていたということをテレビで僕は知った。

さつき、フカヒレから3年7組生徒全員で学校に午後4時に集まりお通夜に行くと電話があった。そして、僕に、石山、草津、野口、寺本の一班全員に連絡してと言ったので、僕は草津に電話をしたら草津はびっくりしていた。

僕が、「知らなかったのか、テレビのニュースでも話してたぞ」と少しかすれた声で言う「テレビは余り見ない」と答えた。

僕は何か腹立たしく伝えることだけ伝えたとさつさと電話を切った。次にかけた野口はもう知っていて声を落として返事をしていた。寺本の家に電話はない。呼び出しでよその家に電話をかけて呼ぶことも出来るが、僕は自転車に乗って寺本の家に行くことにした。

石山からの電話はお昼にかかってくる予定だからまだ時間はある。昨日の夜、石山から電話があり「明日の昼頃また電話する」と言っで電話を切ったから、その時、石山にはお通夜のことを話せばいいと思い、寺本の所に向かっている。

寺本はテレビのニュースで加山の死は知っていた。僕は簡単に集合時間を伝えると「石山から電話がくるから、じゃあな」と言っで寺本の家を後にした。

じつとしているのは嫌で、動いていたいのだが、おしゃべりも今はしたくない。まだ、自分の中で加山の死をちゃんと受けとめられなく、どうしていいか、わからないからだ。

石山は約束通り正午ちょうどに電話をかけてきたので、学校で会おうと言って電話を切った。

僕は学校の校門前に3時半に着いたが、クラスのほとんどの生徒はもう来ていた。石山も出川も細井もいる。フカヒレが一生懸命人数の確認をしている。

約束は4時なのに校門の前にもうほとんどの生徒が集まっているから、10分前にきた生徒でも走ってくる。結構みんなおしゃべりをしている。一番話題になっているのがワイドショーで加山が取り上げられたことだ。クラスの生徒がどんな形であれ、テレビで何回も流れたのだからその衝撃度は加山の死と同じくらいあるようで、死よりもテレビの方が大きく感じた生徒はヒソヒソとワイドショーの話をしているのだ。

加山は2年の時、目立つ生徒ではなく、付き合っている人間も4、5人だったから、付き合ってたなかったクラスメイトにとって、加山という人間がどういう人間かわかっているものが少なく、友達の死というより知り合いの死と感じているクラスメイトも多くいるようだ。

寺本が4時ちょうどに走って校門にきた。フカヒレが「全員集まったので出発します」と言ったので、僕が「前原や熊田、水口、神崎もいないぞ」と言うのと「あいつら、もう加山の家にいる」とフカヒレは答え歩き出した。

学校を出発した時は喋り声がうしろから聞こえていたがさすがに加山の家に近づいてくると、みんな押し黙っている。あの角を曲がれば、加山の家が六軒先に見えるところまで来た時、騒がしい声や音が耳に入ってくる。

角を曲がって初めに目に入ったのは、テレビカメラとテレビのレポーターのマイクだった。

「同じクラスの生徒さんですか？加山君はどういう生徒さんでした？」

いきなりマイクが僕の前にくる。何がなんだかわからず黙ってい

ると、本山がやってきて「さあ、早く入って」と言いながら、テレビカメラの前に立ち、僕達を誘導した。

加山の家には何回も来ている。でも、クラスメートの大半は初めてみたいでみんなキョロキョロしている。

家は古い和風建築。玄関の前の庭が広く空いており、左にくにやくにや曲がった松がよく目立つ。庭に入るとすぐ右側に大きなテールブルが置いてあり、それに白黒模様の布がかかってある。受付だ。

参列者はそのテーブルの前に行き、記帳し香典を置いている。庭には人があふれ家の中も沢山の人が見える。家の外ではこれからお通夜に訪れる人とテレビクルーの人達ともみあっている。

フカヒレが代表で香典を受付に置いた。さっきまでお喋りしていたクラスメートの顔が、悲しみが襲ってきたためか全員緊張している。

ある線を越えるといきなり自分の感情が変化するということが人間にはある。職員室のドアとか校長室のドアもそうだ。今もその線を僕達は越えて加山の家に入った。

いきなり悲しみの感情が、みんなを襲う。女生徒のほとんどは涙を流しているし、立花なんか『ヒック、ヒック』声を上げて泣いている。

玄関で僕達が焼香を待っていると、加山の叔母さんが目の前に来た。

「みんな和ちゃんのお友達ね。ありがとう。和ちゃんも喜んでい

る」
叔母さんはそう言うのと深々と頭を下げた。ずっと泣いていたのだろ

う、目の下が赤くはれている。
叔母さんの後ろに神崎や熊田の姿が見えた。二人とも顔を伏せている。その隣に水口がいる。水口は誰はばかることなく次から次へと涙を流している。

3年になり加山から告白され付き合い出してから、まだ、二カ月位しか経っていない。きつと、両親、親戚を除けば、水口が一番悲

しいだろう。

焼香は淡々と進み焼香の終わった人はすぐに家から出ていった。加山の親戚や知り合いの人達全員が加山の家に入ると家は満杯になるので、ほとんどの親戚や知り合いは近くの公民館を借りてそこに集まっているらしい。

近所の人やちよつとした知り合いは焼香を済ませたらそのまま帰っていく。そのため、お通夜に加山の家を訪れる人はたくさんいたが、家の中の人数は常に一定である。

順番通り焼香が進まれていったので、いつの間にか加山の家の中は、ほとんどクラスメートで埋まっていた。

僕達3年7組の生徒が焼香する番になった。熊田、水口、神崎、ホゾ、前原は、先に来て加山の家に行ったが、3年7組の焼香が始まったら立ち上がり、みんなのところに来た。一緒に焼香したいのだろう。

立花が水口に何か言っている。熊田はまだ『ウォーン、ウォーン』泣いている。前原は鼻水を流しながら泣いている。加山の笑っている写真が目に入った瞬間、僕の目からさっきまで我慢していた涙がどーっと出てきた。

僕は焼香を済ますと、そのまま加山の家を飛び出した。家の外では相変わらずテレビのレポーターがうるちよろしていたが、構わず突破して去っていった。胸が押し潰されそうになるのを追っ払うために走っていった。涙はずっと出っ放しである。

「加山ー」声を出すとますます泣けてくる。

「加山ー」水口の涙の顔を思い出す。

「加山ー」出来る限りの大声を出すと、向こうから歩いているおばさんが、びつくりした顔をしているのが見えたが一瞬である。すぐにそのおばさんは後方にいなくなる。

『加山、お前死ぬの早いぞ、まだ中学3年じゃないか。俺達これから人生が始まるんだぞ。お前が俺に言ったこと、俺まだ全然意味がわからないよ。お前にちゃんと聞きたかったよ。加山ー、加山ー』

一時間も僕は走ったかも知れない。時計がないから正確な時間はわからないが、空の色が変わってきたから、それぐらいは走っただろう。途中で何回かは休んだが、休んだ時間は短く、すぐ走った。走ることによって悲しみが消えるのではないかと、走りに走っているといつの間にか、慶応の山にぶつかり一気にそれも登った。

山の頂きに立つと下に新幹線の線路が見え、遠くに僕達の町並が見える。加山の家もきつと見えるのだろうが、屋根だけでは見つけることは難しい。空はだいたい色だ。加山を探しに海に行った時見た空の色とそっくりだった。

風が涼しくなった。走っていたので僕のシャツは汗でビショビシヨだし、顔は涙でガサガサになっている。

カワパンは、凄いなーと思った。

カワパンは、やさしさがある。

カワパンは、勇気がある。

カワパンは、正義感がある。

カワパンは、知恵がある。

カワパンは、実行力がある。

加山の言葉が断片的に浮かぶ。加山の方が全然凄いじゃないか。俺なんか加山に比べたら大人と子供の違いがあるよ。

だいたい色の光が僕を包む。

夕焼け海の夕焼け真っ赤な別れの色だよ

頭の中でずっとスパイダースの『夕陽が泣いている』が聞こえる。

この話で完結しますにしかったのでもう一度入れなおします。

昨日の夜のニュースも、今朝のニュースも、加山が死んだことを流していた。中学生がヨットで死ぬということは、ワイドショーでも絶好のネタなのか、三浦半島の加山が流れ着いた現場に女性リポーターが駆けつけて喋っているのがテレビから聞こえてくる。

加山の遺体が家に戻ったのは昨日の夜になったそうで、その間病院で死因を探すために解剖されたいらしい。昨日僕達が家に戻る間、加山は身体を刻まれていたということをテレビで僕は知った。

さつき、フカヒレから3年7組生徒全員で学校に午後4時に集まりお通夜に行くと電話があった。そして、僕に、石山、草津、野口、寺本の一班全員に連絡してと言ったので、僕は草津に電話をしたら草津はびっくりしていた。

僕が、「知らなかったのか、テレビのニュースでも話してたぞ」と少しかすれた声で言う「テレビは余り見ない」と答えた。

僕は何か腹立たしく伝えることだけ伝えたとさっさと電話を切った。次にかけた野口はもう知っていて声を落として返事をしていた。寺本の家に電話はない。呼び出しでよその家に電話をかけて呼ぶことも出来るが、僕は自転車に乗って寺本の家に行くことにした。

石山からの電話はお昼にかかってくる予定だからまだ時間はある。昨日の夜、石山から電話があり「明日の昼頃また電話する」と言っで電話を切ったから、その時、石山にはお通夜のことを話せばいいと思い、寺本の所に向かっている。

寺本はテレビのニュースで加山の死は知っていた。僕は簡単に集合時間を伝えると「石山から電話がくるから、じゃあな」と言っで寺本の家を後にした。

じつとしているのは嫌で、動いていたいのだが、おしゃべりも今はしたくない。まだ、自分の中で加山の死をちゃんと受けとめられなく、どうしていいか、わからないからだ。

石山は約束通り正午ちょうどに電話をかけてきたので、学校で会おうと言って電話を切った。

僕は学校の校門前に3時半に着いたが、クラスのほとんどの生徒はもう来ていた。石山も出川も細井もいる。フカヒレが一生懸命人数の確認をしている。

約束は4時なのに校門の前にもうほとんどの生徒が集まっているから、10分前にきた生徒でも走ってくる。結構みんなおしゃべりをしている。一番話題になっているのがワイドショーで加山が取り上げられたことだ。クラスの生徒がどんな形であれ、テレビで何回も流れたのだからその衝撃度は加山の死と同じくらいあるようで、死よりもテレビの方が大きく感じた生徒はヒソヒソとワイドショーの話をしているのだ。

加山は2年の時、目立つ生徒ではなく、付き合っている人間も4、5人だったから、付き合ってたなかったクラスメートにとって、加山という人間がどういう人間かわかっているものが少なく、友達の死というより知り合いの死と感じているクラスメートも多くいるようだ。

寺本が4時ちょうどに走って校門にきた。フカヒレが「全員集まったので出発します」と言ったので、僕が「前原や熊田、水口、神崎もいないぞ」と言うのと「あいつら、もう加山の家にいる」とフカヒレは答え歩き出した。

学校を出発した時は喋り声がうしろから聞こえていたがさすがに加山の家に近づいてくると、みんな押し黙っている。あの角を曲がれば、加山の家が六軒先に見えるところまで来た時、騒がしい声や音が耳に入ってくる。

角を曲がって初めに目に入ったのは、テレビカメラとテレビのレポーターのマイクだった。

「同じクラスの生徒さんですか？加山君はどういう生徒さんでした？」

いきなりマイクが僕の前にくる。何がなんだかわからず黙ってい

ると、本山がやってきて「さあ、早く入って」と言いながら、テレビカメラの前に立ち、僕達を誘導した。

加山の家には何回も来ている。でも、クラスメートの大半は初めてみたいでみんなキョロキョロしている。

家は古い和風建築。玄関の前の庭が広く空いており、左にくにやくにや曲がった松がよく目立つ。庭に入るとすぐ右側に大きなテーブルが置いてあり、それに白黒模様の布がかかってある。受付だ。

参列者はそのテーブルの前に行き、記帳し香典を置いている。庭には人があふれ家の中も沢山の人が見える。家の外ではこれからお通夜に訪れる人とテレビクルーの人達ともみあっている。

フカヒレが代表で香典を受付に置いた。さっきまでお喋りしていたクラスメートの顔が、悲しみが襲ってきたためか全員緊張している。

ある線を越えるといきなり自分の感情が変化するということが人間にはある。職員室のドアとか校長室のドアもそうだ。今もその線を僕達は越えて加山の家に入った。

いきなり悲しみの感情が、みんなを襲う。女生徒のほとんどは涙を流しているし、立花なんか『ヒック、ヒック』声を上げて泣いている。

玄関で僕達が焼香を待っていると、加山の叔母さんが目の前に来た。

「みんな和ちゃんのお友達ね。ありがとう。和ちゃんも喜んでい

る」
叔母さんはそう言うのと深々と頭を下げた。ずっと泣いていたのだろ

う、目の下が赤くはれている。
叔母さんの後ろに神崎や熊田の姿が見えた。二人とも顔を伏せている。その隣に水口がいる。水口は誰はばかることなく次から次へと涙を流している。

3年になり加山から告白され付き合い出してから、まだ、二カ月位しか経っていない。きつと、両親、親戚を除けば、水口が一番悲

しいだろう。

焼香は淡々と進み焼香の終わった人はすぐに家から出ていった。加山の親戚や知り合いの人達全員が加山の家に入ると家は満杯になるので、ほとんどの親戚や知り合いは近くの公民館を借りてそこに集まっているらしい。

近所の人やちよつとした知り合いは焼香を済ませたらそのまま帰っていく。そのため、お通夜に加山の家を訪れる人はたくさんいたが、家の中の人数は常に一定である。

順番通り焼香が進まれていったので、いつの間にか加山の家の中は、ほとんどクラスメートで埋まっていた。

僕達3年7組の生徒が焼香する番になった。熊田、水口、神崎、ホゾ、前原は、先に来て加山の家にしたが、3年7組の焼香が始まったら立ち上がり、みんなのところに来た。一緒に焼香したいのだろう。

立花が水口に何か言っている。熊田はまだ『ウォーン、ウォーン』泣いている。前原は鼻水を流しながら泣いている。加山の笑っている写真が目に入った瞬間、僕の目からさっきまで我慢していた涙がどーっと出てきた。

僕は焼香を済ますと、そのまま加山の家を飛び出した。家の外では相変わらずテレビのレポーターがうるちよろしていたが、構わず突破して去っていった。胸が押し潰されそうになるのを追っ払うために走っていった。涙はずっと出っ放しである。

「加山ー」声を出すとますます泣けてくる。

「加山ー」水口の涙の顔を思い出す。

「加山ー」出来る限りの大声を出すと、向こうから歩いているおばさんが、びっくりした顔をしているのが見えたが一瞬である。すぐにそのおばさんは後方にいなくなる。

『加山、お前死ぬの早いぞ、まだ中学3年じゃないか。俺達これから人生が始まるんだぞ。お前が俺に言ったこと、俺まだ全然意味がわからないよ。お前にちゃんと聞きたかったよ。加山ー、加山ー』

一時間も僕は走ったかも知れない。時計がないから正確な時間はわからないが、空の色が変わってきたから、それぐらいは走っただろう。途中で何回かは休んだが、休んだ時間は短く、すぐ走った。走ることによって悲しみが消えるのではないかと、走りに走っているといつの間にか、慶応の山にぶつかり一気にそれも登った。

山の頂きに立つと下に新幹線の線路が見え、遠くに僕達の町並が見える。加山の家もきつと見えるのだろうが、屋根だけでは見つけることは難しい。空はだいたい色だ。加山を探しに海に行った時見た空の色とそっくりだった。

風が涼しくなった。走っていたので僕のシャツは汗でビショビシヨだし、顔は涙でガサガサになっている。

カワパンは、凄いなーと思った。

カワパンは、やさしさがある。

カワパンは、勇気がある。

カワパンは、正義感がある。

カワパンは、知恵がある。

カワパンは、実行力がある。

加山の言葉が断片的に浮かぶ。加山の方が全然凄じやないか。俺なんか加山に比べたら大人と子供の違いがあるよ。

だいたい色の光が僕を包む。

夕焼け海の夕焼け真っ赤な別れの色だよ

頭の中でずっとスパイダースの『夕陽が泣いている』が聞こえる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4612o/>

カワパン

2011年1月16日08時25分発行